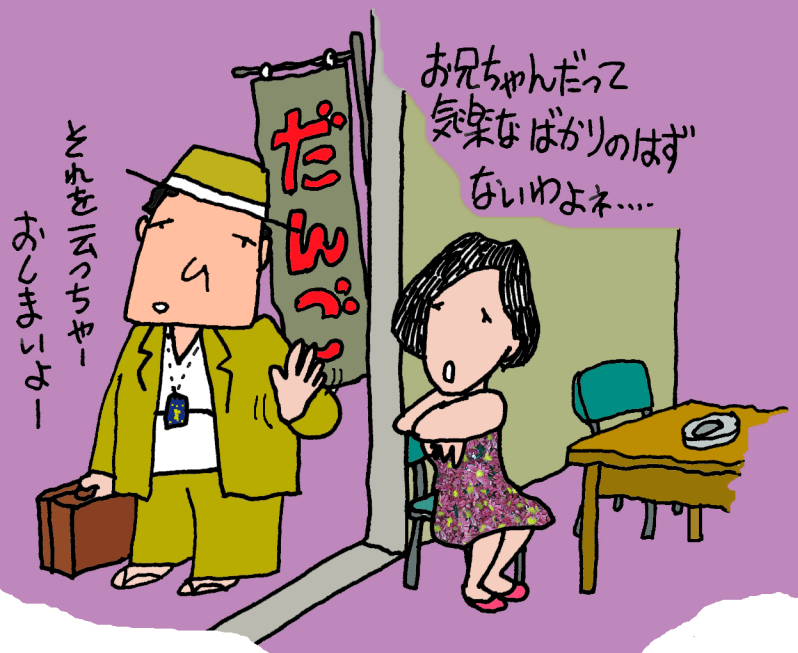
連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 7 No. 3

第27号

対人援助学会

NO. ２７　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	016-022
臨床社会学の方法	中村　正	023-035
ケアマネ　あの目　この目	木村　晃子	036-038
街場の就活論	団　遊	039-041
カウンセリングのお作法	中島　弘美	042-047
コミュニティ心理学を考える	藤　信子	048-050
蟷螂の斧 「次の一歩」	団　士郎	051-058
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	059-061
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村　真也	062-066
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	067-076
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	077-082
境界あれこれ	河岸　由里子	083-085
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	086-088
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	089-094
七日参り	竹中　尚文	095-099
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	100-101
再開　それでも遍照金剛いうことにします	三野　宏治	102-117
男は痛い！	國友　万裕	118-124
新連載（二）　ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	125
援助職のリカバリー	袴田　洋子	126-128
周旋家日記	乾　明紀	129-131
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	132-134
役場の対人援助論	岡崎　正明	135-141
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	142-144
電脳援助	浅田　英輔	145-149
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	150-152
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	153-159
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―	村本　邦子	160-173
病児保育奮闘記	大石　仁美	174-177
新連載　おじゃまします―精神科専門訪問看護日誌―	高垣　愉佳	178-180
知的発達障害の家族の日々	大谷　多加志	181-182

対人支援点描	小林　茂	183-185
「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	186-190
海の向こうに出てみれば	石田　佳子	191-196
清武システムズ	しすてむきよたけ	197-204
SV-羅針盤のない航海	川崎　二三彦	205-208
精神科医の思うこと	松村　奈奈子	209-212
おくのほそみち	奥野　景子	213-219
心理臨床と多文化共生	ガヴィニオ　重利子	220-221
今から、ここから	馬渡　徳子	222-224
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	225-232
新連載（二） お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）	木村 vs 竹中	233-237
新連載 介護福祉を巡る断章　1	臼井　正樹	238-242
新連載　町家合宿 in 京都	山下　桂永子	243-249
再開 そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	250-256
復活 先人の知恵	河岸　由里子	257-261
編集後記	編集長＆編集員	262-263

ハチドリの器　10

見野　大介

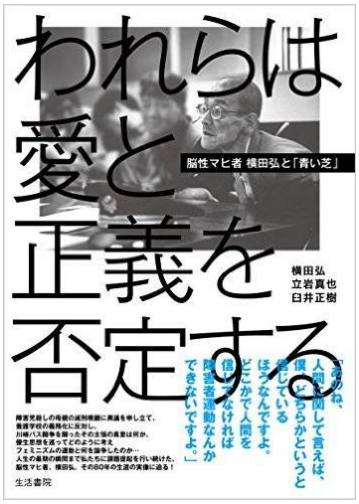
Mino Daisuke

上：冬の食卓
左：コーヒーカップ＆ソーサー
下：8bird（花器・オーナメント）

第27号 執筆者@短信

臼井　正樹　新連載

今年の前半に、かねてからの課題であった脳性マヒ者、横田弘に関する本を生活書院から出したことでしばらく気が抜けていた。



そうこうするうちに 2016 年 7 月 26 日が来て、相模原障害者施設殺傷事件が起きてしまった。『障害者殺しの思想』『否定される命からの問い』を著した横田だったらこのことをどう考えるだろうか。そんなことを考えながら 2 か月が過ぎ、いつものような時間に追われる大学教員の生活の戻ってしまった。

そうした中ではあるが本マガジンの編集長である団先生からお誘いを受け、今回を初めとして『介護福祉を巡る断章』として短い文章を連載させていただくことにした。おそらく介護を巡っての私事を中心にしながら、ときどき考えたことを織り交ぜてのまさしく雑文になると思われるが、よろしければお付き合いいただきたい。

山下桂永子　新連載

はじめまして。山下桂永子（やましたけえこ）と申します。仕事としては（心理士以外のことも）いろいろやってきましたが、今続いているのは、某市の教育委員会で教育相談を 13 年ほど、フリースクールのスタッフを 10 年ほど、スクールカウンセラーを 9 年ほど、看護学校のピンポイント講師を 3 年ほどやっています。

そして仕事ではない個人的な活動として、町家合宿ということを 10 年ほどやっておりまして、今回、そのことについて、団先生からお誘いを受けて、論文ではないということで、少し気が楽になり、書いてみることにしました。なにぶん今まで言語化しろしろ言われても、なかなか手をつけられなかったものですから、ずいぶん拙い文章になってしまいそうですが、読んで頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

小池英梨子　連載再開

9月末で前職を退職し、「のらねこ生活」がスタートしました。それに伴い連載も再開しました。猫が繋ぐ縁はとても不思議で、来月はいったいどこで何をしているのか、自分でもわかりません。次回の連載で、自分がどんなことを書いているのか、自分でも楽しみです。

先日友人と近年増えている「保護猫カフェ」めぐりをしました。猫の保護活動や TNR 活動をしているボランティアさんがなんとか猫たちが新しい飼い主さんと巡り合うチャンスを増やしたいという強い思いからぎこちなくも運営している所、活動しているボランティアさんを助けようとオシャレに若い人が運営している所など、素敵な動きだなーと思うお店がいくつもある中、入った瞬間に糞尿の臭いが鼻をつき、猫はケージに入れられたまま、犬は自由ではあるがスペースに対して頭数が多すぎる店があった。しかも、ほとんどの犬猫が血統名つきの純血種だった。さらに不妊去勢手術をしていない（基本的に保護猫カフェは、これ以上捨て猫やノラ猫が増えないようにしたいという思いがあるため、避妊去勢手術は絶対している。というか、していなければ、交配してしまうため、室内を自由に歩かせることができない）。譲渡条件を聞くと、無料だが運営している NPO 団体に数万円の強制寄付と、初回餌セット 2 万円相当の強制購入が必要だった。ここにいる犬や猫の経緯を聞くと、ペットショップの売れ残りや、ブリーダーが手放した犬猫だという。つまり、乱暴な言い方をすればペットショップとブリーダーのアウトレットだ。保護猫、保護犬ブームに乗っかっていた。しかし悲しいことに、店内は賑わっていた。同じようなうたい文句でも、内容は大きく違うことがある。実際に自分の目で見て、その裏で動いているシステムを見極める必要性を感じた一日だった。

三野宏治　連載再開

二年ぶりの連載です。相変わらず「面白くない」歴史の話を書いています。今の話や現場の話を買いたいと思いますし書くこともあるのですが、まず「面白くない」歴史の話が終わるまで書こうと思います。歴史の話は、特に対人援助の歴史の話は大切だと思っています。福祉学というものがあるとすれば、そのほとんどが現場での実践を集めてまとめたものだと私は考えているので、最近の話かか遠い昔のことか程度の差はあれ過去のことであろうと思います。その歴史をたどると「かつて良いとされていたこと」は現代では否定されていることが多くみられます。入所施設は建設当時、「良いもの」で「必要とされていた」ものです。しかし後に否定されます。では、いま「良いとされている」支援や方法が後年否定されないといえるのか。そんなことを思いながら歴史のことをかいています。

「面白くない」のは歴史そのものにその責があるのではないことは自明です。それは大河ドラマを見る人は多いし、歴史ドキュメンタリーは旅番組や芸人が騒いでいるだけの番組と同じくらい多いことからもわかります。私はどれもみませんが人気があるようです。ではなぜ私が書く歴史の話が「面白くない」のでしょうか。分析し

た結果、「面白くない」理由として考えられるのは、映像や音楽が入っていないことが原因だと考えられます。次に NHK が制作していないかことも可能性として高いでしょう。これは、考えたくないですが「私の書き方が良くない」可能性も少しあるかもしれません。本当に考えたくありませんが。

松村奈奈子

今回は電子カルテがテーマ。私は欧米の医療ドラマやサスペンスを見るのが好きで、電子カルテが導入されているのはドラマや映画でもよく目にしていました。

ただ、ドラマの中の精神科医は相変わらずゆったりと患者さんと向き合って、紙に記録を書いています。むむっ、パソコンはどこ？電子カルテじゃないのか？と謎でした。

数年前にイギリスに留学した精神科医に聞くと“医師は記録を紙に書いて、その後、秘書が電子カルテに入力してたよ、うらやましい”と笑って話します。秘書を雇えるのか・・・

アメリカに留学した精神科医も“１日に8人ほどしか診察しないしね”“当然、ウエイティングリスト（診察の順番待ちリスト）に名前がのっても、なかなか診察日はこないみたいだよ”と。

だいたい、診療報酬（診察代金）が日本は低く抑えてあるので、保険制度の診療では、１日８人の診察で秘書を雇って精神科医が生活費を稼ぐことはなかなか難しいです。

で、この日本の医療システムの中で、どう診療に関わっていくべきか・・・いまだ模索中です

ガヴィニオ重利子

１２月、この街ではクリスマスの前にもう一つ、大きなイベントがある。エスカラードと呼ばれる州の独立祭。１６０２年１２月１１日の夜、フランス（当時のサヴォア公）から仕掛けられた奇襲に市民が立ち向かい、見事独立を勝ち取ったことを祝い、州をあげてパレードや仮装、マラソン大会などが開催される。地元の小学校では、その日仮装をして登校することが許されており、毎年賑やかな登校風景が広がる 。もちろん先生たちも負けてはおらず、学校はちょっとしたコント劇場のような様相を帯びる。

毎年、わが家の子どもたちも「今年は何を着よう？」とワクワクし始める今週。ショッピングセンターには 仮装用コスチューム売り場もできていて、ゴジラやクマの着ぐるみから中世兵士などイベントの文脈に沿ったものまで 、様々な衣装が揃う。多くの子どもたちがその年の流行（スター・ウォーズやアナと雪の女王など）の衣装に身を包むが、中には空手や柔道などを習う子どもたちが道着を「仮装」として着てくることがある。日本人の私は、そのことにどこか複雑な思いにさせられる。

彼らにとっては確かにエキゾチックな仮装なのだろうなーと理解しつつ、私にとってそれはやはり伝統や文化を意味するもののようだった。そんなことを思う母を尻目に、我が子はというと・・・日本から持ってきた浴衣を羽織って、同じく日本で入手した 丁髷カツラをかぶり、１００円ショップの刀を差した「サムライ」という変装を創作。私としては一番どうかと思う姿で、昨年は登校していった。さて、今年はどうなることやら。ハラハラ、ドキドキ。

奥野景子

ここ最近、いろいろと悶々とすることがあった。悶々だけでは収まりきらず、悶々々々々々々々々…といった感じになっている。ただ、そんなこともありながら、上手く言えないなりに自分の中で明らかになってきたこともある。だからこそ、悶々ループから抜け出せないようにも思うが、あまり嫌いでもないのでぼちぼちやりたいと思う。

私がそのことを知らなかったからと言う理由で、それが自分の身に降りかかった時、それにあたふたしたり、傷ついたりしたくない。そして、同じ理由で、誰かを傷つけるようなこともしたくないな、と最近思う。以前にもどこかで書いたような気がするが、その全てを知ることは出来ないと思っている。だからこそ、自分の手の届く範囲で気になることや知りたい、考えておきたいと思うことは、大切にしたいと思っている。そして、あたふたしたり、傷ついたり、傷つけてしまった時は、ちゃんと立ち止まれる人でありたいな、とも思う。

柳　たかを

再会

30年近く昔のこと、若い芝居好きの友人から「(オズの魔法使い)を紙芝居に描いてほしい」と頼まれ舞台用の台本をわたされた。

祖父母とカンザスの田舎で暮らす少女ドロシーが、竜巻で家ごと飛ばされながらも、強い決心でふたたび祖父母のいる故郷をめざすファンタジー。物語に引き込まれ、1年以上かかり紙芝居では異例の70枚を越える大作となって完成させた。あれから四半世紀以上の月日が経つ。

先日、京都マンガミュージアムで戦後子供マンガの原点と言われる「新宝島」を手塚治虫と共同執筆した漫画家・酒井七馬と七馬の師である小寺鳩甫(きゅうほ)を紹介した「小寺鳩甫と酒井七馬展」が開催された。

期間中に、生前の酒井先生の思い出を語るイベントに出演させていただいたが、余興でプロの紙芝居師が酒井七馬作の紙芝居を実演するコーナーがあり、子供時代に戻って楽しませていただいた。するとなんとそこに私が描いた『オズの魔法使い』(My way)が登場した。70枚以上と一回で演じるには長過ぎるので最初の10枚ほどを実演され、「続きはまた別の日に別会場でやります」とのこと。

じつは、(オズの魔法使い)のことはすっかり忘れていた。実物と再会しとても驚いたが、見たところ色も褪せてないようで大事にしていただいてるらしい、それがとてもうれしかった。その再演がもうすぐあるらしいと聞いている、どんな風に演じてもらえるのかワクワクしている。

齋藤　清二

後期が始まって、それなりに色々な事に追われながら日々が過ぎていく。昨年は京都の紅葉はあまり色づきが良くなかったようだったのだが、今年は当たり年ということである。ちょうど 11 月の半ばから忙しくなり、いわゆる有名どころに出かけることはできなかったが、ちょっとした風景や何気ない自然を写真に撮る習慣が定着してきて、それなりにおもしろい。美的対象の探求などと大げさなことを言うつもりは毛頭ないが、手当たり次第に写真に撮ってみて、FB などにアップしてみて初めて「ああこれってこんなに美しかったのか」と気が付くことが多くなった。再現＝表象（re-present）することによって、すでにそこにあっても見えていなかったことが見えるようになるということは確かにあるのだなと感じている。

石田　佳子

2016 年 11 月 8 日に行われたアメリカの大統領選挙では、「プアーホワイト（Poor White）」「ホワイトトラッシュ（White Trash）」「ヒルビリー（Hillbilly）」などと俗に呼ばれる貧しい白人層が、一躍脚光を浴びました。また、「グローバリゼーションに取り残され困窮した彼らの怒りが、ポリティカリーコレクトネス（政治的公平性）を否定するトランプの勝利を後押しした」とか「彼らの住む田舎町には同じ種類の白人しか住んでおらず、その約半数は自分の州の外へ出たことがないため、彼らは他の（異なる肌色や思想や宗教を持つ）人々と直に接した経験がない」などとも言われていました（町山智弘，TBS ラジオ『たまむすび』より）。いずれにしろ、これまでほとんど顧みられなかった人々が、いつの間にか米国民の過半数を超えて居たこと、国政を動かしたことに、世界中が驚いたのです。

私の知る限りでは、これまでアメリカの映画や TV ドラマなどでも、彼らの生活や心情を扱った作品は、少なかったと思います。（例外には、女性の連続殺人犯を描いた『モンスター』や、過食症の母と自閉症の弟を抱えて家族の重圧に苦しむ『ギルバート・グレイブ』などがありますが・・・反対に、これでもかと言うほど登場していたのは、『ビバリーヒルズ高校/青春白書』『デスパレートな妻たち』『セックス・アンド・ザ・シティ』などに見られる“セレブ”たちです。

お洒落な家に住んで、優雅に装い、華やかな話題を繰り広げる人たちを観せられた方が、エンターテイメントとしては良いのかもしれませんが……実際には、「こんな人たち、どこに居るの？」「どれだけ居るの？」という気もします。。「しょせん作り話だから」と言えばその通りですが、これでは世界中の人たちに“アメリカの白人=セレブ”という間違ったイメージを植えつけかねません。

ただでさえ、日本のマスコミは、人が死ぬ場面や残酷過ぎる事件など「不適切な内容」を報道しません。それは（子どもを含む）「視聴者への配慮」なのでしょうが、そのようにして取捨選択され加工された情報や映像を取り込むのに慣れることは、お気楽な反面、後でその大きな代償（ツケ）がまわって来そうな不安も感じさせます。「平和で安全な国」と言われる日本に居て、その外で起きている事柄に無関心となり、自己完結的な「内向きの暮らし」を続けることは、私たちに将来、何をもたらすのでしょうか？

現実には、目を背けたくなるほど悲惨な事柄や危険な人物,状況は、存在しています。にもかかわらず、「現実にある危険」や「人間の暗い面」に対する認識が希薄になってしまうことは、大きな問題だと私は思います。少なくとも海外へ出たら、「知らなかった」では済まされない危険に遭遇する可能性が高くなると考えるべきでしょう。個人の身に降りかかる災難だけでも、詐欺や窃盗や誘拐や強盗の被害にあうとか、麻薬の運び屋にされるとか、危険は常に、すぐそこに、「ある」のです。それについて知っていても、いざとなれば防ぎきれない場合もあるほどなのに、知らなければ、自ら危険を招き入れるようなものです。

また、自分で調べたり確かめることをせず、与えられた情報を鵜呑みにしていると、「いつの間にか、とんでもない所へ連れて来られてしまった！」という目に陥る可能性があります。マスコミによる世論の誘導やイメージの改竄、事実の捏造など……誰かに惑わされて自らの進む方向を見誤らないためには、情報を得るだけではなく、その真偽を見極めて取捨選択する“眼力（フィルター）”を磨くことが大切でしょう。その力を養うためには、（たくさんの失敗をしながら！）実際にやってみること……経験値を上げることが、役に立つのではないでしょうか。

結局、自分で経験できることなど限られているけれど、本当のことは自分で経験してみないとわからないんだな……でもだから面白いんだな！と思っている昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

東京の仕事で関わりある芦部さん。彼女は中間支援組織にいる人。僕は、彼女に感謝している。

僕は、プロジェクトの事務局長に所属しているけど、「清武システムズ」と看板をさげているので、そこの人だけではない。

それだけに止まれない人であるし、分かりにくい存在であり、所属現場に片足しか突っ込んでいないから、周囲に勘違いされるような振る舞いをしているはずだ。なんらかの境界にいると痛感し、悲し涙や悔しさを伴うことも多い。

それにもかかわらず、芦部さんは、熱心により良いチームになるように協力してくれている。また、そうしたチームになって来ている事をキャッチしてくれる。

例えば、こんなことから僕は感じ取っている。僕が、くじけ、いじけている時、僕の見えている何かを活かしてくれるよう励まし、自分だったら何ができるか、と考え、伝え、動いてくれていること。

他にもそうした振る舞いをしてくれる人たちに恵まれていのに、なぜ芦部さんをピックアップしているのか。

それは、彼女が、今年度をもって、所属している職場から辞職する。このことを、分かりにくい僕なのに、なぜか最初に伝えてくれた。

このタイミングを通して、僕は付き合いが１年くらいとまだ浅いが、彼女の存在を残さずにはいられなかった。

芦部さん！正直、辞めて欲しくない！しかし、辞める事で始まる事もある。辞めると決めたから彼女の中で、動き出した事がきっとあると思う。だって、知ってから僕は、芦部さんがいなかったらと考え、プロジェクト、チーム、協働のためにどのようにしたらいいか考え、動き出していたのだから。

彼女がいたこれまでを振り返ると、誰かと、共に歩むことで気づくことがあると知る。また、少し距離があるから気づく、相手の存在。存在自体に意味があることと改めて気づいたのだった。

実務とは違う振る舞いから、その人の人柄を感じることもあったのだと思う。

芦部さん、早いけど、お疲れ様！僕は、あなたから得た高揚するような感覚が、沢山ありました。これからも、まだ頼ります。これからも共に、成長していかないかい？

芦部さんの次のシーズンに期待を込めて。

便乗して、我が連載について。今回で、シーズン1「SMクラブの受付」を終了します！シーズン2のテーマは、動きながら考えまーす。

小林茂

前回の短信で温泉案内をしようと予告していました。今回は、その第一回目です。もともと、温泉やスーパー銭湯は好きな方でしたが、北海道に来て何が良いかというと温泉の多さが挙げられます。毎週1カ所巡ったとしても何年かかるかわからないぐらい温泉があります。現実には、そのすべてを巡り紹介することはできないのですが、少しずつ行った先のレポートをしようと思います。

９月22日に、元の職場の同僚と当事者仲間の吉さんらと佐々木実さん（浦河べてるの家理事長）の慰労会をしてきました。十勝地方の浦幌町にある留真温泉（るしんおんせん）に行ってきました。留真温泉は、留真川沿いの山中にある温泉で、1901年に発見された歴史ある温泉です。2011年にリニューアルオープンされたこともあり、建物も湯船もきれいなところです。湯船は、露天風呂、ふつう程度の熱さの湯舟、ややぬるめの湯舟、サウナがあります。どの湯船も小ぶりで3～4人入ると満員になるような大きさです。気になる泉質は、単純硫黄温泉（アルカリ性低拡張性温泉低温泉）PH10．0の透明なお湯です。PH 値が高いのでヌルヌルした感じがあります。古い角質を落とす美肌の湯ということです。一般に PH が高い泉質はお湯が肌に膜を作るそうで良く温まります。また、ここの温泉のお湯は飲むことも可能で、飲用の蛇口もあり飲むことができます。団体のお客が来るようなところではないので、山間の景色を眺めながらのんびり浸かるにはいい温泉です。

水野スウ

2016.11.23

明日から少し長めの憲法のおはなし出前旅がはじまるので、今日中に短信書かなくっちゃ、と今、書いてます（スマホは持っていないので）。

今回は、豊川→豊橋→姫路→高松→松山、というノンストップの旅。姫路と松山の会は、この夏に福山で話を聞いてくださった方が、次は自分の町で、と、どちらも個人で、はじめはたったの一人で、企画、準備をはじめてくれました。

姫路のTさんは、私のことをお知りあいや友人たちに知ってもらうため、毎日1ページずつ、私の「けんぽうBOOK」をラインやメールで友人たちに送り続け、ついに一冊まるごと読んでもらったとか。まるで毎朝の新聞配達みたい！

松山の会を主催する若いMさんは、市内のカフェを何軒も回っては、前売り券をおかせてもらい、そのお店の紹介とあわせて当日のけんぽうかふぇの宣伝を、次々FBにアップしていきました。更新されるどのイベントページも、おしゃれでとっても楽しい。アナログな私には真似のできないことです。

当日何人みえるかは、ふたを開けてみなきゃわからない。でもこういうのって人数じゃないと思う。何より、組織の一員ではなくて、個として考える、動きだす、今そんな人たちのふえていること、その手応えがうれしい。その日に到るまでの過程――憲法を話題にする、チラシをつくる、声かけする、誘ってみる、手伝いを頼む、といった小さなふだんの努力、一つひとつのつみかさねが、未来に確かにつながってくと思うからです。

度重なる出前のおかげでだいぶ旅慣れた私。思いの外、軽い荷物で明日の朝早くでかけます。

高垣愉佳　新規連載開始

精神科訪問看護日記「おじゃまします」をスタートしました。よろしくお付き合いください。この話しは前職場での経験をまとめたシリーズです。前職場の許可もとってありますので、安心してお読みください。現在は訪問看護は緊急時のみ対応していて、基本は精神科・心療内科のクリニックで初診インテーカーとナースをしています。初診のインテークには、心理の知識や経験と医療の知識や経験のどちらもが活用出来て、天職かもしれないと思ってしまうくらいです。また、その後の治療へのモチベーションや信頼関係づくりという点でもインテークは重要だなぁ～と思い、毎日楽しく働いています。

浦田雅夫

９月になんと「肺炎」に。老眼もますます進行中。エイジングまっしぐらですが、何とか歯止めをと思っていた矢先「歯」も抜け。健康第一で、アンチエイジングに向かいたいです。

中島弘美

対人援助学会研究会の準備等をお手伝いさせていただいている中島です。

先日、大阪で「家族支援のプログラム」をテーマに、お話をさせていただく機会をいただき、家族支援のポイントとりこんママパパ応援講座の紹介及びグループワークをしました。

こちらの福祉カウンセリング講座は、1年で 20 回の講座数があり、3 年間がひとまとまりのサイクルとなる、充実した内容です。

この民間主催の講座は 49 年もの実績があります。来年は 50 年、半世紀の節目の年です。そこで、協会の方にお越しいただいて、そのあゆみについて、研究会でお話をしてもらえないかと現在、交渉中です。いまのところ、前向きなお返事をいただいており、年度内に開催することを目標にしています。どうぞお楽しみに！

藤信子

ここ 2, 3 日で、窓の外を黄色く照らしていた銀杏がすっかり散ってしまった。今年は、京都も 38 度になる日があるような猛暑だったので、紅葉の前に葉が枯れてきれいな色にならないのではないかと心配していたけれど、銀杏、紅葉はきれいに色づいている。

ただ例年より欅があまりきれいではないようだ。これは我が家のある団地の並木もだけれど、御池通の並木も今年は早く枯れた色になっているようで、あまり美しくない。木の種類によって、暑さ寒さの影響が違うのだろうか。そう考えながら、ガラス戸の向こうを眺めたら、目の前の公園の銀杏はすっかり散っているのに、少し東のお寺の銀杏はまだとてもきれいに輝いている。身近な花や木のことを考える時間を大切にしたい。

中村周平

引越しは時間が掛かります。引越しは費用が掛かります。引越しは気持ちを一新することができます。引越しは新しい出会いがあります。

２年という約束で住み始めた現在の住居。本当に本当にあっという間でした。「びっくり！」という言葉では言い表せない･･･時間の速さに焦りと喪失感が入り乱れている、というような感じです。

ということで、2年近くお世話になった現住居から引越します。時間とお金は掛かりますが、この引越しが自分にとって様々な意味で変化をもたらしてくれると期待しながら･･･さてさて、荷造りを。

浅田英輔

全国の都道府県職員が50人くらい集まって半年間研修をするというものに参加しており、１０月から半年間東京におります。1日5時限の勉強をして、夜は寮の仲間たちといろんな地域の美味しいものを食べています。高知のカツオ、仙台の牛タン、長崎の皿うどん、福岡のもつ鍋、そして様々な日本酒と、贅沢な生活です。何よりも雪のない冬、太陽がある冬というのはいいものですね。都心からは少し離れていて、晴れた日には富士山も見えます。つらいことは、一日中黙って座っていることですね。中高生は毎日これをやっているのかと思うとすごいなと思います。 3月までおりますので、お時間取れるかたはぜひお声がけください！

中村正

この秋の学会は関西に集中していた。毎週末のように学会や研究集会があった。関西なので企画を頼まれることが多く、例年になく学会に参画・参加した。狭い学者の世界で、重箱の隅をつつくような議論は面白くないので、なるべく異分野の出会いとなるような企画を練った。11 月末に大阪で開催された「日本子ども虐待防止学会」は 3000 人近い参加があったという。私は会員ではないので部外者の感想となるが、関心の持たれ方や議論の傾向も含めて虐待問題のきり取り方をもっと「平易なものに洗練させていく」必要を感じた。たとえば虐待への「介入」に力点が置かれすぎていること、子どもと養育者の支援、社会全体が子どもを育て、親を後景に退かせる取り組み、つまり養護だけではない社会的養育論等が語られるべきだと思った。「平易に洗練させる」とは、日常的な子育ての苦労や不安から出発すべきという意味であり、その意味では当事者の参加・参画があってもよく、あまりにも専門職者の目線が強いような印象を受けた。

それでも、記念講演に招いたゴリラ研究の霊長類学者山極壽一さんを対話のためにひきとめ、理化学研究所の脳科学者である黒田公美さんをひっぱりだし、私を加えた三人でシンポジウムを組織したところ300 人近い参加者があり、子育てについての異分野討論ができた。人間の赤ちゃんは何故泣くのかという山極さんの問題提起、動物の世界のオスと人間の父親・男性の役割の違い、向社会的行動の典型としての育児と脳の働き、動物と人間にとっての家族の意味の異同等、異分野交流ができた。二日目の企画では、母親支援に取り組む伊藤悠子さんと藤木美奈子さん、男親塾にとりくむ私が、大阪市児童相談所の久保さんや高下さんの発案による柔軟な公私連携をとおして取り組みはじめた「養育者支援 10 年」の経過と成果について発表する分科会をもった。こちらも会場いっぱいの参加者だった。今年の学会はこれで終わりと思っていたら、広島文化学園大学の副学長さんからメールがあり、全学あげての研究が「対人援助研究の推進」に決まり、そのための「対人援助研究センター」が文部科学省私立大学ブランディング事業に採択されたのでアイディアを欲しいという依頼があり、年末に出向くことにした。対人援助学会でお世話になっている神奈川県立保健福祉大学の臼井正樹さんのところは以前から「ヒューマンサービスの実現」を掲げており、ヒューマンサービス研究会を組織されている（臼井さんは本号から連載の予定）。全国に同様の研究や教育の組織が広がると思うが、共通点は実践と理論の関連を重視していることである。対人援助学会と

深い関わりのある立命館大学大学院応用人間科学研究科は、並行してスタートさせた人間科学研究所とともに「対人援助学の創造」を掲げている。立命館大学では、2016 年度から総合心理学部を開設し、2017 年度には専門職大学院・教職研究科を始動させる。2018 年度には、応用人間科学研究科を改組転換し、いままで修士課程だけだったが博士後期課程も加えて「人間科学研究科」とする計画で文部科学省と相談をしている。児童福祉司の専門性を高める研修制度が始まること、公認心理師制度が発足することもあり、そうであるならばより大胆な対人援助学の創造に向かうことを意図し、単なる資格課程となることのないようにしていきたいと思っている。学生や院生には人気があると想定される公認心理師資格であるが、名称独占なので、どんな仕事ができる人や資格なのかが問われることになる。単に資格課程に対応するというのは消極的な契機でしかなく、志は低い。多様な仕事を対人援助学という観点から再構築していくという新たな展開に向かう契機にしていきたいと思う。そのための異分野交流から刺激を受けた秋の学会であった。

牛若孝治

1億2700万分の1の確立の出会いを大事にできないのか！！！

「あなたはいつから眼が見えなくなったのですか？」、 外出する度に、そして仕事で患者さんと接する度に、こんなことを聞かれる。あるいは、「私も障害者なんです」、「私の家族のだれそれも眼が見えなくて」などという話題。私はこのような話題が大嫌いである。だから私は、この手の話題になるとこう言いたくなる。場合によっては現実に言ってしまうこともある。

「あなたは、障碍のある人たちと出会うと、障害者の話しかできないんですか、あなたの心音は実に貧弱ですね。この世界人口を、仮に 70 億人とした場合、私たちが出会う確立は 70 億分の 1、日本の人口を仮に 1 億 2700 万人とした場合でも、私たちが出会う確立は 1 億 2700 万分の 1。その 1 億 2700 万分の 1 の確立で出合った人に、挨拶一つで傷に、それでもあなたは社会人ですか。よくよく考えてみてください。これからの日本はますます厳しい時代に突入します。そんなときに、いちいち「あなたはいつから障碍を負ったのですか？」などと愚かな質問をするのですか。そんな質問をするような時間があったら、もっと日本の政治や社会の仕組み・世界情勢に目を向けて、積極的に自分から発信するぐらいの社会性を持ってください。そして、いろいろな人と出合ったら、「70 億分の1の確率で、もしくは 1 億 2700 万分の 1 の確立でお会いできてよかった」と、自分たちの方から言ってみてください」。

袴田洋子

締め切りをまたもや数日過ぎてしまって、すみません。今日は、11 月 27 日。今の自分にしか書けないことを書いてみようと思いました。人生、一度きり。あるがままに。私らしく。自分の気持ちを表現するのが、本当に上手くなかった、と気づきました。もっと自由に生きてみようと思います。

団遊

最近、パソコンバッテリーの様子がおかしい。減りが早くなったのは消耗したからなのだろうが、残り10%になった際に、「あとどのくらい持つか」の時間推定がハチャメチャなのだ。先日は「バッテリーが残り 10%になっています。あと約 7 時間しか持ちません」と表示された。7 時間持てば十分なのだが。アダプターを持ち歩いていない場合は、残り時間の中で優先事項を決めて仕事を処理するのがぼくのいつものパターンだから、こうなるとリズムが狂う。しばらくバッテリーとの駆け引きが続きそうだ。

大石仁美

私は、自分でワンを飼うまで、愛犬家と言われる人たちをずい分誤解していました。「犬に服を着せるなんて！犬はきっと迷惑しているでしょう。季節によって毛替わりしているというのに。自然のままの方がずっといいはず。えっ、防寒着以外にレインコートや靴まであるですって。人間の子じゃあるまいし、玩具にされて可哀そうなワンちゃんたち。」

ところが、実際ワンを飼ってみると、寒いところが原産地のわが愛犬は、夏は苦しそうで息絶え絶え。クーラなしでは夏は越せませんでした。日が暮れてから散歩に連れて行っても、帰るとすぐプールに飛び込み、全身を水につけて体温を下げています。冬はどんなに寒くても平気。反対に寒さに弱くコートを着せないと体調を崩す犬もあるようで、要は血統書つきの何の犬種かによってずいぶんちがうようなのです。鎖に繋がれて、完全に人間の管理下にあるワンちゃんたちの宿命として、過去にどこの家にでもいた、雑種という犬種は淘汰されてしまっていたのでした。

人間による環境の変化は、ワンの生活も大きく変えてしまいました。夏、コンクリートで固められた路面は強い日差しで鉄板のように焼け、日中はとても歩けません。ワンの肉球は焼け焦げてしまいます。日が暮れてからも、手を置いてみると、まだまだ熱く、8 時を過ぎてやっとなんとか歩けるかなあという具合。靴を履かせたくなるのもうなずけます。体験して初めて解ることがいっぱい。

自分はなんて思い込みの強い人間だったのか思い知りましたが、もしかして人間は皆、思い込みの中で生きているのかも知れないと思ったことでした。」

村本邦子

楽しかった研究休暇も終わった。あくせくせず、長く楽しく働き続けられるようにと、今、いろいろと努力している。これまで「今日できることは今日やる」をモットーに生きてきたけれど、「明日でいいことは明日する」に方針変更した。それから週1本は映画を観に行くこと。ちょっと仕事がたまりすぎた感はあるが、でも今のところ、まぁまぁ

のペースかな。いい加減、大人の余裕を身につけたいものだ。

國友万裕

ちょっとずつだけど、男性被害へ社会の関心は向いてきています。『ヒメアノール』は久しぶりに興奮させられた日本映画でした。いじめられっ子や非モテ系の三人の男性を中心に、極めて新鮮な視点で、その末路を描いていきます。こういう映画がではじめたのは、男性学にとっての大きな進歩です。話は結構グロいのですが、いじめられたり、非モテだったりの男性は、大人になってもそのトラウマを引きずり続けることがわかると思います。ぜひ、女性に見てもらいたい。そして、男は痛い！ということをわかってもらいたいです。

久米泰介さんの翻訳による『広がるミサンドリー』（彩流社）の書評が朝日新聞に出ました。斎藤美奈子さんによる好意的な書評でした。ミサンドリーとは男性嫌悪のことを指します。これまで女性差別の文献は山のように出てきましたが、男性差別についての本はほとんどなかったので、これが朝日の書評に大きく出るとは画期的なことです。

女性専用車両、映画のレディースデーなど女性に特化したサービスはたくさんあるのに、男に特化したサービスはほとんどない、まだまだ政治家や管理職は男ばかりだけど、しかし、権力握れる男なんて、ごく一握り。最初から権力なんて要らないという男だっているし、男イコール支配階級っていう考えはもう古い、なぜ、これくらいのことを皆わかってくれないの？？？？？　いつまで男は割の合わない思いをしなくてはならないのか。僕は小学生の頃からそれを訴えているんです。わかってもらえないままもう 50 代、はよ、誰かわかってください！！！！！（笑）

北村真也

認定フリースクール「アウラの森　知誠館」代表。（http://tiseikan.com）

古川秀明

今年は新しいCDも完成し、関西だけではなく、九州や東北でも講演会＆ライブをさせていただき、忙しいけれど充実した 1 年でした。対人援助マガジンを書くことで、その時の反省や今後の課題が整理されていくので、自分にとってとても良い総括になります。

（シンガーソングカウンセラー）

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。あといろいろ、面白そうなことに顔を突っ込んでいます。

この締め切りから次の締め切りまでの間に、40 歳の誕生日を迎える予定です。ついに第二成人式。とにかく私の周りの諸先輩方は毎日楽しくって仕方がない！という顔をしている人が多くて、おかげさまで年をとることに期待とワクワクしかありません。

もちろん皆さまそれぞれに人に言えない痛みや結構重い荷物もおありでしょうが、それさえも自らの深みや厚みや味として大切に抱きしめて、明るく元気で機嫌よい方が大変多いです。人生の壁には、そうやって挑むのか、と勉強させて頂いております。

京都精華大学のあかたちかこ先生が以前何だったかの講演会で「機嫌よくいる、というのは社会人としてのマナー」とおっしゃっていました。諸先輩方は皆さんマナーの良い方ばかりで、思わず身は引き締まり、背筋は伸びて、心はユルむ思いです。

「悲観主義は気分のものであり、楽観主義は意志のものである（アラン『幸福論』）」。私も日々、ご機嫌でいる自分を選びます。

坂口伊都

養育里親をしながら、いろいろな仕事をさせてもらっているのですが、その中の一つにスクール・ソーシャル・ワーカーがあります。学校という場所は、あまり立地条件がいいわけではないので、自家用車で移動することが多く、その日も学校の指定された場所に駐車していました。業務が終わり、帰ろうとすると違和感があり、フロントガラスをよく見るとキズがついています。うん？と思って外に出てみると、ワイパーの所に石が落ちているではありませんか。慌てて、教頭先生に報告をし、写真を撮ってもらい、石を預けました。雇い主の教育委員会にも報告をしましたが、誰がしたかがわからないと何もできないと言います。SSW 担当の指導主事は、申し訳ないといろいろ動いてくれましたが、結局 12 万円の修理費がかかりました。夫からは、週 1 回の勤務で修理代を稼いでいるようなもんだなと言われ、全く反論できません。運が悪かったねという問題ではないでしょう。教育委員会には、来年度の労働条件や保証をしっかり考え直してくださいとお願いしています。保険を見直してもらうと、条件がマシになるはずです。おかげで、教育委員会からは今年度いっぱいは、送迎される身になり、帰り時間になると「忘れられていないかしら」と不安になりながら過ごしています。いや～、いろいろありますね。

河岸由里子

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

さて、最近あるクライアントさんの話から。

その人は、難病にかかりあちこちに麻痺が出て、1年の間に歩くこともできなくなった。たいていの人がそうであるように、今まで健康で過ごしてきたし、自分が病気で動けなくなるなどとは考えたこともなかった。今動けなくなって、「たとえ末期のがんと宣告されたとしても、動ける方が良い。」

と言っていた。たくさん話をした最後に、「今元気でいる人は、本当に偶然が幾つも重なって、奇跡的に元気でいられるのだ。」と言った。

確かにその通りだ。ちょっと動きがずれるだけで、もしかしたら事故に遭っていたかもしれないし、ほんの僅かな違いで、病気にかかったりケガをしたかもしれない。そもそも、五体満足で、健康体として生まれたことでさえ、幾つもの良い条件が重なったともいえる。このように考えると、今、この年齢まで大きな病気もケガもせず、結婚して子を産み育て、子どもたちも健康に育っていることなど、本当に奇跡的なのかもしれないと思えてくる。

後悔のない一日を過ごすことを第一に、毎日健康で過ごせていることに感謝し、これからも「日々是好日」と過ごしていきたいものだと、その人の話を聴いてあらためて思った。

今回は「先人の知恵から」と「境界あれこれ」の二本立てになった。別によくばるつもりはなかったのだが、中途半端が嫌いなのと、ラジオで諺の話を聴いていて、やはり「先人の知恵から」も続けようと思い、二つとも書くことになった。次回も二本書けるかどうかはわからないが、無理せず、ボチボチやっていこうと思う。

岡崎正明

我が家の1歳の娘の最近のブームは、相手に食べ物を与えること。

毎日自分が「ア～ン」と口に運んでもらったり、上の子に親が食べさせる様子を見て真似するようになったのだろう。ミラーニューロンが働いているようでなによりだ。

食べかけのパンや豆腐を手に掴み、「アー」とかいいながら一生懸命私の口に入れてこようとする姿は可愛いが、あまり見た目のよろしくない食物を放り込んでくるので、正直勘弁してほしい。特に朝の忙しい時は、真面目に食べないことに怒りすら覚える。料簡の狭い親業勉強中のおっさんである。

トランプ大統領が誕生したショックと、イギリスがEUを離脱する流れを受け、世界は「協調」から「分断」だ！とマスコミは騒いでいる。たしかにどことなく不穏な空気を感じるが、歴史の長い軸で考えると、こういうことは初めてではないのだろう。離合集散を繰り返し、私たちは少しずつ賢くなっていると思いたい。

トランプが「言えなかった本心をいってくれる！」と、彼の発言がさも人間の本性のように語る意見があるが、そんな単純なものでもないと思っている。本音も建前も、欲求も理想も、私たちの内から出ているものだ。すべてひっくるめて、まぎれもない私たちだ。そのへんの詳しいことは、また本文で。

まだたいした躾も、道徳の授業も受けていない娘が、他者に分け与え施す姿を見て、希望は捨てないでいいのだと確信している。　buimen0412@yahoo.co.jp

竹中尚文

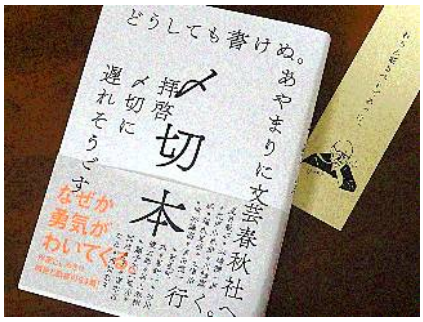
浄土真宗本願寺派専光寺住職。

トランプ氏がアメリカの次期大統領に選ばれた。予想外の結果だそうだ。しかし、その結果に関してはイギリスのEU離脱の国民投票も同様だろう。アメリカもヨーロッパも日本も同じような状況だと思う。普通の人々が困っている。実感として普通の人たちの給与は 40～50 年前に比べて減ったように思う。かつては、普通のお父さんだけが定年まで働けば、普通の家が持てたと思う。今は、普通のお父さんが定年まで働いても普通に家が持てるとは限らない。好むと好まざるとも夫婦で働かなくてはならなくなった。日本でも普通の暮らしの所得は減った。◆夫婦と子供たちも共に元気な家族にとっても、余裕のない暮らしである。そして、元気な普通の家族に他者を思いやる余裕はない。日本の投票結果は、その状況を示している。欧米の投票結果も同様である。他者の困難がいかに深刻であっても、自分の困難の解決が優先する。それは、蜘蛛の糸を這い上がるカンダタの姿である。◆自分以外に大きな困難を抱えている人々をイメージできない。自分の知らないことをイメージできることがインテリジェンスだと思うのだが。私たちは、無経験のことに想像力を働かせるのは不得意だ。死の経験はないが私たちは必ず死ぬ。自分の死についてイメージをしない人が多くなった。死は、その時に考えようと言う。それは他者の死に無関心であることを示している。それが身近な人の死であっても。◆大切な人の死は、私の人生を目覚めさせる機会になってほしい。

川﨑二三彦

朗報

対人援助学マガジン連載中の、おそらく約１名を除く全員に朗報です。



皆さんは、編集長から定期的に送られてくる「締切のお知らせメール」に恐怖感を覚えたことはないでしょうか。かく言う私も、メールの件名を見た途端に顔を背け、未読のまま放置し、このまま時間が止まればどんなに幸せだろうかと呟き、次の瞬間、どこから絞り出されたのかと疑いたくなるようなうめき声に、自分で驚いている有様なのです。

そんな私の味方が無数に存在することがわかりました！

まあ、騙されたと思って読んでみて下さい「〆切本」。いずれも名だたる多数の文筆家が、そろいも揃って〆切地獄に追われる姿に、我が身を忘れて笑わずにはおれません。溜飲が下がります、現実に引き戻されるまでは。

＊

というのはさておき、前号で紹介した動画版の「ジェノグラム－描き方と活用のコツ」。子どもの虹情報研修センター援助機関向けページにアップした後、多くの方に訪問していただき、おそらくはこのマガジ

ンを見られて、「是非みたいので、援助機関向けページのパスワードを教えてほしい」と連絡してこられた方もおいででした。

試作品レベルのものではありますが、実際に参考にしいる人も多いとて聞きますので、改善点を検討し、さらによいものを目指して改定版を作りたいと考えています。引き続き皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしています。

＊

などと言っている間に、実は私、町内会の老人会参加資格ができてしまいました。

この間、東京に行くのに新幹線の切符を新横浜までしか買ってなくて追加料金を払ったり、ホテルの部屋番号を勘違いして別の部屋の鍵を開けようとしているのに気づいて後ずさりしたり、研修講師で訪問した先で出されたお菓子を遠慮深く食べずにいたら、ひとまとめにしてお土産にしてくださったので有り難く頂戴したものの、ホテルに置き忘れて着払いで送ってもらったり、某学会に出かけるべく電車に乗る直前に参加証を忘れていることに気づいて慌てて取りに戻ったり、確実、着実に呆け状態が進化、深化しております。

そんな私に朗報！　がありました。某鉄道会社が、〇〇歳以上の高齢者を対象にした「ジパング倶楽部」なるものを盛んに宣伝しているのを見つけたのです。ふと考えると、私もほやほやの有資格者。

詐欺に遭う老人が増加している昨今、怪しげなものではないかと眉に唾して調べてみると、何と年間 20 回も、（新幹線のぞみ・みずほを除いて）全国全線の JR が、特急券、乗車券を含めて3割引きなるというではありませんか。これを逃す手はないと即断即決、夫婦会員も可能というので、連れ合いも無理矢理説得して無事入会。

早速その権利を行使して、1年のうち9日間しか一般公開しないという佐賀県神埼市の「九年庵」を訪ねてみました。

というのはよいとして、宿泊した武雄温泉での出来事。幸せ気分で温泉に浸かり、やおら上がろうとしたその途端、丸裸のまま足を滑らせて転倒し、右腕打撲の不名誉の傷　　。

「ジパング倶楽部」より「老人クラブ」ですかね、やはり。

（2016/11/26 記）

荒木晃子

今回の原稿は、出張先の島根県松江市のホテルで完成した。本マガジンの連載開始以来、初の経験である。自分が（以外に？）不器用な人間なのは、ずっと以前から自覚がある。二つの作業を同時に進めるといった効率的な動きが苦手なのだ。しかし今回は、カウンセラー業務中に、執筆活動を行う、といった偉業を成し遂げたことになる。そういえば、最近とみに、順序良く仕事や作業の予定を組むことが不可能になった。気が付けば、現在係わっているプロジェクトは 3 チーム。業務以外にである。当然、プライベートな時間を楽しむ暇はない。この状況を嘆くも、喜ぶも自分次第。泣きべそをかきながら、ひたすら PC に向かい、やるべき作業を進める日々を送っている。

11月第1週には、第61回日本生殖医学会（横浜）で生殖医療従事者を対象に講演。先週は、昨年に続き、津田塾大学で講師も務めた。100名を超える女子大生たちの幸せを願い、思いの限りを語ることができたと思う。今回の出張を終え自宅に戻れば、おそらく受講した学生たちから講義後の感想文が届いているはずだ。講義前に事前質問票として届いた100項目近くの質問の、その後がどう変化しているのか楽しみである。忙しい中にもよろこびがあり、また新たな出会いもある。なんと幸せな人生だこと！

鶴谷圭一

幼稚園の年長組で、「エルマーのぼうけん」という童話を読んでいる。

僕が子どもの頃からある名作で、誰もが夢中になる！･･･と思っていた。しかし聞いていられない、興味が沸かない子どもがクラスに数人いるという報告を担任から受けた。

登場人物を自分の頭の中で動かせなくなってしまったのか！ショックだった。

担任はいろいろと働きかけているが、小さい挿絵では興味が沸かないらしい。乳児時代からテレビを含めて動画ばかりを見てきた子どもたちの脳でどんな現象が起きているのだろうか。気になる。

原町幼稚園
http://www.haramachi-ki.jp
メール　osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター　haramachikinder

木村晃子

この１０月、父が亡くなって１年が過ぎた。部屋にある父の写真は、いつも私を見ている。いなくなって改めて父の存在の大きさを感じている。父を亡くしてからの母は、心配なく元気に過ごしてくれている。父亡きあと、ふさぎこんでいる母をみたことがない。いつも、近くに友達がいて、それなりの交流のためのスケジュールもあって･･･母は母なりに楽しく生活を続けていることが私の安心でもある。そして、やがて老いる私自身も、どんな老いを生きていったら楽しいだろう？と考えることが

出てきた。「老いの事前相談」は、人生の諸先輩たちの生きる姿から感じ取るものだろうか？

乾明紀

過去3回の短信に肌の痒みが治らないということを書きましたが、6 月に生まれた次男も肌荒れが酷く親子で苦労していました。皮膚科で言われたことはとにかく肌を守ることだったので、私は掻かないように努め、子どもにはミトンをし、加えてお風呂上りにワセリンをたっぷり塗ることを心がけました。ワセリンって効果があるんですね。ようやく改善を感じられるようになりました。

ただ、また奥歯が少し痛むようになってきました。仕事中や就寝中に食いしばっているようです。慌ててマウスピースを復活したのですが、体ってメンテナンスを欠かしたらダメですね。

馬渡徳子

月日が経つのは、本当に早いもので、12月に父の一周忌を迎えます。母のたっての希望で、父の勤務先であった本社近くの菩提寺に、家族で訪れることになりました。

後輩社員の方々のご高配で、お目にかかれる機会をもてることにもなり、私たち家族の知らない職業人としての父の業績を、家族みんなで振り返る事が出来る、素敵な一周忌になりそうです。

家族にとっても、この日を区切りに、「今から、ここから」と次の一歩を踏み出せそうです。

皆様にも、神の御加護の元に、素敵なクリスマスと、良いお年をお迎えになられますように。　　合掌

三嶋　あゆみ

相模原事件のことを忘れたくなくて、学ぶ機会を見つけたら手を伸ばしています。私の見ている世界は私しか知らないのに、外の基準で勝手に判断されるくやしさやがまんを想像します。

この「徘徊介助犬」は、こんな相棒がいたらいいなと思って描きました。不安な時、うれしい時、さみしい時もソワソワする時も、一緒にウロウロしてくれる頼れる相棒です。2014 年作。

ブログ：http://fooshi.exblog.jp/

見野　大介　みのだいすけ

怒涛の秋のイベントラッシュもなんとか乗り切り、あとは餅つきをして新年を迎えることになります。

今年は兎にも角にも忙しかったです。そのおかげで来年は関西を筆頭に、東京や徳島、愛媛にも出展することが決まりました。自分の作品をより多くの人に観て頂ける機会が増えて、嬉しい限りです。

来年も、器の一つ一つを丁寧に作り、陶芸の楽しさを伝え、自分も陶芸を楽しみたいと思います。

団士郎

我が事ながら、七十前とは思えない秋のスケジュールをほぼ乗り切った。9月第一週末から、例年の青森県むつ市に出かけた。それを皮切りに延々と巡業になった。翌週末、山形WSに行った。その翌週には長崎ハウステンボスで家族療法学会とマンガ展、WSをした。翌週、神奈川県横須賀市での対人援助学会でシンポジストを務めた。月末、東京日帰りで学会の常任理事会に出席。10月第一週は入試面接があったので京都にいた。第二週の震災プロジェクト・宮城県多賀城市では、新しくなったTSUTAYA図書館のギャラリーでマンガ展＆漫画トークを開催した。次の週末、家族心理学会で千葉県松戸の聖徳大学に行った。翌週末は帯広。新千歳でピックアップして貰って雪景色も見える道を車で2時間。遠い。夕刻について懇親会。翌日一日WSの後、車で三時間、夜札幌に到着。翌日一日WSを実施。

月末の土日に一息つけたのは、京都国際社会福祉センターのプログラムが参加少数で不開催になったからだ。それならというので、妻と富士山麓、忍野八海近くの富士山が部屋の露天風呂から見えるというところに出かけたら、大曇天だった。11月第一週末は岩手県宮古市で、東日本大震災復興家族応援プロジェクト6年目。二週目は定例の東京での家族理解WS第51回目。今回の会場は代官山。

翌日は埼玉県北浦和で一日WS。国際女子マラソンのコースに阻まれ、大きく迂回して会場に。

そして授業を済ませた火曜の夜、熊本へ。児童施設の心理士のための一日WS。震災後の益城町にも立ち寄る。

週末は17年目になる青森・弘前WS二日間プログラム。最終の日曜日は川崎医療福祉大学を会場に継続開催している岡山WS。12月の第一週末は福島市で震災プロジェクト。第二週は広島で一日WS。第三週は松江市で一日WS。そしてクリスマスイヴを迎えると、私の今年のスケジュールが終わる。

この間、毎週、月、火は大学院と学部で授業とゼミをしている。木曜日には京都市職員相談室のカウンセラー勤務。月例の事例検討会が立命館大学、大津、草津の勉強会。更に毎月の連載漫画「木陰の物語」制作と、現在作業中のこの季刊「対人援助学マガジン」編集。

これらをつつがなくやり通すには、健康が必須条件。だから今はストレッチに通っている。思わず「疲れた・・・」とこぼしたら、妻から「当たり前！ 少し仕事を減らしなさい！」と言われた。

もう新たな仕事を引き受けるような愚はしないからな！と新年に向けた決意。

千葉晃央

表彰や賞状の類とは無縁の人生を歩いてきた。勉強も、運動も、飛び抜けることなく過ごしてきた。それが20年、民間社会福祉施設で勤務したことで「感謝状」を頂いた。何か資格を習得したのでもなく、何か1番になったのではない。毎日、出勤し、利用者さんと共に過ごし、任された業

務を継続した時間への感謝状ならばうれしい。ギリギリに出勤していたことも、朝の7時には現場に毎日いたことも、深夜近くまでいたこともある。夜ご飯はみんなで弁当、差し入れはドーナツ、旅行の出し物で職員の漫才を必死に練習…など思い出は尽きない。お世話になった方々の一人一人の顔が浮かぶし、謝りたい気持ちでいっぱいになることもある。歳を重ね、やっと少しわかったこともあるし、今ならああいうことはしないので思い出したくないできごともたくさんある。「利用者さんのことを一番に考えるなら辞めないこと！」団先生に千葉が20代の頃に言われた言葉。私の思い出は一人のものではない。思い出の中にいる利用者さんのものでもある。その共通体験をベースに今も会ってくださっている利用者さんもおられるし、一緒に過去を振り返ることができるたくku梆C鵑陵・w）ﾏ者さんもいてくださる。そういう人がいることは人生そのものを広げる。これは、今回書いた編集後記にもつながる話。感謝に値する仕事が完璧にできているとは思わない。これからも日々精進あるのみ。

大谷多加志

いささか気力が乏しくなっているように自覚しているこの頃。流れを変えたいとは思うのだけれど、具体的な動きにまではなかなか持っていけない。そんなグズグズしている自分を認識している。そんな言い訳をしておいて、今号の締切が迫る中、まだ原稿を書きあげられないまま、ひとまず短信から書いている。夕刻から息子が発熱し始めて、先ほど熱を測ったら39度超え。ただの風邪と思っていたけれど、ひょっとするとインフルエンザかも、と思い至る。そういえば、もうそんな季節。もしインフルエンザとすると、私は今日 1 日の濃厚接触者。実は私はインフルエンザにかかる頻度が高く、仕事を始めてからは 3 年に 1 度、ここ数年では 2 年に 1 度はかかっている（予防接種をしても関係なく）。はたしてインフルエンザか否か。結果はたぶん、無事連載が成されているかどうかでわかります。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

27：　救世主になりたい援助職

千葉　晃央

「一生私たちが支援します！」

「一生私たちが支援します」と利用者の家族に言った。この現場では、実は利用者による職員への暴力が継続的に発生していた。それでも、福祉事業所の援助職は「相手を受容することが大事だから」と、利用者からの暴力を「受容」（?）していた。職員の腕にはアザもできているし、出血した時には通院もしていた。それでも、その事業所のスタッフは利用者とそのご家族に「一生私たちが支援します」と言う。この事業所にも体系的に社会福祉学を学んだ方がいて、一生懸命科学的に捉える重要性、職員のスキルアップの必要性を訴えた。しかし、その方自身が身も心も持たなくなり…。

救世主になりたい！

心理学には「救世主願望（メサイア・コンプレックス)」という言葉がある。ユングは、複雑な感情的反応を「コンプレックス」と呼んだ。日本語で「コンプレックス」というと「劣等感」というイメージがあるが、ユングがいったのは「劣等感」だけではない。人の心の奥にある「自分は劣っている」という不安な気持ち、それと同時にある「いや、自分は人を救える優れた人間である」という気持ち。それらが入り混じっている状態を「メサイア・コンプレックス（救世主願望)」といった。

そして、その結果として「自分が救われたい」から、他人を救うということが起こるといわれている。他者を助けることによって、自分自身（援助職）の存在を確認したり、相手（クライエント）に対して優位に立とうとしたりすることも起こるとされている。自分自身（援助職）が他者から必要とされたいという思いがベースにあり、これはアイデンティティ（自己証明、自己信頼感）の欠如である、つまり自分は対象者を「救う人」でありたいという願いの表れといえる。

ウラ支援

知的障害者の労働現場で、通所の事業所の場合、利用者さんは朝出勤して、夕方ま

で働いて自宅やグループホームにかえっていく。平日は働いて過ごし、土曜日、日曜日、祝日などは休日となる。利用者さんは家族と過ごしたり、友人と過ごしたり、ガイドヘルパーさんとお出かけをしたりと各々に休日を過ごす。しかし、充実した休日（誰の視点からの充実なのか？は大切なポイント）を送ることができていないと感じてしまう利用者さんに出会うこともある。当たり前だが、多くの知的障害者の労働現場の職員は自分たちの役割、機能、立場が持つ限界を理解し、自分が休日まで直接かかわることは当然していない。職務を越えているからである。ガイドヘルパーの利用を提案することや、地域にある機関などの社会資源の情報の提供などが行われることもある。しかし、「…うーん、それやったら私が明日一緒にいましょうか…」といって、知的障害者の労働現場の職員が勤務時間外に、休日の「支援」を行っている話が漏れ聞こえてくることがある。もちろん所属長の許可はない非公式なわけで、何か事故でもあれば…大事となる。

利用者の幸せを望んでいない？！

救世主願望（メサイア・コンプレックス）の根底には、自分自身の価値がない…という深い自己無価値感を持つとされている。そして、そんな強い劣等感を抑圧しているともいわれている。自分自身が存在する「価値」を感じることができないために、人から感謝されるようなことをして、自分の価値を実際に感じようとする心理的なメカニズムがあるといわれている。つまりは、本当には他人（利用者）の幸せを望んではいないともいえる。「私（援助者）がいないといけないよね…」と自分が思いたいし、相手にも思わせたいという心の奥の願いさえもあることも指摘されている。

私自身は援助職という職業選択を高校生の時に決めた。デスクワークは無理、規則正しい高校生活への不適応、社長のベンツのためには働きたくない…以上の点から、自分がいることで誰かが喜んでくれるかもしれないということがよぎり（今では恥ずかしい動機）、福祉の道を選んだ。そう、私自身もメシア欲求が見え隠れする動機がスタートである。

そこから、更にさかのぼり、私の原家族でのケア役割を考えると、母はしばしばある悩み事を抱えていて、その話を小さい頃からよく私にしてきた。その経験から、話をきく、誰かの支えのような役割にはなじみがあったのかもしれないと思い返すこともある。こうした経過が私にはあったので、この救世主願望をいう言葉に出会った時はなかなかの衝撃であった。

救世主のやり方をかえるな！

職員は病気で休むこともあるし、資格取

得のための実習を別の事業所で受けるため長い時は約 1 ヶ月間不在にすることもある。その時に代わりに利用者さんを担当をしてくれる職員に、普段自分が行っている対応と一語一句違わない支援を行うよう求める場面に出会ったこともある。そして、それが行われていないと「(…やはり私じゃないと無理だな。) だから、私がいつもしているやり方をしてください！といったやん！」と思ったり、ひどい時には不在を担ってくれた同僚にそのセリフを言ったりすることも起こる。自分は欠席していて、職員手薄状態を現場でつくっておきながら、「こうしろ！」という。更にそれができていなければ相手を責めることも…。これでは職場に他者の欠勤を容認できる心の余裕はなくなる。職場の援助職チーム全体に悪い影響をもたらしかねない。こんな場面もメサイアコンプレックスが見え隠れするように感じた。

救世主の提案を断ろうものなら…！

これらのように救世主願望（メサイア・コンプレックス）が引き起こす行動といわれているものがある。そもそも対人援助職という職業選択自体が自分の脆弱なセルフイメージを補おうとする自己満足になってはいないか？というセルフチェックが必要である。先ほどの休んだ職員のように、過度な理想主義を掲げることで、自分を補おうとすることも起こる。しかし、自分自身が完璧にそれを遂行できるわけではなく、更に実際の現場ではチームで仕事をするわけであって、自分だけの思いでは実践は成し遂げられない。それでもがんばろうとして、疲弊し、結果としてはうまくいかない…。加えて、利用者や同僚が嫌がったり、迷惑がったりするような、親切の押し売り（この支援を利用するといいから…など）をすることもみられるとされる。もし相手がこちらの申し出を断ったり、注文をつけたりすると援助職が不機嫌になるというようなことまで起こる。

「せっかくこうしたのに、もう知らん！」と援助職が思ってしまう場面。これは、援助職が解決したい事案を選び、援助者のペースで解決しよう、なおそう、癒そう、楽になってもらおうとしているのである。それは利用者が思う解決したい事案の優先順位とは異なる可能性も多分にある。「そのことよりこっちを先に…」と利用者さんが思っているかもしれないのである。こういった時には利用者さんのタイミングを援助者はただ待つわけではない。利用者さんの状況がわかる距離は常時保ち続け、時には「お誘い」や「提案」もする。けれども何かを扱うタイミングは利用者ご本人のペースで…というのが基礎になくてはならない。

自分のやり方だけが唯一の方法

援助職が自分のやり方に固執し、この方にはこの取り組みを…、この事業にはこの進め方を…という状況を一定期間実践することで、その仕事を援助職が抱え込んでしまう状況もしばしば起こる。自分しかできない、自分のやり方だけが唯一の方法であるというように思うのである。人事異動や担当変更での支援関係の終焉、担当業務を

手放す事態は、組織に勤務している限りは、つきものである。あくまで職務として勤めているという事実は存在しているわけである。大切にするべきは、自分自身の自分の仕事への納得ではなく、支援を本当に相手の役に立つものにしていくことといえる。

一方で、現場には自分のペースで、仕事をとことんやる援助職がいる。現に福祉の先人といわれる人々や福祉のトップランナーといわれる人々は、勤務時間とか関係なく、利用者と寝食を共にもするし、私財も投げ打つし、休みもないような自分のペースでの働きぶりで今の福祉を形作ってきた。古くはスラム街への住み込みをしたセツルメント事業、90 年代は自分のボーナスで職場改革のため職員全員のパソコンを買い与えた逸話…。そういった「モーレツ社員」ならぬ「モーレツ援助職」の働きを、多くの人が働ける形に一般化していくことも福祉の作業であり、任務といえるだろう。社会政策として、広く普及、提供するためには必要なプロセスである。一方で、とことん福祉の提供ができないことでの「罪悪感」も援助職には生まれる。その下地にあるボランティア精神、サービス精神、自己犠牲の精神ありきの伝統的価値観。これは、この業界の低賃金の遠因の一つともいえるだろう。自分の身を削り、自分が破滅してでも…という話しは日本の桜が散ることを美化する文化、特攻隊の精神、玉砕思想とも親和性を持っているようにも見え、良くも？悪くも？日本の援助職業界の特徴となっている。

手柄が欲しい援助職

「私の前で成長して欲しい」、「私の成果による利用者の変化が欲しい…」、「私がかかわったから利用者さんが落ち着いた」こんなことが頭をよぎるのは人間なら当然ともいえるだろうか。そう、援助職も勝手なもので、つい自分がかかわった成果を求めてしまう。それを、今は福祉制度も拍車をかけている状況がある。自分がいる時間に、自分の目の前での相手の変化を探す。それを自分の成果だと理解し、自分がやってきたこと、勉強してきた努力を自己承認し、また自ら学び、利用者にかかわる。この繰り返しでは「自分のやり方だけが正しい」と錯覚が起こりかねない。私はよく知っている人、利用者はよく知らない人という権威関係ができる「パターナリズム」にも近づく。こうした成果主義であったり、エビデンスであったり、そうしたものの見方自体が過剰になることが「パターナリズム」に近づける力を持っているとはいえないだろうか。物事の多面性を認め、実際に多面的にみる力が求められている。

制限のある状況での支援であること

長年、社会福祉の実践に必要とされてきた原則の一つに「制限の原則」がある。コ

ノプカがグループワークという集団に対する福祉的支援を行う時の原則として整理したものである。ここ 10 年ぐらいですっかり教科書などからカットされてしまった。これは、利用者が自分や他人の生命を脅かしたり、人間関係を破壊する行動をとったりすることのないように、お互いに制限を加え、制約しあうことを根本的ルールとすることである。援助者は、利用者が、この制限や誓約のルールを尊重することを、利用者の成長（変化）やグループの発展へとつなげていく。制限を，各個人およびグループ全体の状況に対する診断的評価に基づいて，巧みに用いていく。つまり、何をどんなふうにやってもよいというわけではなく、必要に応じて一定のルールや制限を設ける必要があるとしている。

当然、支援者にはその役割と所属機関の目的がある。その制限を受けるわけである。自分たちの役割、自分たちの資源という限界（＝制限）がありながら関わっていくのが我々援助職の原則である。たとえ「利用者主体」と言っても、休日にもかかわったり、利用者を受容するために暴力を甘んじて受け続けたりするのではない。そのままいくと関係の継続ではなく、破たんに向かい、それこそ利用者にとっても、援助職にとっても不幸である。限界であり、制限のある中での、最大限を狙うことも援助職には求められている。

かかわりの量に頼り過ぎない？

そのあたりの話として、かかわりの量について、援助職の間では話題になる時がある。私は、なかなかある利用者さんとの信頼関係が構築できない時があった。その時にその方が暮らすグループホームを訪ねようかと考えて、上司に相談したことがある。すると上司は「それは当然すぐよい結果が出るよ。でも我々の役割は、日中の仕事場でかかわるのが中心やから、もう少し何とか本来のわれわれのところでいろいろかかわってみたら」と言われたことを思い出す。かかわりの量での解決ではない、制限のなかでの解決を模索することも援助職にとって学びになることを提示してくれたのである。

私のいる知的障害者の労働現場での支援はかかわりの量は多い部類に入るといえる。かかわる量が少ないのは面接、相談を中心にしている職場の援助職である。施設現場でのかかわりは共有する時間も体験も多く、その時間と経験が信頼関係を担保することも起こる。しかし、面接場面では短時間、面接室という枠で信頼関係の構築が求められる。当然、求められるスキルが異なる部分があるともいえる。しかし、「面接も施設での日中プログラムと考えることもできるのよ」と先輩から示唆を頂いたこともある。なるほど、構造化面接、半構造化面接といわれるあたりである。私の施設等でのグループワークの経験を面接場面でどう活かすのか？についての姿勢を伝えていただと大切にしている言葉である。もちろんすべてがそういう場面ばかりではないが、今も面接や支援のヒントをくれる視点としてもっている。

先日、入所施設の先生がおっしゃっていたのは「かかわりは量が大事というのもあるけど、生活施設だと切れ目がなくなって

超過勤務も簡単に起こる。そうすると職員もいずれは倒れてしまう。やはり長い目で見るとよくない。この頃、職員に伝えているのはかかわりは量より質といっています」というおはなし。このように支援を質と量で捉えてみるのは興味深い。かかわる量が多いオープンダイアローグが話題になるのも、何かの照らし返しであり、何かの対極を示すといえる。

言ったのに聴いていない方が悪い？！

援助者の陥る問題として救世主願望という視点は、時に大事なものを気付かせてくれる。われわれ援助職の仕事は、援助職は利用者を大切にしながら、なおかつ職業人としての自分も大切にしながらの仕事となる。そこに救世主願望の視点があることによって、過剰な保護、過剰な配慮になっていないかのセルフチェックである。こうした自分自身の一定レベルでの精神的な健康の保持が、利用者さんにも帰依するのは言わずもがなである。

救世主願望というキーワードのように状況を知性化してとらえるための努力は怠ってはならない。「約束を破った利用者が悪い」「言ったのにきいていない利用者が悪い」といったレベルからわれわれ援助職は決別しなくてはならない。知性化に向かう時の手段が資格の取得であったり、進学であったりすることもあるし、もちろん独学でもできる。自分で、その仲間を見つけ、場をつくることもできる。

そこでは、ひとつはスーパーヴィジョンを受けるというスタイルも活用するべきだろう。私のいる障害者福祉のお隣である高齢者福祉の援助職は向学心も高く、その領

域ではスーパーヴィジョンは当たり前になりつつあるように思う。グループスーパーヴィジョン場面で用いる事例検討の方法すら複数提示され、全国で学びを継続している。私のいる障害者福祉の領域もこの姿勢を大いに学びたい。いずれにせよ、何らかの方法で、学びを続けること、その成果として、状況を「知性化」してとらえることができるとよい。

Teacch の方法でかかわっている、行動療法・行動分析の視点でかかわっていると支援を組み立てていても、精神分析的にみると「退行」が起こっている…というようなことが現場では起こる。しかし、一つの状況を多面的に捉えることができるとチャンスは増える。かかわるチャンネルが増えているのである。支援を行っている途上で困難な状況に出会った時、今とは違う何かオルタナティブを模索する時には、資源になるのは言うまでもない。

そもそも、新しい世代は　救世主願望を持たない…という話しを京都文教大学の吉村夕里先生からうかがったことも記憶に新しい。「福祉現場の事務職がいい」「人とかかわるのが苦手なんで」という福祉を学ぶ学生に会うこともしばしばである。「援助職って、その人の人生に関わっていて、責任が重いじゃないですか！」といってのける学生に言葉を失う…そんな経験も一つや二つではない。

参考文献：

古宮昇『プロカウンセラーが教える場面別傾聴術レッスン』ナツメ社　2015
古宮昇『プロカウンセラーが教えるはじめての傾聴術』ナツメ社　2012
福島哲夫『ユング心理学』ナツメ社　2003

BACK ISSUES

事件について 26　2016 年 9 月
クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月
施設が求める「障害者像」はあるのか？　24
2016 年 3 月
連絡帳 23　2015 年 12 月
におい 22　2015 年 9 月
作業着 21　2015 年 6 月
食べる 20　2015 年 3 月
通勤 19　2014 年 12 月
クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月
倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月
触れる 16　2014 年 3 月
対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月
情報の格差 15　2013 年 12 月
20 年前のノートから 14　2013 年 9 月
そうじのねらい 13　2013 年 6 月
個別化の暗部 12　2013 年 3 月
グループワークの視点 11　2012 年 12 月
実習生がやってきた！10　2012 年 9 月
月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月
所得を決める福祉職？82012 年 3 月
世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月
この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月
障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011 年 9 月
旅行がない！5　2011 年 6 月
職員の脳内回路 4　2011 年 3 月
たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010 年 12 月
利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月
障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（15）社会的孤立と感情的苦痛

―嗜癖と嗜虐の背後にあるもの―

中村正

１．嗜癖・嗜虐（アディクション）として把握するべき社会病理

嗜癖と嗜虐

日本科学技術振興機構・社会技術開発センター「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築研究開発領域」の公募があり、研究仲間で組織した「多様化する嗜癖・嗜虐行動からの回復を支援するネットワークの構築プロジェクト」が採択され、3 年間の共同研究がスタートした。このプロジェクトは、薬物問題を抱える人を犯罪者として処罰するだけでは解決に向かわないという問題意識に端を発し、さらに薬物問題以外にも広くアディクション（依存症）として把握し、刑罰や医療とは異なる対応を探るべき課題が多いことをテーマにした研究である。薬物以外には、アルコール、性問題行動（性犯罪含む）、DV・虐待・体罰等の対人暴力、ギャンブル、ハラスメント、インターネット、クレプトマニア（窃盗嗜癖）等を想定し、司法と連携し、回復を指示する命令制度、その内容の開発、担い手の養成、そして専門家や当事者グループにつなぐためのネットワークの仕方や専門家同士のメタレベルの高い研修内容の開発を検討することにしている。

アディクションとは

このアディクション問題は複雑である。たとえば、①それ自体は合法的であるが、やりすぎや使いすぎが生活上の諸困難をかかえることになる問題（ギャンブル、アルコール、ポルノ・風俗、合法ドラッグ、インターネット、買い物等）がある。

また、②こうした行動に由来する第１次的な被害者は自分であるので、それをいかにして問題にできるのか、さらに回復をどう指示できるのかという難問もある。

他方で、③違法性や暴力性を帯びた暴力行動も、禁止してもくり返して行われるので、嗜虐行動として把握して治療の対象にするべきこととして位置づける。対人暴力を単なる暴力事件としてではなく嗜虐性においてとらえ、嗜癖行動である物質依存や行為依存と並ぶアディクションとして対象にすることとした。

Nakamura Tadashi
Ritsumeikan University

くわえて、④司法の上では合法的な次元と違法となる次元の境目が連続的であることも難しい点である。痴漢、盗撮、下着盗、幼児性愛・少年愛から強制わいせつ・強姦へと広がる性犯罪は、漫画やアニメの性描写、ポルノグラフィ、風俗等の使用というそれ自体は合法的なものであるが、場合によっては、当該の男性の欲望が横溢し、犯罪へと至るゲートウェイとなっていることがある。ポルノと児童ポルノ、風俗の買春と児童買春、非接触型の性問題行動と性犯罪の関連等の境界は接近している。一定の枠内ではあれ、その使用の継続は嗜癖となり、性犯罪、性問題行動、性嗜好、性癖は連続性がある。

嗜虐というアディクション

この④の連続性と不連続性は、対人暴力も同じである。喧嘩、口論、葛藤、しつけや指導、コントロールと連続的であるのが DV、虐待、いじめ、体罰、ハラスメント、ストーキングである。

これらは一定の関係性において発生する。関係性を利用して特定の相手への嗜虐的な行為がくり返され、加害の側は、快楽や満足感、支配欲、達成感を得ている。嗜癖性を帯び、対人関係のなかで実現されるからこそ、対人関係をとおしたコントロール行動が快楽となっている。そして対人暴力には被害者が存在する。暴力は加害者のエネルギーとなっており、暴力をとおして得ている満足感がある。快楽を得るもしくは不快感を除去するという利得が暴力のコストよりも大きくなっている。さらに共通して脆弱な者が対象に選ばれていて、確実にその利得が得られるようになっている。

この意味では、ハラスメント、体罰、虐待、DV 等の対人暴力は嗜癖と嗜虐の双方を含んでいる。支配欲や満足感という快を得ること、心理的な不全感にもとづく不快感を除去するための行為だからである。こうした嗜癖と嗜虐行動をとおして満たしたいことは、その時々の背景にある感情であることも見逃せない。

こうしてみると暴力をめぐる嗜癖と嗜虐は地と図の関係にあるともいえる。連続性と非連続性のなかにあるマトリクスのように機能して嗜癖と嗜虐の問題領域をつくっている。

なお、嗜癖と嗜虐の行動には共通点がある。それは処罰と医療だけでは解決しにくいことである。解決の方向性が単に「しらふである」「暴力をやめる」だけではないからである。そのような物質を使ってしまう、耽溺してしまう、依存しあう関係をつくってしまう感情の処理の仕方や対人関係の持ち方に解決すべき事項がある。アディクションは当人なりの問題解決の仕方となって習慣化している。そこから離脱する（desistance デジスタンス）ためには、単にそれをやめるという「解毒的な面」だけではなく、やめ続けるという習慣を変更していく過程が必要である。

そのためには背景にある感情問題や対人関係の持ち方や意味づけの方法の刷新がいる。すでに身につけた方法が嗜癖と嗜虐なので、それを脳は快楽として記憶している。快を実現し、不快を除く過程で脳は体験を記憶していく。しかも感情の浮き沈みの問題は人生に

つきまとう。嗜癖と嗜虐が問題解決の手法となって定着し、快楽の記憶として構成されているので、再使用や再発への渇望となって同じような感情的心理的問題に直面した時にそれが表れる。これはリスクである。依存性のある物質の使用や暴力を振るうことや特定の行為に耽溺することで、人は簡単にその瞬間の感情問題を克服することができるからである。ギャンブル、アルコール、セックス等の依存性のある行為は、忘我やめくるめく時間をつくりだすことができる。暴力のもとになる怒りはたやすく高揚感や満足感をもたらす。これらのことを身体が記憶している。通例は、対人関係、仕事や学業についての心理的感情的なストレスがあるとき、人は地道な努力や健康的なコーピングをとおしてなんとか乗り越えようとする。対話や相談というカウンセリングも活かす。しかし嗜癖と嗜虐の行動はそのような努力をしなくてもすむような、コストもあるが手っ取り早いやり方となっている。

２．ある心理学的実験への批判からはじまった―ラットパーク実験と社会的孤立の研究

動物実験への批判

この点を別の角度から考えてみる。何度もくり返すアディクション行為を、快楽の記憶による脳の作用や物質の薬理作用に還元できるだろうか。たとえば薬物中毒という言い方はアディクションの定義ではない。仮に中毒であれば単に解毒すればよく、身体から薬理効果のある物質が消え去れば解決するはずである。脳が快楽を記憶し、心理的感情的問題の解決のために依存行動がおこり、たんなる解毒や禁止では問題解決にならない。特定の行為や関係性に耽溺することで得られる快楽が脳の作用だけとするならばその快楽作用を遮断する薬物を用いればよいだけとなる。

しかし課題は、苦痛を和らげ、快楽を求めるための脳の記憶は、こうした嗜虐や虐待の行為が必要となった時の心理的感情的な苦痛と関係している点にこそある。問題解決のための行動としてなんらかの物質、行為、関係が選択され、それがその時の苦痛を取り除き、快楽を得た記憶となっている。満足感を得たことが記憶されている。この生理的な面と心理的な面の双方をアディクションとして定式化する必要がある。脳の記憶にもとづくにしても、こころが渇望しているし、その時の関係性や感情的な苦痛がその渇望を促進させる。このことをカナダのサイモン・フレーザー大学の心理学教授であるブルース・アレクサンダーはある実験で証明しようとした。

「アレクサンダーは薬物依存の性質の研究に専念し、依存症とは、薬理の中にあるのではなく、患者をサポートしない社会の複雑な関係性のなかにあるとの結論を得た。・・依存症の原因となる一つの化学物質というようなものは存在しない。・・依存症とは事実ではなく、物語である。」（『心は実験できるか―20 世紀心理学実験物語』ローレン・スレイター著/岩坂彰訳、紀伊國屋書店、2005 年、246 頁）という。少し紹介しておきたい。

ラットを用いた依存症の研究は動物実験心理学の通説となっていた。それまでの依存物質と行動についての動物実験は、狭い檻（ス

キナーボックス）で閉ざされた実験的環境をつくり、快楽中枢を発見するためにラットが薬物入りの水を飲むかどうかの実験をくり返していた。脳の報酬系の確認をしていたことになる。「薬物中毒は薬物自体の成分が原因だ」と結論づけていたのが動物実験である。

ラットパークという環境はあるのか

アレクサンダーはこの実験に異を唱えた。従来の薬物依存に関する研究はマウスを狭い檻に閉じ込めた実験として行われている点を批判した。ラットの日常の生活環境とは異なる人為的な環境が実験の内容に影響を与えている、つまりストレスの多い環境に置かれたラットの選択した行動をもって薬物依存となる物質を確定していくというのは依存症的行動の説明にはならないというのだ。その檻となっている実験的環境がラットの「生きにくさ」(自然な行動を導かない環境での生活という意味）を構成していることが考慮されていないというのである。

そこで 1980 年、アレクサンダーは「薬物中毒は外部的要因(生活環境)が原因で引き起こされる」という仮説を実証するために「ラットパーク」をつくり、実験を行った。狭苦しいケージを捨て、20 平米ほどもある群居生活が可能なスペースを用意した。「快適な温度に設定し、香しい木の削り屑を敷き、きれいな玉や輪っかやブリキ缶等、さまざまな遊具も置いた。オスメス混じった群居生活になるため、交尾や出産にも適切な空間を確保し、歯をむき出しにしたオスがうろつく部屋や、温かい授乳部屋も創られた。・・さらに壁を鮮やかな緑や黄色に塗り、樹木や山の絵を描いた」。これが「ラットパーク」である。この環境のもとでも、檻のような環境にいたラットと同じようにモルヒネ入りの水を選択するだろうか。彼の実験では檻のなかのラットはパークのなかのラットに比べて 16 倍もモルヒネ入りの水を飲んだという。

環境のストレスへの対応

アレクサンダーは、Rat Park-Addiction: The View from Rat Park(2010)というエッセーで「独房は人間を狂わせる。孤独な受刑者が、頭がぼうっとするような薬を服用する機会を持っていたら使うだろう。(檻のような実験室に）分離されたラットは、そうした人々が行うのと同じ理由で、心を麻痺させないことはないだろう」と述べる。「なんの努力も要請されず、することもないスキナーボックスでは他の選択肢はない」と述べている。

ラットは集団性のある生態をつくる、行動的な動物である。こうした檻の実験環境は苦痛となる。自然な生態と異なる環境では、モルヒネ入りの水と単なる水のどちらかを選択させる設定自体が自然ではない。孤立を強いられた動物の行動の証明として薬物を志向するという結果でしかなく、負荷のある実験環境それ自体を考慮していない。依存性のある薬理作用とそれへの依存を説明することはできないとした。

(http://www.brucekalexander.com/articles-speeches/rat-park/148-addiction-the-view-from-rat-park/アレクサンダー教授のホームページ参照)

これは、アディクション研究の変化の契機となった。期せずして社会実験的な出来事が進行していく。アメリカのベトナム戦争での復員軍人たちの心理的健康問題である。戦地での心理的負荷を考慮して多様な薬物を使用していた兵士たちである。復員後の兵士の多くは戦地で使用していた薬物の依存には陥らなかったという（前掲『心は実験できるか』248 頁）。環境こそがアディクション問題の背景にあるというのだ。

アディクションについての動物実験心理学批判は、生理学的事実も社会的、感情的、心理的な事実や環境との相関であることを示唆している。だから生理学的事実は科学という「物語」だというのである。

現在のアディクション研究はさらに「孤独の病」としてアディクションを位置づけ、社会的孤立との相関、そうした環境における自己治療行動としての面を把握しようとしている。物質それ自体の薬理作用に還元することなく、孤立をもたらすような環境に適応するための行為や関係に耽溺していくこととしてアディクションを把握する。生きづらいことへの自己治療行動でもあり、嗜癖や嗜虐の行動をとおして解決しようとしてきた当人の感情と心理の課題こそをテーマにしようとしているのが現代のアディクション研究である。これは、アディクトとの対話を重視し、ナラティブ的な治療と回復をめざして、感情調整、自尊心、人間関係の病としてアディクションを把握するアプローチである。たとえば、『ひとはなぜ依存症になるのか―自己治療としてのアディクション』エドワード・J・カンツィアン、マーク・J・アルバニーズ著/松本俊彦訳、星和書店、2014 年がある。

３．人間関係に悩む心理的脆弱さが生まれる社会―孤独な群衆たち

近代社会は社会的孤立をうむ

アレクサンダーは、ディスロケーション dislocation（配置、混乱、移動）として社会的孤立がさらに進行している現代社会の動向を社会科学的に把握する研究を続けているこれは人々の根無し草化をともなう自由市場化というグローバリゼーションこそが薬物をはじめとした多様なアディクションの拡大の背景にあるのだという社会学的なアディクション論である

（*The Globalization of Addiction: A Study in Poverty of the Spirit*, Oxford University Press, 2008）。

社会学はこの視点から近代人の病理を多様に表現してきた。たとえば、エルリッヒ・フロムは「自由からの逃走（ナチズムの大衆心理的基盤をなしていく）」を、デビッド・リースマンは「他者志向型人間」「孤独な群衆」を、マックス・ウェーバーは「魂のない専門人・精神のない享楽人」を、エミール・デュルケームは「アノミー（無規制的な欲望の肥大化による混乱）」を語った。個人がそれぞれ生きがいをみいだし、目標を立て、必要な努力をしなければならなくなった近代社会に生きる個としての苦悩、辛さ、困難、一言でいえば社会的孤立と感情的困難が常態となることをマクロな社会の趨勢として切り取っている。

セラピーの時代

そのすき間を埋めるように誕生したのが「心の時代」である。たとえばロバート・ベラーは個人主義の時代の社会的孤立がこころの時代の流行の背景にあるという。彼は現代アメリカ文化を「セラピーの文化」としてとらえた。

「結婚だけではなくて、家族、仕事、共同体、社会についても、セラピー的な視点から見てゆく傾向がある。人生の喜びやその深い意味、そして人生のむずかしさも、物質的条件に帰したり、またそれらについて伝統的な道徳的視点から解釈したりすることは、わずか一世代前と比べても少なくなっている。今では『インターパーソナル（対人関係の)』ということが人生のあれこれを解く鍵のようである。セラピー的なものが自己と世界を考える際の主要なモードにまでなった」(R.Bellah et.al., *Habits of the Heart*, Harper & Row,1986, p.113)。

そのセラピー的思考は狭い意味での臨床的技法というよりも、文化現象化し、思想の様式にまでなっていると言う。

また、「セラピーがひとつの仕事であるだけでなく、いまや私たちの仕事の多くがセラピーの一形態でもある」（p.123）時代を生きている。セラピストだけが活躍するのではなくて、サービス産業は人間関係を商っている。人生の意味の充実を絶えず自己確認させてくれるような関係が消費の対象となる。「理想のセラピー的世界とは、顔の見えない官僚制的規則が、市場における自由な選択を保証し、さらに、オープンで親密な対人関係のなかで感情移入的なコミュニケーションの機会を保証するような世界である。それは政治のない世界であり、共同体すらない世界のようにも見える」(p.133)。公民権運動、ベトナム問題、女性運動、新しい若者文化の形成、貧困撲滅戦争、暴力や犯罪の増加等というアメリカ社会のドラスティックな変化の裏側で進行していたのは、こうした個人主義の文化が自閉する病理であった。

「心の時代」とは、よく言われるように、たんに社会が物質的に豊かになってきたので、あとは精神的な豊かさの問題だというようなことではない。そこには「個性の尊重」や「人格の完成」という積極的な価値を創出した近代人に特有の苦悩や困難が映しだされている。近代人の苦悩は個として自立することに随伴する。個性の発揚にかんする強迫観念のような意識がうまれやすくなっている。「尊敬に値する自己、尊厳ある自己、オリジナルな個性、人格の完成」への努力が要請される。個人の責任も協調される。その社会にふさわしく合理化された主体として自己を形成しなければならない。努力しなければしないだけの扱いと結果でしかないことを甘受しなければならない。自己責任ともいわれている。

そのために絶えざる自己研鑽と進歩が求められる。昨日の自分よりも今日の自分、そして明日の自分へと向上することが鍵となる。現在に安住してはいけない。絶えざる反省と進歩・向上は、裏返せば自己否定の連続となる。弱点を発見し、それを克服することが尊ばれる。メリーゴーランドのような終わりのない競争、しかもマラソンランナーのような

「孤独な克己心」が必要なのである。

ナルシシストの孤独

そうなると、個人の内面に、焦燥感、閉塞感、不安定感が満ちる。個人の関心は社会的公共的なことよりも、自己に関すること、可能性の開発、人生の意味の充実に関することにむかう。自己開発、自己啓発、自己改善等自己に関わる意識の肥大化である。こうした自己実現型社会の個人の苦悩や病理を和らげるもの、それがセラピー文化である。

セラピーの文化を生きる人間はナルシシズム的な特徴をもつ。クリストファー・ラッシュは「ナルシシズムの時代」と特徴づけた。「ナルシシストは自分が全能だという幻想にとらわれているくせに、その実、自分の自尊心を確認するのに他に頼らなければならない。ナルシシストは、かっさいをおくってくれる聞き手がなくては生きていけない」（『ナルシシズムの時代』、ナツメ社、29 頁）として現代人の不安を語った。つまりナルシシストは自尊心を満たすために他者からの承認と賞賛を必要とし、他者の評判を絶えず気にする。自己に内在する価値にではなく、他者との比較や序列のなかに価値を見いだす。

しかし、喝采をおくり、承認してくれる他者が自己と同じような水準であれば、ナルシシストの自尊心は満たされない。けれども、自分以上の者の存在を認めることは自尊心に傷がつく。他者に喝采と承認を求めつつも、そう簡単には評価されたくないという複雑な感情を抱く。ここでも、個人の精神はじつに不安定である。苦悩する自尊心である。

だから、ナルシシストは熱心に自己聖化の儀式を行う。人生をドラマ化し、自己にのみ関心をむける。社会の変化という大きな物語よりも、個人の成長という小さな物語に興味がある。

ラッシュはこうした事態を「人格崇拝のカルト」と名づけた。現代日本の文化状況も、「心の専門家」であるセラピストへ関心が集まるので、「人格崇拝のカルト」は盛んとなっているといえる。各種の教養講座、健康産業の隆盛、潜在能力開発、英才教育、幼児教育、胎教、自己啓発、生涯発達、生涯学習等の自己実現のための消費の発展をみればよくわかる。

「人格崇拝のカルト」は内面世界という広大な市場を見いだした。「神に類似するまでになりながら今日の人間が自分を幸福だと思っていないという事実」（フロイト「文化への不満」、『フロイト著作集』第３巻、454 頁）をふまえれば、憂鬱（メランコリック）で脆弱（ヴァルネラブル）な、そして不安定な存在が現代人なのである。

４．回復と治療のためのコミュニティ―「支援と責任のためのサークル」について

社会的孤立と感情的苦痛

アディクションが、近代的な人間関係の随伴する病であり、社会は合法的に誘惑としてアディクション市場を形成している。嗜癖と嗜虐にかかわる違法な問題行動はどのようになくしていけるのだろうか。違法性があり、被害者がいる嗜癖・嗜虐の行動は犯罪として処罰されるが、処罰だけでは解決しない。処

罰は元となっている社会的孤立と感情的苦痛を強化するだけである。「出口無し」なのだろうか。

そこで次に、アディクションからの回復と離脱について考えてみる。ラットパーク実験や自己治癒としてのアディクション理論が示したように、社会的孤立と感情的苦痛をもとにした心理的脆弱さがアディクションへの囚われの背景にあるとすると、ラットパークに匹敵する社会環境（ヒューマンパークと仮に呼んでおく）がアディクションからの回復には必須となる。

しかし、現代社会でヒューマンパークをつくるのは困難である。なぜなら、アディクションとなる物質、行為、関係それ自身を無くすわけにはいかないからである。合法的に存在しているものもあり、遊びとして必要でもある。なんといっても巨大な市場を成している。しらふであること、そうした行為をしないこと、アディクションとなるような関係を結ばないことは不可能であり、それはそれで社会的孤立を強化することなる。一昔前の言い方になるが、男性にとっての「のむ・うつ・かう」はヒューマンパークの様相を呈している。

この意味では、ラットパーク実験の陥穽をみてみるのも大切だろう。つまり檻のなかからネズミを解放したとはいえ、また別の人工的な「楽園」という枠をつくっただけである点である。ラットパーク実験への批判はこの点に集中していた。自然のなかにラットの「楽園」はなく、厳しさそのものが動物の生きる環境である。だからスキナーボックスの対案として考案した「ラットパーク」もまた別の実験的環境でしかない。楽園はどこにも存在せず、あたかも実在するかのような環境の構成はそれ自体がスキナーボックスと同じように人工的である。

やり直しにむけての分岐点

だからアディクションを導くような、誘惑する物質、行為、関係はいつも周囲に充ちていると考えた方がよいのだろう。誘惑の多い社会で、自らやり直し、生き直す機会となる別の分岐点が要ると考えてみる。離脱し続けることが求められるが、自らの自由な意志の力だけでアディクションを乗り越えることは難しい。対処しなければならない負荷となる心理や感情は常に生成するからだ。

そこで分岐点となるような、やり直しや離脱しつづけることを支援する社会内処遇の取り組みが必要となった。刑務所や精神病院の全制的施設（アサイラム）では問題解決のレパートリーを増やせない。渇望だけが増大することになりかねないからである。楽園をつくりだせないにしても、せめてアディクトのそれまでの人生や生活には欠けていた社会的孤立を回避する時間、空間、仲間の「三つの間」をつくる取り組みが脱嗜癖、脱嗜虐の対人支援となるのではないかと私たちの冒頭のプロジェクトは想定した。違法性があるアディクションについては司法が関与して跳躍台のように設定した選択肢をとおして小さな努力を続けるヒューマンパークへの参入を誘導する。これが回復と治療のための司法、つまり治療的司法・回復的正義であり、司法の関

与する回復、治療、和解の対話をすすめる受講命令や参加指示となる。

治療と回復のためのコミュニティ

具体的には、処罰以外に、処罰とは別に、処罰に加えて取り組む、DV や虐待についての脱暴力プログラム（バタラーズプログラム）、物質依存に関する脱嗜癖プログラム、虐待する親プログラムへの参加指示である。もちろんそれ単体での効果というよりもそこへの参加をとおしたケースワークや生活の立て直しも含めた過程に関わることで効果が発揮される。それを利用したやり直しの過程をトータルにマネジメントする必要がある。そうしたプログラムはアディクションからの回復として位置づけられ、それを支える取り組みの場を、一般に、治療的共同体 therapeutic community という。回復のためのサークルもしくはグループとしたほうが馴染みやすいかもしれない。こうした場所への参加命令・受講命令を発する法制度を治療的司法 therapeutic jurisprudence という。諸外国では処罰だけでは改善しないことに鑑みて司法のあり方を変化させた。

この治療的司法は、社会的孤立への自己治療活動としてアディクションがあるのだから、当事者たちのそれまでの共同性は低く、仲間も少ないと想定されることに対応している。共同性をとおした満足感や達成感、そして孤立感の解消のためにサークルが組織されている。

サークルの思想

カナダで考案され、イギリスでも展開される類似の取り組みがサークルという名で取り組まれているので紹介しておきたい。それは「Circles of Support and Accountability (CoSA)」である。イギリスの Circles UK を訪問調査したことがある。それを管轄する英国法務省の研究をもとにした A Case File Review of Two Pilots があり、概要が示されている。McCartan,K.,Kemshall,H, Westwood,S,Solle, J, MacKenzie, G, Cattel, J. and Pollard, A. らの、Analytical Summary 2014 March に掲載された Circles of Support and Accoutability (CoSA)：A Case File Review of Two Pilots というリサーチである。

2008 年から 2010 年にかけて整備された加害者に対して組織的に更生サービスを提供する National Offender Management Service の仕組みがある。それは保護観察制度を補完するための組織であり、とくに性犯罪者の再犯防止を意図したリスクマネジメントを担う。行動と活動の能動的な観察をとおして「社会的孤立 social isolation」を縮減していくことが目指されている。保護観察所の更生と処遇プログラムに従うことを目的とした社会内処遇の実践的支援を展開する。出所してきたコアメンバーがより適合的な向社会的行動を発展させることを可能にするための支援であり、訓練されたボランティアによる支援が基礎にある。

どこの国でもそうだが、性犯罪者のスーパービジョンとリハビリテーション（更生）は

複合的で挑戦的な課題となっている。イギリスでは、12ヶ月以上の禁固を科せられた者は保護観察所の監督に服すことになる。許可された住居に住むこと、それを報告する義務を負う。さらに、特定の場所に行かないこと、特定の人と接触しないこと、子どもがいるところに住まないことも保護観察付きの出所の条件となる。

サークルの概要

2001年、登録された性犯罪者あるいは子どもにかかわる仕事に就けないようにされた性犯罪者は更生のための法律にもとづいて行動することを指示される。「MAPPA（Multi-Agency Public Protection Panels)」（警察、保護観察所、その他のサービスの多機関連携組織で公的な処遇アレンジメントを行う）がその受け皿となる。

2003年にすべての釈放された性犯罪者は地域で居所を届け出ることとなった。出所者登録制度である。管轄の警察に届け出る。

さらに2012年に法が改正され、銀行口座、海外渡航、18歳以下の子どもが同居しているかどうかについても警察に告げるべきこととなった。保護観察官は突然の訪問もできる。30ヶ月以上の懲役を受けた者は生涯にわたってこうした住居の登録が要る。

2011年には5955件の性犯罪者となっていた。性犯罪者の出所後の保護観察は2750件から3024件まで増えた。スーパービジョンと再参入のためにもアディクションからの回復を位置づける。カナダのCoSAモデルがイギリスにも導入された。このアプローチはハイリスクグループへの対応だった。2002年のことである。サークルは2008年にUKで発足。2010年にふたつのサークルが動き出した。サークルは4人から6人のボランティアからなる。ボランティアは定期的にコアメンバーと会うこととする。社会的孤立というリスクをなくすために社会的で実践的な支援をおこなう。コアメンバーの行動と地域社会の安全をモニターする。処遇プログラムに従っているのかどうか、コアメンバーが地域に溶け込んでいるかどうかも確認する。これは二重のサークルとなっている。内側のボランティアのサークルと外側のサークルである。外側には心理学者、加害者マネジメント担当者、警察、医師、保護観察官が配置される。そしてポジティブな役割を果たすコアメンバーへの期待がある。非犯罪的な態度の構成をグループワークそれ自体の力動をとおして身につけていく。

ボランティアは平均すると週1でコアメンバーと会う。頻度はメンバーのニーズによる。保護観察所ではない別の中立的なところで合うようにしている。1年から1年半の間がまずは大切となる。そのボランティアは研修を受ける。集中した二日間の訓練と毎月の研修となっている。ふたつの段階に分けてサークルが運営されている。

第1段階は、コアメンバーが適切な住居に住んでいるのか、適切なクラブや組織に参加しているのか、教育を受けているのか、スキルを磨いているのか、雇用可能性を高めるサービスを受けているのかどうかを点検する。9ヶ月から12ヶ月続く。CoSAとしてのサーク

ルの重要な部分である。

第２段階はさらに半年から 9 ヶ月続く。テーマは、自己充足、自立しているのかどうか、支援と説明の機能を果たせているのかである。さらにボランティアからの支援を少なくできているかどうかも点検される。この段階はアドバイス機能となる。

サークルの支援は、ローカルコーディネータの判断で終結する。保護観察官や他の専門家もこの判断に加わることが出来る。ボランティアが再統合の責任を負うのではない。権限ある専門職者が責任をもつ。

ボランティアが支えるサークル

2012 年段階では 600 人のボランティアが活動していた。74%は女性、26%は男性であり、年齢も幅広く、82 歳から 21 歳までとなっている。30%は学生である。2005 年には 2%だったので増加している職業である。ボランティアの満足度は高い。

ボランティアのコメントとしては、①ヒューマニスト的アプローチに共感している、②活動をとおして専門的な力をつけることができる、③性的虐待を受けたサバイバーとしての個人的な経験を活かすことができる、④子どもを保護するための目的としていることに貢献できる、⑤安全な地域をつくることに貢献できる、⑥宗教的な信念を実現できるということが紹介されている。③は RJ 的な観点が垣間見える点である。

このサークルを支える更生保護、加害者臨床の理論は、GLM(Good Lives Model)と RJ(Restorative Justice)である。GLM は、ケア論でいえばストレングスアプローチであり、アマルティア・センの潜在能力（ケイパビリティ）アプローチがさらに背景にある。その上で、再犯のリスクを無くすことに力点がある。犯罪心理学の対立点でもあるが、犯罪誘発要因としてのリスクを管理することに力点をおく「リスク・ニーズ・レスポンシビティ（RNR）モデル」を補完・包摂するという立場がサークルの理論的背景である。

GLM と RJ をとおして、個人の機能の行動選択におけるレパートリーを広げることが目指されている。犯罪へと至るリスク管理だけではない。GLM は構成主義・協働的なやり方で加害者を意味ある生き方への能力を高め、さらなる犯罪から離脱し続けることができるように構築していくことを目指し、自己を力づけていく（セルフ・エンハンスメント）。結果として、処罰をとおしてではなく公の安全をたかめるというアプローチとなっている。

RJ は加害者の良心の呵責、償い、和解をもたらそうとするものである。特定の加害をとおして利害をもった関係者のすべてがみんなで集まり、加害の影響・余波を考えるプロセスと位置づけられている。

サークルは被害者と加害者の修復に直接関与するものではないが、地域社会からの加害への非難を変換させていく。より積極的なやり方で加害者に向きあうこと、コアメンバーを自らの行為の説明と責任へと向かわせることをめざす。上からの直面化でなく、自らの説明と責任をとることを支援する。この意味では、サークルは、加害者の説明と支援、安全なコミュニティ再統合、可能な行動変容を

もたらす修復的な介入といえる。

サークルの実績

また、この研究では、英国の二ヶ所の CoSA の事例が検討されている。2008 年 4 月から 2010年3月までのケース分析をもとにしている。サークルに所属していた性犯罪者 32 人のコアメンバーのケース記録を点検した総合的な結果が紹介されている。

コアメンバーの属性としては白人、中年、異性愛者、接触性の性犯罪者が多数を占めていた。一人の女性加害者が含まれている。リスクアセスメントではハイリスクグループである。犯罪事実としては、2 件の成人女性強姦、4 件の女児への強姦、5 件の女児への強制わいせつ、8 件の男児への強制わいせつ、1 件の成人男性への強制わいせつ、2 件の露出、2 件のぞき、21 件のネットわいせつ、6 件の児童ポルノ等を含んでいる。

コアメンバーへの支援は、向社会的行動を支援することである。例えば安全な余暇活動、ボランティア活動、支援グループ活動、教育コースの受講を奨励する、趣味の活動を促す（ジム、社交イベント、ボランティア、教会にいくこと）、就職活動を支援する等である。

犯罪の鍵となるトリガーについても議論しているサークルがある。コアメンバーのプログラムへの不安も話し合う。32 人のうち 19 人は加害行為について、さらにどのようにして安全を確保するのかについても議論をしていた。あるサークルは加害の詳細について時系列でおいながら分析をし、変化への動機づけについての公的な支援のあり方も議論をしていた。サークルはコアメンバーの否定的なライフスタイルについても評価をし、修正と改善についてアドバイスしている。否定的なこととは、例えば禁止されている子どもとの接触や他の登録出所者との接近である。そうしたことがあった場合にボランティアはコアメンバーに挑戦する。32 人のうち 21 人がそうだった。コアメンバーの行動をコーディネータに伝える。それがさらに加害者マネジャにつたわる仕組みとなっている。

サークルでは、怒りマネジメントによる暴力の自己申告、再発防止プランの補填、コーピングスキルの向上へのさらなる取り組み、リスクを減らすためのセルフトークの練習、気晴らし法の活用等に取り組んでいる。悲嘆的思考を追い払うこと、加害を沈思すること、適応的な趣味をみつけること等にも取り組む。

そして再犯率が紹介されている。2004 年の全英の性犯罪者の平均では 25%が再犯する。10%の性犯罪者は 2 年のあいだに性犯罪をくり返す。16%は 5 年のあいだにくり返すというデータが紹介されている。2012 年の調査では 31 人のサークルと非プログラム者を調査している。24 ヶ月のあいだの再犯調査では、サークル参加者は 2.3%、比較グループの非参加者は 13.7%の再犯率だった。別の調査は 54 ヶ月後のものがある。サークル参加者は５%、非参加者グは 16.%だった。さらに別の英国での 55 ヶ月後の調査では、参加者は 4.2%の再犯、非参加者は 16.9%の再犯だった。

こうしたサークルの取り組みはそれをささえる多職種の連携組織とともに、保護観察の仕組みを使った、擬似的ではあれ、事件以前

の当事者の人間関係や社会環境にはなかった人工的なヒューマンパークをつくる取り組みである。もちろん事件への直面化や生活力を形成する課題も含むので、サークルは楽園ではない。むしろコアメンバーにとっては心理的な葛藤を課すので、困難な課題の取り組みとなる。しかし、当たり前の市民生活を送ることができるようになることを通して得られる対人関係のなかでの快と善を体験するので、それまでとは異なる心理的感情的な満足を得ることになる。

５．やめ続けるためのソーシャルネットワークと人間関係

嗜虐問題にも応用

このサークルは性問題行動・性犯罪を対象にしているが、理論的な支柱である GLM と RJ は、嗜虐問題としての暴力や虐待にも応用されている。

私が主宰する子ども虐待についての虐待親グループ「男親塾」も同じような意図がある。英国やカナダにおけるサークルの仕組みとは異なるが、仲間を組織した、当事者グループの治療的コミュニティの実践は長い蓄積がある。薬物、アルコール、ギャンブル等の依存症からの離脱をめざす回復コミュニティ（日本ではダルク、断酒会、アルコホリック・アノニマス等）がある。盗癖（クレプトマニア）からの回復についても、司法と医療・心理的治療が連携して取り組まれるようになっている（窃盗癖に対応する赤城高原ホスピタル院長の竹村医師の取り組みがある。たとえば『彼女たちはなぜ万引きがやめられないのか？』川村重実著・竹村道夫監修、飛鳥新社、2013 年を参照）。

こうして社会的孤立や感情的苦痛を中心としたアディクトの心理的現実と対話するサークルのような取り組みは日本でも散見され、その重要性も理解されつつある。

しかし、それを包摂する治療的司法の概念は成立していない。したがって伝統的な処罰と医療の枠のなかにあるので、嗜癖と嗜虐から脱出させるための一貫した制度はない。治療的司法のように作用している事例はあるが、個々の弁護士、医師、心理士の努力に委ねられた偶然でしかない。嗜癖と嗜虐の問題行動をやめ続けることの支援としてサークル制度をはじめとした諸外国の実践に学ぶことは多い。

本来はここを起点にしてさらに紹介したいソーシャルキャピタルという考えがある。GLM や RJ をさらに統合する概念でもある（たとえば『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』ロバート・パットナム、柏書房、2006 年がある）。紹介と検討は別稿とする。ここで扱った社会的孤立と感情的苦痛やアレクサンダーのいうディスロケーションにも対応しうる考え方である。

＊なお、ラットパークの解説は「You Tube：ADDICTION」で視聴できる。さらに、プレゼン番組の「TED ジョハン・ハリ「依存症」―間違いだらけの常識」も的確な解説となっている。

なかむら ただし

（社会病理学、臨床社会学、社会臨床論）

ケアマネ　あの目　この目

変化

指定居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

木村晃子

人は必ず変化する。どんなに変わらなさそうな人でも、時間の流れと共に必ず人は変化する。わかりやすいところでは、肉体が変化する。見た目が変化するし、体力や気力なども変化しているはずだ。その影響を受けて、内面も変化する人や、内面の変化に抗する人もいる。

高齢者支援の現場では、常に「変化」を意識して仕事をしている。高齢期は、喪失の連続でもある。体力も気力も周囲との関係も、喪失することが多い。その中で、今までのような自分を維持していくことは非常に難しく、日々変化を求められているようにさえ感じる。

人は変化に弱い生き物かもしれない。上手に変化を受け入れることができれば、少しは生きやすくなるのかも・・・

・・・引き際・・・

美千代さんは、農家に生まれ、農家に嫁いだ働き者だった。６０半ばまで、現役として農家仕事をしていたが、夫の死去後は、農家もたたみ、一人静かな暮らしを送っている。自分や、時折訪ねてくる子どもたちにわける程度の野菜は自分で作っていた。自分たちが食べる程度、と言っても、その畑は家庭菜園と呼ぶには広く立派だ。時期になると、朝から晩まで手入れに追われることになる。それを８０半ばまで続けた。

変化が見られたのは、８０歳を過ぎたころだった。家の中に「うっかり」が目立ってきた。食事の支度をしている途中に、外へ行ってしまい、ガスの火を消し忘れてしまったり、畑の肥料を間違って大量に使ってしまったり。時々訪れる子どもたちも心配した。失火の心配はなくしたい、と子どもたちや、配食サービスの手配がされ、美千代さんが食事の支度をすることはなくなった。これまでよりも、更に畑の仕事に打ち込めるようになった。けれども、その畑仕事にもミスが多く見られるようになってきた。やがて美千代さんは、認知症と診断された。

例え、認知症であったとしても、本人がやりがいや生きがいとしていることを取り上げることはケアとしては適切ではない。好きなことを好きなように続けられるように、と言われるのが本人を中心としたケアのあり方でもある。子どもたちの訪問は、美千代さんの畑仕事を支え

るために回数は増えていった。ところが、ある年の春、美千代さんは宣言したのだ。「もう、畑はしない。」まだ、手助けがあれば十分仕事はできるだけ、体は自由がきいていた。けれども、美千代さんは「もうやめたから。」と言って畑には一切関心を示さなかった。

それからの美千代さんは、友人の通うディサービスへ参加した。そして、これまでとは違う形で、友人らとの交流を楽しんだ。生活場面では、少しずつ物忘れによる不具合が増えていったが、子どもたちの協力もあり、しばらくの間ひとり暮らしは継続された。畑の野菜が元気に実ってくる時期、美千代さんを畑に促すことが何度かあったが、そこには一切関心を示すことはなかった。今思うと、美千代さんは、少しずつミスの増えた生活の中に、自分の変化を感じていたのだろう。農家に生まれ、農家に嫁ぎ、畑仕事は自分そのものだったのかもしれない。その自分の中に、度重なるミスを見つけることが辛かったのだろう。栄光は栄光のままに。引き際を自分で見つけたのかもしれない。

・・・なぜ、できないの？・・・

里子さんは、８０を過ぎた義両親の衰えをなかなか受け入れることができない毎日だった。結婚当初から、義両親とは同居。教員をしていた里子さんにとって、義両親はとても心強い存在だった。子育ても協力してもらい、里子さんが定年まで勤め上げることができたのも、義両親のおかげだと感謝していた。６０歳で定年を迎え、義両親と同じ時間を共にするようになってから、これまで知らなかった義両親の変化が目につくようになった。

電気やテレビの消し忘れが目に留まった。食事にかかる時間がとても長くなった割には、食べ残しも増えていた。定年を迎えたと言っても、里子さんは、まだまだ活動的にやりたいことが多々あった。義両親のスピードでは、自分のペースが狂ってしまう。そこで、何をするにも、義両親への声掛けは増えていった。初めは、里子さんの声掛けに合わせるように応えていた義両親も、毎日四六時中の声掛けにはうんざりしていた。そのうちに、義両親はそれぞれの部屋にこもるようになり、里子さんと顔を合わせる時間を減らしていった。

里子さんは、家事を担い、仕事とは別の活動に外出することも多かった。夕方には自宅に戻るが、里子さんが帰宅すると、そのタイミングで義両親は部屋に戻って行った。夕食は家族が揃っていたが、まるでお葬式のように静かな食卓だった。

里子さんは、日々老いていく義両親の変化を受け入れることができずにいた。なるべく見ないようにして生活は続いたが、そのことで、益々義両親との距離も離れていった。同じ家に住まいながら、それぞれに共にする時間は増えたはずなのに、今日もほとんど顔を合わせずに、

出かけていく里子さんだった。

・・・痛快！一人暮らし・・・

ヨシ子さんは、６５歳の頃からひとり暮らしだった。夫が闘病のため入院したからだ。入院当初数年は、自宅と病院の往復で、夫の病室を見舞いに行く毎日だった。そんな生活が数年続いたある夜。ヨシ子さんは、ふと言い表すことが難しいほどの、空虚さに襲われた。それから、数週間、ヨシ子さんは家を出ることもできずに、毎日鬱々とした日々を重ねた。結婚して４０年も生活を共にした夫がいない。退院して自宅に戻るという目処さえない。ヨシ子さんは、まさに夫との生活を喪失してしまったのだ。この鬱々とした状況は、数ヶ月続いた。

何をしてもやる気がでないヨシ子さん。こんなことではいけない。なんとかしなくては。ヨシ子さんは思い立って、数十年ぶりの旅行に出来かけることにした。行ってみたかった海外旅行のツアーに申し込み、１０日間ほどの旅に出た。旅を共にした人たちとの交流や、旅先で見る雄大な景色に、ヨシ子さんの心は元気づけられた。

旅行から戻ったヨシ子さんの生活は少しずつ変化した。誰にというわけではなく買ってきた旅行土産を、出会う人に渡すと、今度はその人から誘いを受けて、地域で行われているサークルへと参加するようになった。サークルへ参加すると、そこで出会う新たな人たちとの交流の輪が広がり、別のサークルへと誘われる。ヨシ子さんは、自宅と病院の往復だった毎日に、自分のためのスケジュールを入れていった。

やがて１１年もの闘病生活を送った夫は天へと旅立った。けれども、ヨシ子さんの周りには、夫と離れた１１年の間にできたたくさんの友達がいた。友達との交流を続けながら、ひとり暮らしを楽しんでいる。

・・・変わることの難しさ・・・

いつまでも、今のままが続くわけではないと知りながら、人は変化に躊躇する。高齢期を、あるいは高齢者と共に楽しそうに生きている人を見ていると、上手に変化を受け入れて、変化をしている人が多いと気がつく。柔軟さは生きるコツだと感じる。

＊事例は、プライバシーに配慮して、事実を加工しています。

街場の就活論 vol.27

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん　あそぶ
団　遊

就職先を食べログで選ぶのは、どうしてダメなのですか？

大学でキャリア教育の講師をはじめて８年目になります。わずかな時間ですが、その中でも学生から投げかけられる質問の内容がずいぶん変化してきた印象があります。私が教壇に立つ大学の学生に限った内容かもしれませんが、最近特に多い質問で、考えさせられたものをご紹介します。

質問した彼女は大学２年生です。授業で「仕事は手段であり、大切なのは将来どういう風になりたいかを考えることだ」と言われるたびに、その問いに向き合い、その度に「将来

どうなりたいかを考えたって答えは出てこないのだから無駄じゃないか」「団さんは答えが見つかる必要はなく、考える時間が大切なのだと言うけれど、答えの見つからない問いを本当に考える必要があるのだろうか」と思うのだそうです。

ある日、彼女なりに考えを整理し、相談があると言ってやってきました。そのときに、こんなことを言いました。

▼　▼　▼

・私は働く気はある。働くものだと思っているし、働きたいとも思っている
・やれと言われたことは、結構きちんとやる方で、ちゃんと結果も出せるタイプだ
・アルバイト先でも、リーダーとしてみんなのマネジメントをしている
・しかし「やりたいことは何？」とか「人生のビジョン、目標は？」と言われると戸惑う
・それが大切だと、先輩や先生は口にするが、それが見つかる気がしない
・そもそも、そういうものが本当に必要なのか？
・勘違いしないでほしいのだが、働く気はあるし、就職もする。だからそれでいいじゃないか
・もし可能であれば、先生や先輩から「君はこういうことしてみれば？」と提案を受けたい
・候補をもらえれば、その中から最良を選ぶことはできると思う
・「働く理由」や「人生のビジョン」を自力で考えることに今一つ意味を見いだせない
・食事に行くときは「食べログ」を利用する。仕事も食べログ的に探しちゃダメなのか？
・食べログの情報を鵜呑みにするわけではない。候補があることが大事なのだ
・いちから自分で考えても、いいアイデアが生まれると思えない

▼　▼　▼

この考えは、そのとき一緒に授業を受けていた学生たちの大きな支持を受けました。しかし、これを読まれている多くの方は、合理的な考え方である部分を認めつつ、やはり違和感を持たれるでしょう。ぼくなりに、この問いかけに対して思うことを回答しましたが、考え方自体を否定することはできませんでした。

ここにある落とし穴は「最良の結果を最も効率的に手に入れたい」という病ではないかと思います。大学生たちに、どうすれば「非効率で面倒なことが、全体最適を生むこともある」ということを伝えるか。なかなかに難しい課題です。

しかし、そのことを十分に理解しないまま社会に出ると、知恵の回る大人たちに上手く言いくるめられ、人生を捧げることになってしまう、という現代社会の基本構造があります。

大手広告代理店に入社後、わずか半年と少しで自殺した彼女のような悲劇を繰り返さないために、果たして何をどう伝えるべきなのか。どう言えば伝わるのか。上手くいっているときは、何でも構いません。でも上手くいかないと思う時に支えになるのが、「なぜ働くのか」という問いへの、オリジナルな回答ではないかと、ぼくは思います。

文／だん・あそぶ
「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第九回

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

家族理解の手立て　その二　ミニューチンの家族構造

家族構造は境界線と提携と権力

さまざまな家族療法のスタイルが誕生して拡がり始めたころ、理論の枠組みに応じて、「○○派」と呼んでいました。

今回は、その一つである家族療法構造派の話をします。

「構造派」と呼ばれるのは、アメリカのサルバドール・ミニューチンです。

フィラデルフィア・チャイルド・ガイダンス・クリニックつまり、日本の児童相談所にあたるところで、多くの子どもや家族にかかわり、同僚とともに研究を重ね、支援をしました。

なかでも摂食障害の子どもとその家族へのアプローチに注目が集まりました。

健康的に機能している家族は、適切に組織化された構造を持つと主張し、問題を抱えている家族の再構造化を目標にしました。

そこで、家族の構造を理解するための概念を三つあげました。

- **境界線**(Ｂｏｕｎｄａｒｙ)
  ＝家族のメンバーそれぞれが、どのように関与しているか、子ども世代、親世代、祖父母世代等の区別を境界線であらわす
- **提携**(Ａｌｉｇｎｍｅｎｔ)
  ＝家族のうち、だれとだれが組んでいて、協力関係か、相反する関係か
- **権力**(Ｐｏｗｅｒ)
  ＝家族の相互作用のなかで、だれが影響力を持っているか

境界線バウンダリーについて、さらに話します。

親(夫婦)世代と、子ども(きょうだい)世代の境界については、**固い、明瞭、あいまい**、の三つの状態があると示しています。

境界線が固い場合は、家族はバラバラで遊離状態にあると考えます。お互いに関心を持ちにくく、コミュニケーションの量も少ないという状態です。

明瞭な境界線を主とする家族は、健康度が高い状態です。適切な距離感でコミュニケーションが行われていると考えられます。

あいまいな境界線を主とする家族は、その構成員は、あらゆる問題に関してお互いに引き込まれ、必要以上に関与し過ぎると考えられます。

構造派　サルバドール ミニューチン

はてな子さん　カウンセリング初学者

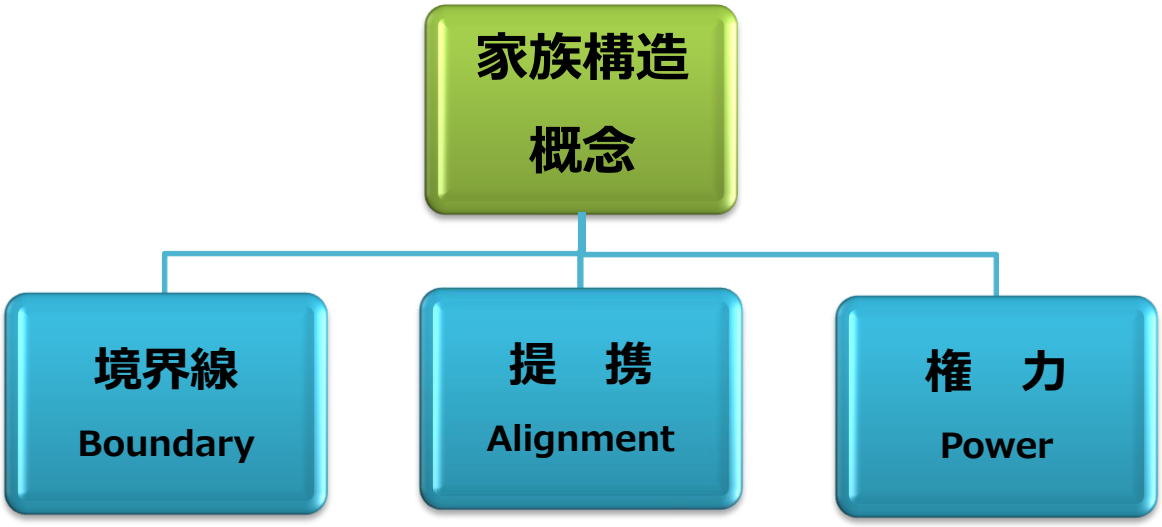
家族療法の構造派？

少しずつ難しくなってきた気がします。巻き込まれる状態って、過保護、過干渉の親っていうかんじなのかな。

ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

ミニューチンは、三十年ほど前に日本にやって来たこともあるのですよ。

当時、少しずつ増えていた摂食障害の子どもとその家族へのアプローチで注目され、子どもと親世代の境界があいまいで、お互いに巻き込まれる状態を示しました。



健康的に機能している家族は、適切に組織化された構造を持つと主張しました

家族理解の手立て　その二

からみあった家族　あいまいな境界線

病的な状態

あいまいな境界線や、固すぎる境界線が極度の場合は病的であると考えます。

そのあいまいな境界線についてさらに説明します。

親が子どもの領域に入り込んでいる状態とは、たとえば、子どもが子ども自身で対応すべきところを親が代わりに行動する状況です。

そして、子どもの方から親や夫婦の領域に侵入していく場合も同じです。両親の会話に入って行き、一方の親について過度に心配するなどです。

このような家族をあみの目(＝メッシュ)のようにからみ合った家族と表現し、明確な境界を引くことが健全さにつながると考えました。

親の領域に子どもを巻き込まない

大人の領域に関心を持ち過ぎている、あるいは心配し過ぎている子どもがいます。親や大人からすると、子どもが親や大人たちの領域に入ってきているということで、つまり、子どもの侵入を許す状況であると考えられます。

親世代と子ども世代の境界線があいまいになり、大人の立場と子どもの立場の区別が不明確になります。

「お母さん、どうして、あんなにだらしないお父さんと離婚しないの?」

などと子どもが発言し、母親が夫に対する愚痴をわが子にしゃべってしまうような習慣が定着しているとしたら、見直す必要があると考えます。

子ども世代には子どもたちのコミュニケーションがあり、親や大人は、同世代でしか理解できない事情や会話があります。

仲良し家族の落とし穴

お母さんと娘がどんなことも話しあえて、まるで姉妹のような親子だという状況があるとすれば、仲良し家族の落とし穴があるかもしれません。母と娘が密接になりすぎて、二人が提携してアルコール使用障害の父に対応する構図などです。

母と娘の距離が近いことで、自分の気持ちなのか、相手の思いを代弁しているのか、わからなくなってしまうような状態です。

境界線

boundary

家族のメンバーそれぞれが、どのように関与しているか、子ども世代、親世代、祖父母世代等の区別を境界線であらわす

固い境界線 Rigid boundary	明瞭な境界線 Clear boundary	あいまいな境界線 Diffused boundary
遊離家族 Disengage family 	健康的な家族 	からみあった家族 Enmeshed family

家族理解の手立て　その二

ペアレンタル・チャイルド　親のような役割をする子ども

ひとり親家族

最近は、離婚数増加の影響もあり、ひとり親家族が増えています。

親と子の二人だけの家族や、ひとり親きょうだいだけの少人数家族の場合は、どうしても、子どもがひとり親とのかかわりが密になり、たとえば、母親の相談相手のような存在になってしまう傾向があります。

PC＝ペアレンタル・チャイルド

さらに、年下のきょうだいの世話をする機会が多いと、子どもであるにもかかわらず、まるでもうひとりの親のような役割をすることがあります。この状態をPC＝ペアレンタル・チャイルドと呼びます。

もうひとりの親

親は仕事や家事で忙しいため、どうしても年長の子どもをたよりにして用事を言いつけ、子どももその事情がわかっているだけに、年下のきょうだいに対して親的な役割を担うことになります。

しかし、子どもはあくまでも子ども。背伸びをさせたり、大人扱いをしすぎたりすることのないよう、まわりの大人の配慮が求められます。

最近でこそ少ないですが、きょうだいの多い家族の長男や長女は、もうひとりの父親や母親のように末っ子たちに対応することが昔から知られています。

もちろん、すべてを問題視しているわけではありませんが、家族のお互いの関係やかかわりから、親・大人世代と子ども世代の区別する視点を忘れないでいることが大切であると考えています。

参考文献

遊佐安一郎(1987)『家族療法入門システムズ・アプローチの理論と実際』星和書店、

中島弘美(2016)『児童心理・五六年生の家庭教育「親に批判的になる　家族カウンセリングの立場から」』10 月号臨時増刊金子書房

提　携

Alignment

家族のうち、だれとだれが組んでいて、協力関係か相反する関係か

連合　二者が第三者と対抗して提携する場合

例　アルコール使用障害の父に対して、母と子は連合して父に対抗する

同盟　二者が第三者とは異なる共同の目的のために提携することで、第三者との敵対関係を含まない

権　力

Power

権力　個々の家族メンバーが相互作用の過程を他者に与える影響力

ＰＣ（parental child)とは

年長の兄や姉が、年下のきょうだいの世話をする、親のような役割をする子どものこと

境界線侵害

コミュニティ心理学を考える

― Martin-Baro（2）―

藤 信子

前回からの続きで、Martin-Baro の仕事とその影響について見ていく。1980 年代には彼の名声は高まった。国内でも国際的な行事においても、基調講演を依頼されたが、エルサルバドルでは、保守的な同僚からは、共産主義者あるいは破壊分子と非難された。変革の手段としての心理学の役割についての彼の見解や、「解放の心理学」は、市民のエンパワメントと不正義への闘いを強調した。そこには解放の神学とブラジルの教育学者のパオロ・フレイレの影響があった。その考え方の基本には「貧しい人々に寄り添う選択」をしたこと、彼らが抑圧された歴史の中で、自分を見出していくことをエンパワーする方法は、当時の政府を含む支配階級にとっては、敵対的なものとうつった。彼がきわだった悪評を得たのは、カラカス（ベネズエラ）での第 20 回アメリカ大陸心理学会大会においてであった。

一方、心理学によりコミットし批判する見解を同じくする友人 Martitza Montero はハバナ（キューバ）で開催されたアメリカ大陸

心理学会の中央アメリカおよびカリブ海諸国大会に、彼を招待した。

Martin-Baro にとって、旅行はアカデミックな知識人にとっての特典ではなかった。公開の目の中にいることで生き残る方策であり、戦争の残虐行為とサルバドル政府が合衆国の援助を受けて苦しめている人権侵害を弾劾できる証人として働く方法だった。彼は合衆国の国民に彼らの政府が「裏庭で」何をしているのかを知らせるために、頻繁に合衆国に行った。そして活動主義の心理学者の Adrianne Aron(“ Writings for Liberation Psychology” の英訳者の一人)と M. Brinton Lykes と親しくなり、2 人が彼が訪ね、話をするところを準備した。

エルサルバドルの内戦が始まる前から、Martin-Baro の合衆国に対する気持は、愛と憎しみのアンビバレンツなものだった。北アメリカの外交問題について熟知していたため、そこからの来るもの殆どすべて、合衆国で作られた心理学も含め、疑っていた。合衆国で学んだことは、敵を内部から知ることになった。彼の 2 つの主な仕事“Action and Ideology”(「行為と意識形態」)(1983)と” System, Group ,and Power”(「組織、集団そして権力」)(1989)、において、ラテンアメリカで得られる心理学についての理論的な本の中では、稀な北と南の対話を開いた。彼はアメリカの心理学へ鋭い批評を述べるだけでなく、そこから離れるための挑発的な方法も提案している。その確固たる考えが表れた局面が、英語が流暢であるという事実にも拘わらず、スペイン語だけで書くという彼の決心であった。そのことが、不幸なことに彼の著作が、合衆国やその先の英語圏の研究者に知られないという危険が生じた。

彼と連帯感を持つ友人や同僚は、注意するように、そして可能なら国を離れるようにと忠告した。彼は一流の研究所からのいくつかの仕事の申し出を断り、その代わりに本の製作、旅行資金そして道徳的な支持を頼んだ。大学の生活の中でのコミュニケーションの他のチャンネル、El Salvador Journal of Psychology などのような専門の機関紙、グループで編集する本、そして編集委員会などを始めた。ベネズエラ、プエルトリコ、スペイン、コスタリカの大学への短い訪問の任務は引き受けた。

経歴の最後までに、彼は 1 ダースほど本と 100 あまりの論文を編集し、書いた。彼は解放の心理学(1986)と名付けたことの開拓者としてよく知られることとなった。政治的で批判的社会心理学が切望されるべきものというのが彼の提案である。

1987 年の初め、エルサルバドルの状況は非常に困難になったので、彼は短い期間隠れなければならなかった。同じ年にキューバで英国の心理学者の Arison Harris にキューバの国営 TV に出ることを断っている。TV に出ることによって、エルサルバドルにおける報

復を招く可能性があるためだった。

1989 年にスペインに行った時、彼の兄弟の Carlos は彼が非常に神経質で疲れていることを知った。47 歳の誕生日の 2 週間前の 1989 年 11 月 16 日の早朝、政府軍の精鋭部隊が 5 日前から始まった FMNL（ファブランド・マルチ民族解放戦線）のゲリラによって始まった大きな作戦を口実に、大学のキャンパスと、イエズス会士の住居に押し入った時には、彼はすでに起きて原稿を書いていた。政府軍部隊は、UCA(University of Central America)の総長であり神学校の校長である Ignacio Ellscuria を殺し、目撃者を誰一人残さないように命令されていた。 6 人のイエズス会神父と彼らの料理人とその娘が殺された。

1990 年彼の同僚や友人たちによって「精神保健と人権のための Ignacio Martin-Baro 基金」が設立された。以下の彼のことばが、この基金を説明している。

「個人の障害としてか、それとも（戦争による）社会的相互作用の悪化によるか、どちらにしても、それ自体重大な社会的障害で、我々の仕事や愛、我々自身の独自のアイデンティティを主張するような、人々の歴史の中で我々の個人的なそして共同の物語を語るための、そのような集団の能力の腐食である。このような理由で、問題は戦争によって生じた破壊や混乱に取り組むことに限定しない。問題は新しい社会の新しい人を構成することである」（Ignacio Martin-Baro）。

文　献

Portllio, N. (2012) The Life of Ignacio Martin-Baro: A Narrative Account of a Personal Biographic Journey. Journal of Peace Psychology. 18(1), 77-87.

Http://www.martinbarofund.org/

蟷螂の斧

次の一歩

社会システムを変える
第３回
地域での学びシステムの構築

団　士郎

２０１６年９月24-25日、横須賀市にある神奈川県立保健福祉大学で、第8回対人援助学会が開催された。相模原の障害者施設で酷い事件が起きた地元である。時期的にも、あの問題に向き合わないわけにはいかない。結論があるわけではないが、理事会シンポジウムとして私も発言者の１人で登壇した。

そこであらためて気がついたことは、あの問題は日本社会の障害者問題における様々な積み残し課題に否応なしにスポットライトを当てたということだ。

事後対応策として行政は、あの施設の全建て替えを5年を目処に決めたそうだ。しかし、定員百数十人の巨大障害者施設。かつてコロニーと名付けられた大型施設が全国あちこちの不便な場所に建設された。あの時代の日本の障害者福祉界においては、一定の到達点であっただろう。しかし今、そんな施設を新設するかと言えば否だろう。

現状として、そこには現在も利用者が存在する。しかし、世の中は進歩、変化している。そこにあの事件が起きて、対策されるのが「かつての枠組みのまま」というのはおかしな話ではないか。

ここに見られるのは、安易な元の姿への復帰ではない。そんなに杜撰な仕事は誰もしないだろう。むしろ動かせない現実、説得力を持てない対案の結果なのだろう。本人への支援と家族への支援は、別の問題として考えられなければならない現実がずっと横たわり続けているように思う。

障害当事者への取り組みはバリアフリー化や諸制度の歩み、地域生活支援の様々な専門家が担ってきた。だが家族へのサポートはそんなに変化していない。今なお、まずは障害受容から始まって・・・であろう。だから家族の意向が登場すると、暗礁に乗り上げたような古くて新しい問題点が表面化する。

今回の流れの中でも、家族の意向を受けた匿名報道がそうだろう。当事者の地域生活、在宅生活の推進は、苦しむ家族の利害としばしばぶつかってきた。社会に対して匿名のまま、死という不在化を受け入れさせられる自分とは、いったいどういう存在なのだろう。そんな様々な昔からの記憶を、今も変わらぬ課題として想起させられた事件だ。

＊

2016年秋、訪れた東北各地は、東日本大震災津波被害を経て、さらに高い防潮堤の建設ラッシュだった。今年も訪れた宮古市田老地区には、それまで世界一だといわれていた防潮堤があった。それが破壊され、多くの人命が失われた。なのにその結果がさらに高い防潮堤をということになっているのをみて、人間社会は事実から学ぶことのなんと難しいシステムなのだろうかと思った。

これらは共に、大事なことも含まれてはいるが、いずれも次の一歩ではない。前にもあったことを

リバイバルしただけだ。何があっても、失敗しても、まだそのままを続けたがる勢力はあなどれない。それは外にいるだけではなく、あなたや私の内にも住みついている。

＊

さて、今回の本題にはいる。さしたる目的もなく訪れた旅先で、思いがけないものと遭遇する。そんな幸運はしょっちゅうあるわけではない。

地名以外何も知らなかった大分県日田を訪れたのは、ほぼ偶然だった。私の母が熊本県久留米市の生まれで「久子」と名付けられたと言っていたのが記憶にあったので、九州新幹線さくらの下車地を久留米にしたのが始まりだった。もっとも、母方祖父は職業軍人で、その赴任地だった久留米で母が生まれただけで、故郷とか出身地というわけではない。

初めての久留米の街を、寺町等を中心にぐるっと散策した。駅に戻って、さてどうしようかと思っていたら、JR久大本線が目についた。久留米から大分で久大線。こんなルートを列車で移動するなど考えたこともなく、更に考えてみると、大分市も訪れる機会のない場所だった。

別府はいったことがあるし、竹田市や国東半島観光はした事があった。そこで大分市でも目指そうかと思った。さらに地図を見ながら、その先の佐賀関からフェリーに乗れば四国に渡れるなぁとも思った。開業したばかりの九州新幹線で、くるっと九州巡りのつもりだったのが、結果的に気まぐれ優先で大変更になりそうだった。

阿蘇の麓を抜けて走るJR九大本線。大分までの特急が主だったが、急いで大分に向かう理由もないので、途中駅までのローカル列車に乗った。終点で降りたが何もない駅は、まだ久留米市内だった。人影もまばらな駅舎で読書しながら次の列車を待って乗り継いで日田についた。

日田のことは、名前は知っていたがそれ以上でも以下でもなかった。ゆっくりするつもりの車中でネット検索し、二連泊の宿をとった。事情が分からないので素泊まりにした。着いたところは中規模の温泉旅館で、赤い風船などのパックツアー客が主だった。

翌日、街をそぞろ歩いていると、商店の店先や個人宅の玄関前に雛人形が飾られていた。寺の本堂にも多量の雛人形が飾られていた。町を挙げて、こういう趣向らしかった。

そんな観光名所の一つとして、「咸宜園（かんぎえん）」に遭遇した。それまで聞いたこともなかったし、開塾者　廣瀬淡窓のことも知らなかった。ただ、たまたま訪れた街に、江戸時代に開校された私塾の歴史が展示されていただけのことである。それが妙にはまった。案内人の話をたっぷりと聞き、向かいにある資料館を熱心に見学して、結局、半日近くそこにいた。

江戸時代の武士のための私塾をイメージしていたので、三奪の法（入学した者は身分、出身、年齢に囚われず、平等に学ぶ事が出来た）に、ちょっと感心していた。あちこち視察に行っても、何も見てこないことの多い私にすれば希なことだった。

そして自分がしてきたこと、していることが「私塾」なのだなぁと思ったら嬉しくなった。資料館の廣瀬淡窓の志がいちいち興味深く、歴史をまとめた書籍も購入して読んだ。

私はしばしばこういう感想、感情を持ちやすい男である。24，25号執筆者短信で内村鑑三のことに触れた。その時に感じていた事とも共通しているが、自分のしていることを、歴史の中の先人の実践と重ねて納得するのが好みのようだ。先人の誰かに学ぼうとか、真似ようというのではなく、自分のしていることを歴史に重ねて、「おうおう、こういうことをした人が先にもあるなぁ、そりゃ当然だ」と思うのである。

「咸宜（かんぎ）」とは、ことごとくよろしい、という意味だそうで、皆良いという話である。私にピッタリじゃないか。そんなわけで、全国14カ所で長年継続開催中の「家族理解WS（出張私塾）」が今回のテーマである。

なお今回の文章は、2013年に発刊された、立命館大学大学院、応用人間科学研究科10周年記念誌に書いたものを、加筆、校正、再編集したものが中心になっている。

はじめに

私が長年働いていた福祉の現場（児童福祉、障害者福祉）ではずっと、「地域のネットワーク構築」を願う問題意識はあった。

そして「縦割り行政」、「セクト主義」、「専門バカ」、など、いずれも使い古しの分断表現実態もあった。つまり地域ネットワークとは、なかなか実現は遠いが故に、ずっと言い続けられてきたテーマだった。

わかってはいるのだが、そう簡単には変化しないもの。指摘が慣用句化しているにも関わらず、相変わらずそのままある事態。これは結局、「変化を拒否するよう構築された社会システム」だと言っていいのかもしれない。

藪から棒の突然の事態、事故は、否応ナシに変化のきっかけになりやすい。しかし、予め承知されている事態は、なかなか他からの影響を受けにくいし、反省から学ぶところも少ない。

こういった課題の変化実現が、私にとって長年のテーマなのだという意識は常にある。

臨床現場で

明確な問題意識からと言うより、自然に近い違和感への反応、疑問に対する反応が、後から考えると新たなネットワーク作りを志向することになった。

ことさら困難なテーマからというわけではなく、次々と現実の改善から着手したのが、結果的にそれだったわけだ。ここではその実現に向けて摸索した道筋と、道中で手にした知見を述べたいと思う。これに至る道筋はけっして計画性を持ったものでも、直線的に展開を実現できたものでもない。

対人援助領域における実践は、常にこの世界の持つ現実のディテールに寄り添っていなければならない。

杜撰な現状認識しかないと、業界内流行語はあっという間に消費され、問題意識の上っ面を撫でただけで消えてしまう。用心しておかないと、専門家の利益確保のためのアリバイ作りに手を貸すことにさえなりかねない。

児童相談所にとっての家族療法

児童相談所業務に内部スタッフとして家族療法を導入したことの意味が、しばらく経ってからはっきりと分かったのは大きな事だった。

多くの専門機関がそうだが、業務は基本的な仕事の流れを持っている。担当者個々人の特性にかかわらず、進め方には基本形式がある。これは、その業務に関する理念、原則の上に形成されている。

子どもの問題で来談したとき、親面接は児童福祉司が、子どもの心理面談は心理判定員（現・児童心理士）が行うのが定番だった。

今はかつてほど頑なではないかも知れないが、基本的にこの役割分担は健在だ。そして担当する両者の見解の食い違いによる不満や葛藤も継続中だろう。

それまでしばしば起きていたのは、こんな事だった。子どもの面談が長引いて、児童福祉司の親面接はとっくに終わってしまっている。アドヴァイス好きの児童福祉司は、面接が長引くと、持ちネタがなくなってしまう。そして、なかなか終わらない心理面接にイライラする　　。

心理判定員からの継続面接提案も、児童福祉司には毎週時間を取られて、他ケースの訪問や調査に支障をきたすだけだ。一方、心理職は児童福祉司が親に話している内容が同意できない。

そして「子どもは良くなってきているが、親が問題だ」、「親は反省しているから、もう大丈夫なのに、いつまでセラピーをするのか。子ども一人で来させるようにしてくれないか」など、担当者間の葛藤が表面化していた。

今もあちこちで行われているであろう親子併行面接ゆえの見解の相違。これは積年の頭痛の種だった。

家族療法の形式を取り入れたとき、けっしてこの問題意識が先行していたわけではない。相談の形として合同家族面接をすることになり、親担当、子ども担当という別室での併行面接が変わることになった。

家族面接室と観察室、二人の担当者がどちらかに位置して、共同して面接展開を見ることになった。やり始めて分かったことだが、合同家族面接を採用したことが、児童福祉司と心理職間のギャップを取り除いてくれた。

だから家族療法の採用は、心理療法の一技法を導入したのではなく、児童相談所に於ける従来型の面接スタイルの変更だった。これは百の理屈よりも明快な現実だった。

そして当初は心理職の研修だと認識されていた家族療法訓練に、児童福祉司職にある人が参加するようになった。今では、家族療法研修に児童相談所から参加するのは、児童心理士、児童福祉司、半々くらいになっている。

してきたこと、たりなかったこと

公務員を退職する時期と前後して、いくつかの地域で、対人援助職に従事する人たちを対象のワークショップを始めていた。この核にあるのは京都国際社会福祉センター（KISWEC）で二十五年余り、現在も継続している「家族療法ワークショップ」である。

全国の児童相談所を中心に、今では福祉現場のみならず、教育、保健、医療、司法など、対人援助のほぼ全領域の人たちが受講する家族療法ワークショップstep１、step2、step3、更に「援助職者の原家族を見つめる」を継続開催している。

波はあったものの受講希望者は途絶えることなく、四半世紀を超えて現在に至っている。これまでの受講者総数は１５００名を超えることになるだろう。

この事実は、KISWECで実施するプログラムが、時代を越えて普遍的に有用であることを示しているだろう。

研修内容の話ではない。長年愛用されて、今もコンスタントに売れ続けている定番商品のイメージである。これと対比されるのが、大ブームを起こし、あっという間に色褪せて忘れられてゆく商品である。

では、二十五年以上も続くものが作り出す状況とは、どのようなものだろう。長い時間が形成するのは、けっして技法やプログラムの結果だ

けではない。

WSを経験をした終了生は、各地での日常実践の後、時と共に管理職になっていった。良い学びだったと思う者は、部下や後輩にこのプログラムへの参加を勧めた。その結果、「うちの課長が薦めてくれたので・・・」、「先輩から是非にと言われて・・・」という各組織内からの参加者が増え、それが世代間連携のきっかけになった。

「家族」に関する共通のキーワードを持った多世代のスタッフが働く場を形成する触媒役を、このプログラムが果たすことになった。

しかし一方、このプログラムが全国各地の希望者が受講できることや、出張扱いで参加する公務員も多いことから弱点も抱えていた。

日本中から集う専門職同士のネットワーク作りとして、少なくない貢献はある。しかし、それが各地元での近接領域間のネットワーク形成に、リーダーシップを発揮できるようになるところまでは、なかなか推進できなかった。職場内では、よく機能できてきても、なかなか地域ネットワークの核にまではなりにくい。

研修の持ち方が結果的に「地域の連携」というキーワードを排除している面を否定できなかった。

地域での連携

そんな問題意識を持ち始めていた20年ほども前、青森県からの受講生が、「ここ（KISWEC）で行っていることを、地元で働く人たちと一緒に、地元で受けられないか」と問いかけてきた。

各地に出向いて行って、継続的研修を実施する発想はなかった。それまでの経験から、実現可能性に悲観的だったのだ。

何でもそうだろうが、物事が動き始める段階で、全てのことが分かっているわけではない。動きながら明らかになってゆくことも多いし、当初の目標より大きく発展した現実が構成される幸運もありえる。

結果的にこれがきっかけになって、全国各地で自主的で継続的なワークショップの開催が実現されてゆくことになった。

青森県の児童相談所職員であった女性に、地域における世話人グループを形成してもらい、地域に合ったワークショップ企画の展開を促すことにした。

こう書いてしまうと簡単なようだが、実現は大変だった。地域のネットワークづくりを、公の肝いりではなく、現場で働く人の意志の繋がりで形成してゆくのはなかなかだった。だからこの準備段階に時間をかけた。思いつき即実行のイベントは、一、二度は盛り上がるが、たいてい急速にしぼんでしまう。個人の情熱は冷めやすいものだ。

近年、大きな災害被災に対して市民社会がボランティア活動を組織化し、多くの人たちの連帯があちこちで生まれてきている。これは従来には見られなかった日本社会の進歩の一つだろう。

この流れを片方の車輪だとすると、もう一方は地域で専門職として従事する人々の使命感（専門職としての責任感）の連携だ。縦割り行政などといつまでも言っていないで、渦中の者が自ら構成してゆく。私が目標にするこちらの方が、なかなか継続実現は難しい課題なのである。

研修のツボ

非常に意欲的な人が、高額な費用をかけて、都市部の学びの場に出てくることや、短期留学にチャレンジするのは、珍しいことでも難しいことでもない。こういう研修の盛況は過去も現在も、そしてこれからも繰り返されていくだろう。

それが意欲的な個人の仕事や人生に貢献するところがあることを、否定するものではない。その道のトップランナーとして、然るべき地位や職を得ることになるのを批判する必要もない。

ただ、私の興味関心はそこにはない。こちらは地域における人の繋がりと、地域社会資源の繋がりを実現するべく、共通言語（私の場合は、「家族理解」）獲得の学びの場を協力して作り上げていく事を目指した。

これがエリート消費者としての研修参加ではなく、地域社会に於ける対人援助職従事者のネットワーク作りへの一歩だと考えていた。

当然のことだが、ネットワークという言葉の背景には持続、継続する営みが想定されている。従って、実現される学びの場も又、継続されるものでなければならない。この継続は次世代にまたがった連携を含み込んでいる。

とはいえ第一歩の青森において実現されていったのは、職場はまたいでいたが、先ず限定された業種（児童福祉関係職員）の人たちの研修であった。

更におおきな壁は、お金を払って講演会に行く人など地元には少ないという当時（20 年も前）の地域社会の常識だった。確かに地方に行けば行くほど、講演会や研修会は、公やスポンサーによって企画され、出席者は動員されていることも少なくなかった。研修とはそういうものだと認識されていた。

だが実際に始めてみると、思った以上に参加者は熱心だった。直ぐに参加者有志によって二回目が計画された。条件に恵まれた人、選ばれた人だけの特権だった学びの機会が、身近なものになった。

無論、プログラム内容も関係なかったとは言わない。しかし従来の研修マニアには希薄だった一緒に学び、地域社会に新しいものを作り上げていくという動きが新鮮だった。

青森県での取り組みは結果的に、現在まで（2016年）17年以上も継続中である。当然参加者は変動してゆく。

しかしその割に、プログラム内容は大きく変化

はしてゆかない。同じ事の繰り返しが中心である。リピート参加者の中では深度が更新されてゆく。その実感は、参加者個々人の地域社会に於ける役割の変化を見れば一目瞭然である。

地域社会の抱える課題に、直線的因果論で成果や効果の立証できるものなど限られている。参加者が自分の意志として十年以上も続けていることと、その主観的体験として、地域の一員としての役割達成感こそ、それぞれが受け取った成果物である。

デザイン
研修に於ける原則

おこなってきたことの整理をしておくと、おおむね四つの原則が立つと思う。

第一は誰が対象かということだ。研究者中心から現任者中心にしようとした。更に言うなら、学ぶことが好きな人よりも、実践家であることに軸足を置いている人を対象に考えた。これは地域開催することで自然に、研究者、大学関係者（教員、院生、学生）より現場の人の参加者比率が高くなった。一つの職場、地域、事業所から複数の人たちが参加し、共有できる学び（共通言語）が生まれた。

地元開催なら、子育て真っ最中の人や介護渦中にある人も、参加できるようになった。

第二番目に考えたのは、出席者のモチベーション形成のことだ。

「どこかが企画した目新しい講習会に、自分も一度顔を出してみるか・・・」、こんなレベルの研修動機は、ほぼ継続することはない。研修マニアはあれもこれもと雑食だが、結局そのどれも深く味わうことがない。

だから地域で継続的に参加するメンバーを育てることが目標になった。回を重ねる研修会で近接領域の人たちが繰り返し参加し、交流する。そうなれば受講生が即、地域ネットワークの構成員になる。

そのため、開催日程は土・日・祝日にした。プライベートの時間を業務に役立つ学びのために使うのである。

公的機関から年間行事の一つとして打診される研修依頼より、こちらを優先した。

第三に研修費用のことも、よく言われるように身銭を切ってこそだと思った。そこで費用は参加希望者なら、誰もが自己負担できる範囲の設定にした。地元開催なら参加者の交通費、宿泊費もゼロ近くなり、受講経費負担はより軽くなった。

全国各地で試行錯誤を繰り返した二十数カ所の中で、結果的に継続しているのは、この参加者自己負担方式をとったところだった。

どこからか予算がついて開催したものは、予算の切れ目でことごとく消えた。その後、自分たちの手で続けていこうと声をあげる参加者グループも存在したが結局、皆中断になった。

四番目に心がけたのは、プログラムを繰り返すことだ。これでいつも新しい参加者に門戸を開いていることを示し続ける。

「深く狭い専門家」が地域社会に必要なのではない。研究会や勉強会が特定の人たちのサロン化してゆくのは、途中から参加する者を阻むようなシステムになってしまっていることが大きい。

リピーターは繰り返しの中で習熟してゆく。新規情報を次々手にしようとするのではなく、上手になって、職場での処遇力がアップしてゆくことを目標にした。

継続

何事においてもいきなり大きな変化や転換が起こることはない。そう根拠のある話でもないが、一つの目安は十年だろう。十年続くものなら、内容よりその継続をもって、一つの意義、信頼を形成していると考えてもいいだろう。

新しいことを始め、それを継続維持してゆくに

は、中身もだが、運営の上手さも大事だ。そしてそれらが幸運をつれてきた時、新たな一歩が確保される。

こんなことを考えて着手して十数年。今も全国あちこちの地域に通い続けている。そしてそこには十年つきあいの現任者、管理者、そして新しく参加し始めた若者たちがいる。どの会にも共通しているのは、中心メンバーの領域だけではなく、関連近接領域からの途中参加を受け入れていることだ。

ネットワークの議論ばかりやかましく、いざとなると押しつけあったりしがちな地域社会システムを、一歩変化させるためには、中味よりも形式の変化に着目するのが早道だった。

変化は一気には起こらない。起きているのかどうかさえ、あやふやなところのあるものだ。しかし、今までなかなか実現しなかったものが生まれ、存在し続けているのをみると、変化は起きていると実感できる。社会の変化はこれくらいのスピードでいいのかもしれない。

多層的連携

このような各地での実践継続は、十年も過ぎると、あちこちで具体的な変化を生みだした。新しく参加する人たちの中に、初期からの参加者の部下であったり、組織構成員だったりする人が増えたことは先に述べた。加えて、母と娘の二代にわたって参加している人や、「娘が大学院でお世話になりました」と語る母親（教員）もいる。

また、参加者の属する現場が徐々に拡大していった事にも気づいた。福祉全般（児童相談所、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、福祉事務所、障害者諸施設、高齢者施設、ヘルパー、ケアマネジャー）のみならず、教育（小中高教員、特別支援学校、スクールカウンセラー、養護教員）、保健（保健師、助産師、精神保健相談員）、医療（医師、看護師、心理士）、そして司法分野（家裁調査官、調停委員、弁護士）からの参加者も増えた。更に、近接領域だと考える人たちの属する民間企業や組織からの参加も増えた。

近接異分野との連携、交流を声高に言いつのっているよりも、はるかに実態的変化が生まれ始めた。

また、初期からの参加者達の身上には、人事異動や昇進、退職、転職など、個人に属する変化も当然のように起き、それも研修会に変化を与えた。そこここにネットワーク成立の結果が確認できることになった。

当然、人の行動選択には、様々な要因が関与する。一つのキーワードで、人生の多くの時間を乗り切れる人は希だ。人は飽和するし関心もうつろう。

だが一方で、一つのことに長く関心を持ち続ける人も出てくる。その結果、受身なだけではなく、自身の関心をライフワークとして実践し続ける人も登場する。

地域社会にこういった人材が生まれ始めると、そこに取り残された地方都市のイメージはなく、今日社会の拠点の一つになって輝き始めた。

地域にスーパーヴァイザーはいる

このように、家族システム論的な視点からの現状を理解する人々の居る複数分野の地域社会資源が連携しはじめ、それによって切り開かれた新たな現実が動き始めた。それが地域開催の家族理解WSとして、全国各地で数年、場所によっては十数年も継続開催される学習の場に育つことになった。

ネットワークが生まれた場としての継続研修会には、若い世代も多く参加するようになった。そこには、職場ではなかなか出会えない地域社会の人材といえる業界のベテランが待っていた。

現場のあちこちで長年聞かされてきた、上司、管理者がスーパーヴァイザー能力に欠けているというグチにも変化が起きた。

各組織は頻繁な人事異動などで、多くの現場が素人集団化し、防衛的にならざるを得ないと思われる現実がある。そんな中で専門職のベテランと若い世代が親しく言葉を交わせる場の継続的確保は、まさしく地域社会システムに於ける連携の実現である。職場では短期異動が多くても、地域社会にはベテランがいた。

現在継続中の地域プログラムとしては、年四回開催の東京は50回を超えた。年二回開催の札幌、弘前、埼玉、金沢、岡山、松江、高知、年一度の山形、広島。隔月開催の草津（滋賀）、毎月開催の京都（立命館大学）、大津。いずれも長きにわたって開催中である。

★関心のある方は雑誌奥付にある編集長のアドレスにお問い合わせ下さい。

スピンオフ
ほほえみプロデュース

専門細分化された時代の行き詰まりに、専門職を増員することだけで対応するのではない地域作りが青森で始まった。（詳細は、本マガジンバックナンバー第6号からの連載を参照）

この企画の中心人物は、弘前勉強会の開催事務局を永年つとめた人だ。問題解決に専門家が対応することに終始するのではなく、予防に力点を置いた取り組みを考えたいというスタートだった。

「県民にもっと笑顔を」という行政の事業としては荒唐無稽にも思えるプロジェクトだが、知事みずからが関心を示したことで、進められることになった。

予防の取り組みとして、地域のコミュニケーション活性化のために、住民有志に「笑い療法士」（小児科病棟の取り組みとして、諸外国で有名なスキル。映画「パッチアダムス」で取り上げられている。長期入院中の子ども達に笑顔を！という目標で実施されるプログラムである。）の研修訓練を受講して貰う。

受講者を組織し、ねずみ算式の伝達講習会をプランし、地域に降ろしてゆく、現在も進行中の取り組みである。開始五年でファシリテーターとして、活動可能な研修受講県民数が二万人を越えたそうだ。

そして行政主導の事業としては区切りを迎え、NPO法人活動になって、継続進行中である。

学校臨床の新展開

― ㉖「不登校」スクールソーシャルワーカー ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

増加する

不登校への支援をめぐって

2016 年 10 月 27 日に文部科学省が発表した平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、小中学校義務教育における不登校児童生徒数は、少子化のなかでも、ここ数年右肩上がりとなり、昨年度は、12 万人を超えた。文部科学省は、この調査発表が行われる 1 か月前に「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」を発表している。この発表は、2016 年 7 月に報告された、不登校に関する調査研究協力者会議「不登校児童生徒への支援に関する最終報告～一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進～」を受けてのものである。

この最終報告書では、「不登校児童生徒への支援に当たっては、多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限り的確に把握し、児童生徒が不登校に至った状況を理解し、寄り添うことが重要である。しかし、社会や経済の変化に伴い、子供を取り巻く家庭、地域社会の在り方も大きく変容しており、不登校の要因、背景もますます多様化、複雑化している。したがって、学校においては、校長のリーダーシップの下、学校全体で組織として対応できる充実した体制を築くことが必要である。また、心理や福祉の専門家、教育支援センター、医療機関、児童相談所など学校外の専門機関等との『横』

の連携を進めるとともに、子供の成長過程を見つつ継続的に一貫した支援を行う視点から、小学校、中学校、高等学校、高等専門学校及び高等専修学校等の『縦』の連携も重要である。」として、教職員や他の専門職、他機関との連携により、「一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進」を期待したいと述べられている。そして、具体的には「児童生徒理解・教育支援シート」を作成するなど、個々の児童生徒に合った支援計画を策定し、その児童生徒を支援する関係者により、組織的・計画的な支援を実施することなどが重点的に取り組むべきこととして掲げられている。これらのいわゆる「アセスメント」や「プランニング」等のプロセスは、ソーシャルワークプロセスそのものともいえ、教育や心理の視点だけではなく福祉の視点が相当程度に入ったものと見ることができる。

他方、この間、国会では「教育機会確保法案」なるものが 2016 年 11 月末現在、進行形で審議されている。しかしながら、不登校当事者やその親、フリースクール関係者、教育関係者の間では、この法案や先の文部科学省通知等への批判が大きい。たとえば、「不登校・ひきこもりを考える当事者と親の会ネットワーク」では、不登校当事者の自由を奪い、不登校ではない児童生徒と不登校の児童生徒を分断し、不登校当事者の不登校に至った背景を自己責任とし、学校教育へ戻ることを強制するような「不登校対策・管理法」は不要であると訴えている。また、先の「児童生徒理解・教育支援シート」についても、「小中学校で不登校をした子どもの個人情報を高校終了まで校種間をこえて収集・管理し、『切れ目ない支援のため』の名のもと公共・民間の関係機関で情報を共有し、23 才まで保存するという個人情報保護を無視したもの」であり、「法案と施策で不登校の子どもたちの人権とプライバシーを侵害しないでください。」と訴えている。

中央大学の池田はこの法案に対して、

① 学びを権利としてらえず、課程主義的・能力主義的に義務教育制度をつくり変えようとしている。

② 教育機会については、日本国憲法や教育基本法、さらには、子どもの権利条約等の国際条約等でも規定されているのだから、新たな法律をつくる必然性はない。

③ 不登校児童生徒を定義することで、不登校を子どもの自己責任に帰しており、いまの学校あり方自体を問う視点がない。

④ 「多様な学びの場」を用意し、子どもたちを分類・排除し 子どもたちを分類・排除していく差別制度をつていく差別制度をつろうとしている。

⑤ 学校以外の場で習にも国・地方公共団体の管理が及ぶことなり、多様な学び、自由な学びは保障されない。

⑥ 民間の団体が公教育の経営・運営を行うことになり、教育機会の均等性や安定性に問題が生じる。

⑦ 子どもの権利条約に則ると謳いながら、

子どもたちの意見表明の機会が保障されていない。と述べている。

誰のためのＳＣ、ＳＳＷか

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーは「不登校を減らしたい」という国や行政のニーズに応え、児童生徒をいかに早く学校に戻すかということを目標に業務を行っているわけではない。しかし、そういうつもりはなくとも、そのプレッシャーやシステムに巻き込まれていないか自己点検が必要であろう。当事者の真のニーズを把握し、支援につなげたい。そういった意味でも、あらためて当事者にとっての環境（学校）という場のアセスメントについても丁寧に行い、アドボカシーやシステムの改善にむけたアクションを行っていかなければ、当事者からの信頼を得るのは難しいだろう。

（参考、引用文献）
不登校に関する調査研究協力者会議「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」2016 年 7 月

文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」2016 年 9 月
池田賢市「一人ひとりの能力を伸ばす教育は社会に何をもたらすか」2016 年 10 月
http://ftk.blog.jp/archives/cat_1101014.html
最終閲覧：2016 年 11 月 30 日

文部科学省「平成 27 年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（速報値）について」2016 年 10 月

「不登校・ひきこもりを考える当事者と親の会 ネットワーク」ブログ
http://ftk.blog.jp/archives/cat_1171306.html
最終閲覧：2016 年 11 月 30 日

不登校経験を持つ若者たちの
もう一つのキャリアパス

第１章　キャリアって何？

キャリア支援、キャリア形成、キャリア教育、キャリアプラン…。私たちの周りを見渡せば、実に多くの「キャリア」というコトバが使われていることがわかります。私たちの暮らしの中に多くの同じコトバが使われているとき、それは要注意なのかもしれません。気がつけばそれは、まるで意味を十分に理解しないままに使われる、記号のようなものになってしまっているのかもしれないからです。記号は、その意味を十分吟味することなしに、社会に流通していきます。これが消費社会を生み出す構造でもあるからです。

そして今回私たちは、この「キャリア」という当たり前のように使われてしまっているコトバを、あえて問い直してみようと思ったのです。

1. 交差する 2 つの移行期

「以前は、青少年の若者たちはみんなごく当たり前のように大人になることができました。でも今は、そう簡単にはいかなくなりました。現代は、大人になることが難しい時代と言えるのかもしれません。特に困難を抱えた若者たちにとってはなおさらのことです。だから彼らが学校から社会へと移行する過程に寄り添いながら、様々な道や様々な形を模索していく支援が必要なのです」

私はその日、ドイツ南部のニュルンベルグという人口 50 万ほどの街にいました。日本の文部科学省とドイツの家族・高齢者・婦人・青少年省（複合領域をカバーするために設定された総合省）が、昨年 11 月に合同で主催した青少年指導者研修に参加するためです。そしてこのメッセージは、その研修の責任者の一人であったニュルンベルグ市の移行マネージメント研修部長、メツガー博士が冒頭のあいさつで話されたものでした。

ドイツでは、青少年たちをいかにスムーズに社会へと移行させていくかということが、大切な社会的課題として扱われてきました。特にドイツでは、移民的背景を持つ人口が全体の約 20%にのぼっており、そのことに起因する青少年問題が多様に存在するからです。彼らは、言語的、文化的、あるいは経済的な理由から学校の卒業資格を得にくい状況にあり、さらにそのことが職業資格を手に入れにくいという、さらなる

厳しい状況につながっていきます。また資格社会が定着しているドイツでは、職業資格を持たない労働者は非正規雇用者となり、大変厳しい労働条件のもとで働くことにもなりかねないため、このことが新たな貧困の連鎖にもつながっているのです。そしてこのような状況を放置することが、やがては自分たちの生活をも脅かすリスク社会へとつながっていくことを、彼らは過去のナチス時代の反省から学んだのです。そのため青少年の課題は、彼らだけの課題ではなく国民全体の課題として捉えられているのです。

メツガー博士の言う「移行」というコトバには、二つの意味が重ねられていました。その一つは、子どもから大人へ、あるいは学校から社会へという若者の発達過程における移行です。ドイツでは、幼少期における家族から学校への移行、そして青少年期における学校から社会への移行という時期が取り立てて重視されます。この不安定さを抱えた時期に、十分な社会的な支援が必要だと考えられているからです。そしてもう一つの移行、それは近代社会からポスト近代社会へという社会そのものの移行です。1980 年代以降の社会の消費化と高度情報化のうねりは、便利さと引き換えに私たちの主体そのものを喪失させ、自分の意志に基づいた行動なのか、あるいは何らかの意志によってさせられている行動なのかの区別を不明瞭なものにしていきました。また多様な価値観が社会に流入してくるようになる一方で、人々の生活や行動がどんどん標準化されていくといったアンビバレントな状況を作り出し、その結果、地域社会の解体や家族機能の喪失、個人の孤独感や連帯感の喪失などといった社会のつながりの断片化という状況を作り出していったのです。まさにそれは、ジークムント・バウマンのいう「リキッドモダニティ」（液状化する近代）そのものなのです。そしてドイツでは、ちょうどその時期に東西ドイツの統合、そして EU の成立と立て続けに大きな社会状況の変化があり、それが新たなパラダイムを形成することになっていったのです。

このように現代社会における青少年の課題は、個人の発達的、社会的な移行期と、社会そのものの近代からポスト近代への移行期とが交差するところで生じていきます。メツガー博士の言う大人になるということ、あるいは社会へと包摂 *social include* されていくことの困難さの背景には、このような個人の中に内在する変数と社会の中に内在する変数を双方に含んだ二つの大きな移行期の存在があるのです。そしてこのことは、ドイツだけが抱える状況ではなく、私たちの社会においても同じような構造的な課題がみられるのです。

私たち個人は、家族という小さな社会の中で育ちます。そしてその家族は、その外側にあるより大きな社会の影響を受けます。この時、善なる社会は、善なる家族を育み、善なる家族は、善なる個人を育むといった三層構造がうまく機能することが望ましい状況です。しかしポスト近代においては、社会そのものの危うさが露呈し始めます。危うさを含んだ社会が、家族の機能を喪失させ、機能を失った家族が新たな若者の問

題を作り出していくという構造が見られるようになっていくのです。

私たちは、個人という単位である若者の問題に、家族や社会の問題が集約されていることを意識しなければならないと思うのです。問題は、個人の中にあるのではなく、個人と社会との関係の中に生じていくのです。従って問題を抱えた若者たちが、ある一定の変容を遂げ、あるいはその変容が家族にも伝わり家族の機能を回復させたとしても、彼らが依然危うさを含んだ社会へとただ単純に包摂されていくだけではいけないと思うのです。彼らの変容が、社会的に何らかの意味を発信し、社会そのもののあり方に一石を投じるような仕掛けが必要になると思っています。それは何も大それたものである必要はありません。個人が社会から影響を受け続けているように、たとえ小さな規模であったとしても、社会が個人から少しばかりの影響を受け取るシステムが必要なのです。

私が今回この青少年指導者研修に参加するきっかけとなったのは、以前から日本のキャリア支援やキャリア教育のあり方そのものに疑問を持っていたからです。私の眼には、それらのアプローチそのものが受動的な「施し」のように映り、キャリア形成をおこなう若者たちの主体がどこか置き去りにされているように感じていました。また、支援そのものがその場しのぎ的で、どこか間に合わせ的な方法論に終始してしまっているような印象さえ受けていました。そうすると若者たちはせっかく変容を遂げたとしても、再び危うさを含んだ社会の中に組み込まれた時には、簡単にはじかれてしまったり、不適応を起こしてしまったりする可能性がとても高いと考えていたのです。従って、この課題をどうクリアすればいいのかを真剣に検討できなければ、結局困難を抱えた若者の問題を本質的に問えないのではないかという思いがあったのです。

私たちはそんな疑問のもと、3 年前から京都府の地域力再生プラットフォームの一環として「南丹ラウンドテーブル」を立ち上げ、若者支援に携わる援助者たちの学びの場を主催してきました。その中で「キャリアとは何か？」というテーマを立て、あらためてキャリアそのものの問い直しをおこなってきました。だから、今回のドイツ研修に参加しようと決意したのも、日本以外の社会では、この若者たちのキャリア形成の課題をどのように扱っているのか？という思いがあったからでした。

受け身ではない若者たちのキャリア形成。若者たちが自分自身の仕事の意味を今後も継続させていくことのできるキャリア形成。間に合わせ的なものではなく若者一人一人が自分自身とじっくり向き合い、自分自身を発見しながら進めていけるキャリア形成。そして若者の変容が社会に何らかの影響を及ぼしていけるような社会的機能を備えた支援のあり方を、私たちはどこかにイメージとしてあたためていたのかもしれません。そしてそのイメージは、私たちの中で長年の経験として培われてきた学習観と重なっていきました。すなわち主体的で能動的なキャリア形成というものは、本来自分自身の人生の物語を描くことと重なり、それは

新たな経験を絶えず自分の物語の文脈の上に編集しながら重ねていくという作業なのです。そして、これはまさに自律的な学びのカタチそのもののような気がするのです。ここに「学び」の世界「キャリア形成」の世界がかなり近い形で出会うことになります。特に若者たちの援助場面においては、これらを切り離しては考えられないのです。

ドイツの若者支援の領域では、教育 *padagogik* と労働 *arbeit* はかなり密接なものとして捉えられています。ドイツでは伝統的に社会教育と職業教育がとても重視されてきたからです。社会の教育を受けた若者たちをどのような形で社会へと包摂していくのかは、社会の責任において大事なことなのです。私たちは、ドイツで何人かの当事者である若者たちに直接会って話を聞くことができました。その中でも特に印象深かったのは、内戦が続くチェチェン共和国から難民としてドイツへとやってきた18歳の女の子でした。彼女はお父さんや他の兄弟たちを残したまま、お母さんと聾唖の弟と3人でドイツへと逃げ込んできました。イスラムの文化的背景を持つ彼女は、ヒジャブを顔に巻いていたことでいじめを受け、最初はなかなかドイツの学校になじめませんでした。しかし大変頭が良かった彼女はドイツ語の習得も早く、比較的スムーズに学校の卒業資格を手に入れることができたそうです。やがて彼女は小児科の看護師を目指すようになっていきます。そんな彼女は今、家族と離れて一人で生活しています。母と弟がドイツ語のできる彼女に必要以上に依存していたため、支援者たちは、彼女に一時的に家族から離れて暮らすことを提案し、家族には福祉的な支援を提供しました。そして、職業学校に通いながら資格習得に集中できる環境を整えるということが彼女への支援の方向性となっていったのです。しかし、実際には彼女がその支援のあり方を受け入れるのに2年の月日が必要だったと言います。支援者たちは、それを寄り添いながらずっと待ち続けていたそうです。来年、彼女は看護師の資格を手に入れ、小児科の看護師としてどこかの病院で働き始めます。そして一定の経済的自立を果たした上で、再び家族と一緒に生活を再開するということでした。

このような支援のあり方を見る時、そこに当事者である彼女の人生の物語が、一つ一つ積み上げられていく様子が伝わってきます。彼女の周りの支援者たちは、彼女の葛藤をどこまでも尊重したといいます。そして、その葛藤を彼女自身が主体的に乗り越えた時、彼女のキャリアが一つ前へと進んでいくように感じました。

ドイツ語では、職業のことをベルーフ *beruf* と呼んでいます。しかしこれは、「職業」というよりも「天職」に近い職業観だそうで、神から与えられた使命であると考えられています。それは決して間に合わせ的に見つけるようなものではなく、自分自身との深い対話の中で見出されるものなのかもしれません。(このあたりのことについては、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』が詳しい)

2つの移行期が重なり合うところで若者たちのキャリア形成が営まれていく時、そ

れは必然的に不確定さを含むことになります。それ故、彼らのキャリア形成は、あるパターン化された形成過程をたどるのではなく、個々の若者たちが自己更新を遂げ、変容を続けながら徐々に構築されていくような複線的なイメージを持っています。そして、彼らの変容が向かう先は、単純に既存の消費社会の中へと組み込まれていくということではなく、その消費社会を越えたところ、あるいはその消費社会の中に点在する形で成立している、どこか生産的で文化的なこだわりをもった世界であるようにも思うのです。

『幼稚園の現場から』
27・おもちゃのかえっこ

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

今回は、全国いろんなところで開催されている**「かえっこ」「かえっこバザール」**についてご紹介します。このイベントはシステムがとても良くできている上に、親子層の集客力が高いので、商業施設などの各種施設、地域活動、子育てサークル、行政、教育などに携わる方が、交通安全や防災の企画と抱き合わせで開催したり、いろんな形で実施されています。

その仕組みを簡単に説明すると、

（１）不要になったオモチャをカエルポイントに交換して、他の方が提供したほしいオモチャをポイントで買う、というシステムが“かえっこ”です。
（２）ポイントは不要なオモチャを“売る”ことでゲットできます。
（３）ポイントの無い人は開催されているワークショップを体験することでポイントをゲットできます。

このワークショップにそれぞれの主催者が意図する内容を盛り込むことができるのです。もちろん、かえっこ単体だけでも十分に楽しい活動です！
「来年のイベントどんなことしよう～？」「子どもたちが喜ぶイベントがしたいなー」とお考えの方、こちらのサイトを見てみて下さい！

①まず導入編
https://www.youtube.com/watch?v=RD4eerJNYOs
◀かえっこ説明動画６分程度

②より詳しくブログで見る
http://kaekko.exblog.jp/
◀Kaekkoの情報ブログサイト

③このシステムを考案したのは、藤浩志さんという美術家の方です。なので、最初は美術館などアート関係の方からかえっこは広まってきました。発案と事務局を運営して下さっている敬意を込めて紹介致します。膨大なオモチャを使ったアートもすごいです！ちなみに事務局窓口は奥様が運営されています。
www.geco.jp　◀藤浩志さんのHP
https://www.youtube.com/watch?v=jANcMttq_d4&feature=youtu.be ◀作品

仕組みを一通り頭に入れて頂いたところで、開催の手順をおさらいしましょう。

《計画・事前準備》

（１）開催時期と集客人数をだいたい決めます。

関係者だけに収めるのか、一般に広く告知するのかは、段取りを共通認識しているスタッフの人数や、会場の広さで変わってきます。

（２）開催時期と会場が決まったら、必要なグッズを「かえっこ事務局」から購入します。

最低必要なのは、
①かえっこカード
②カエルスタンプ
あると便利なものは色々揃っていますが、手持ちもので代用することも可能です。開始に先だって必要なオモチャも事務局から送ってもらうこともできます。事務局は利益無しで行っているので、グッズを買うことが運営を支えることに繋がります。

（３）かえっこの仕組みをわかりやすくプリントして、日時・会場を告知します。
同時に、小学生以上のボランティアスタッフを募集します。

《当日の段取りと注意》

（４）できればスタッフ希望者への仕事の説明の時間が取れるとスムーズです。

（５）フリーマーケットと混同してしまいがちなので、大人が売り場に入らないこと、その意味などを掲示したり、説明していかないと、トラブルの元になるので注意しましょう。

（６）ワークショップは必須です。こちらの計画もぬかりなく！

（７）予想外の来客数への対応も考えておく必要があります。整列場所、入口、出口、大人の待機場所等々、人の流れを考慮して配置します。私たちは１回の入場で買えるオモチャの個数を３個と決めたり、幼児の時間を設けたりしてコントロールしています。

（８）オークションは、参加する年齢によって形を変えても良いでしょう。私たちはじゃんけん大会でゲットするようにしました。

（９）閉会後に余ったオモチャは、処分するものと分けて、保管したり事務局へ送ったりします。

次は原町幼稚園での具体的な取り組みについてレポートします。一例として参考にして下さい。2008年から始めた“かえっこ”も今年で９回目。原町幼稚園では保護者会のお母さん方が担当する一般対象ミニバザーや飲食の模擬店、職員が担当するワークショップ（あそび）コーナーで構成されています。かえっこでは収益はありませんから、模擬店やバザーの売上げで園で使う備品の購入資金に充てたりします。

今年は、既に11月中旬に終了しましたが、保護者の方からこんな嬉しい感想をいただきました。

『土曜日のかえっこバザールでは、◯◯は相変わらずの小心っぷりでご迷惑をおかけしました。でも◯◯は、自分で選んだオモチャをとても喜んでいました。親が入れないっていいですね！子どもに（オモチャを）選ばせているようで、親はぜったいに持っていないものや、ジャマにならないものとか、無意識に子どもを誘導してしまいますもんね(ˆ_ˆ;)
子どもにとっては似たものが家にあろうが、その時ほしいオモチャが宝物なんだと改めて感じることができました！ありがとうございました。』

年少組の一つ下、３歳の男の子のお母さんからのお手紙でした。その日の彼は、初めての参加でお母さんと離れることになり、大泣きをして会場入りしたんですが、誘導の保育者にオモチャの前に連れていかれると、ピタッと泣き止んでオモチャを選んで、ゴキゲンで帰っていったそうです。

この活動を幼稚園でやる意義については、次ページからの告知プリントをご覧ください。

《告知プリント第一弾／概要とスタッフ募集》

『はらっこバザール2016』(ˆ〇ˆ)／ごあんない第一弾

2016.10.27原町幼稚園

昨年参加したお友だちは、スタンプカードの確認と、交換するおもちゃを選んで準備してね！

初めての人は
「かえっこ」でインターネット
検索してみて下さい！

11月19日(土)『はらっこバザール』が開催されます。

今日は概要のお知らせと、お手伝いの募集です！
※かえっこのシステムや当日の模擬店などについては後日詳しくお知らせします。

はらっこバザールって なにするの？

《1》子どもたちの「おもちゃのかえっこ店」

☞全国共通レシピのおもちゃのとりかえっこシステムにて
お金ではなくポイント制の「こどもだけのおみせやさんごっこ」を楽しみます。
かえっこシステムについては後日詳しくお知らせします。

◎もう遊ばないけど捨てるのはもったいない→提供できるおもちゃを選んでおいて下さい。

《2》お楽しみコーナー

☞先生によるお楽しみコーナーで遊びます。
ポイントをゲットできるコーナーもあります。

《3》マミーさん＆ＯＢによる模擬店＆ミニバザー

☞お母さん方の手作り品が大人気のバザーと、食品の模擬店が出店します。

登園日ではありませんので自由参加ですが、積極的にご参加下さい！
卒園生、お友達もＯＫ！あそびに来て下さいね！

〇開催時間は、午後12時～３時／原町幼稚園と保育園１階にて。雨天決行
お昼から開催します！ランチタイムを園でどうぞー！
かえっこ最終入場時刻は午後２時半→３時終了です。

〇参加対象者は、園児関係者、卒園生とその友達、未就園児の方。

〇保育園の土曜日保育は保育園２階で行います。バザールのお客さんは入れません。

◎模擬店お手伝いさん募集！ご協力よろしくお願いします！

マミーさんだけでは手が足りないため、
当日の模擬店の販売補助、準備などの
お手伝いをお願いしたいです！
※お手伝いの方にささやかなお礼、模擬店交換券１枚進呈！
（別紙お手伝いのお手紙をお読み下さい）

♪はらっこ模擬店予定

手作りミニバザー、らくがきせんべい
フランク、からあげ棒、チョコバナナ、カフェコーナー
チョコバナナ、ポップコーン、焼き菓子＆パン
おにぎり、ドリンクを出店予定！

『はらっこバザール2016』おてつだい募集のお手紙

2016.10.27..原町幼稚園

Ａ：大人のスタッフ募集

仕事は、模擬店コーナーの店員さんです。
マミーさん一緒に店番をお願いしたいと思います。
①前半12：00～13：30･･･　10～20名
②後半13：30～15：00･･･　10～20名
③午前中の準備９：00～　10～20名
ご協力よろしくお願い致します。（申込は下の連絡票で！）

Ｂ：小学生以上のスタッフ募集

幼稚園のときにお兄ちゃん、お姉ちゃんにお世話になったキミたち！
今度はキミたちの番です！在園児兄姉とそのお友達対象に募集します！（小中学生）
噂を聞きつけたお友達以外の卒園生もＯＫ！（口コミで広げて下さい！）
仕事は、かえっこバザールのスタッフです。下のお仕事紹介を見て下さい。

①バンクマン・・・お客さんとコミュニケーションしながらオモチャを査定してカードにスタンプを押す仕事。
②シールマン・・・バンクで査定されたオモチャにポイントのシールテープを貼る仕事。
③ハコビマン・・・バンクに集まったオモチャをショップに運ぶ仕事。
④ショップマン・・お店の売り子さん。お店に来た小さいお友達のお世話もします。
⑤レジマン・・・・お客さんが選んだオモチャを計算してポイントをチェックします。
⑥あるかもしれない仕事？・お店を守るかえっこポリスや、大人の人の入場制限をするかえっこガードマンなど。
⑦マミーさん模擬店のおてつだいもお願いします！

仕事時間は約60分です。（①12～１時、②１～２時、③２～３時）
かえっこの仕事の合間に模擬店のお手伝いも募集します。当日お子さんに希望を聞きますので伝えておいて下さるとありがたいです。
★小学生には11月19日の午前９時半から仕事説明会を行います、
**　説明会にも参加できて午後も仕事が出来る小学生！エントリーして下さい。**
エントリーしてくれた皆さんには後ほどお知らせします。
☆スタッフの仕事が終わったら、カエルポイントとささやかなお礼を進呈！

----------キリトリセン----------

★はらっこバザール2016連絡票（11／4までにお願いします）

提出者お名前＿＿＿＿＿＿組　園児名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

募集Ａ：大人　お手伝いされる方のお名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〔希望時間帯：　①前半　　②後半　　③午前中の準備　　④どの時間帯でもOK〕

募集Ｂ：小中生

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿（学年　　）〔希望時間帯：　①12−1時　②1−2時　③2−3時〕

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿（学年　　）〔希望時間帯：　①12−1時　②1−2時　③2−3時〕

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿（学年　　）〔希望時間帯：　①12−1時　②1−2時　③2−3時〕

《告知プリント／主旨説明文》

「おもちゃのかえっこ」とは？

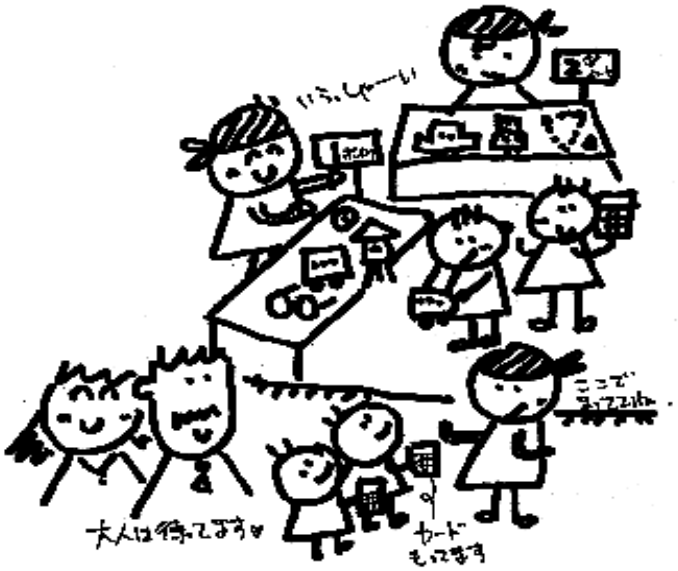
このお手紙は、はらっこバザールで行う「おもちゃのかえっこ」のやり方について、お知らせします。
これは、全国各地で開催されている、かえっこ（Kaekko）という仕組みを使って行います。

☆しくみは簡単です。

①お家から不要になったオモチャを持ってきて提供します。
②そのおもちゃを査定してもらって、カエルポイントに交換します。
③カエルポイントを使って、誰かが提供したオモチャの中から欲しい物を選んで買い物（ポイントと交換）します。

☆かえっこは、あくまでも子どものあそび！

バザーやフリーマーケットと同じに考えてしまう方がいますが、
それはちがいます！
まず利益を目的としていません。かえっこショップ運営のために
手間と費用をかけて準備し、オモチャの提供とみんなの協力で成り立つ
リアルな“お店屋さんごっこ”なのです。



バザーやフリーマーケットと同じに考えてしまう方がいますが、
それはちがいます！
まず利益を目的としていません。かえっこショップ運営のために
手間と費用をかけて準備し、オモチャの提供とみんなの協力で成り立つ
リアルな“お店屋さんごっこ”なのです。

☆どんな意味があるのでしょう？

街の駄菓子屋さんや昔ながらのお店が減って、スーパーやコンビニで買い物をする現代、子どもたちが、小銭を握りしめて自分の欲しい物をさがし、お店の人とやりとりしながら買い物をするチャンスはめっきり減りました。今回のイベントの中では、「本物のオモチャ」がお店に並ぶので、子どもたちにとっては、「遊びなんだけど、遊びを超えた本物の魅力!!!」にキラキラしながら、緊張したりワクワクしたりするお買い物の経験になるでしょう。

☆そのほかに、次のような効果も期待しています！

●まず、自分のおもちゃを見直す！
かえっこをきっかけに、自宅のおもちゃをお子さんと見直してみて下さい。お部屋にはおもちゃが溢れていませんか？
お子さんと相談しながら「もう、これは卒業しようね」「これはもういらないや」という整理をしたり、「自分の本当に大切なおもちゃはどれか」など、選び取り、ただ捨てるのではなく「必要な誰かに使ってもらおう」という気持ちで、リサイクル、リユースの意識を育てていきます。

●次に、かえっこショップで楽しみながら、
他の人には必要無くなったけど、自分は欲しいおもちゃを探します。
何回も言いますが、自分で！というところがポイントです。何を選ぼうが自分で決めるのです。
手持ちのポイントを全部使って、山のようにおもちゃを持ち帰る子どももいました。これではリサイクルの意味が弱くなってしまいますので、ジックリ自分の気持ちと向き合ってもらうために１回３個までと限定しました。

☆かえっこを楽しむためのルール【重要】

お店の運営は、お手伝いの子ども（小学生）を中心に運営されます。
お店の中に、大人は入れません。
「あれを買いなさい！」「はやく選びなさい！」という口出しもなしにして下さい！

子どもが自分で選び、自分で決めて、自分で買い物をするためです。
時間がかかっても忍耐強くおまちください。。。
オモチャをお金に換算して考えては成り立たない遊びです。
・・・・ですので、コミュニケーションを大切にしながら和気あいあいとやっていきます。
最後にダメ押しでもう一つ、「こんな、しょうもないもん買ってきて～(｀ｏ´)」という
“ご感想”も無しです。自分で決めてきたことが否定されるって悲しいですから。
主旨をご理解の上、ご参加よろしくお願い致します。m(_ _)m

☆かえっこに参加する方は、
かえっこするオモチャを選んでまとめておいてください。

必ずお子さんと一緒に選んで合意を得てお持ち下さい。
＊もう、必要ないオモチャ。プラスチックのオモチャ、ぬいぐるみ、、キャラクターグッズ、
＊アクセサリー、本、ＣＤなどＯＫです！
＊細かいオモチャがたくさんの場合は、ビニール袋に入れるなどして予めだいたいの数を数えてきて下さい！（メモ貼り付けなどご配慮を！）
◎提供するオモチャが無い人は提供しなくても大丈夫です。ワークショップ・ゲームコーナーでポイントをゲットできます。
◎逆に、ポイントで利用できる模擬店もあります。

■持ち込んで頂くオモチャについて

リサイクルショップではありません、子どもたちの手に渡すものですから、
破損して使い物にならないものや汚れのひどいもの、
揃っていないゲームなどは避けて下さい。

《告知プリント３／仕組み説明文》

★だいたいの概要と主旨はおわかり頂けましたでしょうか？　⇩では、

☆かえっこの実際の流れについて説明します

お家の方は「自分で買い物をすること」をお子さんに説明してあげて下さい。

◎かえっこショップの入場制限

ショップは３回に分けて開きます。入れ替え時に15分間閉まります。

①かいめ・12じ～１じ（園児のみ）

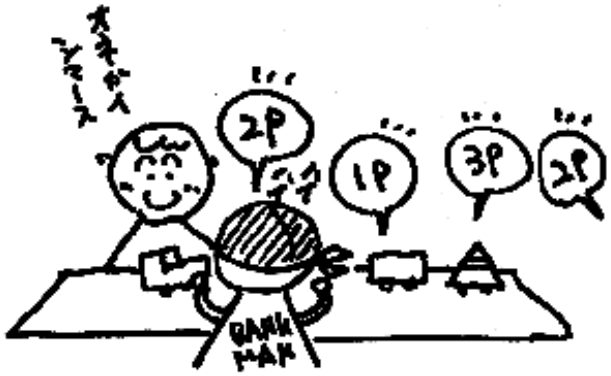
②かいめ・１じ15ふん～２じ（小学生も参加OK！）

③かいめ・２じ15ふん～３じ（　　〃　　）

☆原町幼稚園・原町保育園の園児は①～③入れます。
☆小学生は、②かいめから入れます。
☆未就園児は、自分で買い物が出来ないので入れません。
☆子どものお店なので、中学生以上と大人は入れません。
☆年少組、うさぎ組には小学生のスタッフ、もしくは担当職員がついて一緒に買い物を手伝います。

１　会場に来たら、まず列に並んで下さい

会場は、保育園の向かって右側の部屋です。
おもちゃを買う人も、おもちゃを提供する人も同じ列に並びます。
ショップの入口で大人の方は、お子さんと分かれてテラスや園庭でお待ち頂くことになります。



２　おもちゃを売りたい人は？「かえっこバンク」に行く

オモチャを提供して「かえっこカードに」カエルポイントのスタンプを押してもらいます。これが通貨代わりになります。
本物の通貨を使う訳ではありませんが、お子さんに説明する時には、お店やごっこですから「売る」と言ったほうが理解がしやすいと思います。

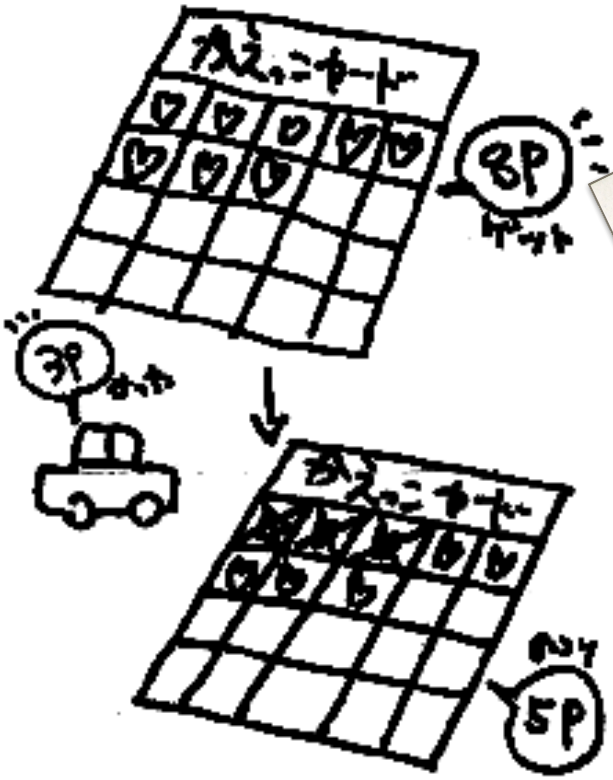
どんなオモチャも１～３ポイントに査定されます。査定するのは「バンクマン」の子ども！
基本的にバンクマンの独断で決めていきます。（今年はオークションは行いません）
★そこそこのもの＝１カエルポイント　→［赤シールをつけてお店に並ぶ］
★まあまあのもの＝２カエルポイント　→［黄シールをつけてお店に並ぶ］
★なかなかのもの＝３カエルポイント　→［青シールをつけてお店に並ぶ］
※細かいものが沢山持ち込まれたときは、バンクマンとの交渉で
　まとめて10ポイントなど臨機応変に対応します。ま、言ってみれば子ども任せ！

３　おもちゃは「カエルポイント」で買います

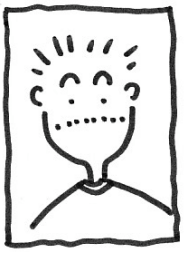
「カエルポイント」は会場にある「かえっこカード」にスタンプされます
昨年のカードを持っている人は、そのカードを持って「かえっこショップ」へ。
自分の持っている「カエルポイント」の分だけオモチャを買うことができますが、<u>１回の入場で３個だけに限定します。</u>
気に入ったオモチャをしっかり探すこと、無駄なものを更に無駄に買っていかないこと。店内の回転率を上げること、の３つの理由があります。
これだ！というオモチャを（３個）見つけたら「レジ」に持っていき、「カエルポイント」を消してもらえば買い物が終わります。
<u>※再度買い物をしたい人はもう一度最後尾から並んで下さい。</u>
大人の方は、お子さんが買ってきたオモチャについて「いいの選んだね！」と言ってあげて下さいね
子どもが自分で選んだということを尊重しましょう！
前半が混雑しますが、後半は比較的すいています。
ゆっくりおいでになるのも良いかと思います。

４　提供するオモチャ、ポイントがないときは？

売るオモチャが無かったり、ポイントが足りなくなったら、
幼稚園の２階でやっているワークショップに参加して
カエルポイントをゲットすることができます。
※ポイントは今回使いきってしまわなくても、
　かえっこバザールを開催している全国の会場でも使えます。



さあ!かえっこを楽しみましょう！



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
HP：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ
第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く
第24号　お話あそび会（その１・発表会の意味）
第25号　お話あそび会（その２・取り組み実践）
第26号　お話あそび会（その３・保護者へ伝える）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さいきんのかえっこ。

最近の傾向としてガラクタおもちゃが増えたような気がします。
Ｍ社のハンバーガーを買うとオマケで付いてくるガラクタも相変わらず多い。
おそらく小学生以上がデジタルゲームをする機会が増えて、そちらにお金が投入されているので、形のあるイイおもちゃが少なくなっているのか･･･
始めた当初は、「こんなイイもん出していいの！？」というものが結構あって、その頃やっていたオークションも力が入ったものだ。もちろん、最近のじゃんけんオークションでも、子どもたちは相当の入れ込みようで、負けて思いっきり落胆したり、泣き出す小学生も必ずいる。
幼児のさいきんの遊びの一つに、お気に入りのプラレールやおもちゃの動画をスマホで見て楽しむ、という遊びがあるが、これは遊びと言えるのか？　「遊び込む」というより、視聴していることが遊びになっていることも多いのではないかと危惧してしまう。だって、動画見ているうちにあそぶ時間がなくなっちゃうでしょ「晩ご飯よー！片付けなさーい！」って感じ。どんなイイおもちゃであそんでいるかって、それはその子の生活の文化だと思うのだが、さいきんイイおもちゃが減っているのが気になる。

福祉系対人援助職養成の現場から㉗

西川　友理

伝わらない！！

「もーっ！なんであなたはいつも提出物忘れるのっ！」
「うーんなんか、忘れるんですよねー。すみません…気を付けます、今度こそ。」…と答えている学生が次から忘れ物をしなくなる、などという事はほとんどありません。教員側も、
「今度こそ、絶対よ！」
などと言いながら、「またどうせ忘れてくるんだろうなぁ…」と頭の中ではため息をつきます。
　学生に教員の思いは、なかなか伝わりません。

「そういうの、あるある！私もさぁ…」と、保育士の友達。担当しているクラスで、一人のお母さんが、子どものズボンの裾上げをしてくれないらしいのです。
「お兄ちゃんのおさがりやしねぇ。子どもなんてすぐ大きくなるし、裾を引き摺っているくらいでちょうどいいのよ」
とお母さんはおおらかに笑っていらっしゃるとのこと。

「裾を引き摺って、もしもこけてしまったらケガをしますよ。ただでさえ、まだ歩行もままならない小さいお子さんなのに…」
「だって私も忙しいもん。めくっておけばいいでしょ。」
「いや、それだけやったら、やっぱり解けてしまいますし…。」
「んー…わかりました！やっときます、やっときます！」
と、最後には答えられましたが、「あのテキトウな返事は、きっとやってこないだろうなぁ…」と思ったとのこと。案の定、それから先もズボンの裾上げはされていないらしいのです。

お母さんに保育士の思いは、なかなか伝わりません。

伝わった！！と思う時

相手に伝わらない、伝わりきらない。こちらは言っているのに、聞いてもらえない。

では逆に、相手に「伝わった」というのはどんな時なのでしょうか。

ラブソングなどの歌詞に「思いが伝わる」というフレーズはよく聞かれますが、この「伝わる」は意中の相手が、自分の事を好いてくれる、あわよくば両想いになる、さらには付きあう事になる…という状況を指すことが多いように思います。こちらの思いを伝えても、相手が自分の事を好きになってくれない、あるいは相手には自分とは別の好きな人がいる、という状況は「思いが伝わらない」と表現することが多いように思います。

つまり、こちらの思いを表現して、それが相手の耳に届いているだけでは伝わったとは考えません。

こちらからの行動に対する、相手からの反応が、自分の意に沿わないものだと判断した場合にも、伝わったとは表現されません。

逆に相手からの反応が、こちらの思い通り、あるいはこちらの想定以上に良い行いであると判断した時に、「伝わった」と認識することが多いと思うのです。

上記の例で言えば、学生が提出物を忘れなくなった時であり、お母さんが子どものズボンの裾上げをしてくれた時、またはそれに類似する何かがあった時です。

では、「伝わらない」というううろたえ、苦しみについては、どうすればいいのでしょうか。

「伝わらない」をすこしでも「伝わった」にするため、まずは

・相手に言う
・相手からの反応がある
・その反応を判断する

この３つを分けて考えてみたいと思います。

思いは相手に影響を与える

「相手に言う」事については、この連載の第 20 回目に、書いた「I メッセージ」などが役立つように思います。第 20 回から、以下に引用します。

「『私は嫌な気持ちだわ』『私はその方法はヘンだと思う』というように、私を主語にして自分の思いを表現する発

言を“Ｉメッセージ”と言います。“Ｉメッセージ”は相手の思いや行動を勝手に決めつける表現ではありません。ただ自分の思いを表現しただけにすぎないのです。それに対して、相手がどう考え、どう感じるか。それは相手の自由だから、そこまではこちらが決められることではありません。」

その後、話が始まるか、相手が怒りだすか、きちんと話をするようになるか、無視されるか、どんな方向に話が進んでいくのかはわかりません。しかし、確実に相手に何らかの影響は与えます。

教育の場面で考えると、生活環境を整えることが、大人から子どもへの、一つの自分の思いの提示になります。子どもがあらゆる情報や知識、出来事、考え方、人、モノ、経験に触れられる環境を整え、主体的に変化するチャンスに出会えるようにします。

そこで子どもが何に気付き、何を発見し、何を得るか、あるいは何も気付かないか、といったことはわかりません。しかし、生活環境は確実にその子どもに何らかの影響を与えます。

相手に影響が与えられると、何の反応もないという場合も含めて、なんらかの「相手からの反応」があるのです。

その反応に何らかの価値を見出し、思い通りになったかどうかを精査して、伝わったとか、伝わっていないとか「相手からの反応を判断」しているのです。

やさしい授業

ある若者たちに対して、人権の講義をしたことがあります。

人として大切だとされており、大人になる前に考えて身につけておいてほしい、人権についての講座。

人権については、今の社会情勢にマッチしやすい考え方はあったとしても、「答えは唯一これしかない」という正しさはないと考えています。だから、「こう考えるべきである」「こうすることが人として恥ずかしくない道である」という話をするのではあまりに説得力がなく、そもそもそういう答えを提示することは私には出来ません。

ですから、何より皆それぞれの考えや思いがあり、それらを発言したり、文章に書いて可視化したりすることを重視しました。講座のテーマに沿って、私の知っている知識や情報を提示することはしますが、なるべく「起こっている事実」「存在する制度」の説明になるように努めました。

それぞれの価値観を見つめ、また他者と擦り合わせることが勉強になると思い、それらが出来る様なワークを考えて実施しました。

講義後、数名の若者が、
「やさしい講義、ありがとうございました！」
と言いに来てくださいました。

講義に「やさしい」という形容詞をつけるのは珍しいと思いました。優しい？易しい？やさしいとは？
「こちらこそ、ありがとうございました！…ところで、やさしい、ってどういうことですか？」
すると口々に答える若者達。

「うーん…心の講座とか、人権教育って『命は大事です』『相手を大切にしよう』なんていうスローガンみたいなのが多いでしょ。そういう感じじゃなかった、ってこと。」
「何ていうか、聴かれている感じがした。」
「うん、そうそう。自分の中から気持ちが自然に湧いてきた感じ。」
それを聞いた私は、さらに聞きました。
「そうか、自分の中から言葉が出てくる授業や、聴かれていると感じる授業は、やさしい授業やと思うんですね。」
「うん。何か、そんな感じです。ほんまに大事な事やと思えました。」
若者たちの発言は、私にとって、大変勉強になりました。

まず聴くことから、伝える事が始まる。

誰かにプレゼントを渡す時、自分の思いを届けるために、相手の思いやタイミングを考え、時には雰囲気づくりにまで尽力します。これと同じように、こちらから誰かに何かを伝える時には、まず相手の様子を見たり、話を聴いたりして、手がかりを得てからでないと、伝える言葉も手法も解りません。それらが解らない状態で何かを伝えようという事自体が、大変難しいと思います。まずは相手の状況を知り、相手が何を理解、納得し、習得しているのかを把握する事から始めます。これに応じて伝える内容や方法を工夫する必要があると思います。
聴く時には、眼と耳と心で聴きます。「次にこう言ってやろう」といった事を考えず、ただ相手の発する言語メッセージ・非言語メッセージを受け止めることに尽力します。
冒頭に挙げた２つの例のように、相手に行動を変えてほしい、と思う時などは、そもそも相手が変わりたいと思っているかどうかを確認する必要もあります。変わりたくないと思っている人に対しては、何をしても変わりにくいと思います。変わった結果、どんなことが起こるのか知らない人、わからない人には、変わったらどうなるかという情報提供が必要です。

保育の仕事

ある保育園に就職する予定の学生が、卒業直前に言いました。
「保育士にとって、子どもの主体性って何やろうってほんまに思うんです。」
「どういうこと？」
「教科書にも、保育所保育指針にも、“子どもの主体性が大切”って書かれているじゃないですか。でも、月々の保育指導案を作って、それに基づいて各週の指導案を作って、さらにそれに基づいて日々の指導案を作る。私達の意図に沿った計画にどうやったら子どもがノッてくれるのか考える。そのどこに主体性があるのかなぁって。」
「うーん、そうかぁ…。」
「子どもの自発的な思いや主体性を大事にしたいんですよ。でも思うようにいかないっていう事態になると、やっぱりうろたえて、どうしよう！って思ってしまいます。」

変化を引き起こす仕事

保育や教育の仕事は、学生や生徒…暫定的に子どもとします…に、今正しいとされている知識や、望ましいと考えられている行動、何が正しい倫理観とされているか、などを伝えます。その後、子どもがテストで点数が取れたり、望ましいとされる行動をとったりすると「伝わった」とみなします。つまり、こちらから伝えた思い・考えに対して、子どもの考え方・行動が肯定的な変化をした時、目的が達成されたことになります。

今の社会の中では「センセイ」と言われる仕事に「教える主体・子どもに変化を起こさせる主体」という役割が明確に求められているためでもあるかと思います。「よいセンセイが担任になれば、子どもをなんとかしてくれる」という考え方。子どもに「センセイの言うことを良く聞きなさい」等と伝える保護者。子どものはやし言葉にも、「いーけないんだいけないんだ、センセイに言ってやろう」というものがあります。

センセイは子どもを教え導き、良い方向に変化させる人。センセイ方はその期待に応じなければならないと奮闘します。

しかし、周囲の大人の影響で、結果的に子どもが変化を起こすことになるとしても、「変化する」主体はあくまで子どもです。何らかの外圧に対し、どのような変化を選ぶのかという所に、子どもの主体性があります。

保育士や教員には、「自らの言動により、子ども達により良い影響を与える主体である」という認識があるから、「子どもが変わってくれない」＝「言う事を聞かせることができない」という苦しみやうろたえが生まれます。これでは、子どもの変化の主体はあくまで子どもにあり、保育士や教員等の大人はそれをサポートする側、客体であるという認識を持ちにくくなってしまうのではないでしょうか。

けれども、多くのセンセイは、他人は自分の思い通りに動くものではないということを、頭ではよくわかっているのです。しかも相手を思い通りに動かす等ということは、子どもの主体性や自発性を無視した行為になりかねないという事も、理解しているのです。だから、「日々の指導のどこに子どもの主体性があるのか」と苦悩する学生が出て来るのです。

教員同士で話合い、保護者とも意見交換をし、共に子どもを育てていくにはどうすれば良いのかを考える。そして何よりも子ども自身の話をよく聴き、姿をよく見る。基本的な事ですが、そこから始めていく事が大切だと思います。

子ども自身が
こうありたいと思う姿を大切にする

どんな人生にしろ、5 歳なら 5 年、10 歳なら 10 年、15 歳なら 15 年、20 歳なら 20 年、それぞれの環境とのやり取りの中で得てきた「経験」があります。その中で、それぞれが自分なりに周囲の人

達との関係性の中で生き抜いてきた知識と価値と判断基準があります。それらひとり一人の考えを自分で確認できるような機会を作り、可能であれば周囲の人とその考えを開示しあう。その周囲の人の一人として、保育士や教員も考えを提示する。後はその子ども自身が、何かの「身の回りの状況と折り合う方法」を見出して、変容していくように感じます。

一定の社会性という限度はありますが、相手の変化を引き起こそうという時にも、それぞれ人の、それぞれの価値に基づいた「望ましい私・ありたい私」を尊重したいと考えています。

それでもまだ、「これが社会のルールだと伝えても、相手が理解し、変わってくれない」と思う時は、自分は相手の言葉を本当に聴いているのか、そして、自分が考えている「社会のルール」が本当に社会のルールなのか、ちょっと立ち止まって考える必要があるかもしれません。

思い通りにいかない時は

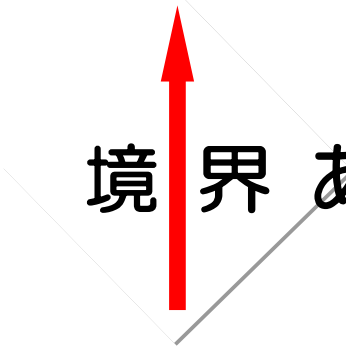
子どもの主体性に悩んでいた学生は今、無事に保育の仕事を続けています。最近話をする機会がありました、卒業前にこんな事で悩んでいたね、というと、キョトンとしています。

「そんなこと言ってましたっけ…？」

「うん、思い通りになってくれないと思ってしまう、って悩んでいたよ」

「思い通りにいかない事なんてもう、日常茶飯事ですよ…！でも最近は、思い通りに行かない時には、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、任せてしまいます。子どもが夢中になって、自分のやりたいことをしている時って、本当に生き生きしてて、凄いんですよ！」

そこには、子どもをよく見て、よく聴いて、子ども自身の「こうありたい」を大事にして仕事をしている、元気な保育士さんの姿がありました。



境界あれこれ

2

～親の呼び名が変わる境界は？～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

親の呼び名は色々である。「お父さん、お母さん」「とーちゃん、かーちゃん」「おっとー、おっかあ」「とと、かか」「父上、母上」「お父様、お母様」「おとうちゃま、おかあちゃま」「おとん、おかん」「おやじ、おふくろ」などは日本語での一般的（？）な呼び名である。おそらく、日本語ほど親の呼び名の種類が多いところはないのではないかと思う。そこに外国語も入ると「パパ、ママ」「ダディ、マミー」「ダド、マム」「ファーザー、マザー」「ファーター、ムッター」など多種多彩である。

ベネッセの高校生以下の調査では以下の通り。

・お袋（おやじ）……0.2%
・ママ（パパ）……39.8%
・お母さん・お母ちゃん（お父さん・お父ちゃん）……52.2%
・名前+さん・ちゃん……1.5%
・あだ名……1.9%
・その他……4.4%

一体こうした呼び名の変化はどの様になっているだろうと、ふと思った。そこで、ちょっと考えてみたい。

呼び名の変化

ドラマなどで、上流階級（？）と目される家族が出てくると、大人になっている子どもたちが、「お父様、お母様」などと呼んでいるのを聞く。これは別におかしなことではない。

自分の親に対し「父上、母上」と呼ぶのは今時、時代劇でもなければ出てくることはない。しかし今も、お手紙などで、「お父上はお元気でいらっしゃいますか？」などと書く。文章語としては今も使われている。

筆者が幼少の頃は「お父様、お母様」と呼ばされるところが、省略形というか「おとーま、おかーま」と呼んでいた。その後中学生くらいから、「お父さん、お母さん」になり、その省略形の「とーさん、かーさん」も含め、ずっとそのまま父母が祖父母になるまで続いたと思う。

我が家では、最初は「パパ、ママ」だったものが、中学校くらいから、「ねえ」「ちょっと」となり、その後名前やあだ名（筆者は午年故、ウマ）で呼ばれるようになった。

相談で出会う子どもたちを見ていると、小学生は基本「パパ、ママ」で、中学校２年くらいの丁度反抗期に呼び名が変わるように感じる。直接的には呼ばず、我が家の子どもたちのように「ねえ、ちょっと」とか「おい」とか言っている。

アメリカの友人たちに聞くと、段々名前で呼ぶようになる家が多いという。日本でも名前で呼ぶ家がある。

家によって全く異なるが、なぜ途中から呼び名を変えたり、名前で呼ぶようになるのだろうか？

それは思春期が進んで、親に対し対等または親を乗り越えようとする気持ち、自分はもう赤ちゃんではないという主張なのではないか。思春期になると、親に対する反発やイライラ感から、親に対し酷い態度をとったりする。その中の一つの表現として、親の呼び名も変っていく。「ねえ」とか「ちょっと」とか、むしろ呼び名さえ使わなくなるのも、そうした態度の表れだろう。

もっと大人になってからであれば、対等な立場として名前に「さん」を付けて呼んでいる人にも出会う。子どもも自立した大人となっていれば、親に対し「さん」付けで呼ぶのは自然だろう。

親の呼び名は地域によっても異なるとは思うが、子どもが親をどう呼ぶかは、やはり親同士の対応によっても違う。つまり、母親が父親のことをどう呼ぶかが大きく影響する。

母親が父親のことを「パパ」と呼び、何かにつけて「パパのところに行ってごらん」「パパ帰ってきた」などと、「パパ」という言葉を聞くチャンスが多ければ、子どもは最初に「パパ」を覚えて、母親は「面倒見ているのはママなのに、なんで『ママ』が出ないの？」とショックを受ける。しかし、パパが「ママ」と呼ぶ回数より、ママが「パパ」と呼ぶ回数が圧倒的に多ければ子どもは最初に「パパ」を覚えるのは当たり前だろう。そう説明することで母親は納得である。こうやって「パパ・ママ」を覚え、子どもが成長し、中学生になっても母親が父親のことを「パパに聞いてごらん」というように「パパ」と呼んでいれば、子どもは自然に「パパ」を使うだろう。子どもが大人になっても使っていればそのままかもしれない。

しかし、ある程度子どもが大きくなったところで、「お父さん・お母さん」に変えれば、子どももの呼び名も変るだろう。

まあ、家の中でどう呼んでいようと個人の勝手であり、余計なお世話ともいえる。

ただ、人前で自分の親をどう呼ぶかは家の中の事情とは異なるのではないか。大人になってもテレビなどでタレントが「うちのママは・・・。」などと言っていると、違和感がある。結婚式に親への手紙を読むこともあるが、そういう手紙でも「パパ、ママ」で始まると、大人としてどうなのかと思う。

高校生以下の子どもたちの調査（ベネッセ、２００９年）では、家の中と外で親の呼び名を変えているのは、約１６％だそうだ。中・高校受験の面接練習で「パパは～」などと言えば、注意を受け「父は～」というように指導されるだろう。つまり人前では自分の親を「父・母」と呼ぶことが、暗黙の了解となる年齢は小学校高学年以降ということになるのではないか。そして、それをわきまえるということは家の内と外の境界を意識できるようになるということでもあるだろう。

アメリカの友人たちも、「お父さん、お母さん」

というような感じで「Father・Mother」を使うことがあるが、人前ではやはり「my　father/ my mother」と呼ぶのが普通である。諸外国でも、基本的には家で呼ぶ名と第三者に対していう場合は異なる。

スペインでは父親はパパー・パピ、母親はママ・マミと呼ぶ。第三者に対しては、「父・母」はパドレ・マドレになる。フランスでは父親はパパ（P 母親はママン。第三者に対しては「父」はペール、「母」はメール。イタリアでは父親はパーパ、母親はマンマ。第三者に対する「父」はパドレ、「母」はマドレ。ロシア語では父親はパーパ、母親はマーマ。パパーシュカ、パパーシャ、ママーチカ、ママーシャと呼ぶこともある。第三者に対する「父」はアチェーツ、「母」はマーチ。中国語では、父親はパパ母親はママだが、かつては父親がディエー、母親がニャーンだったので日本と同様時代ともに変化しているようだ。そして第三者に対しては父はフーチン、母はムーチンだそうだ。韓国語では父親はアッパ、母親はオンマ。第三者に対しては「父」はアポジ、「母」はオモニ。親元を離れたら、この呼び名になるそうだ。

このように全世界でも、第三者に対して自分の親の呼び名は、通常の呼び名とは異なる。ということは、日本でもきちんとそのようにすべきだろう。韓国のように生家から離れたらというような境界がはっきりしていると助かるが。

親同士が名前で呼び合っていて、子どもが名前で親を読んでいる例にも出会ったし、親同士があだ名で呼んでいて、子どももそれに準じている例もあった。親の呼び名次第で、子どもの呼び名が変わるのであれば、親は呼び名に気をつけねばならないし、親自身も人前で自身の親のことを話すときに、「父・母」と呼ぶような、見本をきちんと示すことも小さいことかもしれないが大事なのではと思う。

同時に、子どもの呼び名も、大きくなっても「〇〇ちゃん」と呼んでいるのもどうかと思うし、子どもに対し「バカ〇〇」などと呼ぶようでは問題である。親にとっても子にとっても、お互いに尊重しあえれば、自然に呼び名も変ってくるだろう。少なくとも思春期を境に、呼び名を変えること、人前での呼び名も同時に変えていくことが必要であろう。日本語の文化としてこのように継承していくことも、また大事なのではと思う。

対人援助学マガジン第 27 号
生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング⑫

～ドナー面接へのプロローグ～

荒木晃子

「卵子を提供したい」クライエント

ここは、西日本のとあるカウンセリングルーム。今日は、先日メールで予約が入ったご夫婦の面接日である。面接は、心理カウンセラーである「私」が担当する。

カウンセリングに、一定の「枠」と「場」が必要なのは言うまでもない。「時間」と「空間」を基本に、予約日時や面接場所以外にも、面接前に直接カウンセラーから伝える約束事項など、その枠は施設ごと、また、カウンセラーごとの規定を設けることが多い。私の場合、メール予約の際、初めて来室される方には常に相談の主旨を短い文章で送っていただくようお願いしている。

今日のご夫婦の主旨は、「妻は卵子ドナーになりことを望んでいるが、夫としてはまだ納得できていない。カウンセリングで、卵子提供に関するさまざまな疑問や、治療内容、（妻の卵子で）生まれた子どもに関する法的ルール、卵子を必要とするご夫婦のことなどを事前に知り、参考にしたい。」という内容であった。

いつもは面接ごとにキーワードを使い、（自分自身に）必要な面接概要を記すことを心がけているのだが、今回ばかりは、予約の段階からその詳細をできる限り記録することとした。理由は、次の通りである。

・今回の相談は、家族形成の経路に、日本では認められていない「卵子提供」という生殖補助医療技術の介入があること。
・また、形成される家族は、来談者である Do 夫婦とは異なる、卵子を必要とする Re 夫婦による家族形成であり、Do 妻は Re 夫婦の家族形成ために自身の卵子を提供したいと考えていること。
・Do 夫は妻の望みに納得できていないこと。
・Do 夫婦は、Re 夫婦のことや、Re 夫婦間に

生まれた児に関する法的なルールを知りたいと考えていること。
・「血縁による」家族概念で考えると、Do 妻と血縁関係にある児を Re 妻が出産することとなる。本面接では、既存のあらゆる家族概念を払拭した面接を試みる必要があること。
・Do 夫妻が卵子提供するか否かをカウンセリングで判断する可能性があること。

これだけの重責を担うカウンセリングになるかもしれないと考えると、正直、いまから身が引き締まる思いがする。

カウンセラーの覚悟と自覚

面接の事前準備として、以上の項目を列記したとき、この面接は、自身が自己分析しつつ進めなければならないことに気付く。面談を振り返り、面接者の自己分析を深めることが、今回の来談者夫婦（＝クライエント）にとって有益となると思い至った。この相談は、一般の不妊カウンセリングや家族カウンセリングとは一線を画している。今回ばかりは、カウンセラーとしての覚悟と自覚が必要だ。それ以上に、「私」というひとりの人間の家族観というか、人間性そのものが問われると感じる。相談の主旨は、血縁、法律、居住形態など、以前から多様な家族のあり方を肯定する立場にある自分に、まるで新たな課題を突き付けるかのように思えてならない。その課題は、クライエントのみならずカウンセラーである自分に課せられた課題でもある。それを、来談者夫婦と共に抱える覚悟が必要だ。さらに、日本の生殖医療の法整備が進まない現状下で、生殖医療技術が先行する家族形成の是非と、今後の家族のあり方そのものを問う重要なテーマでもある。そのことをしっかり肝に銘じ、面接に臨む必要があった。いま一度、予約主旨を読み返し、事前にカウンセラーとして必要な準備はないかと、自分自身に問いかけてみた。

まずは、場所と時間だ。場所はプライバシーが守られるカウンセリングルームなので問題ない。時間については、通常、個人には 60 分、カップル（家族）には 90 分の面接時間を設定しているが、今回は特別に制限時間を超えてもいたし方なしと考え、その後の予約は入れないことにした。来談者 Do 夫婦の相談主旨が、きわめてまれであるため、相談内容の理解のためにも（カウンセラーにとって）時間が必要と判断したゆえである。カウンセラーの都合で面接時間が延長した場合、カウンセラーに必要な時間を来談者に負担させるわけにはいかない。これで時間の枠の確保も済んだ。

現時点での課題としては、実際に生殖医療施設で実施する卵子提供に係る、医療技術、法律、生まれた児の親子関係、Do 夫婦と Re 家族の今後の関係など、多岐に渡る。話を聞く前から、Do 夫婦の相談そのものに、一体どれだけの課題があるのかは計り知れない。しかし、重要な家族のテーマであることに違いはない。これまで長年に渡り、生殖医療施設で心理士を務める面接者は、生殖医療技術に関する知識は持ち合わせている。今回、相談の中心となる「卵子提供」についても、その詳細をリスクと共に説明することも可能である。

よくよく考えると、来談者の Do 夫婦は「卵子提供という医療行為」自体を問題にしていないことが想定される。おそらく「自分の卵子」を「他者に提供する」という「行為」そのも

のに、ためらいや、夫婦間の意思の齟齬があるのだろう。未だ日本では、「他者に自分の卵子を提供する行為」は法的に認められていない。つまりは、「提供卵子で生まれた児の親子関係」も法律で定められてはいない、とも解釈できる。「分娩者を母とする」といった既存の親子法で解釈すれば、提供を受けて出産した Re 夫婦が児の親となる。しかし、現在の民法は、「他者の卵子で自分が産んだ児」という前提では制定されていない。このことを、法律が現状にそぐわないと考えればよいのか、それとも、法律を無視して生殖医療技術が新たな家族形成を促進していることが問題と捉えればよいのか、その答えはどこにもない。カウンセラーは時に、こういった重要な課題を提示しなければならないことがある。そして、それを共に抱え、来談者が自ら選択し決断することを支援する。決して、オーバーリードにならぬよう、カウンセラーの主観を押し付けるような、そして、社会の慣習や一般常識といった通俗的な言語に惑わされぬよう留意しつつ言葉を選ぶことに気を付けなければ。まるで自分自身に言い聞かせるように、そう呟いている自分がいた。

人の行為には、結果が伴う。至極当然のことではあるが、特に今回の面接においては、決して忘れてはならない重要なポイントのひとつである。自分の卵子を他者に提供するという「行為」には、そこに新たな生命が誕生するという「結果」が伴う。面接では、仮説として、この結果を念頭に置いた会話をしなければならない。出産し、実子として出生届を提出するのは Re 夫婦である。しかし、自分の卵子で生まれた児に対し、Do 妻はどのような感情、感覚、関係性を持つ/待ちたいと考えるのか。また、Do 夫はどうか。また、Do 夫婦間に子どもがいるとすれば、自分の子どもと、卵子提供で生まれた児との関係を、ふたりはどう捉えるのか。結果に伴い、想定される様々な課題や起こりうる問題を提示することもカウンセラーの大切な役割である。

確かに、今日の面接には課題が多い。考えれば考えるほど、迷いの渦中に吸い込まれてしまいそうになる。こんな時は、一旦思考を止めるのが効果的だ。約束の面接時間が迫ってきた。さて、まずは静かに、クライアントを迎えることにしよう。

（次号へ続く）

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 26 話

水野　ス ウ

原始林窯さん

11月にはいってもあいかわらず私の、けんぽうかふぇ・おはなし出前の旅は続き、参院選の後からはじめた「紅茶の時間」内、憲法と憲法草案を学ぶ毎週の「草かふぇ」も、回を重ねながら続いています。

けれどその話は今号はちょっとわきにおいて、かわりに、栃木は那須烏山で40年近く、普段使いのお茶碗やお皿など、焼きものづくりをされている原始林窯（げんしりんがま）さんこと、げんさん小稟（こりん）さんご夫婦のこと、書こうと思います（こんな時、連載のサブタイトル「紅茶の時間とその周辺」という文言の、なんと使い勝手のよいこと！）。

紅茶の時間で2年に一度ひらく、原始林窯展。2002年からスタートし、今年で8回目を数えます。毎週ただ何気なくあいている静かな「紅茶の時間」空間が、この2日間だけはすてきなアートギャラリーに変身するのです。

毎回、新旧の紅茶仲間が、げんさん小稟さんの器を見に、何より二人に逢いたくて、二人と話したくて、入れ替わり立ち替わり紅茶ギャラリーにやってきます。

原始林窯の、初個展

今から35、6年前のこと。げんさん小稟さん夫婦のはじめての個展が、金沢の喫茶店でひらかれました。当時、私はその近所に住んでいて、そのお店が行きつけの場所だったことから、たまたま二人の初個展に遭遇し、その時にうつわを一つ買ったことがご縁のはじまり。

その後、私に娘が生まれ、生後百日のお食い初めの食器を二人に頼んでつくってもらいました。それからも、げんさんがお墓まいりで金沢に帰って来た時、わが家にも寄ってくれたり、夫婦ぐるみのおつきあいが、自然なかたちでずっと続いていて。そしてある時、「ねえ、今度は紅茶の時間で個展をしませんか」、と私から提案をして、2年おきの原始林窯展が、2002年から紅茶ギャラリーではじまった、というわけです。

幸せな食器屋

日本の伝統的な文様を、小稟さんが職人技で手描きしたそばちょこは、紅茶の時間に一度でも来たことのある人なら誰もが知っている定番のお湯のみですし、我が家で毎日使っているご飯茶碗もお皿も、飽きのこない絵柄で、どれも使いやすく、洗いやすく、しかも割れにくい、暮らしの中のすぐれものです。

それに加えて原始林窯さんの最大の特徴は、こちらから出すどんなわがままな注文もいとわずに、世界に一つしかない、オリジナルのお皿やお茶碗をつくってくれること。

この大きさのこのお皿に、今は亡きうちの犬と猫を描いてほしいの、という注文（これは私です）や、ある人は、大きな手術の後、少しずつごはんの量がふえてきた夫に、それとわからないくらいほんの少し大きめのごはん茶碗をつくってもらいたい、と。または新築祝いに、家族全員の名前とそれぞれの好きな花を描いた揃いのお皿を、とか、孫が生まれたので、その子の名前入り小さなお茶碗を、とか、これと同じお皿でどこかに私だけのしるしを入れてつくってください、などなど。あ、今、こんな風に書いてみて、わがままなお願いはどれも、注文主の、その時々の暮らしや家族のかたちを反映しているってこと、気づきました。

そんな原始林窯さんなので、紅茶ギャラリーでも、世界に一つきりの、お茶碗やお湯呑みを少しずつ買い足していく人がふえました。

原始林窯さんは、自分たちの仕事を正式には、陶磁器製造業、と呼んでいます。まちがっても、陶芸作家、ではない。

同業の人からは、奇跡の食器屋、といわれているとか。陶芸教室も持たず、入賞をめざしての作品づくりもせず、他のバイトもせず、ただひたすらお客様のリクエストを細かくきき、もちろんそれに定番のうつわも制作しつつ、普段使いの食器づくりだけをなりわいに生活できている焼きものやさんって、この業界では本当に稀な存在なのだそうです。

でもそれはあくまでも周りの人が言っていること。二人はただ、うつわを手にした人のよろこぶ顔や、使う人のしあわせを願いながら、わがままな注文をできるかぎり叶えたいと、焼きものづくりに励んでいるだけ。そして、自分たちって本当になんてしあわせな仕事させてもらってる食器屋だろうね、と夫婦してよく言いあっているのだそうです。

小稟さん、山道でおじさんと出会う

原始林窯展@紅茶ギャラリーがオープンする日、とりわけ、みなが楽しみにしているのが、小稟さんのトークタイム。

小稟さんの、実に自然体な語りくちのおはなしは、どれも実際にあったことをただそのまま話しているだけなのだけど、どうしてこうもめっちゃおかしく、楽しく、不思議で、しあわせなきもちにさせてもらえるのだろう。思わずひきこまれて聴き入ってしまいます。昔ばなしをくり返しせがんでちっとも飽きない子どものように、紅茶ギャラリーでも、同じ一つの話なのに何度聴いてもその度おかしくて、その場にいるみんなで笑いあって、しあわせを共有するのです。

今年の小稟さんのおはなしは、遠野からはじまりました。

5年半前の東日本大震災のあと、岩手や福島をはじめ、東北——とりわけ津波の被害が大きかった三陸海岸沿い——を訪ねることの多くなったげんさんと小稟さん。今年5月には、げんさんが前々から行きたがっていた、遠野の六角牛神社へ行くことになりました。

その神社に通じる山道が細くて、どうも車で通れそうにありません。肺の丈夫でないげんさんには少々きつい山道、彼は車で行ける別の道を探すことにして、小稟さんは一人そのまま、ひっそりしたきもちのいい森の中の道を登っていきました。

すると道の先に、黒いヤッケをきた小柄なおじさんが、山菜採りでしょうか、腰をかがめている背中が見えてきたのです。

以前、畑仕事中の耳の遠いお年寄りに、近くで声をかけてびっくりさせてしまったことがあった小稟さん。また驚かせちゃいけない、と、こんにちわ〜、こんにちわ〜、と声をかけながら、おじさんに近づいていきました。

5、6メートルほどそばにきた頃でしょうか、やっとそのおじさん、こちらをふりむきました。……あれれ？　見ればその顔はまっ黒、耳が二つとも立っていて、鼻筋が長〜くて、何より全身真っ黒い毛だらけで……。あっ、おじさん、人間じゃなかった、おじさん、クマ、だったのね……。

目と目があって、だけど小稟さんには不思議と恐怖心も驚きもなくて、クマおじさんのほうもただ、きょとんって顔してて。

その瞬間、小稟さんはこう思ったそうです。自分もこの年まで生きものをいーっぱい食べてきたから、もしここでクマに食べられちゃったら、それも運命、それはそれで、まぁしょうがないか。

よく見ると、そのクマはどうも子どものよう。もしかすると近くにお母さんグマがいるかもしれず、そうなるとおおごとになってしまいそうで、それはあんまりよくないな。そこで、互いに、あれーっ？？って見つめあったまま、小稟さんは、しーっと言いながら、そっとそーっとあとずさりしてその子グマから離れていきました。

ええ〜！？　ちょっと待ってよ、どうして怖くなかったの？　どうして食べられてもしょうがない、なんて思えたの？　話を聴いていたみんなから、口々にそんな声があがりました。

まさか野生のクマに出会えるなんて予想もしてなかったけど、その時ちっとも怖さを感じなかった自分の反応に、小稟さん自身も、実は驚いていたそうです。

生まれかわり

小稟さんは、これまで何度もハチに刺されてきました。クマンバチにもスズメバチにもアシナガバチにも。このつぎ刺されたら命に関わるよ、とお医者さんに言われながらもまた刺されて、その度に腫れはするけど、それでも死なないで無事に生きている。

「きっと前世の自分はハチに悪さをするクマで、そのせいでこんなに攻撃されるのかも。そんなふうにこれまでずっと思っていて、そうしたらほんとにクマと出会えた。だからちっとも怖くなかったのかな、いや、それとも単に私がよっぽど鈍いってことかなぁ？」

いやいや、ふつう、なかなかそうは思わないんじゃない？　前世で自分はクマだったかも、だなんて！

ですよねぇ、うふふっ、と、小稟さんもおかしそうに笑います。

「でもきっとこんなふうに思うのは、小さい頃からおばあちゃんの口ぐせをよく聞いていたせい。前世のおまえは虫だったかもしれないし、石ころだったかもしれないよ。次はウシに生まれかわるかもしれないんだよ。そんなことをしょっちゅう言われていたから、ひとも動物も虫も、どっちがえらいかじゃなくて、みんな一緒のレベルで、何かは何かのうまれかわりで、いのちは巡っている。輪廻、っていう言葉はその時まだ知らなくても、なんとなくそれを自然なことって受けとめてたんだと思う」と、小稟さんは言うのです。

小稟さんが子どもだったころの家には、いろんな動物たちがいました。ウシもウマもヤギもヒツジもブタもお蚕さんもいて、全員が家族のような感覚で暮らしていました。ブタの赤ちゃんが生まれると、幼い小稟ちゃんはその赤ちゃんを抱いたまま、干し草の上で一緒に眠ることもありました。

ニワトリもたくさんいて、おばあちゃんが、こーこー、と呼ぶと、エサをくれる人だ、ってわかるからたちまち一斉に寄ってくる。お祭りの日など、その中から、もう卵をうまなくなった老いたニワトリをつぶすのも、おばあちゃんの仕事でした。

中の一羽を抱き上げ、その頭をなでながら、おばあちゃんがクイッと首をひねると、そのニワトリはケッといって、おばあちゃんの腕に抱かれたまま少しも苦しまずに、むしろうっとりしたような表情で息の根が止まる。

そういうことを幼い時から当たり前に見て、育ってきた小稟さん。家族のように暮らし、こんなにかわいがって育てたブタも、人間に殺されて、食べられる。自分はそういう生きもののいのちをこれまでいっぱいたべてきた、その確かな実感が、小稟さんのからだの中にはあるのでした。

東北に通うということ

そもそも、二人が東北によく行くようになったのは、2011年の大地震の後のこと。

あの震災で、げんさん小稟さんの自宅ギャラリーにあったやきものは、その9割がこなごなに砕けました。原始林窯の、窯そのものも壊れました。焼きものづくりをこれからも続けていけるかどうか、全く先の見えない日々に襲われたのです。

地震直後のしばらくは、水もない電気もない、だから原発が爆発したことも知らない。その中で必死に、小稟さんは屋根にのぼり、瓦をのせ、屋根を修理しました。瓦職人に頼んでいたらいつ来てもらえるか、見当もつかなかったからです。

しばらくの間、げんさんは、食べることも笑うこともできないほど落ち込んでいましたが、自力でどうにかこうにか窯を直し、これでまたやきものが作れるかもしれない、という再出発地点に立てたところからやっと、なんとか食べものを口にできるようになったそうです。

東北のことが気になりながらも、体を張ってのボランティアは、げんさんにはとうてい無理、ならばその地を度々訪ねることも、ささやかながら自分たちのできることだ、と思った二人。そうやって通いはじめた東北の旅が、不思議なことに、げんさんをどんどん元気にしていく。そしてまた、長く一緒に暮らしてきた小稟さんを、新鮮に発見していく、そんな旅でもあったそうです。

鹿踊り

今年の9月、げんさん小稟さんは再び、遠野の六角牛神社を訪ねました。神社の秋の例大祭に奉納される、鹿踊りを見るためです。

六つの角の牛、と書いて、ろっこうし。その角は、シカかウシか、またはイノシシか、クマ、でもあるらしい。その動物たちはまた、神でもあるらしい。

かつて、動物と人間は、闘って殺し殺される関係でした。殺したものたちに生かされているいのち。どちらかが殺されて、また別のものに生まれかわるなら、もしかしたらそのシカは、自分だったかもしれない。または自分が、ウシだったかもしれない。鹿踊りは、そういう循環がわかるお祭りだ、と小稟さんは言います。

金沢生まれのげんさんにとっては、いのちが循環するという考え方も、遠野の鹿踊りも、遠野物語の世界も、そして、震災以来よく旅するようになった東北そのものがまったくの異文化で、そこにとても惹かれて、わくわくするそうです。

一方、福島県の中通りがふるさとの小稟さんには、遠野の祭りも物語も、自分の生まれ育った世界と根っこがつながっている感じがして、いたって当たり前のことに思えるのでした。

東北の旅を重ねながら、げんさんは、小稟さんの中に、自分とは違う文化が脈々と流れていることをあらためて発見し、小稟さんは小稟さんで、これまで当たり前すぎて気づかなかった自分の文化のルーツを、げんさんのおかげではじめて認識することができるようになったというのです。

小稟、という名前

この日のトークの中で、小稟さんは自分の名前の由来についても語りました。本名ではなくて、結婚後に、げんさんのお母さんがつけてくれた名前であること。「稟」の字は、神様から分けていただくもの、という意味があって、それが「小」さいので、「小稟」とは、神様からほんのちょびっと分けていただいたもの、の意味だと小稟さんは思っていること。

生きていく中で、いいことも悪いこともみな、神様からの授かりもの、という受けとめをする小稟さん。動物も作物もひともみな対等で、何かの生まれかわりとして巡り巡っている、とずっと思ってきた小稟さん。

彼女のそんな生き方と、自分たちの身に起きた

さまざまなできごとを、そのまんまのみこんで、受け入れていくように思える東北の人たちの生きる哲学とは、やはりどこかで重なっているように、げんさんは感じるのです。そんな東北に通い続ける中で、げんさん自身がまた、不思議な元気をわけてもらえているのだと。

文様は祈り

小稟さんが細い筆で描く、日本の美しい文様の数々。麻の葉、青海波、七宝、砥草、唐草、矢羽根、格子、市松、亀甲、麦藁手……。どの文様にも、一つ一つ意味の違う、祈りがこめられているのだそうです。

今、これだけの細かな手仕事のできる職人さんって、この国では、きっともう、そう多くはないでしょう。

使う人のしあわせを願いながらいつも文様を描くの、そういう小稟さんの書いた「文様は祈り」という美しい文章で、今回のおはなしを締めくくりたいと思います。

（2016.11.19）

文様を描いている時、その間中、祈っている気がします。古くからある古典文を描いている時、淡々としたリズムの中にすっかり心が静まり、手だけが勝手に動いているかのような一瞬があります。その時、無限の世界（宇宙のような）と繋がっているような不思議な感覚になる時間です。

以前、作品展に来てくださった老師様が、描いた鉢の文様をご覧になって、「まるで写経のようだ」とおっしゃったのです。その時、やはり文様は祈りだと、確信しました。

——小稟

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

六　七　日

1. あの人はどこに

七日参りも六回目あたりになると、「ウチのおじいちゃんは、今、どこにいるのでしょう？」と尋ねられたりします。はっきりと質問の言葉にならずとも、「自分の大切な人は、今、どうなったのだろう」という思いを感じることも多いです。それは即得成仏といって、大切な人はすぐに仏様に成ったというのだから、仏様に成ったのだろうと思うが、得心がいかないようです。この一ヶ月以上も仏壇に向かって手を合わせてきたが、仏壇の奥には阿弥陀様の姿だけです。私の大切な人はどこでどんな姿の仏様に成ったのだろうかという問いかけです。

今、仏教は死者と生者の関係を語らねばならない時代にいる、という文章を読んだことがあります。死者の在りように対して、土俗的あるいは民俗学的な説明では通用しない時代に入ったと言います。私は、お参りをしていて、そのような状況を

実感しています。仏壇の前で手を合わせている人たちは、自分の大切な人がどのような仏様に成ったのか、という説明を求めています。

2. 仏身論

私は、仏の在り方を仏身論という概念で説明ができるのではないかと思います。古来、仏教では仏様の有りようについて考えをめぐらせてきました。特に、大乗仏教では仏様の在り方について深く考えられてきました。南方仏教では、仏というとお釈迦様をさします。仏教徒はそのお釈迦様に帰依をするのです。キリスト教を精神的背景とする社会で暮らす欧米の人々は、大乗仏教の仏より南方仏教でのブッダが理解しやすいように思います。

紀元前後頃から始まった大乗仏教は、仏に対する帰依であり、自らも他者も仏に成っていく教えであります。つまり仏は釈迦一仏とは限りません。たくさんの仏がいるのです。

いろんな仏の在り方に対して考察され、仏身論のような考えが出てきたのであろうと思います。この仏身論についてはいろんな説がありますが、三身説を採るのが多いようです。それは応身仏(おうじんぶつ)・報身仏(ほうじんぶつ)・法身仏(ほっしんぶつ)という三種類に分けて考えるのです。

3. 応身仏と報身仏

応身仏というのは、歴史上存在した仏です。今から二千五百年ほど前にインドで存在した仏で、一般的にお釈迦様と呼んでいます。南方仏教の仏に対する理解と重なるものであり、いわゆるブッダです。

報身仏というのは、いかにも大乗仏教的な仏様です。その例として、阿弥陀仏があげられるでしょう。阿弥陀仏とは、法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)がすべての人間を救いとるという誓いをたてて、それが成就して仏となった姿です。

菩薩とは仏に成りたいと修行を始めた存在です。だから、阿弥陀仏とは法蔵菩薩のすべての人間を救うための修行が完成した結果なのです。私がいつもペアを組む近隣のお寺の若い住職がこんな話をしてくれました。そこの門徒さんの一人が「わしは、阿弥陀さんがいてくれないと困る」とおっしゃるのです。

その方は、息子さんを亡くされたそうです。阿弥陀仏の姿は、息子さんが救われていることを示しています。阿弥陀仏のように報身仏というのは、その教えを体現した姿であるとも言えます。

4. 法身仏

法身仏とは、「色も形もない真実そのものの体」『仏教語大辞典』と言っています。真理そのものを体現した存在であるというのです。応身仏も報身仏も仏像として描くことができますが、法身仏は色もなく形もないのですから、描きようがありません。私たちには極めて理解しにくい仏様であります。

私たちは、法要の始まりの時に三奉請(さんぶじょう)を読誦します。それは「弥陀如来」「釈迦如来」「十方如来」に対する敬意を表すものです。「弥陀如来」は報身仏です。「釈迦如来」は応身仏です。「十方如来」は法身仏かもしれません。十方とは私から見て、すべての方向を意味します。すなわち、私の直ぐそば、至る所にいる仏様であるのかもしれません。

5. ある老婦人の話

私のお参り先の話です。そのお宅は、山間部でお爺さんとお婆さんが二人で暮らしていました。息子や娘は都会でそれぞれの家庭を持って暮らしています。そこでは、ゆったりと時間が流れています。私は、そこにお参りをするのが好きです。そのゆったりした時の流れの空間に身を置くことに快さを感じます。しかし、過疎の村で暮らす夫婦にとっては、決して便利な生活ではありません。移動がしにくいところで、買い物や医療受診は容易ではありません。密な近隣関係は、相互扶助の利点はありますが、かなり大きな協調性が求められます。

ある日、そのご夫婦のところにお参りをして、お婆さんが「私はここに嫁に来る前の夜に、父親が『おまえ、つらかったら帰ってきてもいいぞ』と言ってくれた」と話してくれました。５０年か６０年も前の話です。それを、昨日のことのように語る老婆の顔は、とても輝いていました。この半世紀以上の間には、つらいこともあったでしょう。その時に、このお婆さんを支えたのは、父親の言葉であったと思います。

今となっては、帰る家もあるのかどうかも分かりません。父親が存命であるかどうかも分かりません。けれどもそれ以上に、父親の言葉は大きかったのです。この言葉は、父親の「おまえのことを、心配しているぞ」という気持ちでしょう。この父親の気持ちは、命を超越しています。生死を超越したものが仏であります。

ここで、私の友人の話をしましょう。彼の娘が結婚をすることになりました。私が彼に様子を尋ねると、奥さんと娘さんで楽しそうに準備をしていると言います。彼は「オレは黙って金を出すだけだ」と言います。私が、取りなすように「いつか、お父さんにも感謝してくれるだろう」と言うと、彼は「うん、オレが死んでからで十分だ」と答えました。

感謝は死んでからでいいなどと思えるなんて、私は胸が熱くなりました。彼は自分が死んでも娘のことを思い続けるつもりです。老婆の父親の気持ちも、友人の気持ちも同じで、何十年が過ぎようと変わることのない真実だと思います。

6. 母親の涙

友人の住職がしてくれた話です。そのご門徒さんの若い婦人が小さな娘の手を引いて、川の土手の道を歩いていたそうです。道の向こうから首にタオルを掛けたおじさんが歩いてきたそうです。すれ違い際に「お母さんは、偉いもんやなぁ」と言って過ぎ去ったそうです。その瞬間、母親の両目には涙が溢れたそうです。何か特につらいことがあったわけではなかったそうですが、涙が溢れたそうです。

そのおじさんは寅さんかと言いたくなります。その人が誰であるかは不問にして、その言葉が誰の言葉でしょうか。母親は、仏様の言葉として聞いたのだと思います。仏様の言葉は、とても優しい言葉だと思います。そして、いつも優しく見守っているという眼差しが共にあるのです。

あなたの大切な人は、阿弥陀様に救われて仏と成って、あなたと共に

いるのだと思います。その仏は色も形もないというのですから、あなたの目には見えませんが、必ずあなたのすぐ側にいるのだと思います。そこに真理としての仏様がいらっしゃるのだと思います。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２３）

中村周平

私にとって同志社大学での第二の大学生活(モグリ)が始まってから、気が付くと長い長い夏期休暇が終わろうとしていました。当初、隔週で通わせていただいていた川井先生のゼミは、いつの間にか毎週の参加が当たり前のようになっていました。次々に新しい知識や情報が自分の中に蓄積されていく感覚は本当に嬉しいものでした。

そんな中、「論文作成」に取り掛かることになりました。調停でお世話になった弁護士の方に川井先生をご紹介ただいたのは、スポーツ法学の知識を学ぶこと、そして、スポーツ法学会の学会誌に寄稿するための論文を指導していただくことでした。

「まずは、今書けることを書いてきてください」

川井先生からのその一言で論文を書き始めました。一度、挫折を味わった・・・というより何を書いていいのかわからなかった相手。最初の一文を書き出すのは、ちょっと時間と勇気が必要でした。ただ、書き始めてみると、その不安は徐々に薄れていきました。毎週の川井先生のゼミでの学びやゼミ生とのプレゼンを重ねたことで、これまでまったく無かったスポーツ法政策に関する知識や日本におけるスポーツ事故に対応した補償制度については基礎知識として身についていたのです。同志社大学に来させていただく前にモヤモヤしながら書き進めていた論文とはまったく違う手応えを感じながら作成していました。

ただ、書き進めながらいくつかの疑問にぶつかることを繰り返していました。その一つは、同志社大学に来て以来、川井先生から学ばせていただいた膨大な情報をどこまで載せたらよいのかということでした。たとえば、日本におけるスポーツ事故に対応した補償制度を解説する文章や注釈だけでも数千字にも膨れ上がってしまいました。字数を削る作業を何度も繰り返しても、新しい情報を把握することができた嬉しさと、この論文を読んでくださる方に少しでも多くの情報を知ってもらいたいという感情がその作業の大きな妨げとなっていました。(手が進まずモヤモヤしていたころに比べると贅沢すぎる悩みではありましたが…)この状況を打破することができたのは、川井先生の知人の方からのアドバイスからでした。何万字にも膨れ上がってしまった論文の第一稿を読んでいただいていた後に、

「学生時代や論文を書きなれていない頃は、目新しい情報や知識を『自分の考えだ！新しい発見だ』と勘違いすることが多いです。あたかも『これが自分

の主張』だと言わんばかりに。しかし、実際は過去の先駆者たちによって明らかにされたモノがほとんどです。」

「論文において大事なことは二つあります。一つは、先行研究というものをまとめるうえで十分な時間を掛けることです。それは他人の成果を自分の成果ではないということを明確にする・・・つまりは、先駆者たちに対して最大限の敬意を払うことだと思います。二つ目は、先駆者たちが積み上げてきた知識や情報を踏まえたうえでの、あなたの発見や新しい考えが一番の醍醐味だということです。その上澄みがその論文におけるあなたの主張と言えると思います」、

というコメントをいただきました。論文を書くうえでの決まり事・・・そんなことを知らなかったことへの恥ずかしさはもちろんでしたが、それ以上に自身の無知さに正面からコメントしてくださったことに強く感銘を受けたことを今でも覚えています。何万字にもなっていた第一稿は、大事な情報は残しつつ、日を追うごとにスリムに、そして論文の体裁を成していきました。

そして、私を悩ませていたもう一つのこと。それは、論文の「主訴」についてでした。これまでの自分の考えでは、「無過失補償」というものを第一の主訴として考えていました。現行の補償制度の不備から、それ以上の経済的支援を考えた場合、訴訟という選択しか残されていないということに課題を置いていました。ただ、訴訟を起こしたとしても「不慮の事故」として扱われてしまうスポーツ事故において、過失責任を立証することは困難を極めます。また、司法の場に判断を委ねてしまった時点で関係性は崩壊し、原因の究明が難しくなるどころかスポーツによって生まれた繋がりまで失ってしまうことになります。

スポーツ事故後によって引き起こされるこの現状については、今でも同じ考えを持っています。しかし、今回の論文作成を通して、自身の大きな誤りに気づくことができました。「私の誤り」・・・、それはこれまで経験してきたことを Logical な政策的視点で捉えられていないということでした。

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第１３回

脱精神科病院「わが国の脱精神科病院⑥」

三野 宏治

はじめに――前回までに書いたこと

約二年ぶりの連載となる。この連載で書いてきた「脱精神科病院」についての考察をまとめ博士論文を書いた。博士論文執筆のための休載だったが、それは前半一年の話で 2015 年 10 月以降は単に書かなかっただけだ。書かないといけないという思いはあった。そんなこんなで今年 9 月に対人援助学会の年次大会で団マガジン編集長にお会いした。そして書いている。本来、このようなことは短信に書くことなのだろうが、まずは言い訳をさせていただいた次第です。

前回までは数回に分け日本の精神科病院の成り立ちと増加の理由について書いた。そこで明治以前から精神病／障害で苦しむ人がいたことを述べた。そして多くの場合、家族が面倒を見ており家族がいなくなれば瘋癲人などになり、明治期に入り取締りの対象とする警察の内規や家族が監置するための法律精神病者監護法（1900 年）が出来た。それと前後して呉秀三は精神病院法成立に尽力し公立精神科病院の増加を狙う。その努力の結果、1919 年には精神病院法が制定され公的な責任においての精神科病院設置が謳われる。しかし精神科病院の数は多くはなかった。そして第二次世界大戦以前には公立病院は増えなかった。この公立精神科病院の増加は戦後も私立のそれと比較すれば大きなものではない。公立の精神科病院建設は進まなかったが呉秀三の業績は精神病院法成立に奔走したことと東京帝国大学医学部病院で精神病／障害者を鎖から解放し医療対象として治療にあたったことなどから称賛されている。

これらの経過から精神病／障害者を「社会防衛の対象」と「治療の対象」と区分けし同時期にその区分けによって処遇、つまり「私宅監置」か「病院で治療」されていたと考えがちである。しかしすべての精神病／障害者が「私宅監置」か「病院で治療」されていたというわけで絵はない。ではその他の精神病／障害者はどうしていたのか。法律施行以前と変わらず家族が面倒を見ており、家族が居なくなれば乞食等になった。

まず、これらの状況を治療することで変えようとしたのが、呉秀三をはじめとする精神科医たちだった。そして彼らは精神科病院を設立する。ではこの時期の精神科病院の治療法は如何なるものであったか。呉は東京帝国大学医学部病院や松沢病院などでモラルトリートメントなど行っていたようである。しかしモラルトリートメントに治療効果が認められた一方でそれを行うには人手と時間がかかる。入院患者数が増えればそれに伴い治療者の増加を必要となる。すべての精神科病院でモラルトリートメントが行われていたとはいえない。それは当時の呉がおこなった治療法や患者への処遇を「人道的である」と評していることからもわかる。

さて精神医学黎明期にすでに、政府によって精神科病院の二つの機能が期待されていた。その機能が「治療の場」と「社会防衛のための隔離の場」であり、その機能を精神医学界は引きうけた。政府は精神障害者を治療の必要のあるものと社会防衛の対象とした。ただそのどちらも精神病／障害のある「憐れむべき同胞」とし、これらのものに対応するために精神科病院があり、精神病者監護法と精神病医院法の双方の併存を必要であるとした。精神医学会は社会防衛の対象をも治療することを引き受けた。このことが社会防衛の一翼を担うことをどこまで吟味できていたかはわからないが、医師にとってそれはあくまで治療を目的としており職業的な情熱を帯びていたことも想像できる。この治療と社会防衛を連続的に捉え処遇していく状況は、今日においてもさほど変わらない。

終戦直後、精神科病院・病床は他科と同様に不足していた。また治療法もショック療法やロボトミーなどの治療法であった。その後、1950 年代に登場した向精神薬による投薬治療は状況を変える。投薬治療はそれまでのショック療法と比較して手軽であった。向精神薬による投薬治療には効果があった。その効果は症状が治まる治療効果のほか、投薬治療の効果と手軽さは治療者と患者に良好な治療関係をもたらした。そのため治療者がその都度治療を施す必要は少なくなる。必ずしも入院による治療が必要ではなくなったことから、米国では向精神薬の登場が「脱」という方向へ向かう要因となった。しかし、わが国では精神科病院・病床「増」を支えるものとして使用される。それはなぜか。

この向精神薬の有用性だけをみれば、わが国も米国と同様に「脱」に向かってもよいはずだ。ただそうはならなかった。ケネディ教書が象徴しているように「脱」の政策がとられたが、わが国では精神科病院・病床「増」という政策がとられた。そしてその政策誘導を受けた私立精神科病院の経営上の努力によって精神科病院・病床が増えていく。ではその政策は何を意図したものであたったか。

一つは社会防衛機能を精神科病院に期待した。ただ、それが精神科病院である理由はないはずだ。さらに精神医学界が社会防衛機能を拒否することもできたはずだ。ただ双方がそうはしなかった。政府は精神科病院建設への融資は国の経済政策の一環としての意味も持っていたという指摘や、結核病治療が進み結核病床が空いたことも要因として働いているとの指摘もある。これらの指摘が増加の要因のすべてではないだろうが、すでに存在し増加している精神科病院に社会防衛機能を付与すれば、新たに専用の施設を作る手間や財

源を用意する必要がないと考えたことは想像がつく。

なぜ、精神科医療は医療以外の役割を引き受けたのか

精神科病院が社会的防衛としての機能や家族の（経済的に限らない）負担を引き受ける請ける役割を果たした。その結果、措置入院患者の増加となり病床数の増大となった。これまでは政府の経済政策の一環と精神科病院が様々な要請を受けた結果と病床数増加である。これらの養成を請け負うと同時に、精神科病院が積極的に患者を捜し入院させ経営を安定させさらなる病床を増やしていった。「経済措置」が廃止された後も私立精神科病院は患者を積極的にリクルートした。黒田研二は『大阪の精神医療』（黒田 2006）で次のように述べる。「人権を侵害するおそれのある措置入院にたいする批判が強くなり、その頃から（筆者注：1970 年）からおおさかでも新規の措置入院件数は減少し始める。…措置入院は保護義務者による同意入院（筆者注：現在の医療保護入院）に取って替わられただけである。特に大阪市のように単身者が多い大都会では、親族の保護義務者がおらず、市長が保護義務者（法第 21 条）となって入院させる場合が多い。…いわば精神病院の管理者の判断で強制入院が可能になる」（黒田 2006:9）。医療保護入院の開始や継続について審査する精神医療審査会が都道府県に設置義務づけられたのは 1987 年の事である。それまでは各医療機関が独自に行っていた。医療保護入院は行政による措置ではない。したがって医療費は健康保険や自己負担が原則であるが、患者に生活保護を受給させることで医療費を徴収することができた。

第二次大戦後、経済的困窮によって入院できないという事態が精神科病院病床数の増加と公的な入院費用負担によって解決した。しかし新たな問題が出現する。黒田は「戦後、浮浪者などの「あぶれ者の収容施設」として精神病院は増えていった」と指摘する（黒田 2006）。黒田の指摘は、「高度経済成長期に地方部から都市部への人口流動に際して底辺部の労働者の中らか生活破綻者としてはじき出された人たちを「アルコール中毒」や「精神病質」などの病名で入院させ患者を確保することで経営を安定させた病院が少なからずある」というものだ[i]。駅周辺の浮浪者から、向精神薬の登場によって統合失調症患者へと入院患者は代わる。その後、アルコール依存症や老人精神障害へ精神科病院が主体的に患者を取り込む。

筆者が精神保健福祉臨床で仕事を始めたのは 1995 年である。その当時、保健所の精神保健福祉相談員に同様の話を聞いた。それは 1997 年に大和川病院に入院中の患者を転院させる時期の事であった。大和川病院は前掲の黒田が批判する類の精神科病院であり、1993 年に入院患者が何者かに暴行された後死亡する事件が起きた。その後の不正等によって 1997 年に廃院となる。精神保健福祉相談員は大和川病院に対し「多くの精神科病院では入院が拒否される、アルコールや薬物依存、行き倒れの人を取ってくれた。言葉は悪いが必要悪であったことは否めない」といった。アルコール依存症や薬物依存の患者、行き倒れであっても精神障害が認められれば精神医療の対象であり、必要があれば精神科病院への入院

も可能だ。しかし、黒田の指摘に従えば 1997 年当時、「多くの」精神科病院は統合失調症を主な患者としており、依存症や行き倒れなど「手間のかかる」患者を入院させたくなかった。大和川病院がそれらの患者を引き受けまともな治療やケアをしていれば問題はなかったが、任意入院患者への退院制限や違法な隔離や強制労働などの不正が発覚し廃院になる。

精神科病院・病床が急速に増加した 1960-70 年代に大和川病院と同質の処遇が行われていたことに対する批判や指摘は多い。日本政府の要請によって WHO はイギリス・フルボーン病院の院長クラーク氏を顧問として日本に派遣(1967 年 11 月から 1968 年 2 月)する。そして「クラーク勧告」を受ける。1969 年、精神神経学会は「精神病院に多発する不祥事事件に関連し全会員に訴える」という声明を出す[ii]。1970 年、大熊一夫は「ルポ精神病棟」を朝日新聞に連載する。では、なぜこのような劣悪処遇が行われたのか。一つに前掲の黒田の指摘のとおり向精神薬によって入院管理を容易に行った結果であろう。

向精神薬の登場によってアメリカの「脱」は後押しされた。他方、わが国では精神科病院・病床「増」に積極的役割を果たす。この方向性の違いは単純に比較できない。それは向精神薬の登場そのものだけで精神科病院・病床「増」に積極的役割が果たせなかったことからもわかる。

まずそこには「増」を目指す政策があった。その政策は特に私立精神科病院にとって経営面で都合の良いもの（精神科特例や経済措置等）であった。この文脈で向精神薬が登場し使用された結果、入院患者にとっての治療環境が悪化する。さらに単純比較が困難であると指摘する理由として、米国では向精神薬登場までに州立精神科病院や病床は増大しており、それに対して批判もある。他方、終戦直後わが国の精神科病院は他科同様多いといえなかった。更に病院建設が経済政策の一環とされた。

同時に精神神経学会や精神病院協会の「精神科病床数が不足している。したがって病院・病床の「増」が必要である」という主張や請願があった。

1963 年に「第 2 回精神衛生実態調査」が行われた（203 地区 11858 世帯、44092 名を対象）[iii]。調査から精神病／障害者（精神薄弱者を除く）の医療・指導状況は、精神科入院が 15.6%、精神科通院が 10.7%、他科通院が 19.1%、指導を受けているが 1.9%、その他が 52.7%という結果であった。この結果から次のように試算された。精神科病院への入院 28 万 3 千人、その他の施設に収容 1 万 5 千人、在宅での精神科医・神経科医による治療指導 27 万 4 千人、在宅でその他の指導 7 万 4 千人。この調査結果は同年の 11 月 30 日に発表された。その時の新聞見出しは“三分の二は野ばなし”であった。1964 年 11 月ケネディ教書全文が『精神衛生』に掲載される。同号の『精神衛生』では、当時東京大学教授であった秋元波留夫がケネディ教書の基礎となった調査・勧告である Action for Mental Health（1961）について、「ケネディ教書」で述べられた脱精神科病院という方向性について、「アメリカ医療施設の問題を解決する方法」として地域ケアへ方針転換をおこなったと評している。しかし同時に、日本の精神医療の問題として「精神病院は、量と質との両面におい

て多くの問題を蔵している。まず病床数の絶対数の不足ができるだけ速やかに解消されなければならない」と述べているiv。わが国では精神病／障害者に対応する場は地域ではなく精神科病院であるとの主張だ。

向精神薬登場後に精神病の治療がすすむ。症状が緩和することで精神病／障害者自身の病院外での生活や活動が可能となった。そのため米国では「脱」という方向に政策が傾く。しかし、わが国では向精神薬の登場により少ない治療者で多くの患者に対応することが精神科病院で行われるようになった。わが国にケネディ教書が紹介された 1964 年当時、秋元などはその意義を認めながら病床数増加を主張した。また、政府も前年の 1963 年に「経済措置」といわれる通達をだし、入院費用を負担できない家族・障害者のために、措置入院 はその本来の要件が満たされない場合であっても「柔軟」に適応するよう求めた。これらの事から当時の日本では「脱」ではなく「増」が精神医学界や政府の大勢であった。では、政府が精神病／障害者対策を精神科病院に任せたのはなぜか。

一つは社会防衛機能を精神科病院に期待した。ただ、それが精神科病院である理由はないはずだ。さらに精神医学界が社会防衛機能を拒否することもできたはずだ。ただ双方がそうはしなかった。政府は精神科病院建設への融資は国の経済政策の一環としての意味も持っていたという指摘や、結核病治療が進み結核病床が空いたことも要因として働いているとの指摘もある。これらの分析が増加の要因ではないだろうが、すでに存在し増加している精神科病院に社会防衛機能を付与すれば、新たに専用の施設を作る手間や財源を用意する必要がないと考えたことは想像がつく。他方、精神衛生法は「金子私案」がもとになっている。この案は日本精神病院協会内の法令研究委員会でまとめられていることから、私立精神科病院は政府に対してそれなりの圧力と要望、協力する立場であったともいえるだろう。

1950 年にできた精神衛生法は「金子私案」というものがもとになっている。この案は日本精神病院協会内の法令研究委員会でまとめられていることから、私立精神科病院は政府に対してそれなりの圧力と要望、協力する立場であったともいえるだろう。また、政府も日本精神科病院に対し協力を要請することあっただろう。後年（1964 年）であるが、日本精神神経学会の会長を務めた秋元波留夫は自傷他害のおそれのある精神障害者に関して「疑わしいくらいで保護処遇する方が良い」旨の発言をしている。ここでは医療と保護の問題について述べることはしないが、精神科医が社会防衛と治療を連続したものと考え、治療に社会防衛が接続されていること受け入れ自らの仕事を遂行したとも考えられる。

向精神薬登場後に精神病の治療がすすむ。症状が緩和することで精神病／障害者自身の病院外での生活や活動が可能となった。わが国では向精神薬の登場により少ない治療者で多くの患者に対応することが精神科病院で行われるようになった。より少ない治療者で多くの患者に対応することが精神科病院で行われた結果どうなったか。1970 年には朝日新聞で大熊一夫による、アルコール依存症を装って精神科病院に潜入入院し告発記事（後の『ルポ精神病棟』）や 1968 年のクラーク勧告で批判されたような、閉鎖的で治療的雰囲気を失

った収容施設化した精神科病院があらわれる。クラーク勧告では「地域精神衛生活動」の重要性も訴える。しかし政府はクラーク勧告を受け入れることはなかった。これらの批判から精神神経学会は「精神病院に多発する不祥事事件に関連し全会員に訴える」という声明を出す。政府がクラーク勧告を受け入れ無かったことに対する批判は当然である。では精神神経学会（精神医学界）は姓名を出す以外に具体的改善策を打ち出したのか。生活療法という取り組があった。生活療法は批判を受けることも少なくないが、精神科病院に治療的雰囲気を取り戻させたという評価もある。残念ながら生活療法は病棟管理の手段として使用されたこともあった。そして病棟開放化の運動もあった。これも道半ばにして頓挫する。

他方で、日本精神病院協会は米国「脱」の結果を視察しその失敗を指摘し「地域精神医療などという幻想は捨て、精神科病院医療を充実すべき」としている。厚生省の予算の低さと按分の悪さが精神科病院の劣悪処遇につながるという批判は紹介した。それは否定しない。しかしそれら批判点が解消されれば問題は解決されるのか。経営的に困難であっても病棟開放化運動を実施した病院や主導した医師たちはいた。予算的な問題が幾分解消された時期においても大和川病院事件などが起きている。「予算が少ないために劣悪処遇病院や問題が頻発する。したがって予算を増やせ」という主張が精神医学界によってなされているなら、同時に自らの実践を見直す必要もあったのではないか。繰り返すがそのような医師たちは存在し、本稿で紹介したような警告や批判を繰り返し行っている。

本章では精神科病院が精神病／障害者対応の主たる場として確立される過程を述べた。精神科病院体制が構築されるにはさまざまな要素があったことも述べた。そして精神科病院には当初から「治療」と「社会防衛」の機能が期待されており、それらの期待を精神科医たちはある時は無自覚に時に明確に知りつつ引き受けた。この「治療」と「社会防衛」の機能は精神科病院のみ期待されたものではなく、精神医学そのものに対してのもといった方が良いだろう。即ち精神病／障害者に対応する場が精神科病院以外に広がった際には、「治療」と「社会防衛」機能も拡散する。

精神病／障害者対応の場の広がり――ライシャワー事件と精神衛生法改正

精神病／障害者対応の場が精神科病院のほか外来診察のみを行う診療所や精神科デイ・ケア等に広がったこと事により、「治療」の場が地域に広がったと同時に「社会防衛」機能が地域に広がった。それは「治療」と「社会防衛」の機能を付与されたのが精神科病院にとどまらず、精神医療そのものであったことを物語る。

精神科病院には当初から「治療」と「社会防衛」の機能が期待されており、それらの期待を精神科医たちはある時は無自覚に時に明確に知りつつ引き受けたことは指摘した。その後、精神病／障害者に対する対応の場が家庭から精神科病院に広がったことや、精神科病院体制が構築されるにはさまざまな要素があったことも述べた。この「治療」と「社会防衛」の機能は精神科病院のみ期待されたものではなく、精神医学そのものに対してのも

といった方が良いだろう。即ち精神病／障害者に対応する場が精神科病院以外に広がった際には、「治療」と「社会防衛」機能も拡散する。つまり精神病／障害者の対応が精神科病院以外の地域に拡大した際、その「治療」と「社会防衛」は地域において実施されることになる。まず精神医療そのものに「治療」と「社会防衛」機能が付与され地域に拡散した点について、まずライシャワー事件発生から精神衛生法改正に至る議論を紹介することで述べたい。

1965 年の精神衛生法改正は前年のライシャワー事件（ライシャワー駐日大使がアメリカ大使館門前で精神障害のある青年にナイフで刺され重傷を負うという事件）を起点とする。事件直後には警察庁などが厚生省に対して社会防衛機能強化を盛り込んだ精神衛生法改正の申し入れを行う。その後、精神衛生法改正についての駆け引きや議論が行われる。その議論で秋元波留夫は社会防衛を素直に肯定している。65 年改正以前にも「社会」や「政治」は私立の精神科病院に「経済措置」をつけ例外を認めることで家族の経済的負担を含め、広義の「防衛」が安く上がればよいという判断をする。人件費などを抑制し利益を上げた精神科病院はこれらの過程を経てできた体制を守ろうとした。この点は前章でもふれた。同様に 65 年改正に至る議論でも「社会防衛」を足がかりに「すべての精神病／障害者の入院費用を公費によって賄うこと」を政府に要望する。しかし政府はそれを拒否する。改正法では社会防衛機能は強化されているが、法改正後に精神科病院・病床数が急激に増加したともいえず、精神病／障害者の多くが精神科病院に収容されていったわけではない。

改正点の一つである「措置入院制度の整備（警察官通報の要件の拡大，保護観察所長通報・精神病院管理者による届出の新設，緊急措置入院制度，入院措置の解除規定)」は社会防衛機能の強化と考えられるが、他の改正点は精神科病院や入院に関わるものではない。精神科病院の外、つまり地域に関する制度・施設が新設されている。外来治療費用負担を公費によって賄う精神障害者通院医療費公費負担制度や、保健所を地域精神衛生の一線機関とし精神衛生相談員（現在の精神保健福祉相談員）配置する。その相談員たちに精神障害者の相談指導を担わせる。

これらのことにより精神病／障害者を精神科病院に導く道筋が作られたとはいえる。しかし述べたように法改正後に入院患者が激増したとはいえない。「措置入院」はすべての精神病／障害者を対象としたのではなく、他害行為等を行うものに限られた。さらに、それ以外の精神病／障害者は他害行為に至らないように治療し医療的管理の実施を継続的に行う。このことによって、他害行為の予防と他害行為を行った者の「隔離・収容」が可能となる。地域で生活する者を「治療」することが「社会防衛」の一翼を担うことになるとは多くの場合、考えない。「治療」は治療であり医師の仕事であり患者のための行いであり、「社会防衛」のための行為であるはずだ。しかし 65 年改正が「社会防衛」を念頭に置かれたものであり、通院医療費を公費で負担することを考えれば、「治療」と「社会防衛」が連続したものであることが理解しやすい。では、事件発生と法改正に至る経緯について述べよう。

ライシャワー事件以降の関係当局の動向

1950 年制定の精神衛生法は「覚せい剤等の慢性中毒者等を法の対象とする」といった改正（1954 年）を経て 1965 年改正に至る。改正の契機になったのは、前年におきたライシャワー駐日大使刺傷事件（以後、ライシャワー事件とする）だ。ライシャワー事件とは、1964 年（昭和 39 年）3 月 24 日、駐日大使であったエドウィン・O・ライシャワーがアメリカ大使館前で統合失調症患者の青年にナイフで大腿を刺され重傷を負ったという出来事を指す。

批判が集中した国家公安委員会は、国家公安委員長の早川崇が辞任し 28 日に臨時の委員会を開き「犯罪予防の強化」の方針を打ち出す。この方針を受け 4 月 4 日の第 3 回臨時国家公安委員会では「警察官の家庭訪問の徹底、患者リストの整備、保安処分の早急な実施、自傷他害の恐れのある者の警察への通報」という精神病／障害者の早期発見のための方策を決定する[v]。4 月 28 日には警察庁長官名で厚生労働省に対し、精神衛生法改正に関して申し入れを行っている[vi]。この事件発生からひと月後の厚生省に向けての法改正の申し入れは大変早い[vii]。この時点の警察庁長官名での申し入れは「措置入院の強化」と「医療機関等から警察等に対する通報」であった。

これら治安当局からの要請対し精神衛生行政側はどう考え行動したのか。3 月 26 日の参議院予算委員会での小林厚生大臣は「精神衛生法を改正し、家族・学校・医療機関等に精神異常者の報告義務を課すようにしたい」と述べている。また、池田首相も衆議院本会議で「精神衛生法改正」を行うと発言している。述べたように臨時国家公安員会が招集され「犯罪予防の強化」という方針が打ち出されている。他方、厚生省は 3 月 29 日に、「病床の増設を急ぐこと」と「一般医師の精神障害者報告を義務づける」という方向性を示す。4 月 2 日には精神衛生審議会に対して諮問し、諮問を受けた審議会は厚生大臣に対して、①精神病床の拡充、②精神医療専門職の養成・確保、③地域社会における精神衛生活動と必要な期間の整備、④医療確保の充実という内容の意見具申を行っている[viii]。この時点で厚生省は「精神科病床増床」という方向で考えている。確かに警察等は治安強化のため「措置入院体制を強化」するよう申し入れている。しかしそれは必ずしも増床を指していない。さらに、これら治安当局の申し入れ等より早い時期に出されたものだ。広田伊蘇夫はこれらの対応について「治安当局と厚生省がそれぞれ別個の対応を提起している」としている。

治安当局が精神病／障害者を取り締まることで社会不安を除去したい以前よりと考えていたことは想像に難くない。では厚生省の示した「精神病床の増床」はどうか。この「増床」という方向性も既定の政策に則ったものである。

精神医学界の動向

次に日本精神神経学会（精神神経学会）と日本精神病院協会（日精協）の動向を紹介する。1964 年以前より、日本精神新神経学会と日本精神病院協会は法改正についての連絡会

を持つなどして議論を行っていた。その中では「精神病／障害者の入院は国庫が負担せよ」との点で双方の意見の一致があった。日精協は私立精神科病院の集まりであるため、「入院費全額公費負担」を訴えるのは病院経営の側面からは当然であろう。ライシャワー事件後、政府に対して日精協は「長年すすめてきた医療費対策についても、ライシャワー事件は関係当局に広く認識を深めさせる好機である、との観点に立ち、早速に医療費問題の陳情」を次のように行う。（協会 20 年記念誌編集委員会 編 1971:326）

> 人件費の上昇と諸物価の高騰によって精神病院の経営の苦境は土壇場にきています。既に経営不能のため精神病床の絶対的不足の現況にもかかわらず、閉院したものもあります。ライシャワー事件以来当協会所属の各精神病院は、精神障害者の世上にやかましくいわれた「野放し」を防止するために病床の整備拡充、看護要員の確保に努めてまいりましたが、極端な低入院費のため意の如くなりません。他科の病院では差額徴集により急場をしのんでいるかも知れませんが、精神病院では、たとえこれを望んでも事実上不可能であります。かくては病院経営の危機であるのみならず、患者に対するサービスの低下を招き、人道問題といっても過言ではありません（協会 20 年記念誌編集委員会 編 1971:326）

「精神病／障害者の入院は国庫が負担せよ」との主張はライシャワー事件後の精神衛生審議会中間答申（7 月 25 日付）でも述べられている。後年、この 7 月 25 日付）の精神衛生審議会中間答申について、秋元は次のように述べている。

> 医学的に入院治療の必要があると判断されても、経済的負担に耐えなければ入院して治療を受けることができない。精神疾患が慢性に傾きやすく、またその疾患の性質からいっても看護上家人の重荷となりがちであり、精神障害者をもつ家族の経済上の負祖は重いのが常である。そればかりでなく、精神障害による自傷、他害の予測ははなはだ困難で、自傷、他害のおそれなどありそうにもみえぬものが、周囲の状況によって自傷、他害のような行動に出ることはけっして珍しいことではない。したがって公安上の見地からいっても自傷、他害のおそれのあるものだけを措置して足れりとするのはおかしい。それ故に、医療保障を拡大して、措置入院にとどまらず、経済上の負担に耐えない精神障害者の入院治療および外来通院治療におよぼすべきであるというのが答申の趣旨である。（秋元 1971:209-210）[ix]

秋元はまず「入院治療保証のための公費負担」の必要性を述べている。そして「治安上の見地」からも公費負担は必要であり、その公費負担は措置入院にとどまらず外来通院医療にも及ぼすべきであるとする。この答申がだされた時期、秋元は日本精神神経学会の理事長であった。精神神経学会全体が上記のような考えを持ったか否かは定かではない。しかし少なくとも理事長の秋元は治療と社会防衛を連続したものと捉えていた。そしてその考えを措置入院だけでなく、すべての入院と外来患者にも公費負担を適応せよと主張した。

では政府は措置入院についてどのように考えていたのか。1965 年の公衆衛生審議会の「措置入院制度」審議における公衆衛生局長の発言を紹介する。

国としての医療保障は保険で行なっている。足りぬものは生活保護でまかなっている。この基本は崩せない。結核などの公費負担は医療保障を前提としていない。これは公衆衛生、感染防止からの公費負担である。精神衛生法は社会防衛的な考え方に基づいた公費負担である。これを医療保障的に扱うことには省内の反対・抵抗が強い。（広田 2004:84）

政府は「医療保障としての公費負担」を否定し、社会防衛的考えによって措置入院は実施されていることを明言する。秋元は公費＝社会防衛であることを承知のうえで、その対象を拡大し公安上においても予防することを狙う。秋元はこの予防に関しても次のような発言もあったとされる。岡田靖雄（2002）の記述から引く。

1965 年 5 月 17 日衆議院社会労働委員会における参考人意見陳述のさいに，滝井義高委員（自由民主党）が，今回の改正案には公安立法的な色彩がひじょうにつよい，そういうなかで，自傷他害といった客観性のないもので，その疑いだけでやってよいのか，“先生方の考えが，私は率直に言って，むしろ甘いのでないかという感じがするのですよ”と質問した。これにたいし秋元参考人は，人権保護は口にしながらも，“早期発見，早期治療というたてまえから言えば，これはちょっと怪しいという位の程度のうちに処置することが必要なんでず’といった答えをしていた　（岡田 2002:227）

政府の措置の考え方や上記の滝井議員の感覚は真っ当である一方で、日精協の陳情や秋元の発言が「医療保障」や「患者の治療」のためと断っているが、医療・治療とはかけ離れている印象を受ける。その後、精神衛生法は改正される。そしてその改正内容は社会防衛的な意味合いが強いとされる。しかしその社会防衛的意味合いの強い改正内容に精神医学界は強く反対したのだろうか。主張した内容をみると、既定の政策に従いそれぞれの団体がさらなる権益拡大をねらったに過ぎないのではないか。それは精神衛生法の改正内容からもわかる。

精神衛生法改正にみる政府と精神医学界の思惑

外来患者増加にも政府の政策と地域精神医療・衛生業務に携わるも者の努力がある。前章で精神病／障害者に対する対応の場が家庭から病院に増えたと述べた。しかしそれは精神科病院が精神病／障害者対応の主たる場として確立されたことを意味しない。なぜなら精神病／障害者の大多数が精神科病院にいるわけではないからだ。では多数の精神病／障害者はどこにいるのか。あるものは家庭に家族と暮らし、別のものは一人で暮らす。また治療を受けず精神病／障害者としての対応されないもの存在する。これら多数の精神病／障害者に「治療」を保証することで「社会防衛」とした法改正があった。1965 年の精神衛生法改正がそれだ。

65 年改正では「社会防衛」機能の強化がなされたと指摘される。保健所の精神衛生相談

員による訪問指導や精神科通院医療費の公費負担制度によって精神科病院への道筋が付けられたという指摘だ。それらの指摘は間違いではないが、以前より政府はこのような考えは持っていた。また精神衛生法制定時の中山議員のおこなった法案の概要説明[x]は次のようなものである。「長期にわたって自由を拘束する必要のある障害者は,精神病院または精神病室に収容することを原則とした」この点は私宅監置を禁止し病院に監置すると理解できる。この点については既に述べた。さらに「医療及び保護の必要な精神障害者については，警察官，検察官，刑務所その他の矯正保護施設の長のように，職務上精神障害者を取扱うことの多い者には通報義務を負わせるほか，一般人は誰でも知事に医療保護の申請ができることとし，医療保護が必要であるにかかわらず，これが与えられない者のないように，国民のすべてが協力する態勢をつくりたい」という。この点は 65 年改正で強化される。さらに訪問指導に関しても「自宅において療養する精神障害者に対して巡回指導の方法を講ずるほか，精神衛生相談所を設け，誤った療養による弊害を防止し，さらに進んで精神衛生に関する知識の普及に努力する」点と「精神科病院への道筋をつける」という方向性は 1950 年の時点で示されている。

これらかのことから、1965 年改正は精神衛生法成立時の法の精神を強化・具体化したものともいえるがその理由とは何か。確かにライシャワー事件は法改正に至る直接の原因である。しかしそれ以前から法改正に向けての取り組みがあった。前章で述べたが 1963 年に「第 2 回精神衛生実態調査」が行われた（203 地区 11858 世帯、44092 名を対象）れ、精神科入院が 15.6%、精神科通院が 10.7%、他科通院が 19.1%、指導を受けているが 1.9%、その他が 52.7%という結果であった。この調査結果を新聞は“三分のニは野ばなし”と報道した。精神神経学会と日本精神病院協会が連絡会を持つなどして法改正についての議論も行っていた。65 年改正での各団体の主張は、ライシャワー事件への対応として急遽まとめられたものではなく、既に各団体が個々に抱えていた思惑の表出であると考えるほうが良いだろう。

改正精神衛生法の内容

述べたような議論や動向を経て、1965 年に精神衛生法の一部が改正される。改正の主なものは次の 8 点である。

① 道府県は精神衛生センターを設置できる。
② 精神衛生相談員（現在の精神保健福祉相談員）の任用資格の規定。
③ 保健所の業務に精神障害者の相談指導を規定する。
④ 都道府県に地方精神衛生審議会を設置する。
⑤ 各都道府県に精神衛生診査協議会を設けた。
⑥ 措置入院制度の整備（警察官通報の要件の拡大，保護観察所長通報・精神病院管理者による届出の新設，緊急措置入院制度，入院措置の解除規定）

⑦ 精神障害者通院医療費公費負担制度の新設。
⑧ 保護拘束制度の廃止。

65 年改正では精神障害者通院医療費公費負担制度新設だけではなく、精神障害者の相談窓口が保健所に設置され、公務員として精神衛生相談員（精神科ソーシャルワーカー）が配置された。現在では、専門職の保健所への配置が精神障害者福祉増進に寄与したと捉えられている。しかし、法改正に至る議論からは保健所と精神衛生相談員の訪問活動が、単に精神障害者福祉の増進だけを想定したものとはいい難い。精神衛生法改正に至る議論からは「地域での管理・監視」を目的とする意図があったことがわかる[xi]。

改正以前の精神衛生法では訪問指導の対象は「精神衛生鑑定医の診断医より、精神障害者であり、かつ自傷他害のおそれがあるにかかわらず知事命令による措置入院がとられなかった者、およびこの入院措置に附された者で、退院したもののなお精神障害が続いている者」とされていた。そして訪問指導についても「当該吏員又は知事が指定した医師」であった。他方、改正精神衛生法ではどうか。訪問指導の対象は前掲した要件に加えて「その他精神障害者であって必要と認める者」となり、その対象が拡大されている。そして訪問指導の実施機関を保健所とした。さらに「保健所における精神衛生業務運営要綱（1966 年 2 月 第 76 号；衛発）」では「通院医療費の公費負担を受けている者」も訪問指導の対象に加えられた。同時に当該要綱では、「訪問指導の対象者ごとの精神衛生基礎票」を作成し整備し補完する規定も追加されている。

小泉義之（2013）は 1965 年改正法の「在宅精神障害者の把握とその指導体制の整備」と「通院医療費の公費負担制度の新設」は精神衛生施策の展開をはかる上できわめて緊要かつ表裏一体の関係にある」点に注目し次のように述べている。

> その「今回の法改正の主要点」は、通院医療費の公費負担制度と在宅精神障害者の訪問指導に置かれている。すなわち、社会防衛の対象と精神医療の対象が、家族が「保護拘束」しているはずの在宅精神障害者にも及ぶことに置かれている。そして、精神医学の効果は、[社会復帰]にも求められている。（小泉 2013:226）

小泉は改正精神衛生法が「保健所の業務に精神障害者の相談指導の規定」と「精神衛生相談員（現在の精神保健福祉相談員）の任用資格の規定」、「通院費用公費負担制度」などから社会防衛／精神医療の対象が在宅の精神病／障害者に及ばせるものであるとしている。改正精神衛生法は精神病／障害者が社会防衛の対象でもあると位置づけていると考えてよいだろう。それは改正にいたる経緯から明らかである。法改正に際して当初公安当局と精神衛生当局がそれぞれ別に立案した。そしてそれぞれの思惑が改正精神衛生法に生かされた。65 年改正で通院医療費の公費負担が制度化されたこともあり、診療所・精神科デイ・ケアは増加した。この外来精神医療は精神病／障害者の対応の場が精神科病院以外にも出

来たことを示す。それは精神科病院の持つ「治療」と「社会防衛」の機能が地域に広がったともいえるのではないか。

---

[i]戦直後、府下の精神病院は6病院を数えるのみであった。しかし、戦後の大阪駅周辺の浮浪者など「あぶれ者の収容施設」として精神病院は増えていった。昭和30年代前半までに、このような病院は入院患者の蓄積により経営基盤を安定させ、その後は当時使用され始めた向精神薬により入院管理が比較的容易となった分裂病患者の収容に専念するようになる。次に昭和30年代後半から40年代前半にかけて、精神病院開設のラッシュを迎えるのだが、この時期はちょうど高度経済成長期にあたる。わが国が農村から都市部への未曾有の人口移動を経験した時期でもある。この頃から精神病院は機能分化をし始める。新興の精神病院は、大都市で経済成長を支える底辺部の労働者の中から、生活破綻者としてはじき出された人たちを、アルコール中毒あるいは精神病質などの病名で収容し、開設初期の入院患者を確保していった。このような病院では、入院患者の収容を維持するため、ときに暴力的な管理体制を組んでいた。昭和40年代になって多発した不祥事件は、まさにこうした病院で発生したのである。昭和50年代以降に開設した病院には、アルコール依存症や老人精神障害のみを取り扱う専門病院など、さらに機能の分化が認められる。(黒田 2006:13-14)

[ii]世に悪徳病院、病院業者と悪評の立つ一部の精神病院と経営者はたしかに存在する。日本医師会の武見会長は、かつてこのような経営者を牧畜業者と批難した。いうまでもなく彼等からみれば患者は牧場に放し飼いする牛か羊と同じという意味である。いま一連の不祥事件を眼の前にし、われわれは残念ながら、この武見放言を謙虚に聞かざるを得ない。このような病院の存在を許す環境は何か。(日本精神神経学会 1964)

[iii] 第1回の精神衛生実態調査は1954年に、100地区4895世帯23993名を対象に実施されている。

[iv]精神衛生における医療施設の問題はAction for Mental Health(1961)のなかで、Jack Ewaltが強調しているように、依然として精神衛生法の中心課題core problemである。どんなに精神医学的治療が進歩しても、精神病院の問題は常に新しい相貌を呈しつつ論ぜられ、改革されなければならないだろう。わが国における医療施設の主要な部分をしめる精神病院は、量と質との両面において多くの問題を蔵している。まず病床数の絶対数の不足ができるだけ速やかに解消されなければならないが、この最も大切な精神病床の増床が、これまであまり計画的に行われなかったことは遺憾である。

[……]

公私の比は九三対七となり、精神障害者に対する医療施設がもっぱら公共の責任において運営されていることがわかるのである。米国における私立精神病院は公立のそれとは性格を異にしており、経済的に比較的恵まれた階級の患者を扱うデラックスな病院が多い。このような様相はひとり米国に限らず、欧州各国の精神病院の在り方に共通する。

[……]

私立精神病院は公共の病院とは異なった機能と性格をもち得るものであり、それはすでに欧米諸国において証明済みである。この点で日本のみが例外であるとは考えられない。（秋元 1964）

[v] この方策は、警察などの具体的行動だけではなく、治安当局が厚生省などに協力を依頼するという「政治的な対応」という事態に発展した。つまり公安当局（行政機関）が精神衛生当局（行政機関）に治安維持のための協力を申し入れる事であり、個別の事例としては、警察によって東京都の精神衛生課や柏初石・両毛病院は患者リストを求められ、佐野市では入院患者の名簿の提出が要求されている。5 月 8 日、ライシャワー事件調査委員会（警視庁内に設置）は事件調査の結論を出す。ライシャワー事件調査委員会の下した結論を広田の著作から紹介する。

「警備に落度はなかったが，あと一歩押す熱意と積極性に欠け，事件の重大匠の認識が足りなかった。……精神障害者に対しては防犯の立場から，犯罪を犯し易い異常者の実態を早く掴む必要がある。防犯課が中心となり厚生省などに対し，現行法の許す範囲でできるだけ協力を求め，一方各警察署を通じて潜在異常者の確認につとめたい」（広田 2004:67）

[vi] 「精神衛生法の改生等について申入れ」に内容に関しては以下の通り。

昭和三九年四月二八日厚生省公衆衛生局長　若松栄一殿

警察庁保安局長 大津英男

精神衛生法の改生等について申入れ

最近精神障害者による重大な犯罪が発生し、治安上これを放置することができないので、その措置として、次の点について早急に貴省の検討をわずらわしたく申し入れます。

記

第一　精神衛生法の改正について検討すること。

改正点は別添のとおり。

第二　精神障害者の収容体制を強化すること。

精神障害者のうち、治安上放置しがたい者が多く、また法第二四条に基づく通報について必ずしも完全に入院措置が実施されていないので、これらの収容について格段の配意をわずらわしたい。

第三　警察官の精神衛生法第二三条、第二四条による申請、通報に対する受理体制ことに土曜、日曜時の受理体制の整備について考慮されたい。

（別添）

精神衛生法に関する改正意見

第一　都道府県知事は、第四の届出を受理した場合および第二九条第一項の規定により入院させることができる精神障害者について入院措置をとらなかった場合において、その者が他人に害を及ぼすおそれがあると認めるときは、すみやかにその旨を当該警察本部長（警視総監および道府県警察本部長をいう）に通知しなければならないものとすること。（第二九条）

第二　精神病院の長は、モの治療に係る他人に害を及ぼすおそれのある精神障害者が無断で退去し

たときは、すみやかに、その旨を管轄警察署長に届出なければならないものとすること。（第三九条）

第三　仮退院（第四〇条第二項）の場合において、当該病院の長は、当該精神障害者が他人に害を及ぼすおそれがあるときは、必要な事項を管轄警察署長に届出なければならないものとすること。（第四〇条）

第四　医師（第二七条の精神鑑定医を除く。）が診療の結果精神障害者であると診断し、かつ、他人に害を及ぼすおそれがあると認めたときは、当該都道府県知事に、すみやかに、必要な事項を届出なければならないものとすること。（新設）

第五　警察官は、次の各号の一つに該当する場合には、当該精神障害者を警察署、病院、精神病者収容施設等の適当な場所において一時保護することができるものとすること。

(1)　第二の届出があったとき。

(2)　保護義務者が、その保護する精神障害者が他人に害を及ぼすおそれがあると認め、またはその保護する精神障害者が所在不明になったため当該精神障害者の保護を求めたとき。

2　前項の保護をした場合において、警察官は次の措置をとるものとすること。

(1)　前項第一号の届出に基づくときは、すみやかに、届出をした精神病院の長に当該精神障害者を引渡すこと。

(2)　前項第二号の求めに基づくときは、すみやかに、保護義務者に通知するとともに、第二四条に定める通報を行ない保護義務者または関係機関等に当該精神障害者を引渡すこと。（新設）

[vii] 小林（1972）も「ライシャワー事件後の警察等の対応の素早さ」について、著作の中で「社会党　浅沼稲次郎委員長刺殺事件」を例に挙げ次のように述べている。

「ライシャワー事件よりもすこし前ではあるが、一九六〇（昭和三五）年一〇月一二日、日比谷公会堂で行なわれた三党首立会演説会の壇上で山口二矢が、社会党の浅沼稲次郎委員長を日本刀で刺し殺した事件があった。そのあとどのような対策がとられたかを、この一連のす早い精神障害者対策と一般人の傷害事件の場合と比較してみるとよくわかると思う。要人の身辺の警備を一時的に厳重にするぐらいのことは実施されたが、すくなくとも法律を新設または改正したりすることはなかった。傷害事件が起こるたびに「他害の恐れある」一般大衆を全員登録したり監置したことがかつてあっただろうか」

（小林 1972:57-58）

[viii] 意見書の前文を広田の著作から紹介する

「向精神薬の開発，施策の発展とあいまって，(1) 早期発見，(2) 専門医による適格な医療，(3) 充分な後保護等の条件がみたされれば，精神障害は決して危険な疾病ではなく，社会復帰の可能性は極めてたかくなった。従って，徒らに精神障害者を危険視することは患者・家族の心情を損ない，治療効果を減ずるのみならず，患者を秘匿して適正な医療保護を受ける機会を失わせる。……今回のライシャワー事件を機として，精神障害者への社会問題が注目されているが，なお政府施策が充分でない

と考えられるので，精神障害者対策の重要性を思いいたされ，これらの者への適切な医療保護施策を速やかに実行されるよう要望する」

[ix] 1965 年開催の第 58 回関東精神神経学会シンポジウム「呉秀三と病院精神医学」における講演の内容であり『精神医学』第 7 巻第 6 号に掲載されている。筆者は秋元（1971）から引用した。

[x] 第一に苟も正常な社会生活を破壊する危険のある精神障害者全般をその対象としてつかむことにし，従来の狭義の精神病者だけでなく，精神薄弱者及び精神病質者をも加えることにした。第二に，従来の座敷牢による私宅監置の制度を廃止して，長期にわたって自由を拘束する必要のある精神障害者は,精神病院または精神病室に収容することを原則とした。このために精神病院の設置を都道府県の責任とし，また入院を要する者で経済的能力のない者については，都道府県において入院措置を講ずることとし，国家はこれらの費用の二分の一を補助することにした。第三に，医療及び保護の必要な精神障害者については，警察官，検察官，刑務所その他の矯正保護施設の長のように，職務上精神障害者を取扱うことの多い者には通報義務を負わせるほか，一般人は誰れでも知事に医療保護の申請ができることとし，医療保護が必要であるにかかわらず，これが与えられない者のないように，国民のすべてが協力する態勢をつくりたいと考えたのである。第四に，人権蹂躙の措置を防止するため，精精神衛生法の制定神病院への収容にあたっては，真の病気以外の理由が介入しないように，精神衛生鑑定医制度を新たに設け,その二人以上の鑑定の一致を病院収容の条件とした。第五に，自宅において療養する精神障害者に対して巡回指導の方法を講ずるほか，精神衛生相談所を設け，誤った療養による弊害を防止し，さらに進んで精神衛生に関する知識の普及に努力することにした。第六に,精神衛生行政の推進と改善をはかるために,精神衛生審議会を厚生省の付属機関として設置し，関係行政官庁及び専門家の協力によって，この法律の施行に万全を期すことにした　（広田 2004:47）

[xi] 精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）のアピール文

「精神衛生法「改正」の先取＝「訪問指導」の強化を許すな！」

厚生省は、５月１５日「保健所における精神衛生業務中の訪問指導について」という通達を各自治体や医師会に宛てて出しました。その内容は警察庁の要請を受け、『凶悪事件の再犯防止につながるから、入院管理を強化し、医療中断者を訪問して指導を強化せよ』　というものです。訪問指導の了解は家族等を含むというものであり、同意入院＝強制入院をそのまま地域管理に広げるというものです。医療中断は現在の医療の方に問題があるからです。さらに週一回訪問せよと、医療に名をかりて「精神障害者」の地域での生活を管理 ・抑圧しようとする悪辣な内容で、６５年精神衛生法「改正」以降の警察官通報による強制入院をそのまま保健所・医療関係者に拡大しようとするものです。(精神衛生法撤廃全国連絡会議（準）1986)

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第21回

『ビリギャル』

１．　ツギハギの人生

今、俺は部屋の明かりを消して、ベッドに横たわり、MacBook Air を開いて、この原稿を書こうとしている。しかし、なかなか話が浮かばない。浮かんでも、この話は公にするには差し障りがあるのではないかとか、前にも書いたようなことだからと思って、途中でやめてしまう。

思えば、昔はもっと書けた。次々にネタは浮かんできた。しかし、ここにきて、浮かんだネタを文章化するのが辛くなってきている。それは一つには昔のトラウマ的なエピソードを文章にしようとするとトラウマを再体験しなくてはならなくなる。俺は充分にトラウマの分析はしてきたので、もうこれ以上する必要もない。これ以上しても得るものはないだろう。生活のすべてのことにだいたいは諦めも付いてきた。これは悪い意味ではなく、人生なるようにしかならない、ジタバタしても始まらないという開き直りが出てきて、それほど深く考えなくなった。自分の心の中にもやもやしているものがある頃は文章化することでそれを整理しようとしていたのだが、もう今となっては、整理すべき事柄もほとんどないのだ。

そうだ、そう考えれば、俺は幸せ者なのである。日本では、50 代の男が、一番自殺率が高いし、幸福度が低いと聞いている。しかし、俺は自殺したいとは思っていないし、不幸だとも思わない。そういう境地までついに達してきたのである。美輪明宏さんが「負の先払い」という言葉を使われるけれど、俺は 10 代 20 代の頃に一生分の苦しみを経験し、負の先

払いを済ませてしまった。年齢を重ねるごとに幸福になってきている。

今でも断続的に怒りの感情が湧いてくることは事実だ。小学校の頃の男子にばかり体罰を与える女性教師、中学の頃の男子生徒を裸にする横暴な体育教師、不登校の時の保守的カウンセラー、大学の時の偽善的アカハラ指導教授、弱い女を武器に俺を口説こうとしていた女の子、支配的に俺に友情を求めてきたクラスメートの男子、男性運動で出会ったとんでもない学生運動おじさんたち、権威主義的な元大学教授のおばあさん、専門学校の生意気な女子学生、そして、2年前の何もわかってくれなかった女性カウンセラー。もう会うこともないような人たちなのだが、時々、彼らの顔が脳裏に浮かんできては俺を苦しめる。しかし、生活に支障が出るほどではない。嫌な奴との記憶とも付き合っていけばそれで済むのだ。

以前、『キルトに綴る愛』という映画があって、「若い人は完璧を求める。でも年取ったものはつぎはぎの中に美しさを見出すものなのよ」という台詞があった。すごくいい台詞だ。俺の人生も、つぎはぎだったけれど、そこに美しさが生まれ始めたのだろうか。いやな記憶は俺の人生のパッチワークなのである。

2．徒然な日々

①大学どこなんですか?

11月の初め。「先生、大学どこなんですか？」と学生から聞かれた。学歴を知りたがる学生はしばしばいるのだが、その度に俺ははぐらかして、まともには答えない。「なんで、そんな質問するの？　大学の名前を言ってしまうと、そういう先入観で見られるだろう？　だから俺は言いたくないんだ」という具合にすり抜けるのだ。

本を出した時も、出版社から「経歴のところに学歴は載せないのですか？」という問い合わせが来た。その時も、「私はもう卒業してだいぶ経ちますので」と答えて、載せることを拒んだ。俺は3つも大学に入っている。学部、修士、博士と3つ違った大学に入っていて、そのことは大きなコンプレックスとして残っている。この頃は学歴ロンダリングと言って、不本意な大学を卒業した人が、大学院で希望のところに行って、最終学歴を塗り替えるというケースが増えている。しかし、俺の場合は、ロンダリングにはなっていない。仕方がないから大学を移ったというのが本当のところであり、本意な選択ではなかったからである。俺は今でも履歴書を書くのが嫌だ。めちゃくちゃな経歴。三つも大学に行った上に、高校が中退なわけだから、「わけあり」であることは一目でわかる。

対人援助学会は立命館の先生や学生が中心の学会である。そのマガジンで立命館を批判をするのは憚られるのだが、真実を書かなくては、この連載の意味はないので、ご了承願いたい。俺の立命に対するわだかまりはものすごかった。実は衣笠界隈に行くのすら憂鬱だった。俺にとってはトラウマの地。最近になって、中村正さんがだいぶ友達になってくれたので、この大学関連者で親しい人がやっと一人できた。しかし、正さんは立命の生え抜きで教授や理事にまでなった人だ。俺は上手くいかなくて、そのあと、他の大学へと渡り鳥。同じ大学を出ているのにこの違い！人生は理不尽だなあ。

人はなぜ、他の人の学歴を知りたがるのか。それはその人のイメージの指標になるからである。しかし、俺は立命館というイメージに合わない学生だった。俺の世代で立命館の卒業の人は、「学費が安いからこの大学を選んだ」という人が結構多い。実際にはそうでなくても、そう言っておけば、他のところに落ちてきたといわずに済む。当時の立命館のセールスポイントは庶民派で学費が安い、奨学金が取りやすいということだった。

しかし、俺は何を隠そう元祖ワンルームマンションだった。当時の立命館というと４畳半にインスタントラーメンというイメージだったけど、俺はその当時からエアコンまでついた家賃が４万以上もするマンションで暮らしていたのだ。ちなみにあの頃は１万円から２万円くらいの共同炊事、共同便所で暮らす学生が多かった。従って、学費が払えない苦学生ということを自分が立命に行った理由にすることができないのだ。なぜ、お金がないんだったら、あんなところで暮らすんだ？と言われることになる。

じゃあ、他の大学に落ちて泣く泣く入ったのかというと決してそういうわけでもない。受験の時は合格しないと思っていた。俺は英語の力だけはあったけど、国語と社会は良い時と悪い時で差があった。３年も学校に行かなかったというブランクは大き過ぎるくらいに大きかったのだった。

俺は受験の直前まで京都の大学なんて考えたこともなくて、東京の大学に行きたかった。しかし、ブランクは取り戻せない。でももう１年浪人はしたくない。仕方がないから日程と受験地の都合で、立命館を受験してしまったのだ。立命館は地方試験がある。俺は大学に入るまで、立命館どころか、京都にすら来たことがなかったのである。何も知らず、下見もせずに大学に入った。今思えば、見合いもしたことのない相手と結婚したようなもの。でも入学を決めた時は、それはそれでいいんだと思ったものだった。入ったところで頑張れば、おのずと道は開けるのだと思っていた。

俺が高校も行かずに大学に行ったことを知っている人は、「高校も行かずに立命館に受かるなんて大変なものじゃないの」と言ってくれる。しかし、高校に入っていないことは、そうそうおおっぴらに話すことはできない。したがって、なぜ、あの大学に入ったのかと聞かれた時に、即座に答えられるちゃんとした理由がないのである。

立命館に愛校心を持っている人もたくさんいる。しかし、これは俺の偏見なのかもしれないが、そういう人は、大概、立命館のかっこ悪いところが好きだ、ダサい所が好きだという。スポーツで弱いチームを応援するのと同じ心理である。しかし、俺はダサいものに魅かれる人間ではない。洗練された、綺麗なものが好きだ。俺はハリウッドスターが三度の飯より好きな人間なのだ。

俺は大学の頃は前向きだった。ここに巣をつくろうと思っていたから、立命館を自分のアイデンティティにしようと思って、必死で頑張ったものだ。ところが、あの頃は全てが裏目に出た。

挙句に、卒業間際になって、指導教授からアカハラをされてしまった。憎しみの残るような形で俺は立命館を後にした。それから語学系の院の修士に入り、そこの大学の指導教授とは上手く行ったのだが、当時その大学には博士課程がなかったため、兵庫の大学の博

士に行った。移り過ぎなのがマイナスだとは色々な人から言われてきた。どこの学閥にも属していないので、就職が決まりづらいのである。俺は立命館を恨んだものだ。「あの大学に入っていなかったら」という気持ちを常に抱えて、40代までは生きていた。

しかし、もう52歳。さすがに大学に対する囚われは抜けてきた。この歳になって、非常勤歴も24年、著書も2冊出した、もう誰も俺の経歴に文句はつけない。前にある学生に「俺の経歴はつぎはぎなんだよ」と言ったところ、「つぎはぎの方がかっこいいじゃないですか」と言われたことがあった。そうなのだ。若い大学生でも、凸凹のないスムーズな道を歩んだところで、かっこいいとは思わないという子はいるのだ。今思えば、大学時代は、自分の膿を出す4年間だったのかもしれない。70歳くらいになったら老後の楽しみで、どこかの大学で博士号をとろうかなあと思っている。かすかな夢だ。夢は叶わなくてもいい。ただ叶うのならば叶えたい。そんな気持ちで今は生きている。

②専門学校の同窓会

10月の末。専門学校の教え子たちとの同窓会だった。参加者は１０人くらい。先生は俺一人だった。

俺にはコンプレックスがたくさんある。まずは顔がでかいということだ。俺は今まで俺より顔がでかい人に会ったことがない。もう32年ほど前、シェールの主演で『マスク』と言う映画があった。実話に基づく話だが、シェールの息子がライオン病という顔がライオンのようになる奇病という設定になっていた。俺はまさにこのライオン病なのではないかと思うくらい顔がでかくて、奇形に近いのである。中学の時の制帽も俺だけ60センチだった。バイクの時のヘルメットもXLだった。ほとんど特注のレベルである。そのことでからかわれた経験は数知れない。しかし、顔が大きいことが悪いことのように言われ始めたのは比較的最近のことで、タモリが言い出したことなのではないかと思う。昔は舞台演劇などでは顔がでかい役者の方が表情が客席から見えるので好ましいとされていたはず。ところが、テレビ時代になると顔が大きいのは不格好と見做されるようになった。今はスマホ時代。写真を撮る頻度が著しく増えているので、俺みたいな顔のでかい人には困る。いつも目立たないようにちょっと他の人と間を置いたりしながら写真を撮っている。また連写してもらう。連写すれば一枚くらいはましなのが取れるからだ。同窓会の写真はなかなか上手く撮れていて、Facebookにアップできた。

小さな小部屋であぐらをかいて、「専門学校の仕事は地獄だったよ」と教え子たちに話した。彼らはもう卒業して何年も経っているし、大人の年齢だから言ってもいいかと思ったのだ。「そうなんですか」と彼らはキョトンとした顔。大人になったとは言っても、まだ20代なかばの彼らには、先生の苦労がわからない。前号にも書いたが、あの頃のトラウマもまだ癒えてはいない。しかし、専門学校を辞めた後、良い仕事は続いてやって来た。専門学校は俺が成長するための通過点だったのだろう。ちなみに、この日は仕事で来ていなかったが、この時の同窓生と同期だった男子の一人とはラインまで教え合って、父と息子のような仲である。この冬はスキーに行こうかと話している。苦しかった9年間は無駄ではなかった

のだ。

③髪の健康優良児

11 月ある昼休み。大学の控え室で髪の話になった。俺は髪の健康優良児である。ヘアサロンに行くと「毛の量が多いですよね、絶対ハゲないタイプの髪ですよ」と言われる。「いいなあ」と他の先生たちから言われた。

メンズリブの男性たちもハゲかかっている人が多いので、羨ましいと思うのかなあ。そういえば、プロジェクトに関わっていた頃、他のメンバーの人たちが、やけにハゲ問題にこだわるなあと思ったものだった。俺はハゲの心配がないので、ハゲ問題なんて考えたこともなかった。人間は無い物ねだりで、自分が持っていなくて他人が持っているものは価値あるものだと思うのに、自分が持っていて他人が持っていないものはたいしたものだと思わないものらしい。

しかし、「俺は髪が多いんだ、ハゲている人、かわいそう」なんていう態度をとるような男には成りたくない。俺は自信がない男だと言われるが、自信家は嫌いだ。自慢話も嫌いだ。むしろ俺の美点は、人の良いところをみつけられるところ。俺は人を羨ましがる性格なので、自分よりも他人の方が幸せに見える。だから、その人の幸せな部分を即座に探してあげることができる。そのことには自信を持っていいのかもしれない。

④ラガーマンになりたい。

この頃、周りの人におおっぴらに話している。「俺は五郎丸が好きだし、ああいう身体になることを目指しているんだ（笑）」と。これは冗談ではなく、ある程度本気だ。普段、俺はラガーシャツで外出することがある。元々ガタイはでかいので、ラガーシャツは似合うと周りからも言われる。テニスは、ガタイのでかい人は少ないし、水泳も筋肉マンでは泳げない。野球もタンクトップが似合うような身体になってはならないらしい。やはり、俺の体つきに一番、似合っているのはラグビーだ。五郎丸を目指すのが一番いい。

俺の友達は何故かラグビー経験者が多くて、普段マッサージに来てくれる 30 代の男性、東京に行ってしまった鍼灸師の先生、卒業前に風呂に入りに行った教え子、専門学校時代の教え子など、ラガーマンだらけだ。スポーツクラブで、普段レッスンしてくれる若い男性は大学生なのだが、彼もラグビーの経験者とのことである。この人は、俺が友達になりやすいタイプの人なので、スポーツクラブでもよく話をしている。ラグビー部にいるって、どういうものなのだろう。俺は水泳は長い間やっていたが、チームスポーツはついにできないままだ。

スポーツだけじゃない。俺は誰か気の合う友人と二人で、食事や温泉に行くのは好きだが、大勢で騒ぐのは好きじゃない。俺は変わり者なので、大勢だと浮いてしまう。目立ち過ぎて話の肴にされるか、隅っこに追いやられるかどっちかだ。あー、悲しい。大勢だとむしろ疎外感を抱く。一対一の付き合いの方が相手を独占できるから、俺には向いている。

しかし、男ばかり大勢の世界。男同士だから結びつける世界。そういう世界に一度入ってみたい。60 になったら、おじいさんラグビーを始めようかなあーでも、仲間が見つかるだろうか。

⑤孤独に生きる

11 月のある日。母と電話で話した。弟の婚活がうまくいっていない。「二人とも孤独に生きていくのかと思うと、私は心配だわ」と母は言う。母が元気なうちに弟が結婚できたらなあと思う。弟は結婚を望んでいるし、俺みたいに女性恐怖でもない。母も、弟の方が気がかりらしい。母は、俺は結婚することはないだろうと思っている。俺が女性から受けたトラウマのことは、母にはずっと話してきたから、俺が女性不信になるのも仕方がないと理解してくれている。それに俺は長いこと一人暮らしをしていて、今は友達も多いから、一人で生きていくことに慣れてしまっている。しかし、弟は大学時代をのぞいて、ずっと母と同居しているので、身の回りのことは母に頼ってきている。そんな弟が一人きりで大丈夫なのだろうかと考えているのだろう。

変な女と結婚したら余計に不幸になるから、一人でも構わないと俺は思うけど、やはり母は、パートナーがいた方が幸せだと思っているみたいだ。かくいう俺もいつまでも友人や教え子が遊んでもらえるかどうかはわからない。孤独でも生きていける心算はしておかなくてはならない。10 年 20 年なんてすぐ過ぎる。老後はすぐにやってくるのだ。

⑥男性学の道は通し

10 月末のある日。京都で男性学関連の催しが行われた。俺はこの会議の主催者の男性と 6 年ほど前に喧嘩して、この会議にも行っていない。この男性と最近男性学の本の翻訳を出された若い男性とのトークが行われたらしいのだが、どうやら異様な雰囲気だったみたいである。その若い男性自身が自分のサイトでおおっぴらに主催者の男性に対する罵詈雑言を書いている。よほど気にくわないことが起きたのか。

主催者の人は男性加害者の支援をしてきた人だ。本人は加害だけではなく被害のことも理解しているのだと言っているが、実際には加害の人の状況しかわかっていない、これでは男性フェミニストだ、そもそもフェミニストで女性加害を問題にする人がいるのか、というようなことがサイトには書かれていた。この部分は確かに俺も共感する。

これまでの男性学の人たちは、男性を加害者と決めつけ、自分たちは男性性の問題から抜け出した進んだ男だという自負心を持っていたように思う。本人たちは否定しても、俺にはそう感じられるのだ。俺は最初から男性性なんて持っていない。女性性の男である。そこが違和感となって、俺はグループから離れたのだった。

⑦フレーミング

2 年ほど前のある日。「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪いわ、って、O さんが言っていたわよ、ははは」と冗談めかして、ある女性が俺に言った。こういうのを「フレーミング」というのだろう。彼女は「ただの冗談」というフレームを装って、俺を傷つけることを言ったのだった。彼女はもうおばさんだし、俺と限らず、色々な人に言いたい放題いう人で、あれでよくトラブルが起きないものだとは思っていた。

それ以降、俺は彼女とほとんど口をきかなくなった。彼女が話しかけても必要最低限の返事しかしない。できる限り彼女の目を見ない。彼女はまずいことを言ってしまったと感

じ取っているはずだ。しかし、俺はわざと彼女には意地悪したいと思う。彼女はフェミニストたちとの交流もあるし、フェミニストがかった女性だ。そういう女性が、冗談であってもこういう台詞を口にするのは許されない。これを許していたら、ますます男性被害は続いていく。

この頃、彼女はもう俺に話しかけてくることはなくなってきた。俺の方も話すつもりはない。彼女がちゃんとした形で謝るまでは。

⑧女性被害者論

11 月 9 日。ヒラリーが大統領選挙に敗れた。

俺もヒラリーを応援していた。俺はリベラルだから元々民主党支持だが、それ以上に彼女が勝てば、「女だから不利だった」という女性被害者論が言われなくなる。そのことを期待していたのだ。案の定、俺の周りの人たちは、女性だから差別したのだ、女を大統領にしたくないんだと彼女が女性であることを敗因にしている。あー、困った。もちろん、女性だから差別があったことは、敗因の一つだろうが、それを他の男女関係にまで広げられるのは困る。大統領の世界なんて、社会の頂上の世界。その下の世界では男だって差別されている。底辺にいる男性は大勢いるのに、そういう男性に対して、男性だから差別されているなんていう人がいるだろうか。

女だから差別された。男が大統領などトップの座に君臨し続ける限り、こういう決まり文句が言われ続けることになる。男は恵まれているやつでも、恵まれていなくても同じ土俵に立たなくてはならないのに。あー、男はやっていられない。

3 .『ビリギャル』(土井裕泰監督・2015)

今回はこの映画を推薦して、終わりたいと思う。えらい大ヒットになった映画である。興行的にヒットしただけでなく、ネットのユーザーレビューも高かった。しかし、俺の率直な感想は出来過ぎ。

実話に基づく話で、成績ビリから慶応に受かった女子を描いていくのだが、親も先生もいい人過ぎるー。それにビリギャルとは言っても、ヤンキーな高校のビリではなく、名門校のビリなわけだから、もともと勉強ができないわけではないしで、そこがちょっと引っかかる。

でも暇つぶしに DVD で見るにはいい。気分のいい話だから、若い子はこういうのが好きなのだろう。俺だって、そうだったなあ。若い頃は希望がある。しかし、幾度かの挫折や絶望を経験しながら、人はどこかに流れ着くのだ。俺は 52 歳で、どうにか自分の人生に納得できるようになった。納得した後は、はて、どういう人生を歩んでいくべきなのか。とりあえず、一日一生。日々を乗り越えるという気持ちで生きるしかない。

男は痛い。でも痛い経験をたくさん積んでいくうちに痛みが快感になってきたのだろう。さあー、10 年後の俺はどうなっているだろうか（笑）！？

徘徊介助犬

いっしょなら、どこでもいけるね。

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《20》

～「セックスレス」に立ち向かう(1)～

袴田　洋子

京子は、47 歳。同い年の夫・弘明と二人暮らし。共に暮らして 18 年になる。子どもには恵まれなかったが、それでいいと思っていた。世の中、子どもがいない夫婦はたくさんいる。子どもがいなくても、いないなりに幸せに暮らしている夫婦は、大勢いる。まるで自分に言い聞かせているような自分の言葉に、ふと引っかかった。「幸せに暮らしている」夫婦。「私は幸せに暮らしている、のだろうか？」どうしても誤魔化しきれないとある事柄が、京子の胸の奥からじわりと広がっていった。京子と弘明は、結婚後まもなくセックスレスになり、18 年が経過していた。

弘明は、一部上場企業のサラリーマンで、結婚当初から、帰宅は毎晩 22 時半過ぎだった。ノー残業デーの水曜日には、18 時半頃に帰ってくるが、５年ほど前に管理職になってからは、残業時間の制限がなくなり、帰宅は、毎晩 23 時近くになっていた。京子は、大学卒業後、薬剤師として大学病院に勤めた。順調にキャリアを積んでいた 28 歳の時、通っていたテニスサークルの仲間から弘明を紹介された。「結婚適齢期」に逆らうことなく、京子が、弘明の職場近くの調剤薬局に転職するという形で新婚生活が始まった。調剤薬局は、自宅から自転車で 10 分ほどの距離にある。地域で長年診療しているクリニックの院外処方の薬局として、毎日、多くの患者が訪れていた。高齢社会の到来に伴い、京子達薬剤師も在宅療養の年寄りの自宅に訪問するようになり、目が回るほど忙しい毎日だが、専門職として使命感を持って働いていた。

「少子高齢化」がテレビで頻繁に言

われるようになった頃、京子は、子どもがいないことにバツの悪い思いを感じていた。子どもがいなくても構わないという、開き直るような思いとは裏腹に、社会的な問題に自分が加担している罪悪感があった。そして、同じ頃、少子化の原因とも報じられた「セックスレス」という言葉に、他人事ではない思いが生じていた。

セックスレスは、「病気など特別な事情がないのに、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが 1 カ月以上ないこと」と定義されている。と考えると、自分たち夫婦は、紛れもないセックスレスだ。何しろ結婚して約 18 年もの間、途中、やっぱり子どもを持ちたいと考えて、排卵日に合わせてセックスした以外、全くしていない。でも、それでも何も不自由は感じていない。別にしたいとも思わない。よその夫婦は、それなりにセックスをしているのかもしれないが、うちは夫も求めて来ないし、私も求めないし、だから何も問題がない。夜は、性欲より、もうただ寝たい。そんな風に考えていた。それが、一変した。京子が更年期障害で、体調不良を感じ始めたことがきっかけだった。

京子が 45 歳の頃、生理が遅れがちになった。同時に、不眠に悩まされるようになった。夜は熟眠感が得られず、日中は集中力が保てず、仕事がこれまでと同じように出来なくなったように感じた。少し早いかもしれないが、職業柄、すぐに更年期かもしれないと思った。婦人科で検査を受けたところ、女性の医師から「血液データ、女性ホルモンの数値結果からみて、更年期、と言ってよいと思います」と言われた。京子に言いにくそうに伝える女性医師の態度が、余計に京子を落ち込ませた。「ああ、もう女、ではないんだ」と思うと、医療の専門職であり、そのあたりの情報や知識は多く持っているとは言え、やはりショックだった。

体調不良の原因が、更年期障害であることらしいとわかり、京子は、近所の心療内科も受診することにした。更年期障害の自律神経失調症のような症状には、デパスが有効、ということを、インターネットで何度も目にしたからだ。最寄りの心療内科の口コミを調べて、電話予約をした。職業柄、よっぽどひどい応対だと感じない限りは、「どこの医療機関も忙しくて大変なのだから」と思うようになっていたが、口コミどおり、受付も医師も、親切で丁寧な対応だった。不眠に対する治療として、予想どおり、デパスが処方された。果たして、不眠は劇的に解消された。しかし、よく眠れるようになったものの、更年期障害特有の、突然に多量の汗をかくホットフラッシ

ュや集中力の低下は、ほとんど改善されなかった。「このまま、確実に老いていくのだ」と考えると、どうしようもない喪失感と焦燥感に襲われた。鬱っぽくなってしまうのも、更年期障害のひとつだと考え、とにかく一日一日を乗り切るように、過ごすようになった。

薬局の同僚たちも、京子の体調を気遣い、先輩は励ましてくれた。「いつかは終わるから大丈夫。あと 10 年でスッキリするから！」と言う励ましになっているのかいないのかわからないようなことを言われ、大笑い出来ることは、有難いことだった。そんな女たちの豪快な話に、やや困惑したような顔をしながらも穏やかに聞いている古川は、薬局内で一番若い男性職員だ。若いと言っても、京子から見たら若いのであって、4 歳になる子どもがいる 32 歳の父親だ。そのソフトな話し方と謙虚な態度は、年寄りに限らず、どの患者からも評判だった。京子は、古川の仕事ぶりに、いつも感心していた。

そんな古川が、昼休み休憩に入った際、嬉しそうにスマホの写真を皆に見せた。「二人目が生まれました！」と言うその手元の画面には、産着に包まれた赤ら顔の新生児が写っていた。京子は、衝撃を受けた。子どもが生まれたってことは、セックスをしたと言うことだ！あの、真面目な、シャイな、イヤラシイことなど微塵も考えないような古川さんが、セックスをしたと言うことか！あの古川さんにも、性欲があるのか！と真剣に驚き、混乱した。謙虚な、真面目な、シャイな人でも、性欲がある。京子は、改めて自分の性欲について、考え込んだ。「私の性欲って、どうなっているのだろう？」

★★周旋家日記 20★★

「キャリア形成について考える⑨ ートランプ勝利から見えてきたこと

乾明紀

1. アメリカ大統領選の衝撃

11 月 8 日に行われたアメリカ大統領を決める一般投票は、大方の予想を裏切りドナルド・トランプ氏が勝利した（図 1）。

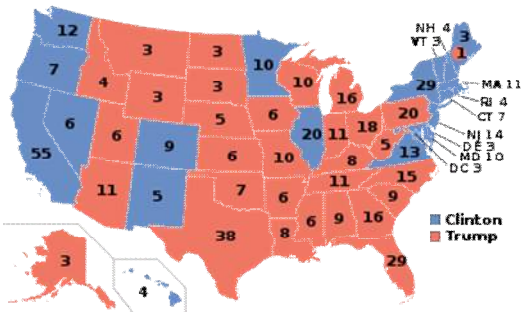


図1　2016 年　アメリカ大統領選挙（一般投票）の結果（Wikipedia より）

日本で暮らしていると、メディアを通じてアメリカの国内事情を理解し、その報道を通じて大統領選の行方を予想することになるが、トランプ氏は当初共和党の泡沫候補にすぎなかった。

不動産ビジネスで成功し、人気テレビ番組の司会者でもあったトランプ氏はセレブリティ（著名人）ではあったが、政治家としての実績は全くなかった。しかも過激な言動が多く、オバマ大統領が誕生した際の感動を記憶している者からすれば、対立を煽る彼の言動は受け入れ難いものがあった。

しかし、トランプ氏は勝利した。共和党の泡沫候補と言われた彼が、アメリカ初の女性大統領を目指したヒラリー・クリントン氏を破ったのである。

このニュースは、イギリスの国民投票による EU 離脱と同様に驚きをもって迎えられた。

民主主義の先進国で行われたイギリスの国民投票もアメリカの大統領選挙も最後は“良識”ある判断を国民が行い、EU 残留、クリントン勝利という結果が大方の予想ではなかっただろうか。

2. トランプ勝利の背景

イギリスの国民投票とアメリカの大統領選挙（一般投票）では、制度が異なるため民意の反映方法が異なる（アメリカ大統領選挙の一般投票は、一部を除いて州ごとに大統領を選択するため、多くの州を制したトランプ氏が勝利したが、得票率あクリントン氏の方が多かった）が、ルールどおりの“結果”から見れば、国民は現状の枠組みに“NO”を突きつけ、政治に大きな変革を求めたことになる。

なぜ多くイギリス人やアメリカ人が政治に変革を求めたのだろうか。ここでは反トランプ、反共和党であったマイケル・ムーア監督が 7 月の時点で語った“トランプ氏が勝利する5つの理由”を紹介しながら、その背景を見ていきたい。トランプ勝利を予想した数少ない日本人ジャーナリストの一人木村太郎氏は、このムーア監督の見立ても大いに参考にしたという。

マイケル・ムーア監督は、「ボーリング・フォー・コロンバイン」や「華氏 911」などのドキュメンタリー映画を製作したことで知られ、アポなし取材によってアメリカ社会や政権の問題点に鋭く切り込む作品は高い評価を得ている。「華氏　911」では共和党のブッシュ政権を痛烈に批判した彼が、一般投票の 4 か月前には次のようにトランプ氏の勝利を予想していたのである[1]。

理由①：中西部の票数、ラストベルトに歓迎され

[1] http://michaelmoore.com/trumpwillwin/
日本語訳
http://www.huffingtonpost.jp/michael-moore/5-reasons-why-trump-will-win_b_11254142.html

ている

ラスト（rust）とは金属の錆のことを指す。かつて自動車産業などの製造業がアメリカ経済を牽引していたが、1960 年代以降の自由貿易の拡大（経済のグローバル化）により産業の構造変革を求められたきたのがこの中西部だ。製造業で働く人々が多かったミシガン、オハイオ、ペンシルベニア、ウインスコンシンは、労働組合も強く民主党支持者が多いブルーステート（民主党の州）であった。

しかし、ムーア監督は「このあたりの人は、イングランドの中流階級と同じだ。疲弊して、元気がなく、苦しんでいる」という。そして、クリントン氏が NAFTA（北米自由貿易協定）と TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）を支持したことで、自由貿易（経済のグローバル化）の恩恵を受けることができなかった 4 つ州の票がトランプ氏に流れることを予想した。

また、「トリクルダウン理論」[2]に騙されて辛い思いで働いている（あるいは働き口がない）」労働者は、「怒りのメッセンジャー」としてアウトサイダーのトランプ氏に票を投じるとも彼は言った。

経済のグローバル化に伴う貧富の格差を是正できない政治に対する不満が先進国に渦巻いている。また、中流階級の先行きに対する不安も高まってきている。この中流階級の怒りや不安が、「EU 脱退」やトランプ氏の勝利を後押しした。

理由②：白人男性の最後の抵抗

ムーア監督は、アメリカで 240 年間続いていた男性主導社会の終焉が、白人男性をトランプ氏支持に走らせたという。男女教育機会均等法以降、女性の社会進出が進み、パイロットにもなれる時代となった。男性中心の考えは容認されなくなったと男性自身も認識している。しかし、フェミニストに征服されることに抵抗を覚える白人男性にとって、黒人大統領に 8 年間耐えた後の女性大統領の誕生は受け入れ難く、「その後の 8 年間は、ゲイがホワイトハウスに入るのか！ それからトランスジェンダーか！」というのが彼らの本音でもあるという。

今回のトランプ氏勝利の背景に、オバマ政権下で加熱した「ポリティカル・コレクトネス」[3]への反発がある。俳優で映画監督でもあるクリント・イーストウッドは、「俺たちは今、お世辞だらけの時代に生きている」と過剰に自己規制を求める社会を批判し、トランプ支持を表明した[4]。

理由③：ヒラリーの問題

ムーア監督によると、ヒラリー氏は旧来の政治の象徴であり、有権者の約 70%が、彼女を信用ができない不誠実な政治家だと考えているという。そして、ミレニアル世代[5]の若い女性が最大の反ヒラリー派になっていると指摘する。

皮肉にも若い女性の多くが、元ファーストレディで大金持ちのヒラリー氏を自分たちのような女性を代表する候補者ではないと考えているのだ。

理由④：意気消沈したサンダースの声

民主党の予備選挙で善戦したバーニー・サンダース氏。社会主義者と揶揄された彼の政策は（富裕層への増税、公立大学の無償化など）は、高い学費（学生ローン）に苦しむ多くの若者から

[2] 富める者が富めば、やがて貧しい者まで富むという経済理論

[3] 差別や偏見を含む表現をおこなわないこと

[4] http://www.esquire.com/entertainment/a46893/double-trouble-clint-and-scott-eastwood/
日本語訳
http://www.huffingtonpost.jp/2016/08/05/-clint-eastwood-donald-trump_n_11345598.html

[5] 2000 年以降に成人または社会人となった世代。デジタルネイティブで SNS などに慣れている一方で、経済のグローバル化に伴う貧富の格差に直面した世代。

高い支持を得た。

しかし、ムーア監督は、サンダース氏を支持した若者が自分たちの思いを民主党候補となったヒラリー氏を通じて国政に反映しようとしていないと指摘する。若者の怒りの声は、「意気消沈」してしまっており、サンダース支持者が積極的に投票行動をすることはないと予想した。

オバマ大統領誕生の際には、熱狂的な若者の支持と行動があったが、ヒラリー氏は最後まで若者の心を掴むことができなかった。若者がオバマ政権に失望していたという不利もあったが、若者に未来を示すことができなかった。

⑤ジョシー・ベンチュア効果

ムーア監督は、プロレスラーのジョシー・ベンチュア氏がミネソタ州知事に選ばれたことを引き合いに、病んだ政治体制の怒りに対する「有権者の何かしでかしてやろうというパワーを過小評価してはいけない」と指摘する。彼らは「パパやママをこまらせてやろうっていうくらいの気持ち」で現状を打破するためにトランプ氏に投票するのだという。

日本でもかつて民主党政権を誕生させた熱狂や大阪維新の会の躍進を支えた民意ははこれに近いと言えるだろう。

3. ローカル経済の発展に向けて

イギリスやアメリカで起きた国民の“反乱”の背景には、政治がグローバル経済の恩恵を受けない大多数の国民（特に中流階級や若者）の不満や不安を解消できていないことにある。日本では、期待した民主党政権に裏切られたこともあって、現政権（安倍政権）への支持は高いが、アベノミクスのトリクルダウン戦略で日本経済全体が良くならないことは証明されつつある。

政治は、国内を主戦場にする非グローバル経済（ローカル経済[6]）の発展やそこで働く人々の幸せを一層真剣に考える必要があろう。円安や株高誘導ではないローカル経済のための経済政策も重要だ。ローカル経済の雇用はジョブ型が多いため、メンバーシップ型とは異なる雇用イメージを持って労働政策を考える必要もあるだろう。

また、ローカル経済は公共サービスに関する事業も多い。税制と一体となった議論が必要であるが、保育や介護などで働く人々がポジティブなキャリアビジョンを描けるような制度の構築も急務である。日本の GDP と従業員の約 7 割は、ローカル経済で働く人々である。このボリュームゾーンの活力を高めないと日本全体は元気にならない。トランプ氏の保護主義的な発言は、ローカル経済で働くボリュームゾーンを元気づけるのが狙いだった。

しかし、“グローバル VS ローカル”、“金持ち VS 大衆”などの二項対立の構図には注意が必要だ。対立を煽って国民を分断してはいけない。グローバル企業をバッシングしてもローカル経済が好転することはない。他国のグローバル企業にシェアを奪われるだけだ。また、ローカル企業に対する過度な保護政策も企業の新陳代謝の妨げになるためマイナスだ。ブラック企業やゾンビ企業を無くし、より生産性の高い企業を作っていくことも大切だ。

ローカル経済の課題は、短期間で成果を上げることが難しいものも多いだろう。しかし、ローカル経済の課題を着実に解決していくことが、これからの先進国の首脳には求められている。

[6] 冨山和彦（2014）「なぜローカル経済から日本は甦るのか」（PHP 研究所）ローカル経済に関する考えは本書を多いに参考にした。

トランスジェンダーをいきる

（19）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

名前と自称詞（後編）

1　始めに

今回は、「名前と自称詞」の後編として、体・書類上の性別は女性、ジェンダーの性別は男性である筆者が、戸籍上男性名を取得したことで、どのような自己変革をしていったかについて詳述する。その自己変革の過程で、名前と言うものが、いかに自己にとって重要であったかに気づかされる。それまで忌み嫌っていた「泣く」ということを再評価した上で、「男泣きに泣く」ということを反復経験することで、さまざまな場面で今までとは異なった視点に出会う。

なお、名前を変更することを一般的には「改名」というが、本稿では「（男性名に）戻す」と表現する。「改名」という言い方は、女性から男性に「変える」というニュアンスが強い。社会的にみれば確かにそうだが、筆者の立場としては、もともとジェンダーが男であるため、そのような自己に女性名を付与したこと事態が間違っている、だからジェンダーが男である筆者には、男性名を付与しなおすのは当然、という考え方から、「（男性名に）戻す」と表現することにしたのである。

2「男泣きに泣く」というプロセスを反復経験することによって自覚した男性としてのアイデンティティー確立

男性名である「孝治」という名を通称名として使用したころから、急速にこの名前への親近感が沸き、友人たちとの関係も良好になってきた。また、通称名として使用した名前が、約８ヶ月ほどで公的に承認されたのは異例の早さであったことは、筆者が行っている自助グループの人たちの話で明らかになった。

公的に男性名が認められて以降、しばらくの間、「男泣きに泣く」日々を送った。それは、一人きりの自宅であっても、友人に男性名に戻したことを知らせる手紙を書いていても、また自助グループや各種コミュニティーの中で男性名に戻したことを知らせている際も、名前の話になると、ひとりでに涙がこみ上げてきた。そのような中で、一人私と一緒に涙を流しながら喜んでくれた男の友人がいた。在日朝鮮人の彼は、日本名から朝鮮名に戻すために、約 20 年間裁判で戦った

という経歴を持っていた。そのため、筆者の名前が公的に男性名に戻ったことを喜んでくれた。

彼との出会いを通じて、筆者は子供時代を振り返る。なぜ、在日韓国・朝鮮人には、日本名と朝鮮名の 2 つの名前を持っている人たちがいるのか、彼ら・彼女等は、なぜこの 2 つの名前の間でもがき苦しむ必要があるのか、なぜ私には 1 つの名前しかなく、それもなぜ女性の名前が付けられているのか、、、。彼との出会いの中で、私は子供のころから、名前にこだわっていたこと、を思い出したのである。

このようにして、あちこちで男泣きに泣きながら男性名に戻したことを知らせていたとき、あることに気づかされた。それは、自己の名前を公的に男性名に戻したことによって、通称名として使用していたときと比較して、更に男としてのアイデンティティーが確立してきた。しかも、その確立の仕方は、ただ男性名に「戻した」というだけに留まらず、「男は強くたくましく、人前で涙を流さない」という、従来の自己の男性性への疑問を呈するようになった。特に、「人前で泣く」という行為は、悪しきもの、恥ずべきこととして忌み嫌い、排除してきた筆者が、「男泣きに泣く」という経験を繰り返したことで、「泣く」という行為への恥ずかしさが少しばかり軽減してきた、といえるだろう。

3 産婦人科への通院時に気づいた「ある異変」

公的に男性名に戻し、「男泣きに泣く」というプロセスが一段落したある日、性同一性障碍の診断に必要な要件に関わって産婦人科に通院したとき、ある異変に気づいた。

待合室で待っているときである。女性ばかりの患者の中に、男の私が一人ぽつんといるような心理状態には変わりはなかった。だがそのような状況の中で、次のような疑問が沸きあがってきた。妊娠している人、子宮・卵巣・乳房などの婦人科疾患を持っている人、不妊治療を受けている人など、一つの待合室にランダムに集められているが、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているのではないか、ということである。つまり、社会が女性をひとくくりに「子どもを産む性」として規定しているとすれば、何らかの理由で子どもを望んでも産めない人、中絶を余儀なくされている人、そもそも子どもを望まない人など、「社会が規定した産む性」にアクセスできない、アクセスしたくない人たちが、妊娠している人たちと待合室を共にするということが、彼女たちにどのような心理状態をもたらすのかということである。では、なぜそのような疑問が沸きあがってきたのか。機能異常のない子宮・卵巣・乳房を有している筆者の身体が「女性であるから」ではなく、そのような自己の身体と「孝治」という自己の男性名との間に一定の距離ができたことで、新たな思考変動によって、従来嫌悪していた女性たちへの共感を示す余裕が生まれてきたからかもしれない。今までただ嫌悪していた「産婦人科」という場に改めて焦点を当ててみたとき、それまで気づかなかった産婦人科の不備な点や残酷な一面が見えてきたといってもよいだろう。

4 男性名を武器として使用することによる、他者の視聴覚的自明性の崩壊へ

名前を公的に男性名に戻したとはいえ、現時点ではホルモン療法や手術療法といった医学的治療を受けていない筆者の姿は、他者の視聴覚レベルでは女性であると規定される。しかし、だか

らといって、そのような他者の視聴覚レベルで、自己の性別を勝手に規定されてよいはずがないと筆者は考えている。いや、かえって他者から不用意に自己の性別を規定される行為は、筆者にとっては不条理である。そこで筆者は、他者からのこのような不条理な扱いを是正するための役割を果たしているのが、やはり自己の男性名である。この場合、上記2つの自己の男性名の意味する事柄とは異なり、他者から女性として規定された場合の武器弾薬としての意味が含まれている。すなわち、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者への行動として、自己の男性名を文字情報として提示することによって､他者が筆者の体を視聴覚的に規定した女性という性別と、文字情報として提示した男性名である「孝治」という名前との間で右往左往し、著しく混乱を起こし、ひたすら謝っている姿は、筆者からしてみると、自ら男性であることを証明するという役割を果たしたことになるだろう。それだけではなく、視聴覚レベルで自己を女性と規定した他者の自明性をも崩壊させるという構造をなしている。このような戦法で自己を女性と規定した他者と向き合ったとき、視聴覚レベルでの自己の性別と、文字情報で提示した名前の性別との不一致に不安を抱いたり、ひたすら謝っている他者に対して、個々人の視聴覚を疑うことなく他者の性別を規定する権利はないということをとうとうと語り、また、個々人の視聴覚を疑わないことそれ自体に「障碍があること」などをことごとく主張した上で、そのような他者の前でひたすら「勝利感」を抱いている筆者の存在は、ともすればそれでも、何がしかの疑問を抱いているかもしれない他者からすると、納得がいかない奇異な存在に思えるかもしれない。それでも筆者は、他者の視聴覚レベルによる自明性を根底から崩壊させたという目的達成によって、自己の男性名が他者への武器弾薬として他者に正しく認識されたと筆者が認識したとき、他者が筆者の前でひたすら謝りながら、個々人の視聴覚レベルの未熟さや恥を、筆者の前で露呈させたことへの反省の言葉や態度を筆者が目の当たりにすることができたということへの優越性が「勝利感」へと繋がっていくのであると筆者は信じている。

ただし､このような目的達成を得るためには､｢孝治｣という筆者の名前が男性名であることを、筆者の姿を視聴覚レベルで女性と規定した他者との間で共通認識があること、戸籍の性別が女性であるため、住民票や保険証などの戸籍と連動している公的書類の提示を不可とし、性別記載が男性であるものまたは性別記載がない書類に限ることにも留意しなければならない。

5 終わりに

「やっと、自分の名前に誇りが持てるようになりました」と、堂々と胸を張って言える様になったのは、公的に男性名に戻して1年も経つか経たないかぐらいだっただろう。その一方で､「あなたのように名前にこだわるのはおかしい」と言われたこともあった。だが、筆者は言う。「名前とは人格である。だから、自分の名前にこだわるのは当然。名前で苦しみ、名前で苦労した分、その後の喜びはどれだけ金を積んでも買えるものではない。だから俺は、これからも自分の名前に誇りを持って生きていきたい」。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１９）

岡崎　正明

（広島市）

番外編

～ノーベル賞とあの事件とハイエナ～

ノーベル賞

今年のノーベル医学・生理学賞に、大隅良典さん（東京工業大学栄誉教授）が選ばれた。細胞が不要なたんぱく質などを分解する「オートファジー」という仕組みの解明が評価されたのだ。

エラそうに書いているが、ニュースの受け売りである。当然だが受賞のニュースを聞いて初めて、大隅さんという方の存在も、オートファジーという名前も知った。ついでに言えば「栄誉教授」という肩書も私は初めてお目にかかった。名誉教授ならよく聞くのだが、何か違うのだろうか。いずれにしても自分には縁遠い世界だろうから、分からなくてもあまり心配はいらないが。

おめでたい話だし、受賞のインタビューに夫婦で出ておられた様子など見ると、とても好感が持てた。ただ、昨日まで全く知らないおじさんが賞をもらったことに、なぜ私たちはこんなに嬉しくなったり、身内のような親近感を覚えたりするのだろう。知り合いでもなけりゃ、同郷でもないのに。ふと、そんな考えが浮かんだ。

おそらくそれは彼の見た目やしゃべる言葉や雰囲気、そこから感じられる文化が、私たちに「仲間」を意識させるからなんだろう。でも世界では同じ国籍でも、言語や文化が違うなんことはザラなわけで。そんな風に思考の脱線を楽しんでいると、受賞

したこと自体は本当にすごいことだし祝福したいが、それで急に「同じ日本人として誇らしい！」「すごいぞニッポン！」ってな気分になるのは、ちと違う気がした。「俺の友達パイロット！」「ご先祖様が上流階級なんで」いうのと変わらん気がするし、変な副作用のほうが気になる。

話がそれたが、大隅さんがどこかのインタビューで、基礎研究への人的・経済的投資が減っている現状をとても危惧しているとの話をされていた。今大学などの研究の世界では、成果主義の影響を受け、成功すればすぐに世の中の役に立つと思われるものや、実用的な研究でなければ補助金や予算がなかなかつかないらしい。そのことを大隅さんは以前から大変懸念していたそうで、ここぞとばかりに語っておられた。

「私は『役に立つ』という言葉はとっても社会をダメにしていると思っています。科学で数年後に起業化できることと同義語みたいにして使われる『役に立つ』って言葉は、私はとっても問題があると思っています。本当に役に立つことは、10 年後かも 20 年後かもしれないし、実をいうと 100 年後かもしれない。そういう社会が将来を見据えて、科学を 1 つの文化として認めてくれるような社会にならないかなということを強く願っています」

これまで「いち研究者のボヤキ」として見過ごされてきたものが、「ノーベル賞受賞者の金言」として世間の注目を集める。本人にとって受賞そのものと同じくらい嬉しいことなんではないだろうか。私は勝手にそんなことを感じ、ますますこの髭のおじさんが好きになった。

それと同時に、また思考の脱線が始まり、あの事件のことを思い出した。

あの事件

今年 7 月。相模原市にある障害者施設でおきた事件はマスコミに大きく取り上げられ、私たちに衝撃を与えた。

戦後の殺人事件として最多の 19 人の死者と、２７人もの負傷者を出したのだから、当然と言えば当然だ。しかしオウム事件やその他のセンセーショナルな殺人事件と違い、報道は熱を帯びるというよりも、むしろ不気味な静けさをもって通り過ぎていった。それはおそらく、この事件の被害者たちが自ら語り、訴えることができない、そして家族や知人も語ったり、訴えたりすることが中々されない現実と、決して無関係でないように思う。

これだけの被害が出たにも関わらず、結局被害者の名前は匿名とされたことも、事件と障害者を取り巻く状況が、通常一般とは異なる環境に置かれていることを物語っていた。

私たちが衝撃を受けたのは死者の数はもとより、容疑者が事件前に周囲にもらしていた主張や、事件後に語ったとされる動機のほうだろう。

報道によれば「障害者の安楽死を国が認めてくれないので、自分がやるしかないと思った」「障害があって家族や周囲も不幸だと思った。事件を起こしたのは不幸を減らすため。同じように考える人もいるはずだが、自分のようには実行できない」などと

供述したという。
　また、事件を起こす５ヵ月前の２月には、衆議院議長宛に以下のような手紙も出しているとのことだった。

> 私は障害者総勢 470 名を抹殺することができます。
> 常軌を逸する発言であることは重々理解しております。しかし、保護者の疲れきった表情、施設で働いている職員の生気の欠けた瞳、日本国と世界の為と思い、居ても立っても居られずに本日行動に移した次第であります。
> 理由は世界経済の活性化、本格的な第三次世界大戦を未然に防ぐことができるかもしれないと考えたからです。
> 障害者は人間としてではなく、動物として生活を過しております。車イスに一生縛られている気の毒な利用者も多く存在し、保護者が絶縁状態にあることも珍しくありません。
> 私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です。
> 重複障害者に対する命のあり方は未だに答えが見つかっていない所だと考えました。障害者は不幸を作ることしかできません。

　最初に断っておきたいが、今回この話題を扱うことには、正直迷いがあった。今も、それがまったくないとはいえない（言いたいことは山ほどあるが、言っても空虚なだけではないか。その上、自分の思いがきちんと正しく表現できるのか。そんな不安がある。しかし同時に、その反作用のように「書かずにはおけない」という何かが膨らんでいる状態）。
　私は彼のことを何も知らない。生い立ちも、趣味も、家族関係も、悩んでいたことも。だからあまり推測だけでアレコレと軽率に言いたくないし、言える立場ではないと思っている。
　ただ、手紙の内容やそれにまつわるエピソード・言動など、報じられている内容からは、「誇大妄想」や「関係妄想」といった言葉が浮かび、なんらかの精神疾患の存在も想像された。だがはっきりとしたことは分からないし、その症状と事件との因果関係も不明だ。少なくともこの情報量と私程度の専門性で、容易く語れるようなものでもない。

　私の短い対人援助職としての経験や、少ない人生経験から想像してかろうじて分かるのは、おそらく彼が事件当時「孤独」であったということ。もちろんツイッターやフェイスブックなど、人とつながるツールは用いていたし、飲み友達はいてそれなりに遊んではいたようだ。
　しかしバカ騒ぎできる知り合いはいても、彼がその苦悩やしんどさを打ち明け、相談できる人や、彼の異変に気づき、手を差し伸べる人は周囲にはいなかった。それはだけは間違いない。

　どんな理由があっても、病気や障害の有る無しにせよ、起きた現実と向き合うことは避けられない。彼は自分の犯した罪を償うことになる。

それがどういう形になるかは、すでに司法制度に委ねられた。私としては、彼が少しでも心から罪を償えるようになることを、祈るくらいしかできない。事件の関係者でもないのだから、当然といえば当然だ。

だが同時にこうも思う。彼が起こした現実から逃れられないのと同様、私たち外野も、事件以前の、事件が起こっていない社会には、もう戻れない。当たり前だが、事件以後のこの社会を生きていく。そういう意味で、事件と無関係な存在ではありえないのではないか。

実際に最近仕事で訪ねた複数の高齢者施設で、セキュリティの見直しを考えているとの話を聞いた。事件が起こるまでは考えなかったことや、事件によって生まれることになった課題に、私たちは程度の差はあれそれぞれ直面し、反応し、影響を受けて暮らしていくことになる。

事件報道を見た私の最初の反応は、まさしく「恐怖」そのものだった。それは私が今まで、障害者として生きてきたことと、無関係ではないだろう。背筋に冷たいものを感じるというのは、このことなのだと実感した。だがそれは、得体の知れない未知のものに遭った感覚ではなく、「ここで、こんな形で出てしまったか」という、むしろこれまでも見知っていたものに、意外な所で出会ってしまった、驚きのようなものを含んでいた。

彼の発想そのものは、人類の歴史から見るとべつに目新しいものではない。有名なところでは彼も名前を出したという、ヒトラー率いるナチスによる障害者の大量虐殺だ。ナチスは障害者の安楽死政策を大規模に行い、20万人以上が犠牲になったともいわれている。日本でも優生保護法という法律が、つい最近の１９９７年まであった。この法律は不良な子孫の出生を抑制することを目的に、ハンセン病患者や知的障害者への断種や堕胎を進めることとなった。そしてこれらの政策の根本である「優生学」「優生思想」は、遡れば古代ギリシアまでその起源を求められるという。

彼の主張や優生思想を分かりやすくいえばこういうことだ。

「障害者は『失敗作』で『不良品』である。どこかが欠けていたり、一定の水準を満たしていなかったりして、社会の『役に立たない』。おまけに世話をしたり、食事を与えたりしなければならず、『手間』も『時間』も『お金』もかかる。経済的な『重荷』で、『足手まとい』な存在である。

だからより『効率のよい』社会にするため、障害者を無くしてしまったほうが良い。

そしてより『優秀』で『質の良い』人間が増えるようにした方が、社会が繁栄するはずである。その方向に社会は力を注いでいくべきである」

私たちはこの理屈に、どれだけ大きな声で「ＮＯ」がいえるだろう。

ひどい考え方だと思うし、間違っているとも思う。しかしこの理屈が、どこか理解できてしてしまう自分がいる。合理的で、少なくとも論理的破綻はないと納得してしまう部分がある。そしてそう思う自分が、とてつもなく恐ろしくなる。

市場経済の社会で暮らす私たちは、普段から「効率を重視し生産性を高める」ことや、「無駄を省いて均一の出来ばえを維持する」ことは、正しいことである、良いこと

であると教えられてきた。そしてその思想は、資本主義や工場生産の場にかぎらず、自然界においてもなんとなく通じるもののような気がしている。効率的で優秀なものが、弱肉強食の生存競争を生き抜いていく。それが常識だと思っている。
　だから私たちは子どもを授かれば「五体満足と健康」を祈るし、普段「働かざる者食うべからず」という言葉を使う。
　作家の曽野綾子が、野田聖子の子ども（重度障害児）が高額な医療を受けていることについて、「自分の息子が、こんな高額医療を、国民の負担において受けさせてもらっていることにたいする、一抹の申し訳なさか、感謝が全くない」と批判したエピソードも含め、底に流れている考え方は共通しているように、私には思える。

　そう考えると、狂気の人間が起こした特異な事件として終わらせることは、できない気がする。私たちは彼と価値観を共有する部分を持ち合わせている。それは社会に普通に存在している。
　私たち自身の中に、彼の「種」は存在するのではないか。
　東京大学教授で、全盲で全ろうの福島智さんは、こんなことを述べている。

「なぜ、これほど心が痛むのだろう。なぜ、これほど恐れを感じるのだろう。（中略）私たちと容疑者が、まったく無関係だとは言い切れないと、私たち自身がどこかで気づいてしまっているからではないか。容疑者は衆議院議長への手紙で、障害者を殺す理由として、「世界経済の活性化」をあげた。障害者の存在は、経済活性化を妨害するというのだ。しかしこうした考えは、私たちの社会にもありはしないか。労働力の担い手としての経済的価値で、人間の優劣が決められる。そんな社会にあっては、重度障害者の生存は軽視されがちだ。そしてほんとうは、障害のない人たちも、こうした社会を生きづらく、不安に感じているのではないか。なぜなら、障害の有無にかかわらず、労働能力が低いと評価された瞬間、社会から切り捨てられるからだ。障害者を刺し殺した容疑者のナイフは、同時に、私たち一人一人をも刺し貫いている」

　「差別は許されない」「非人道的だ」。ワイドショーのコメンテーターは声高に語っていた。
　しかしそんなものは、センチメンタルなヒューマニズムに過ぎないのではないか。
　「優しさ」や「思いやり」は、理想ではあるかもしれないが、生存していくために不可欠なものではなく、所詮オマケなのではないか。
　そんな猜疑心が、私の中で拭いきれないでいる。
　彼の犯行を作り上げることに間違いなく一助をもたらしたであろう、私たちの社会の底に流れるもの。それは本当に正しいのだろうか。太刀打ちできる反論は、存在しないのだろうか。

ハイエナ

　話しがまた脱線するようだが、以前 TV でハイエナの特集をやっていて、以来この不格好な動物が好きになった。
　その名を聞いて、多くの人はあまり良いイメージを持たないかもしれない。「狡猾」「横取り」「サバンナの掃除屋」。ライオンキングが思い浮かぶ人もいるだろう。

しかし実際のハイエナは、群れで狩りをする優秀なハンターだという。エサの６割以上は自分たちで狩りをして獲る。ちなみにライオンは、６割は他人が獲ったものを横取りするらしい。アニメとはえらい違いだ。

ハイエナは群れで生活している。メスが強い女系社会。その次が子どもで、オスの序列は１番下らしい（そのあたりに共感を抱くのも事実ではある）。

ハイエナが面白いと思うのは、群れでの序列が年を取って衰えたり、怪我をしたりしてもそうそう変わらないところ。なので足が１本使えなくなった障害者ならぬ「障害ハイエナ」も、エサの分け前を貰えて生きていけるのだという。これは自然界ではとても珍しいことらしい。中には妊娠出産までする個体もあるという。

また、ハイエナの子育ては協同で行われる。乳が出るメスは、自分の子に限らず、乳を欲しがる子どもに誰でも乳を与えるというのだ。これも他の動物にはなかなか見られない。おかげでハイエナの子どもは、子育てが下手だったり、乳の出が悪い母親でも、ちゃんと育つのだという。ハイエナの子どもが大人になれる確率は、他の野生動物と比べて高いといわれている。

その結果ハイエナは、サバンナでもっとも繁栄している（個体数が多い）肉食動物らしい。サバンナの王者は（女王といったほうがいいかもしれないが）、実はライオンではなくハイエナなのである。

脱線ついでにこんな話もある。これも TV で見た内容だが、７万年ほど前、地球は大規模な火山活動により気候変動が起こり、２年で１２度も気温が下がった。それにより、当時いた人類の祖先も多くが食糧不足などで絶滅したという。

そんな厳しい環境の中で、唯一生き残ったわずかな人類のグループ。その特徴は、どんな環境にも耐えられるたくましく強靭な肉体…などではなく、意外にも「分かち合う」「分け与える」という行動だったというのだ。

サルの仲間には群れを作るものが多いが、エサは強い者から取っていき、弱い者はおこぼれをあさる。それが基本だ。しかし厳しい時代を生き残った人類のグループがとった戦略は、そうではなかった。群れの中の弱いもの、力のないものにも食料を分け与えた。そうすることで、群れ全体が生き残る確率を増やしたのだ。

そしてその結果が、今のこの人類社会なのだ。

現代の私たちは、他人の立場に立って涙したり、知らない人に募金をしたり、助けを求められたら手を差し伸べようとする。私たちが相手を思いやったり、弱きものを守ろうとするのは、ただの理想やセンチメンタリズムではない。DNA に刻まれた本能的なものなのだ。

ハイエナと人類の祖先。

両者の生き方から見えてくるのは、世界は短絡的な弱肉強食なんかで作られてはいないということ。そして「生命」というものは、根本的に自由で豊かな選択肢（多様性）を持つ存在なのだということだ。

競争に勝ち、己が生き残ろうとする。それも無論人間の生き物としての本性だろう。だが分かち合い、助け合っていく力も、私たちか弱き人類が、長い歴史の中で獲得した、私たちらしさなのだ。思いやりや優しさは、私たちの本性の一部なのだ。

これが彼の主張と私たちの社会の底に流れるものへの、今の私なりの答えであり、ささやかで堂々とした反論である。

ノーベル賞を受賞した大隅さんはこう言っていた。

「『役に立つ』という言葉はとっても社会をダメにしている」。

大隅さんは、社会が今日からせいぜいこの先１０年ほどの物差しで、世の中のすべてを査定しようとする態度に、強く警告をしている。私たちが普段使う「役に立つ」が、一面的で、短絡的で、偏りやすいことに気付いている。そして「役に立つ」もの、「優秀」なものだけを大事にし、そうでないものを粗末にする社会が、自由と弾力性に欠けるもろい社会だと分かっている。

ノーベル賞受賞者が、自分と同じような答えを出していることに、少しだけニヤリとしている。

発達相談②

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑰

大谷　多加志

今回のテーマは「発達相談②」です。対人援助学マガジン 23 号で「発達相談①」と銘打った時には自分の中に「発達相談②」の心づもりがあったような気がするのですが、一旦関心が違うところに逸れていたようで、実は「発達相談①」としていたことも若干忘れかかっていました。そんな訳で、当初思っていた内容とは少々異なるのかもしれませんが、今回は「発達相談①」で取り上げた、「発達の見立て」と「支援」に続いて、「検査所見」と「助言」をテーマにしてみようと思います。

検査をどうとらえるか

K 式発達検査の講習会では、いつも初日に懇親会を設けています。全国各地から、さまざまな職種、職域の方が集まっておられるので、受講生の方同士の交流や、ネットワーク作りにつながれば、ということを意図しています。講習会を通して知り合い、その後も研修や実践に関することで互いに連絡を取り合っておられるお話や、巡り巡って同じ職場で同僚になられたお話など、懇親会を通じて生まれたつながりについて、後々教えて頂く機会もありました。

その懇親会の中で、講習会を受講した動機についてもお話頂くのですが、その「動機」の中で定期的に聞く言葉があります。語り方は人それぞれなのですが、要約すると『支援を必要としておられるお子さんがいるのだけれど、保護者の方に説明しても受け入れてもらえない。検査で客観的な根拠を示すことができるようになれば、保護者の方に納得してもらうことができると思って受講しに来た』という内容になります。この「動機」を聞くと、遠くから時間をかけて講座を受けに来てくださった方ですし、熱意とお気持ちがわかるので少々言いにくいのですが、『残念ながら検査の講習会を受けても、お困りのことは解決しないだろうなぁ…』と心中で思っていたりします。

保護者の方には、検査のことをさほど重要視しない方もおられますし（マガジン第 10 号で述べたように、検査用具の積木を出したときに『もっと脳の活動とかを機械で調べるのかと思った』と、がっかりされた経験もあります)、課題ができたりできなかったりするのもその時の機嫌や関心の問題と捉えられる場合もあります。実際、検査場面においてもそのような要素が含まれるのは否定できませんし、検査の解釈においては十分に留意すべき事柄でもあります。

反対に、こちらが思う以上に検査結果を重視される保護者の方もおられます。検査者の悩みとして『検査は子どものよい所を

知るために行うものだから、数値にとらわれずにポジティブに捉えてほしいのだけれど、やはり数値に一喜一憂される方もおられて…。どういう伝え方をしたら、前向きに受け取ってもらえるでしょうか？』というものもあります。これも検査者と保護者とで「検査」への認識が異なる例の１つです。

以下、助言や検査所見など、検査を実施した後の結果の伝え方を巡る検査者の葛藤や迷いについて、少し整理してみようと思います。

助言の方針

時折、『こういう検査結果だったら、どういう支援や助言をしたらいいですか？』と聞かれることがあります。しかし、K 式は特に理論化された機械的な解釈や支援の導き出し方があるわけではないので、回答としては『個々のケースに合わせて考えてください』というしかないのが実情です。『解釈や助言についてまとめた書籍はないですか』という声もありますが、そういう書籍もありません。検査を使われる方には、少々不親切に思えるかもしれません。

そのこともあってか、他の検査や発達支援の考え方を取り入れておられることもあるようです。例えば、一時期注目されたものとして、「ストレングス」に注目するという考え法があります。対象者の方の苦手なことや弱いところばかりが注目されがちなことへの問題提起として出てきたものであり、対象者の強み（ストレングス）に注目し、長所を生かして苦手を補うという、この考え方自体はもちろん大切だと思います。しかし、検査の見立てや助言にそのまま当てはめようしている場合もあり、それには少々違和感を覚えます。

所見の書き方

検査を実施した後、検査者は検査結果をまとめます。この時、単に数値的な計算や処理をするだけでなく、検査全体としての発達の見立てを「所見」や「報告書」の形にまとめることが多いかと思います。

その中で問題になるのが、“どのように所見や報告書を作成するのか？”ということです。検査によっては、数値的な結果からある程度定型的な所見が作成できるものもあるのですが、K 式の場合はそれが無いため、検査者自身が主体的に見立てを行う必要があります。仕事をしている中で、他の検査者や、他機関で実施された検査報告書を見る機会がありますが、検査者や機関によって書き方のクセというか、パターンのようなものがあるように思っています。

例えばパターンの１つとして、「検査課題の１つ１つの出来不出来を順に述べるもの」があります。検査のマニュアルにはこのような所見の書き方は好ましくない、という記載があることもあって、直接的に『○○の項目は通過していて、□□は不通過である』というように項目の通過・不通過を記述している所見は見かけません。しかし、やや婉曲的な表現（例：積木を使って○○を構成することはできるが、□□は構成できない）になっているものの、実質的には項目の通過・不通過を列挙している所見はそれほど珍しくない気がします。時には婉

曲的過ぎて、検査の内容を知らない人には何のことかわからない記述になっている場合もあります（例えば、『2 つの図形を組み合わせて別の図形を構成することは可能であり…』のような表現です)。検査の中身をよく知っている方であれば、『あの項目のことかなぁ』と想像がつくかもしれませんが、知らない人は『図形って何？』『その上別の図形って？？』と疑問に思うでしょう。

別のパターンとして、通過した課題の中で最も通過年齢（難易度）が高いものを「上限」、不通過だった課題の中で最も通過年齢が低いものを「下限」として記載する場合があります。これ自体は事実を書いているだけで、特にどうということはないのですが、時折「上限」をそのまま子どもの「強み」や「得意などころ」として記載し、「下限」を子どもの「苦手」や「支援が必要なところ」として書いている所見もあります。内容によってはわからなくもない場合もあるのですが、機械的に上限を「得意」、下限を「苦手」と言い切っているのには、やはり少々違和感を覚えます。

また、この場合の「得意」と「苦手」はあくまでもその子どもの中での得意・不得意を指しています。例えば、学校の試験に置き換えれば、英語は偏差値 50 で、他の教科は偏差値 40 であれば、英語はその子どもの中での「得意教科」と考えられます。

しかし、「○○が得意」という言い方をすると、それは同一年齢の子どもと比べた場合の得意・不得意という意味で捉えられるのが一般的だと思います。子どもの中での強みを「得意」という言葉でポジティブに評価したいという検査者の気持ちはわかります。しかし、自分の思いだけでなく、その言葉が周囲にどう伝わるかということにも、一方で意識をはらう必要があるでしょう。

助言と支援

検査を実施した後は、結果の説明や、相談の内容に応じて助言や個別的な支援を行います。上記のどこまでを行うかは、機関によって異なります。例えば、公的機関で療育手帳の交付などの手続きのために実施した検査であれば、大まかに検査結果を説明することが中心になるかもしれませんし、具体的な相談ごとがあって来所された方であれば、困っておられる内容に応じて短期的・長期的な対応をアドバイスする必要が出てくるでしょう。

次号はこの「助言」と「支援」を中心に考えてみようと思います。

電脳援助 Ver.17

浅田英輔

Convenience

私が小さいころと比べても、世の中が「便利」になってきた。ケータイを持ったのは大学生のころだし、パソコンを初めて買ったのは就職してから何年かしてからだ。家は冬でも暖かいし、風呂はボタンを押せば沸いてくれるので、溢れることはない。コンビニで大抵のものは揃うし、ネットで注文すれば届けてもらうこともできる。お金さえあれば、食べ物なんかもコンビニですぐ買えるし、調味料が切れたら買いに行けばいいのだ。

便利を否定する意見があったりするが、私は以前の不便な生活に戻りたいとは思わない。

おそらく、「便利」というのはいいことだと思うが、便利になるのは功罪あると思う。便利ってなんなのか考えてみる。

◯便利とは、時間がかからないこと

まずあげられるのは時間だろうか。物事を処理するのに時間がかからなければ、より多くの処理ができるようになる。これは便利。インスタント[instant = 即席、即座]なものが流行るのは、便利だからである。

交通機関も時間がかからないものが便利とされる。新幹線はすごい。ちょっと前まで「青森一八戸間」は２時間半とかかかっていたのに、いまは30分で行けちゃう。便利。青い森鉄道で八戸行くのなんか、面倒くさいのである。

パソコンにしても、速さが求められる。何か入力するたび止まってしまうものより、パパッと動いてくれるもののほうが便利なのである。

でも、レトルト食品より手間がかかる手料理は不便か。逆に、手料理はレトルトより偉いのか。時間があるなら手作りすればいいし、余裕がないなら惣菜でもレトルトでもよい。どちらが優れているということではなく、選択肢の一つでしかないだろう。

鈍行の旅は不便か？私は目的地にはやくついた方がよいが、「鈍行を選ぶやつはおかしい」なんてことは思わない。好き好きである。

型遅れのパソコンは不便か？不便だ！パソコンは最新型がいいね！！

◯便利とは、手順が少ないこと

「交通の便」という言葉もあるし、交通機関は、乗り換えが少ないことがよしとされている。何度も乗り換えがあることは「不便」なのだ。東京で暮らしていると、電車での移動距離が長い。少し遠くに行く時の各駅停車はかったるいのだ。

自動車の操作にしても、マニュアルよりもオートマのほうが手順が少なく、便利といえるだろう。自動運転システムは今後整備されていくだろう。

パソコンの世界でも、アプリケーションの操作などでは「いかにクリック数を減らすか」が重視されている。クリック数を減らすということは、分岐を減らす、選択肢を減らすということにもつながるので、バランスが難しいのだ。

会員サイトの登録でアカウント作るときなど、いくつもパスワードが必要だったり、住所から全部入力しないとだめだったりと入力項目が多いものは面倒くさいのだ。

これは「インターフェイス」にも関係してくる（電脳援助Ver.13参照）。どういう画面、どういう選択肢を出せば、ユーザーが迷うことなく適切な入力をしてくれるか、簡単に入力してもらえるかを考えるのだ。インターフェイスにおける文字入力の手間を排除しようとして現れたのが音声入力である。話しかけるだけで検索してくれたりするのは便利である。この分野はこれからもどんどん精度が上がって行くだろう。SIRIは便利だが、人中で音声検索ははずかしいのだ。

でも、私はやっぱりマニュアル車に乗りたい。自分で運転している感覚が多いのは楽しい。でも毎日の通勤は自動運転でもいいかもしれない。なんでも手順を省かれるのは、困るというか楽しくないのである。

パソコンの世界の話にしても、手順を減らすというのは、ユーザーに危険な面もある。手順、確認が減るわけなので、規約の同意なども簡単にしてしまうことがある。細かい時でへんな規約を書いておいて、「規約に同意したんだから金を払え」というのは悪質サイトでは常套手段である。「便利」にはちょっとこわいところもあるのだ。うまく便利に使うには、警戒心とトラブル対処法も必要になったりする。

◯便利とは、選択肢がすくないこと

選択肢が多いほうが便利なような気がするが、「必要な選択肢が少数あること」のほうが実はよい。品揃えが豊富で、多くの種類が並んでいるというのは便利なようだが、ひとつの欲しいものを買うためには、たぶん不便である。2000年以前と以後の違いのひとつに多様性が挙げられるが、多様な選択肢というのは実は不便なのである。「みんなが使えるもの」よりも「自分専用にカスタマイズされたもの」のほうが便利である。選択肢は少ないほうがよいが、少なすぎるのもまた不便になってしまう。ある程度の選択肢は必要といえる。

amazonなんかがやっている「あなたにおすすめの商品」などは購買意欲をそそるものである（蛇口を検索したら、蛇口をひたすらにおすすめしてくることはあるが）。自分好みのものをうまく進めてくれるコンシェルジュAIなんか便利そうであるが、それでも自分で選びたいという気持ちは出てくるかもしれない。自分の気分を推し量ってくれたりしたら面白いが、「余計なお世話だ」と思うこともあるかもしれない。

ウィンドウショッピングは不便か。自分に最適化された店は、新たな発見がない。いつも同じ感じの商品を手にすることになる。それは穏やかな生活かもしれないが、刺激がないのもつまらなそうである。かわいい彼女と、何を買うでもなく街をぶらぶらするのは全く便利ではないが、必要なことなのかもしれない。

○便利とは、検索機能が優秀であること

　種類が豊富でもよいが、欲しいものがどこにあるかすぐわかると便利である。大きな書店や図書館では、大抵パソコン端末が置いてあって、館内の図書検索ができるだろう。

　大きなバスセンターはどこに行くのにも便利だが、どこのバス停からどこ行きのバスに乗れば目的地にいけるか、ということがわからなければ、逆に不便になってしまうのだ。新潟市の万代シティバスセンターは「不便」だった。

　インターネットの世界も無限に広いため、検索機能がなければ使い物にならない。情報過多である現代においては、簡単な検索で目的の情報にたどり着けることが「便利」といえるだろう。検索サイトの優劣が競われるのもこのためであろう。

　机が綺麗に片付いている状態とは、「何がどこにあるかわかること」といえるが、非常に散らかっていても自分で何がどこにあるかわかっているなら、便利さという点においては同じことといえるだろう。

○便利とは、頭を使わないこと

　「思考停止」っていうのは便利なのだ。何も考えなくとも物事が進んで行くというのは、実は「便利」と言える。上で選択肢の話もしたが、何も選択する必要がない、というのがよいか悪いかは別にして、便利なのである。

　蛇口をひねるとなぜ水がでるのか。車はどうやって動くのか。パソコンの中身はどうなっているのか。これらは考えなくてもいいし、知らなくてもいい。でも、便利なのである。どうやってできているかといった知識を持つことも大事だが、知ってても知らなくても便利さはかわらない。選挙なんて、誰が当選してもたいして変わらないし、勝手に決まってくれればいい。

　でもやはり、人間は考えなければならない。上水道の仕組みを理解しなくともいいが、トイレが詰まった時に「仕組みなんてわかんないもん！」と言ってもどうにもならない。テレビCMを思い出して電話するのか、ネットで検索して修理屋さんを探すのか、多少頭を使わなければならない。「議員なんて誰でも同じ」という意見もわからなくないし、一票でガラッとかわるなんてこともないんだけど、自分が思う「よりよい世の中」にするために、自分が属する市の議員なんかは、どういう人がいいのかは考えたい。

　ピクサーのウォーリーの世界はあながち遠い未来ではないのかもしれない。

◯便利とは、同じことを繰り返さなくてよいこと

特にルーチンワークについて言えるが、同じ作業をより簡単なやりかたで処理できるのであれば、それは非常に便利といえる。

東京にいるとSUICAがとても便利である（青森の駅にはまだ導入されていないのだ！）。「毎回切符を買う」という同じことの繰り返しを排除した便利さといえる。さらにいえば、さまざまなクレジットカードやプリペイドカードが統合されると非常に便利になることであろう。

仕事においても、考えなくともよい、毎月やる計算などは全部エクセルにお願いしてしまえばいいのである。それを「手作業でやるのが仕事だ」なんていってる大人はもう邪魔なだけなのだ。効率化できる部分を効率化しない仕事の仕方は、これからは不要になるのである。

こうやって便利さを挙げていくと、便利が必ずしもいいことではないということがわかるだろう。そんなことはみんなわかっているのだろうが、つい楽してしまうのだ。「楽に生きる」には便利であることに越したことはないが、「楽しく賢く生きる」には、ときには便利さが邪魔になるのだ。便利さは、ときに楽しさを奪ってしまう。ときには細やかな違いを奪ってしまう。かといって、便利が「悪」なのでもない。「昔はよかった」といって、自給自足の生活をしたいならすればいいが、私はしたくない。もちろん、それを選択する人を非難するつもりもない。自分で選べばいいだけなのである。便利さにしろ、不便さにしろ、それを押し付けるのが「悪いこと」なのかもしれない。

便利さを享受するにしろ、不便を楽しむにしろ、楽しく賢く生きたいなぁと思います。

パソコンは最新型の方がいいと思います！

ネット回線もいくら速くてもいいと思います！

Let’s Convenience!!

疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで!

講演会＆ライブな日々⑨

古川　秀明

宮城県アドベンチャークラブ

アドベンチャークラブというのは「ＮＰＯ石巻広域ソーシャルスキルトレーニングの会」の愛称。

２００３年から宮城県石巻地域で、公共施設や野外活動を中心に、発達障害や不登校などいろいろな生きにくさを持つ子どもたちや青年たちと土日の余暇を楽しく過ごす活動を続けている。

ソーシャルスキルをトレーニングするのだが、そもそもソーシャルスキルとはなんだろう・・・。

アドベンチャークラブの櫻井育子代表は、自分と他人とがうまくやっていくコツだと定義している。

アドベンチャークラブは「共感」「尊重」「自己決定」の三本柱で、コミュニケーションが苦手、問題行動が多いと言われる子どもたちとともに集団での活動を続けている。

自分の好きな事が認められ、楽しく生きることができる。それが自然に、当たり前にできるような居場所をつくること。それをひたすら地味に続けているのがアドベンチャークラブという小さな団体だ。

櫻井代表は「発達はゆっくりでも生きている限り続くもの。障害があってもなくても、自分らしく生きるってことを考え続け、提案していきたいと思う」と語る。

今回はアドベンチャークラブに所属しているメンバーの保護者の皆さんとお話することができた。

あるお母さんは、自分の子どもは重度の自閉症で、どこの団体でも参加を断られて、ここも無理だろうと見学したところ、その場で入会申込書を渡され感動したと話しておられた。

障害の種類や重さに関わらず、広く活動を続けるこのアドベンチャークラブに参加する人が増えて行った。

しかし、２０１１年3月１１日に発生した東日本大震災の時に、多くのメンバーが被災し、やむなく辞めていかれた方も少なからずおられたようだ。

櫻井代表から講演会＆ライブの依頼を頂いて、是非やらせていただきたいと思った。

もともと知的障害者施設に勤めていた私は、櫻井代表に共感するところが多く、やりがいも感じた。

ライブをやるには楽器や多くの機材を片道１０時間近くかけて車で運ばなければならないし、演奏者の宿泊場所の確保も必要だ。

それらのことは、アドベンチャークラブのメンバーが全て解決してくれた。

機材はライブハウスを経営しているメンバーの家族が全部揃えてくださり、運搬やセッティングも忙しい仕事を調整して頂き、手伝ってもらった。

講演とライブは盛況のうちに終わり、うれしい感想をいただき、ＣＤや本もたくさん買っていただいた。

私も満足だったが、一番最後にメンバーの楽器演奏と歌が披露された。

障害を抱えながら、リズムや音程をキープするのはなかなか難しい。
それを多くのボランティアスタッフが年単位の時間をかけて粘り強く指導し、発表することとなった。

演奏能力や歌唱力を競う大会であれば、間違いなく予選落ちだろう。
しかし、一生懸命演奏するメンバーにそんな邪心はかけらもなかった。

ただひたすら楽しそうに、笑顔で演奏してくれた。

その姿に、音楽や歌の本質を見せてもらえたように思った。

リズム、音程、ハーモニー、どれも大切だけれど、一番大切なのはやはり「こころ」なのだ。

メンバーの歌を聴かせてもらって、どこかこざかしい自分の歌を強く恥じた。

メンバーとそのご家族、スタッフのみなさんは、遠くから来てくれたことと、歌っもらえたことの感謝を私に言ってくれた。

だけど、感謝したいのは私の方だ。

私の歌にはまだまだ足りないものがあることを痛感した。
いったい何がどんなふうに足りないのか、見当もつかないのだが、それを探しながらまた歌い続けて行きたい。

施設に勤めた３０年前も、そして今も障害のある人達からいろんなことを教わっている。

その謙虚な気持ちを失っていないことだけは、自分を褒めてやりたい。

養育里親

～もうひとつの家族～

15

坂口　伊都

はじめに

里親としての生活も１年以上が経ちました。やっとというところでしょうか。この子との生活リズムができ始め、お互いの短所と長所を知りあいながら、喧嘩をしても引き際がわかるようになった気がします。一緒に生活することが当たり前になり、何かをする時には必ずこの子の存在を考えます。ただ、私は数に弱い人間で、全員で 5 人前だとわかっているつもりが、夫が会議、兄の帰りが遅くなる 2 つの引き算をすると、何故か 2 人前と勘違いしていまいます。こんな 4 から引く癖が抜けないでいる間が抜けた里親ですが、支援側の方や里親会から、どのような里親支援があるといいと思いますか？と質問を受けます。ここまで必死になって生活してきましたが、少し余裕が出てきたので、どのような里親支援があると助かるのだろうかと考えてみたいと思います。

実際に体験してみて、どのような状態のスタートでも、里子を家族として迎えるとなると生活事態に変えざるを得ない部分が出てきます。それは、波紋のように思わぬ所まで届いていきました。里子と里親の関係に注目することも大切ですが、里親家庭の周辺環境にも配慮がいるのだと感じています。

里親の最大の特徴は、家族の中に子どもを引き受けることにあると思います。仕事として割り切れるわけでも、プライベートと言い切れるわけでもない環境に難しさを感じています。一端、この生活が始まればレスパイト制度はありますが、基本はコツコツと新しい生活を過ごしていくことにエネルギーを費やします。里親と

しての私を切り離すことがない日々となります。この感覚は、里親特有のものだからこそ、整理が要るのでしょう。今回から、里親支援について私なりに考えていきたいと思います。

まずは、里子との関係を作るための情報が基本となります。次は、里子が揺さぶってくる行為に里親自身が自分を見失わないようにしていく工夫が要ると思います。子どもの問題行動を目の当たりにして、親が冷静でいられることの意味は大きく、親の構え方や捉え方で子どもに対するストレスが増えたり減ったりすることはどの親子関係でもあることです。今まで暮らしたことがない里子と生活を共にするだけでお互いにそれ相応のストレスがかかります。里親がこんなに頑張っているのに里子は何故その行為に応えてくれないのかと苛立ちやすくなります。里親自身が自分の状態を把握しないと里子との関係性を悪化させるリスクが高まります。その他、里子が加わることで起きる家族の変化、変化は家族を超えて親戚関係にも及びます。実際に里親との暮らしを整えていくために学校や地域との関係調整も必要になってきます。項目に直すと以下のようになるでしょうか。

① 里子の生い立ち・背景を知る
② 里子の強み、弱みを知る
③ 里親自身の得意、不得意を知る
④ 里親家族のバランスを知る
⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
⑥ 行政、地域への働きかけ
⑦ 何を目標にするか考える

最後の⑦は、里親が子どもと暮らしていくうえで、悪循環に陥らないための手段になります。的確で具体な目標（今、目指すもの）を内に抱いていると、気持ちの揺れ幅が小さくて済むようになりました。

今回は、①と②の項目について書いていきたいと思います。どうぞ、最後までおつき合いください。

里子の生い立ち・背景を知る

里子との暮らしは、マッチング期間があるとはいえ、2 歳なら 2 年間の 10 歳なら 10 年間のこの子の生き様があります。その間の子どもの育ちは、目の前の子どもと接していても全く見えませんし、今までの積み重ねが今のこの子を作っています。生い立ちがブラックホールのように抜け落ちている現実があります。

里親委託になるために、いつから外出、外泊にし、里親以外の家族とどのような手順を踏んで出会っていくのか、転入のための手続きや生活に必要なものを揃えていくための準備をしていきます。その中で、この子がどのような背景で社会的養護の場になったのかという概要説明は受けますが、その時にこの子がどのような行動に出たのか、この子の感情はどうだったのかと考え話し合う機会が持てているとは言い難いのではないかと思います。児童相談所のワーカーも児童養護施設の職員も担当が変わるとそれ以前のこの子の様子を見ていないため、記録等の引継ぎの中では実感が持てず、それを里親に伝えること自体が難しいことになります。それでも記録を振り返り、この子の節目となる出来事は何があったのかを里親も児童相談所のワーカーも里親支援専門相談員も知ろうとすることが大事ではないでしょうか。子どもの立場で考えて見る作業をし、共通理解しておくと、里子の今出している行動の意味も考えやすくなると感じます。

記録を振り返る中で、この子がどのような環境にどれぐらい身を置いてきたか、安心して頼

れる大人とどのように向き合ってこられたかを知りたいと何回も感じました。具体的には、在宅期間中、この子の世話をしていたのは誰で、どのような接し方をしてきたのか。乳児院、児童養護施設等の措置変更や担当職員の変更はどの程度あったのか。担当職員が、この子にとってどのような存在に映っていたと思うのか。自分を養育してくれる主たる大人が、変わっていくものだと子どもが感じていたら、里親に心を開こうとしないでしょう。さらに、大人を頼っても仕方がないと感じているようなら、その先に大人に不信感を抱いていないかどうか考えてみる必要があります。大人不信を抱いていたら、里親に気安く心を許そうとはしない行動に出やすくなりますから、それによって里親不調に陥る可能性があるとわかり、また養育者が変わらないためにも、この子が感じている大人像を予測してみる作業は有効なのではないかと思います。

私自身も里子と暮らし始めて、この子にとって生活を共にする大人と子ども像に独特なものを感じました。大人よりも子ども（兄姉）と調和しようとし、大人と子どもの間にわけ隔ての壁があるようでした。また、里父と里母との対応の違いがあり、男性には一目置く、女性には順位争いを挑んでいるような感じを受けました。我が家だけではなく、他の里親宅でも里父の言うことは聞いても、里母の言うことを聞かないという話は、よく耳にします。この家では、里父と里母が家を切り盛りする人で、どちらか一方に取り入っても何とかならないことを知り、この二人と繰り返し話し合いをしていく中で変化してきたように感じます。

その他、この子が暴力、暴言を受けた経験について知っておくことが重要になると思います。暴力を受けた子は、自分でも暴力をふるってしまうということがあります。暴力を周りの人にふるうのは、里親としても困ってしまう事象です。乱暴な子と思っている間は困った子でしかありませんが、暴力を受けていた事実を知ると、この子の辛い過去に触れることになり、子どもを悪者として扱わなくなります。子どものせいにしなくても済むことは、里親には大きな支えになると思います。誰からどのような暴言、暴力を受け、その時助けてくれる人はいたのか、どう耐えてきたのかを知り想像してみると、この子が人間不信に陥っているかどうか想像することができます。子どものしんどくて辛い経験をした上で出ている行動であれば、それは簡単に変わるものではなく、時間をかけて忍耐強くつきあっていくものだと里親が感じることができるでしょう。それは、周りから伝えられるだけではなく、あくまで里親自身が気づいていく作業が必要なのではないかと思います。

子どもが里親委託という新しい環境に身を置くことの戸惑いを感じる必要もあると思いますし、新しい生活の中で何を配慮すべきかも見えてきます。

多くの里親は、少しでも子どもの支えになる人になりたいという気持ちを胸に秘めています。その強い想いが、里子との関係を悪化させる場合があると感じます。子どもが、大人に対して心を開いていくまでには時間がかかります。その中には、試し行動と言われ、里親の手に余る行動を示し、困ったり不安になったりします。里親の想いと里子の行動が伴わない状態です。言い換えれば、里子は真っ直ぐ甘える行動を出せずに、怒られるような行為を繰り返してしまい、里親側は里子に拒否されているように感じ落胆する。そこを冷静に対処していくための策として、里子の背景や生い立ちを知っておくべきでしょう。

この子を支えていく大人達が、肩を並べてこの子のことを語りあい、気持ちを考えて見ようとする試みには意味があると思います。また後の真実告知やライフストーリーワークにもつな

がっていく事柄にもなります。

我が家では、10 歳で委託されているので、私達はあなたの産みの親ではないという真実告知の必要はありませんが、自立するまでにライフストーリーワークを実施しようと考えています。一般的に思春期に入る前の方がいいと言われますが、我が家の場合、まだする段階ではないように感じています。家族というものが何なのかを知り始めている段階で、家族としての基盤作りをもう少し積み重ねる時期ではないかと判断しています。ただ、その積み重ねる時間の分だけこの子は年を取り、思春期真っ盛りに突入してしまうという不安も同時に感じています。この子が生き続けるために生い立ちのどの部分をどのように知っていくのがいいのだろうと考え始めています。この部分も相談できる方が支援側にいて欲しいです。

真実告知について感じている部分としては、まず里親自身が血の繋がりがない親子関係をどのように見ているのかを考えてみた方がいいのではないでしょうか。無意識に血の繋がりがないことに罪悪感や劣等感があるのだとすれば、それは里子にとって不幸なことです。そこに里子が恥を感じる必要はないですし、里親がきちんと大切な存在であることを伝え続けることが重要だと思います。その土台を固めて、真実告知を捉えていく方が、賢明なやり方になるのではないでしょうか。確かにそんなに簡単な問題ではありませんが、まず里親自身が解放されないと、子どもは救われないのだろうと感じます。

里子の強み、弱みを知る

ここについては、初期の段階だけではなく常に意識しておく必要があると感じています。里親をしていると、いけないことばかりするので怒ってばかりになってしまう、もっとやさしく接した方がいいとは思うが、上手くいかないという声をよく耳にしますし、私自身も同じように負のスパイラルを抱え、落ち込んできました。里親の強みは、この子と 24 時間向き合えることです。向き合わなければならないから、しんどくもなるのですが、じっくりとこの子を観察し、作戦を練り、実践して、この子がどう反応するのかを追うことができます。

我が家の里子を見ていると、何か自分がやらかしてしまった時、それを指摘する大人に対して話題を変えようとしたり、「知らん」と言ってその場を終わらせようとする印象を持ちました。里親宅では、その問題に一定程度の決着をつけないと気まずい空気が次の日も続きます。怒られる内容の多くは、してはいけないと言われていることをしているので、里父も味方になってくれません。里父は、どうしたらいいのという促しをしながら、この家族の不穏な空気を早く終わらせようという気持ちも同時にこの子に伝えているのでしょう。里子は、気持ちを立て直してから「謝りに来た」と、私の所にやってきます。その言い方も下手をすると謝りに来てやったという上から目線にも聞こえますが、精一杯の表現なのだと思っています。そう思うことができるのは、日々のこの子の言葉使いを観察し、上手く表現することが苦手だったり、使う言葉が汚かったり、言葉そのものを知らないと感じているところからです。そこで、この子が偉そうな態度で謝りに来たと判断してしまうと、また悪循環が起きますし、二度と謝ろうとはし

なくなるでしょう。この子をよく知ろうとすることで、里親の態度にも変化が生まれます。せっかく生活を共にするのですから、気持ちのいい循環を作っていきたいですし、それに近づける方法を知る方がいいと思っています。

まず、里親委託初期の段階では、里子が送ってきた生活スタイルを具体的に知ることが大事だと思います。当たり前と思っている事柄が、聞いてみると我が家のやり方とは全然違ったということが多くあります。どの家庭でも、その家庭の特徴がありますし、施設実習があるとはいえ、施設の生活は想像できにくいと感じます。あえて細かい日常に目を向けると、日常生活の中で意識しなくてもできることと逆にできて当たり前と思っていたことがあまり経験していないことがわかります。

例えば、我が家では、なかなか里母の言うことが聞けないのですが、食事の後の食器を片付けることは、施設で毎日していたので、食器を片付けてねと声掛けをすると自然に身体が動きます。習慣として身についたことをするのは、それほど抵抗を感じないもののようです。当たり前と思っていたことでは、幼児の子が里親家庭での初めての入浴時間に、大泣きされたという話を聞きました。理由は、施設職員はいつも服を着たまま入浴させていたので、里母が裸になったことに驚いたそうです。

その他、小さい頃からどのように寝ていたのか、寝つきはいいのか悪いのか、寝起きはいいのか悪いのか、入浴は誰と入っていたのか、身体の洗い方はどうしているのか、何時頃が入浴時間なのか、食事の雰囲気はどんな感じで、何が嫌いで何が好きなのか等、日常生活の場面を教えてもらいながら、自分たちの生活スタイルとの違いを知る。お互いに当たり前と思っていることが、当たり前でないとわかることは、この子の戸惑いを察知できることにつながります。子どもの戸惑いを察知できると、子どもに過大な期待をしなくて済みます。

以前に連れ子に対して、継父が面倒をみてあげるのだから子どもの方も遠慮して当たり前だと言う方がいました。子どもは器用に言葉や行動を操れませんから、その子は何かを言われると固まったり、暴れたりしていました。継父も戸惑っていたのでしょうが、子どもの方が弱者ですから傷つきも深くなります。子どもとは、無邪気で可愛気があって、素直に甘えてくるものだと思ってしまうと、この子自身が見えなくなってしまい、親も子も苦しくなってしまいます。大人に対してまっすぐにいろいろな気持ちを出せるのであれば、子どもも戸惑ったりせず、生きやすくなるでしょう。

我が家では、これまでも繰り返し話題にしていますが「言葉の使い方」で苦労しています。この子は、どのような言葉を使って成長してきたのでしょうか。ある時期から言葉使いが変わったのか、どのような言葉のやりとりをしてきているのだろうといろいろ想像してみますが、よくわかりません。言葉の中でも特に気になっているのは、「はい」という返事が出てこないことです。これは、小さい頃から教えられることなので、この子も当然知っている事柄ですし、小さい頃はしていたのではないかと思います。小学校の中学年ぐらいになると、子ども同士の影響を受けやすくなりますから、はいと返事することはカッコ悪いと思っているかもしれませんが、要領がいい子であれば、大人の前ではやり過ごすために返事をするでしょう。この子は、療育手帳を所持しているので、場面によっての使い分けが苦手なのかもしれません。

場面の使い分けができると、この子の強みがより際立ってきます。例えば、私が掃除機を持つとこの子はお手伝いをしようとフローリング用のワイパーを持ち、床の拭き掃除をしてくれようと準備します。それは有り難いのですが、掃除機を持った瞬間、真後ろに立つので、掃除

機をある程度かけてからしてくれるかなとお願いすると、「じゃぁ、もうしない」と言ってワイパーを置いて 2 階に行ってしまいます。してくれないのか、まぁいいやと思って掃除機をかけていると、いつの間にか降りてきて、黙々とワイパーをかけ始めています。えっ、する気満々だったのかと、その時にやっとわかります。ここで、「はい」や「わかった」と返事をすれば、なんていい子なのと思えるのですよね。言葉が違うだけで、これ程までに印象が変わるのかと驚きます。改めて言葉の大切さを感じます。この前も、クリスマスケーキを注文しようかどうしようかとカタログを見ている時、どれがいい？という話題になると、娘は「これがいいな」と言うのですが、里子は「これでいいわ」と言います。そこは、「で」じゃなくて「が」だよと伝えました。

人とコミュニケーションを取っていく上では、言葉は必要不可欠です。いいところがいっぱいあるこの子の行動も、言葉の使い方一つで台無しになってしまいます。里子だけに関わらず、子どもの強みと弱みを観察する際に「言葉の使い方」を注目すると、子どもの特性が見えやすくなると思います。ほとんど喋らない子でも、どのような表情や行動で自分の気持ちを表現しているか観察すると、見えてくるものがありますし、その上でどのような関わり方をしていけばいいか考えることができます。

我が家ではその他にどう寝かしつけをしていけばいいか困っていました。もともと寝つきがいい子ではないようで、眠気がくるまでに時間がかかり、眠気がくるとコテッと寝てしまうタイプのようです。しばらくは、一人で寝るのを嫌がって、父母の寝室で寝ていました。寝つきがいい子なら、電気をつけたままにしていても寝てしまいますが、この子は寝るまでの準備がいるので、部屋の電気を消し、刺激をなくさないと眠気がきません。それに付き合おうとすると、添い寝ではなく、同じ部屋にいるだけなのですが、何もできずに親にとっては辛抱の時間でした。

それがある時、あまりいい流れではないのですが、犬を無理やり抱かないという約束を破ったので、約束通り自分の部屋で寝ることになりました。その時は、この子の横につくこともやめ、豆球の明かりにしてほっておきました。すると、あれ程一人で寝るのを嫌がっていましたが、意外にすんなりと一人で寝られました。それからは、寝室で寝ていた時のように早く寝なさいと言われず、自分の部屋だと自分のペースで寝られるということを体感したようで、このまま自分の部屋で寝ると言い出しました。怪我の功名でしょうか。本人は得した気分になっていますが、寝室で寝ても、自分の部屋で寝ても、だいたい寝入る時間まで 1 時間弱かかっていたので、寝付く時間は同じなんですけどね。自分でできたと思えることは大事なので、様子を見ています。ただ、真っすぐ甘えられないために、寝付けないといって里親の寝室に助けを求めには来られないと思うので、その時はどう気づき、対処できるか気になっているところです。

一緒に生活をし始めた頃は、咳をしている時におでこで熱を測ろうとしても触らせてくれませんでした。どんなにしんどくても、何事もないかのように振舞っていましたが、一緒に生活をするようになって 1 年経つと、ここが痛い、怪我したと見せてくれるように変わってきました。弱みが強みに変わりつつあるのでしょうか。

私は対人援助の仕事をしているので観察し、行動の意味を考えることが習慣になっていますが、一般的には、そのようなものの考え方はしないと思うので、この子の行動について考え、整理をする人がいてくれると里親は助かるのではないでしょうか。

終わりに

今回は、里親を実際にしてみて、里親支援に何があったら、里親子が暮らしやすくなるのかを考えてみました。その中でも、まず里子をどのように見ていくといいのかという部分を考えてきました。日々の行動にばかり気を取られると、肝心な部分が見えなくなるような気がしています。お互いに歩みよりたいのに、傷つけあってしまうのは、悲しいことです。私も毎日やさしく微笑んでいる里母でありたいのですが、私の性格も相まって、女神のような頬笑みにはならず、ゴリラのように唸ってしまっています。その度に自己嫌悪に落ち込み、子どもを育てるなんて私にできるのかしらと思っていた第一子妊娠期を思い出します。もしかして、力量もないのに大それたことをしてしまっているのではないか。そんな不安を抱えてはいますが、ふとした時に見せるこの子の笑顔に出会うと、この子にとってこの家はそれほど悪くないのかなと感じます。

次回は、里親自身に焦点をあてて、何が支援としてあると助かるのかを考えていきたいと思います。

周辺からの記憶 13

～2013 年度福島・シンポジウム～

村本邦子（立命館大学）

2016 年 10 月 21 日、東京で全国婦人相談員連絡協議会があり、「熊本地震と婦人相談の記録～相談員へのヒアリングから」の報告をした。被災状況によって状況は違うが、全般的傾向として、震災直後は相談数が一時的に減り、1 ヶ月後から急増、とくに離婚相談と DV 相談、アルコール・ギャンブル依存が増えたようだ。被災による経済的困窮や住居問題も多く、今後も増えるだろうと予測されている。子どもへの影響も大きく、精神不調や不登校などの問題が増えている。失業や生活困窮によるストレスの矛先が相談員に向かうこともあった。他方、地震による避難をきっかけに問題の解決へ一歩踏み出すケースがあったり、被災による仕事の変化によって新たな連携が生まれたりなど肯定的変化も報告された。災害時だからこそ行うべき特別な支援アプローチがある。日常からの備えが重要であり、災害時の相談マニュアルと体制作りが必要だということで、全国婦人相談員連絡協議会では、それにこれから取り組むそうだ。11 月 14 日現在、熊本では、震度 4 以上の地震が 140 回も続いている。「今後に備え、知見を蓄積していきましょう」と報告をした直後、鳥取地震の速報が飛び込んできた。

11 月の岩手でのプロジェクトでは、台風 10 号の爪痕をあちこちに見ることになった。水に浸かったのは大震災の時と同じで、フラッシュバックする人がいたり、「ようやくここまで立ち上がってやってきたのに、また降り出しに戻るのか」と、大震災の時より精神的ダメージが大きいとおっしゃる方もあった。そして、今度はまた福島で地震だ。いったいいつになったら安心できるのだろう。

12 月には福島に行く。今年は、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムの事前申し込みがあっという間に 80 人を超え、満員御礼となった。来年の全国婦人相談員連絡協議会は福島だが、時期大会長は、福島での 2011 年のこのプログラムに子連れで参加してくれていたのだと言う。何というご縁だろう。まさに、禍福は糾える縄のごとしだ。

3 年目福島

＜福島入り＞

2013 年年 12 月 1 日から、福島市市民活動支援センター「チェンバおおまち」にて 1 週間の漫画展、そして、12 月 7・8 日の週末を使って、支援者支援セミナー、みんなで楽しく劇遊び、クリスマスカレンダーをつくろう、風船で遊ぼう、団士郎の漫画トークを実施する。毎年、同じ流れである。

金曜に福島入りし、夕方、ロビー集合。教職員 6 人、院生 3 名、修了生 2 名の総勢 11 名。チェンバおおまちへ行って、皆で会場設営とプログラムの準備をし、中華料理屋に行って、珈琲専門店へ行く、これも例年の流れ。福島駅前は、クリスマスの点灯式イベントをやっていたが、閑散としていて何だか寂しい夜だった。

土曜の朝、会場へ向かうと、駐車場に「除染中」の看板がかかっており、除染作業をしていた。どんなふうに除染がなされるのだろうと見てみたが、アスファルトの表面を機械で水洗いし、小さな芝生の草むしりをしているだけである。こんな原始的な作業で本当に除染できるのだろうか。地元の人たちに聞くと、家の瓦なども手作業でふき取っているそうだ。機械だと放射能が舞い上がって空中に拡散するが、手でやると確かに線量は下がるという。それにしても、手で放射線をふき取って大丈夫なのだろうか。除染作業員と話したメンバーによれば、水圧で放射線を浮かして吸い取り、安全なアルミでくるんで土に戻しているという。「放射能の体への影響は 30 年後くらいに出るそうだが、60 代の自分は関係ないが、20 代の若者も働いている」と言っていたそうだ。何ともやりきれない。

＜支援者支援セミナー＞

支援者支援セミナーは 9 人のグループだったが、子育てや介護など、家族が日常的に抱える問題が話題になった。震災や放射線による負荷の下で、たとえば、認知症の進行が早くなったり、癌の発見や治療が遅れたりと、本来は日常の問題だったものが大変になっているようだった。先の見通しが持てないなかで家族は揺れており、自主避難

をしたが、結局は離婚になったりする。離婚は日常にもあるが、震災の影響で増えている。家族同士でも言葉にしない、できないつらさがある。そこをどう支えていけるかと、支援者たちも悩んでいた。

仮設住宅では、最初は賠償問題がメインだったが、今ではご近所問題。出ていく人もいれば、取り残されていく人の気持ちもある。避難してきたひとつの家族のなかでも、街の生活にすっかり慣れて戻りたくないという子ども世代と、早く元の家に戻りたい祖父母世代。街に馴染めず不登校になる子もいる。大人も同じで、街中で孤立する人もいれば、しがらみから解放されてのびのびしている人もいる。

「おかげで子どもが楽しめる企画がたくさんある。子どもには経過を話している。子どももそれをよく理解し、感謝して生き生きとしている」「失ったからこそ大切さに気づくことがある」という声とともに、「私たちは、いつまで支援されなければならないの？これまで支援する側だったのに」「支援される側になるとはどういうことなのか。話さなければならないが、誰を信頼して、どこまで話せばいいのか」という声もあった。誰からとなく、前提を共有していない人たちにイチから説明しなければならないことのストレスが話された。先の見えないなかで、支援者たちも揺れていた。

確かにその通りだ。毎年、福島に来ると、テレビや新聞にたくさんの情報が出ているが、関西にいると、ほとんど福島の情報が入らない。事前に皆で勉強してから現地入りするものの、やはり現地に来て教えてもらわなければわからないことがたくさんある。それでは支援されているのか、教えているのかわからないという気分にもなるだろう。このプロジェクトには、「支援」という言葉を使いたくなくて、「応援」プロジェクトと名づけたが、「支援者支援」という言葉は、対人援助学のひとつのキーワードとして以前から使っていたので、違和感なく使っていた。福島の閉塞感や苛立ちをひしひしと感じるとともに、今後のあり方を考える必要があると思った。

＜クリスマスカレンダーを作ろう＞

カレンダーづくりには、９人の子どもと６人のお母さんが来てくれた。「材料をたくさん用意しましたので、よろしければご一緒にどうぞ」「子どもさんにはスタッフがつきますので大丈夫ですよ」と言うと、お母さんたちも楽しそうに参加してくれた。子どもより数の多い大人たちが、片時も目を離さず、子どもたちを守るように囲むなかで、カレンダーづくりが行われた初年度の光景を思い出しながら、お母さんたちもほんの少し気を緩めて自分のことができるようになったのだと思った。日常の子育て支援の場のようだった。子どもも大人も、それぞれに工夫を凝らした素敵なカレンダーを作り上げ、互いに褒め合った後、修了生のアイディアで、その場で写真を撮ってプレゼントした。

実は、子どもたちの５人は、昨年も参加してくれていて、「今年はいつかな？いつかな？」と楽しみにして、チラシを待ってくれていたということだった。１年経って、みんな少しずつ成長していた。昨年、相談にのったお母さんにも、その後の経過を聴くことができた。継続するからこその喜びだ。

＜交流会で＞

夜はビーンズ福島との交流会で、福島の話を聞かせて頂いた。３ 月まで保育士をされていたスタッフの話では、原発事故以後、保育を再開させるまで、自分たちでしなければならないことがたくさんあって、本当に大変だったそうだ。園庭や建物の外側の除染は公的に行われたが、遊具や玄関については、自分たちですべて削らねばならなかった。エアコンも外気が入るタイプのものは使えないので、すべて入れ替えた。園庭の木も、枝分かれしたところは線量が高いので、線量が下がらない木は伐採した。先生方は、放射線についての知識を得るために、保育の合間に交代で研修に出かけたそうだ。今でも、毎日の放射線はもちろん、給食に使う材料も線量を測って保護者に知らせ、窓の近くは線量が高いので、子どもが近づかないように気をつけるなど、多くの配慮をしながら保育をしている。

保護者にもいろいろな考えがあり、父親と母親とで放射線に対する意見が違う家庭もある。学校の給食についても、以前はご飯を持ってきて下さいと言っていた学校でも、最近はご飯を持参するか給食を食べるかを親の判断にゆだねたり、自宅からご飯を持ってくることを禁止したりしているところもある。プールも学校の管理職判断に任せられており、実施するところ、しないところがある。実施する場合には、今度は親の判断によって、子どもを入れるか入れないか決めなければならない。心配で学校に相談したことがわかると、噂話の対象になったり、親の考えでご飯を持参した子どもが、給食を食べている子どもたちから変な目で見られたりすることもあるという。

ビーンズ福島では、自主避難者を対象に、「ママカフェ」を行っている。東京でのママカフェは人数が少なかった。東京に転居した人たちが、福島のことを忘れたい、福島出

身だということを内緒にしているなどの要因が考えられたという。活動をしていくなかで、少しずつニーズも変わってきて、母子のケアだけでなく、父たちが思いを語り合える「パパカフェ」も始めた。長期に渡り、週末に母子の元に通うしんどさ、母が避難先で定着してしまい（仕事を始めてしまうなど）、「もう妻と子どもは戻ってこないのではないか」と不安になってしまうこと、母子からの疎外感など。男性スタッフが入り、木曜の晩に行っている（金曜の晩から母子の元に行く父親が多い）。

家の庭でとれた柿を祖父は孫に食べさせたいが、食べさせたくない親と、間にはさまれる孫。同じ家族の食卓で、県内産のものを食べる父と、食べない母子。聞けば聞くほど悲しい気持ちになったが、それは紛れもない福島の今だ。

＜反省会＞

日曜は 10 時半から 12 時まで、漫画トークと風船で遊ぼうのプログラム。子どもは風船プログラムへ、親はトークへという家族もあった。皆で片づけをして来年に向けた反省会をする。ビーンズ福島の中鉢さんから、「盛りだくさんで、こちらの意図が福島の人に届かないのではないか。支援者たちは支援されるより、むしろ状況を伝えたいと思っている。福島を支援するというより、福島のことを学び、一緒に考えて欲し

い。院生たちは一日早く来て、支援機関を事前に見学してはどうか」との提案がある。支援者支援セミナーで聞いた声と合わせて、来年はそんなふうにしようと思う。

＜福島の街角で＞

プログラムを終え、福島駅に向かうと、クリスマスのイルミネーションの光景とは打って変わって、駅前通りが封鎖され、電気自動車のモーターショーが繰り広げられていた。たくさんの人だかりで、派手な格好をしたキャンペンガールたちがにこやかに人々を誘い、どこか昔描かれていた未来都市に似た雰囲気が漂っていた。

さらに行くと、駅前で、黒ずくめの服を着た若い男が拡声器を手に、声をあげて演説していた。「誰も戦争に行きたい人はいない。それでも行かなければならないのだ。大東亜戦争においても、アメリカや中国や韓国がずるいことをするから・・」何を主張しているのだろうかと耳を傾けてみたが、どう聞いても奇妙な論理だった。後には、サンタのドレスを着たきれいな若い女が大きな日の丸を持って立っていた。男の演説が終わると、女も「私たちのおじいちゃん、おばあちゃんの苦労を思ってください。それで今の日本があります」と演説を始めた。道行く人々は、怪訝そうな顔つきで眺めては通り去っていたが、モーターショーと街宣の組み合わせが何ともシュールに感じられた。

帰ってから検索してみると、この日は12月8日で、1941年、日本が真珠湾攻撃をして、アメリカとイギリスに宣戦布告をした日だった。街宣の若者たちは、朝、靖国神社を参拝してきたらしい。この日は、他にも、1953年、アイゼンハワー米大統領が国連総会で原子力の平和利用を提言した日、ジョン・レノンが射殺された日、1995年、福井県の高速増殖炉「もんじゅ」でナトリウム漏洩事故発生した日だったことを知る。暗澹たる気分になった。街宣の若者たちの気持ちが少しわかったような気がした。

2014年シンポジウム

＜サービスラーニングの観点から3年を振り返る＞

毎年、１年のまとめとしてシンポジウムを企画しているが、2014年2月18日、「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは？～東日本大震災から3年の支援を振り返る」というタイトルでシンポジウムを開催した。午前の部では「サービスラーニングの観点から」として、３名の院生、木下大輔さん（臨床心理領域Ｍ１）、奥野景子さん（対人援助領域Ｍ２）、清武愛流さん（対人援助領域Ｍ２）がそれぞれの体験と学びを報告し、山口洋典さん（立命館大学サービスラーニングセンター副センター長）からコメントをもらった。

山口さんは、ディビッド・コルブの体験学習の循環過程、すなわち、「積極的な挑戦（する）→確かな経験（感じる）→省察的な所見（見つめる）→抽象的な概念（考える）→積極的な挑戦（する）･･･」という循環過程に照らし合わせながら、院生たちの報告を位置づけ、本プロジェクトがどのようにサービスラーニングとして機能しているかを評してくれた。院生たちが、それぞれのスタートラインから始めて、経

験、省察、抽象化を経て、また新しいスタートラインに立っていることがよく見えたように思う。

午後の部では、「東日本大震災から３年の支援を振り返る」として、被災地で支援活動を続けてこられたゲストを招き、それぞれの活動について紹介してもらうとともに、現地では、どの時期にどのような支援が求められてきたのか、今後のニーズはどう変化していくのかなどについて話題提供してもらった。以下、メモ風に記述していく。

＜女性支援の現場から＞

最初のゲストは八幡悦子さん（NPO法人ハーティ仙台・代表理事）で、「宮城における女性支援の視点から」というテーマで報告してもらった。八幡さんは助産師で、みやぎジョネット代表として被災地女性支援に関わっていた。ハーティ仙台は、DVや性暴力など被害女性をサポートする団体だが、震災直後、各地避難所を訪問したという。避難所には更衣室や授乳室もなく、プライバシーが保護されていないこと、避難所運営において少数派の意見が無視されることが際立っていた。民主的に意見を出せるシステムが必要だし、無料電話相談の広報が大事。確実に女性に渡る必要があるが、女性の下着配布に広報カードを同封する配り方が有効だったそうだ。避難所で女性対象の女性による面接調査が必要だが、面接員は直接生活支援者とは別人にすべきであるということだった。

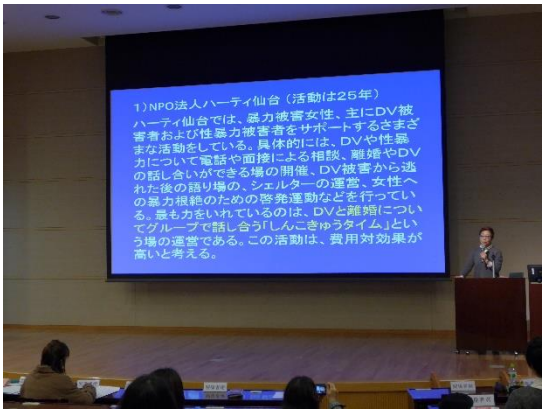
現在、宮城県の DV や性暴力の問題は深刻化している。2012 年、宮城県警へのストーカー相談は 985 件と過去最多。DV 相談も前年比 33%増で 1856 件。2013 年 1 ～6 月のストーカーと DV の相談件数は、過去最多を更新した。ストーカーの相談は前年同期より 35 件多い 508 件。DV 相談は 76 件増の 941 件。相談が増えるのはよいこと

だと思う、広報の効果が出ている、電話相談員の対応が的を射ているから警察まで届けるのだと考える。DV の殺人事件は、2011 年に 2 件、2012 年に 1 件と連続して起きてしまった。DV 相談等の活動増加に対応するため、被災地支援は代表を交替してもらい、2012 年度よりハーティ仙台は、後方支援に回った。

仙台市・宮城県と連携し、相談、啓発、研修を行ってきたが、2013 年からは、県の委託で、被災地における DV 被害者等のサポート講座を県内 7 カ所で開催している。ハーティのスタッフ 4～5 人で週に 1～2 回遠出することで、地方の相談担当者と顔が見える関係ができ、参加した当事者の劇的な展開も次々に起きているそうだ。足を運べば、何かが変わることをつかんだ。

もともとDVはあった。そこに震災が影響して激化している。性暴力は、震災など関係なく、常に起きている。発覚するのは氷山の一角。弔慰金が世帯主に一括で支払われるから、離婚に際し、女性の貧困問題を起こしている。失業、一時的なお金が入る、しかし先に希望がまだ見えない、生活環境の激変で孤立･･･などの理由で、アルコール依存、買い物依存、パチンコやギャンブル依存が増加している。失業保険も切れ、弔慰金などの手持ち金も枯渇して、経済状態が悪化、DVはより深刻化している。仮設暮らしの過酷さから頑張って新築したが、収入の減少、ローンの重さに疲弊してくる。女性の雇用状況は厳しく、セクシュアル・ハラスメントが起こる。震災で家族を亡くした女性の一人暮らしや、心細い母子家庭に対して、セクシュアル・ハラスメントやストーカー事件が起きている。ボランティア、NPO活動者による性暴力、被災者間の性暴力もある。

地方に根強い男尊女卑、家父長制の強烈な弊害。行政や福祉分野の人にも、人権教育がまだまだ浸透していないし、公的相談や支援の広報が不足している。それに対して、民間の商業主義の情報は強力である。「ピンチをチャンスに！今後も災害をバネに、人権教育の普及を推し進めたい」と締めくくられた。『女たちが動く～東日本大震災と男女共同参画視点の支援』（みやぎの女性支援を記録する会編著　生活思想社）を参照のこと。



＜子ども･若者支援の現場から＞

福島での受け入れ窓口にもなってくれている中鉢博之さん（NPO 法人ビーンズふく

しま）からは、「福島における子ども・若者支援の視点から」というテーマで話題提供してもらった。中鉢さんは、2001 年より福島市でフリースクールの設立に関わり、震災後は仮設住宅における子ども支援や「子どものこころのケア」事業担当として、支援者支援や専門職派遣なども行っている。

震災から 3 年近く経過した現在でも、14 万人を超える福島県民が避難生活を余儀なくされている（2013 年 10 月現在）。そのうち子ども（18 歳未満）は、福島県内 13,332 人、福島県外 15,816 人、計 29,148 人であり、ふるさとを離れて仮設住宅やみなし仮設住宅で生活をせざるをえない子どもはかなりの数に上る。自主避難の多い市町村は、福島、郡山、いわき市の順で、県外避難は母子の割合が高い。震災から 2 年目は、もともと復興ステージの踊り場となる時期（変化があまりなく、避難生活が続くとの意味）だったが、福島の場合は、帰還の見通しの無さ、避難区域再編の遅れ、除染の遅れなどによって、2013 年度も同じ状況が続いている。復興公営住宅の建設も遅れ、帰還のためのインフラ整備も進んでいないことから、来年度以降も、仮設住宅での生活はさらに長引く見込みである。

避難して仮設住宅で暮らす子どもたちは、度重なる避難生活、転校、交友関係の断絶、親の失業、同居家族の分断などの環境変化を受け、ストレスや問題行動が増えている。母親たちは、依然として高い放射線量と二重生活による経済的負担を抱え、「この生活がいつまで続くのか」「自分の選択が果たして正しかったのか」と、長期化する避難生活の中で自分の判断に自信が持てず、自己肯定感が持てなくなっている。

支援者や親から上がってきた声をまとめると、①安心して存分に遊べる機会が少なくなったことによる子どもたちの体力低下や肥満　②子どもたちの落ち着きの無さや言葉の荒れ　③チャイルドラインに寄せられる子どもからの電話相談で、人間関係による悩みの比率が被災地で高く、とくに福島は岩手や宮城より高い　④県外避難世帯への支援不足、自主避難者には経済的負担の問題が大きい　⑤母子（父子）のみの避難による家族の分断と別居の長期化、放射能に対する考え方の違いから家族間での軋轢が生じてきている　⑥ひとり親世帯の急増　⑦子育て支援事業の不足　⑧移動手段を持たない親は、子どもの遊び場や支援の場まで行けない　⑨避難生活の中での生じる大人同士の人間関係の悪化（両親の不仲、DV、近隣住民同士の諍い等）が子ども同士の関係にも影響する　⑩慣れない土地で生活再建に追われる保護者によるネグレクト　⑪親の経済的困窮による子どもへの影響 ⑫放射線への不安から子どもの行動を管理せざるを得ない状況にある保護者の負担　⑬イベント型の支援による遊びの提供等が多く行われることにより、子どもが与えられることに馴れ、主体となって行動するという自主性が損なわれてしまう心配がある　⑭支援が入りやすい地域と入りにくい地域の格差　⑮原発事故に伴い発生した「被災者」「被災地」に対する差別の問題がある。

ビーンズ福島では、県外避難者への支援として、避難生活へのストレスケア、母親同士の交流会、子育て支援の情報提供を目

的に、避難先から戻ってきた母子への支援「ままカフェ」を、6 月から福島と郡山で、12 月からは白川といわきでスタートした。また、福島県内の仮設住宅等で避難生活をしている子どもたちへの支援として、県北の仮設 3 か所(福島と二本松)と県中の仮設 4 か所（富岡町と川内村）で放課後学習支援や子ども広場の活動を続けている。走り回って落ち着かなかった子どもたちが集中できるようになり、子ども同士のつながりができ、表情がよくなった。中長期の子ども支援が必要だが、震災後の緊急期を過ぎた後、支援は少なくなった。イベント型ではなく、避難生活の中での生活課題の解決や不安の解消につながる寄り添い型の支援が求められている。子育て、教育、心のケア等に対しての一定の専門性が必要。親・家庭・地域が子どもを支えていく力を取り戻すこと、一方的な支援だけでなく、避難者の自立や主体性の回復が重要だと考える。

本当の復興は、子どもがその地域で育ち、次世代に地域の継承がなされるようになることである。除染が進んで放射線量が低減しない限り、子どもを元の町で育てることは難しいと考える親や若い世代が多い。復興への道筋をしっかりと示しながら、子どもを持つ親世代や若い世代が希望を失わないような支援、つながり、文化を保ち続けられるような支援が必要。仮設住宅等で生活する子どもが、見通しが持てないことからあきらめてしまわないように、これまでの社会がつくってきた課題（原発事故）を子どもだけに背負わせないようにするには、国をはじめ、社会全体のサポートがまだまだ必要だと力説された。

＜岩手の子ども支援＞

次に、「岩手における子ども支援の視点から」として、山本克彦さん（一般社団法人子どものエンパワメントいわて・代表理事/岩手県立大学准教授）と八重樫綾子さん（NPO 法人いわて GINGA-NET 代表）が岩手での子ども支援について報告してくれた。

山本さんは、震災時、フィリピンで学生たちと井戸掘りボランティアをしていたという。3 月 17 日に帰国し、岩手県の災害ボランティアセンターをどう立ち上げるかということを課題に、沿岸部を視察した。自然災害は、子どもに危機的状況をもたらす。2004 年、中越地震の時も少し関わったが、家屋のほか、地域の学校、幼稚園、保育所、児童館、公民館、あらゆる居場所が無くなってしまう。今回の大震災では、いろんな出会いがあって、2011 年 10 月 17 日「一般社団法人子どものエンパワメントいわて」を立ち上げることになった。信頼できる機関がないかという外からの問い合わせに対して、一般社団法人をとった。

イーパッチという略称で活動しているが、震災当初、世界中からさまざまな団体や人が支援を申し出てくれて、その資源と豊富

なネットワークを現地の支援につなげるという役目を果たすことにした。後で紹介するギンガネットもそのひとつ。ユニセフやセーブザチルドレンなど多くの国際 NGO が入ってくれたが、メリット、デメリットがある。資金もあり、それぞれのノウハウで一気に活動を展開するが、避難所のなかにシートを拡げて、「子どものための遊びをやるから、ここには入らないでね」とか、「何だよ、時期的には早いんじゃないかな」とか正直あったりして、言い方を変えれば、頃合いを見て、地域の文化とのすり合わせをして、地域の子ども支援団体との調整や準備などもあった上で動くべきだと思う。

イーパッチが考える被災地支援とは、十年後の大人である子どもをエンパワーして、地域の復興の力をつくること。学校の空教室、仮設住宅の空き場所や公民館などを借りて、沿岸部約 20 ヶ所で、「学びの部屋」という形で居場所機能を持つ学習支援も行っている。自分たちの企画を持ちこむのでなく、ちょっと困ったなというニーズがあったら、出かけて行って、話を聞いて、その場所の支援を作るようにしている。今は、支援されるばかりでなく、自分たちも役に立ちたいという声に応え、少年野球チームが内陸部の雪かきを手伝いに行ったり、被災して再建したパン屋さんに子どもたちのパン焼き教室室を提供してもらったりということも行っているということだった。

八重樫さんは当時、岩手県立大学の学生で、学生ボランティアセンターで活動していた。ちょうど 4 年生になる前の春休みだったが、被災地ボランティアに行くことは前提で、仲間たちと、いつ、どのような形で被災地に入るのがいいのかと構想を始めて、

1 週間後に被災地に行った。初期、全国の学生ボランティアセンターは、被災地支援に行きたいが、現地の状況がわからず躊躇していた。でも、被災地にはたくさんのボランティアが必要。それで、受け入れ機能が果たせたらと、最初の夏休み、千人の大学生を受け入れた。住田の公民館を借り、大学生のベースキャンプにして、寝泊まりなど生活のお世話をし、沿岸部へのボランティアバスを運行させた。以後、冬休み、春休み、夏休みと、学生の長期休暇期間の受け入れをやってきた。

最初の 1 ヶ月、釜石のボランティアセンターの窓口で、学生ボランティアたちと、全国各地から来たボランティアの受付、避難所と炊き出しボランティアのマッチングなどしていた。その頃、毎朝欠かさずボランテ

ィアに関わってくれていた子どもたちの姿があった。学校がずっと休みで、公衆トイレの掃除をやってくれていた高校野球部の子どもたちの姿。その後、姿が見えなくなっていったが、本当は、そうした姿を地域に見てもらい、お疲れさまと声掛けがあるような地域のつなぎができていたらよかったなと振り返って思う。4 月になると、県外の学生ボランティアたちも動き出し、ユニセフのイベントを手伝った。遊びだけでなく、子どもや親が顔を合わせ、交流する機会にもなった。

5 月になると、大学が始まり、週末を利用しての活動となった。生活支援が中心になり、応急仮設住宅でのコミュニティ形成支援として、サロン活動を始めた。支援物資が多く集められたなかに、おむつや子どもたちのものも多くあった。おむつが欲しいという声に、他にも必要な人がいるだろうから届けたいが、自分たちだけでは届け先がわからないという時に、子どもたちに相談したら、子どもたちが学生ボランティアの手をひいて、「あそこに赤ちゃんいるよ」「おじいちゃんいるよ」と連れて行ってくれるようになった。子どもたちはよく見ていて、よく知っている。ちょっと仕掛けで、子どもたちの力を引き出すことも体験から学んだ。

「お茶っこ」と呼ばれるサロン活動も、初めは持ち込み型で、ボランティアが「ようこそおいでください」というスタンスだったが、その場を住民の場にするということで、子どもたちの力を借りた。子どもたちがちらしを配り、声をかけてくれると、少しずつ地域の人が集まってくれる。子どもの人をつなぐ力をみきわめること大事だなと学んだ。子どもたちの力が発揮されることが未来を作ることになる。未来に想像力を持つこと、先を読む力を今後も活かしていきたいということだった。

＜臨床心理士としての活動を振り返る＞

次は、臨床心理士の河野暁子さんの報告だった。河野さんは昔からの私の友人で、2005 年から 2011 年まで国境なき医師団で活動し、パレスチナ、イエメンに派遣されていた。東日本大震災時、帰国していたこともあって、直後より東北に派遣され、2011 年 3 月から 6 月まで、宮城県南三陸町と岩手県宮古市田老で活動し、そのまま東北に残ることを決め、2011 年 10 月から 2012 年 3 月まで、千葉大学こころのケアチームとして一関市で活動した。

震災発生からの 1 年、臨床心理士だからできたこと、臨床心理士でないとできないこと、臨床心理士に期待されたことを考えてみた。震災直後は、海外からの心理専門家が「被災地でのケアの方法を教えてあげます」、あるいは、カルト集団が「カウンセラーです。こころのケアを行います」と入り込んだ地域もあった。災害直後のディブリーフィングが有害だということや自殺のリスクのアセスメントなど専門知識が必要なこともあるし、被災地に一人ボランティアで入って「こころのケア」をやるわけにはいかない。少なくとも臨床心理士という資格があることで、組織に所属することができた。活動の中で、臨床心理士としての視点で関わることができたと思う。避難所で被災地、被災者を元気づけようというイベントが多かった中、無理に元気づける関わり方をせず、被災者がくつろげる場、被災者同士が語

れる場を用意した。話をしたい方には耳を傾けた。

とは言え、臨床心理士でないとできないことはないのではないかとも思う。実際、震災直後は誰でも「こころのケア」を名乗って、被災地に入っていくことができた。ていねいに傾聴することを心掛けたが、傾聴ボランティアとの違いは何だろうと思ったこともある。傾聴する際に専門知識を持っているかどうかだろうか。

臨床心理士に期待されたことは、震災関連以外の課題も手伝ってほしいということだった。2つの考え方があり、①被災地・被災者のための支援なのだから、それ以外の相談は断ってよい　②地域から信頼されるには、最初から震災関連以外の相談は受け付けませんという態度ではよくない。本来は地域の社会資源が担っていた役割なのだと思うが、「こころの専門家」が来たから、あれもこれもお願いしようと、様々な相談が持ち込まれた。大切だったことは、被災地・被災者に「今」必要なことは何かを考えること、現地の自治体の思いを尊重すること。地域のメンタルヘルスについて取り組んでいる自治体保健師との連携はとても大事なことだった。活動終了の際、現地が必要としている物は現地に引き継いでいかなければならない。

2012年4月からは、大船渡地域こころのケアセンターに勤務し、大船渡、陸前高田、住田で活動している。外部から来た臨床心理士だった自分が、地域に暮らす人となった。地域のある保健師が、「5年後には住民同士が自由に語って、互いに支え合っていけるようになってほしい」ということで、地域の傾聴ボランティアやゲートキーパーの養成研修を始めた。元々の社会資源が被害を受けているので、そこをサポートする。例としては、講師を担当できる人材不足を補い、徐々に地域の者が講師をやっていけるように。

研修に参加する方々の喪失体験が大きいので、「大変な状況の中、地域のためにがんばってくださっている」とねぎらうと、涙を流す方々もいる。被災者や遺族のために拓かれるサロンのような場には人が集まらないが、研修等でグループになると、必ず震災の話題になる。「故人を知っている人と話したい」「同じ境遇の人と話したい」「誰とも話したくない」「他の遺族の話は聞きたくない」「見知らぬ第三者と話したい」「口寄せで気持ちが楽になった」など、誰と話したいかは人それぞれ。

個別訪問で、自治体が実施するスクリーニングや健康調査のための個別訪問を続けている。「家族を亡くした辛さは、同じ立場の者でないとわかりません」と、玄関先で拒否する方もあれば、招き入れてくれて、「初めて話せます。来てもらってよかったです」と言ってくれる方もある。「話

を聴いてもらえてよかった」「あんたたちのおかげだ」と言ってもらうと、支援者として少しは役に立てているのかなと思うが、「あなたたちに話しても、この気持ちはわかりません」と言われると、申し訳ないと、こちらの感情が揺さぶられることの繰り返し。ペアで活動することの大切さを感じる。

震災以来、自分の時計が止まってしまったような感覚があった。これまで経験した海外での活動は一定期間活動すれば、自分の世界に帰れた。今はまだまだ帰れないと感じる。かなり意識して休暇を取るようになった。最近、地域での連絡会議の回数が減り、参加者も減ってきた。「こうやって復興していくんだよね」と言った人もあるが、「本当に復興なのか、風化ではないのか」と思った。実際、被災地以外との隔たりをますます感じる。テレビでは東京オリンピック開催が決まりましたと盛り上がっていたが、自分が暮らすアパートの外は、高台移転のための土をようやく切り崩しているところで、建築業者も足りないし、人も足りない。今後のことが心配になる。

＜京都における支援＞

最後は、野池雅人さん（特定非営利活動法人きょうと NPO センター常務理事・事務局長）から「避難者支援、支援者支援の経験から」というテーマで話題提供してもらった。きょうと NPO センターでは、まず、京都からボランティアを送った。災害ボランティアセンターを京都駅に設置し、そこを拠点に 1 年間ボランティアバスを出し続け、500 人のボランティアを送った。その後は、本来の NPO の支援センターとして、現地と専門機関をつなぐ役割を果たし、支援団体の悩みに対する講座を開催した。

次に、民間のお金を必要なところにうまく届けたいということで、京都でやっていた地域創造基金を宮城に持っていき、地域創造基金宮城を作った。これは、民間の資金循環の仕組みとして、3 年間で 9 億円が集まった。つなぷろ基金というのを作り、京都の市民から集められた資金を現地で活動している機関に届けた。それから、京都の避難者のための雇用創出を行っている。多くが母子での生活のため、フルタイムでない形で働きたいという希望が多く、当センターでも 3 名雇用して働いてもらっている。最近では、支援される場所をたくさん作っても、来る人が減っている。いかに日常生活の場面につなぎ手を増やしくかが今後の課題だと思っている。

これで 3 年目の活動が無事終了した。

病児保育奮闘記

(12)

子どもサポート H&K
大石　仁美

子育て相談

時々、卒園した懐かしい方から、相談電話が入ることがあります。どうしていいか分からなくなり、子育てに行き詰った時、ふと思い出してもらえるのは、やはり嬉しいものです。

赤ちゃんの時から、自分の子どもを知ってくれているという思いが、安心感につながるのでしょう。それにどこにも属していない民間の、子育て経験豊かな？おばあちゃんというのも良いのかもしれません。

利用者は、ハイソサエティの方が多いので、世間体もあるでしょうし、なかなか公的相談機関には行きにくいということもあると思います。

お母さん方は、教養があり礼儀正しく、とても素直な、いかにもお嬢様育ちと思われる方々が多く、私とは育った環境が違いすぎると感じることも多々ありますが、はじめての子育てで戸惑うのは、誰も同じ。臆せずに感じたままをお話しするようにしています。

財布のお金が・・・？？

A 子ちゃんのお母さんからの相談は、次のようなものでした。

「以前から財布からお金が抜き取られていたようなのですが、少額だったせいか気づきませんでした。ある日、パパが出張で新幹線に乗っていた時、財布に入れたはずのお金がなくなっていることに気付いたのです。とっさに、すられた！と思ったようなのですが、冷静に考えてみると、財布の中身だけがなくなるのは変だということで、家に帰ってから子どもたちを問い詰め、同時に子ども部屋を点検したところ、A 子ちゃんだということが判明したのでした。

きつく叱り、本人も謝って一件落着したかと思ったのですが、その後も抜き取りは続き、パパが疲れてうたた寝をしていた折、ズボンのポケットにいれておいた万札が数枚なくなったと気づいた時にはパパの激怒は頂点に達し、あの子の脳には欠陥があるにちがいない。精密検査が必要だということまで言いだし、母親の自分もどうしていいか分からず、おろおろする毎日です。本人は謝るけれど、本当に悪いと思っていないのか、ばれた翌日にまたやってしまうのです。これは病気なん

でしょうか?

今は家の中だけで済んでいますが、もし外でやるようになったら大変なこと。物欲が強いのかというとそういうわけでもなく、欲しいものは特にないというのです。マンガ本やゲームの類が増えているのは確かなのですが、どうしても欲しかったというわけではないそうで、どう考えたらいいのか、本当に困っています。

A 子ちゃんは小学 5 年生。三人兄弟の末っ子で御茶目で個性的な女の子。(大学生の兄の評価) 学校の成績は悪いけれど、それでも学校は楽しいらしく、休むこともなく元気に通っています。友達も多く、クラスでは人気者で、よく家に遊びに来る子たちは 5〜6 人いて、良い子たちなのでその点では安心しています。

母親からの情報はこの程度ですが、さてどうしたものか、

脳に欠陥があるかもと考えるに至った理由は

なんど叱っても盗みが止まらないということ以外に、授業参観に行った折、ボ〜ッとしていてなんにもわかっていないという実態を見て、そのことも加わってのことでした。

でも保育園時代の彼女は、のんびりしてはいるけれど、ごく普通の女の子。問題があるとは思いませんでした。

① 本当に友達関係はいいのだろうか。いじめはないのだろうか。
② 父子関係はどうなのだろう。万札を抜き取るのは父親の財布からなので、厳しいという父親への、形を変えた反抗とも考えられないだろうか。
③ 勉強がわからないことへのストレスも大きいかもしれない。
④ おこずかいはどうしているのだろうか。

お母さんにアドバイスが出来るかどうか、自信がないまま、とりあえず本人に会ってみることにしました。

A 子ちゃんとの面接

お母さんに連れられてやってきた A 子ちゃん。ほう、こんなに大きくなったのかと目を見張るほどの、大柄な女の子。浅黒い肌でやや小太り。ほとんど目をあわそうとしないまま、早口でしゃべり、目をキョロキョロさせて落ち着かない様子。お母さんには席をはずしていただいて、彼女の話をまとめると次のようなものでした。

「**お父さん**は仕事が忙しくて夜は帰りが遅く、会うと怒られることが多くて、怖いです。甘えたことがありません。

この間は、勉強したか?予習、復習はちゃんとしたか?というので、終わったよと答えると、お前には勉強に終わりはないといわれました。

お母さんはやさしくて、お父さんが怒っているといつも助けてくれます。でもそれがもとでいつも夫婦喧嘩です。

勉強は算数と社会がきらい。でも、国語と美術体育は好きです。特に本を読むのが好き。一人で静かに読むときが楽しい。ミステリー、オカルト、ファンタジーなど、空想するのが好きで、例えば、猫がでてくると、こんなかわいい猫になって、塀をよじ登ったり、爪を立ててみたり、好き勝手に寝転んでみたりする自分を想像する。そんな時間が楽しいです。

学校は楽しいです。お友達がたくさんいるから。いつも仲良くしている人は 6 人だけど、他のクラスの人とも全員と言葉を交わしたことがあり、みんな友達です。

欲しいものは、さほどありません。例えば今欲しいと思うものがあっても、しばらくすると他のものに関心が移るので、今欲しいと思ってもそれを手に入れようとは思わない。結局、要らないも

のになってしまうので。
お金も別にそんなに欲しいとは思いません。」

やっぱり箱庭

A 子ちゃんには日を改めて箱庭をしてもらいました。その完成を見た時の驚きとうれしさ。私の不安はいっぺんに吹き飛んでしまいました。そこにはっきりと答えが出ていたからです。こんなことは初めてです。たった一回で、こんなにもきれいに現状がみえるとは思ってもみませんでした。

線路の上を汽車が走っています。馬たちが線路の周りに集まり、汽車の窓から投げられる餌を待っているのです。餌はすなわち現金です。

どうやら彼女は、お金や品物をばらまいているようです。

「他のクラスの子とも全員言葉を交わし、みんな友達」　普通そんなことはありえません。

みんな友達ということは、裏を返せば本当の友達はだれもいないということ？もしかしたらいじめ？
不思議に思い気がかりだったことの謎がこれで分かり、すっきりしました。

こわい猛獣は檻に閉じ込めました。

自分のじゃまをするうるさい人たち、お父さん、もしかしたらお兄ちゃんも入っているかも知れません。そして檻の前に座って彼らを眺められるようベンチをおきました。これで罪悪感がないこともはっきりしました。

奥のテーブルやティセット、芝生の庭は彼女の空想の世界。ここで楽しい夢をみるのでしょう。

「線路はここで行き止まり。」そう言って砂をかけて先端を埋め、さらに「止め」を明確にするために、障害物をおきました。これが嬉しいですね。彼女はいずれ止めることを予告しているようです。

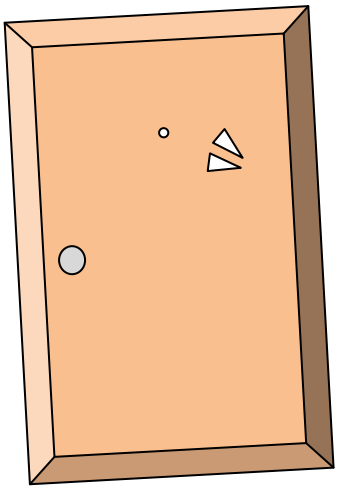
ああ、よかった！これでお母さんを安心させてあげられる。数日後、連絡をとりお母さんに来て頂きました。

私からのアドバイス

1．今後お金は盗られないように、盗らさないように、親がきちんと金銭管理をすること。これを機会に、その都度買い与えるのではなく、こづかい制にして、お金の大切さを考えさせてください。
2．子どもが「盗っていない」と言った時、怪しいと思っても問い詰めないで、時には騙されてやることも必要かもしれません。
3．今以上に話をよく聞くよう気遣ってください。学校の友達のこと、先生のこと、読んでいる本のこと。楽しかったこと、つらかったこと、困ったこと、感動したこと etc.
4．成績をよくしようなど、現時点で望まないでください。
5．休日は男どもをほっておいて、女同士で楽しいことをして過ごしましょう。行きたいところに行き、美味しいものを食べ、おしゃれをして、いっぱいおしゃべりしましょう。
いまは、楽しいことをたくさん経験することが何より大切だと思います。現実の世界で楽しいことが沢山あれば、授業中にぼんやり空想していることも減るかもしれません。

「A 子ちゃんはお母さんが大好きで､お母さんを信頼しています。それに本人が、いずれ止めると意思表示をしていますので、大丈夫！！そのうち終息すると思いますよ。」

お母さんは安心したのか、パッと表情が輝いて、嬉しそうに帰って行かれました。
来春、新学期が始まる前にもう一度お会いすることにしています。



おじゃまします

精神科専門訪問看護日記

（1）

高垣愉佳

はじめに

このお話しは、精神科専門の訪問看護を行った約一年間の間に見聞きしたものをまとめたものです。個人情報を保護する為に、事実に若干の修正を行った上で、かつ精神科専門の訪問看護というものがどういうものなのかを知っていただき、また、このお話しを通して精神病もしくは精神障碍者と呼ばれる方々への理解を深めてもらえれば嬉しく思います。

精神科訪問看護という分野

訪問看護の種類

「訪問看護」という言葉は一般にも広く浸透してきていて、そんなの聞いた事もないよという方は少ないと思います。みなさんがご存知でイメージされるのは「介護保険の老人訪問看護」ではないかと思います。実は訪問看護にはもう一種類別の、難病患者・重度障碍者・末期がんの方などのお宅に伺って看護を行う「医療保険の訪問看護」というものがあります。精神科訪問看護はこの「医療保険の訪問看護」の方に分類されます。

精神科訪問看護が出てきた背景

精神疾患で医療機関にかかる患者さんの数は、年々増加傾向にあります。精神病床入院患者数は微減傾向ですが、疾患別の内訳を見ると、入院されている方の 6 割近くが統合失調症や妄想性障害の患者さんです。外来での疾患別受診患者数の内訳をみると、統合失調症などの方は約２割強です。入院されているのは大半が統合失調症の方ということになります。そして、日本の精神病棟の平均在院日数の推移は、年々減少傾向が続いており、2010 年のデータでは、２０年前と比較すると約 200 日短縮されています。それでも、現在でも平均在院日数は 300 日近くなのです。身体疾患の急性期一般病棟の平均在院日数が 13 日程度になっていることと比較すると、これがいかに長く、異常な事態なのかということが想像できるのではいでしょうか。300 日というと約１年間です。ちなみにこれは平均在院日数なので、もっと短期間で退院される方がおられることを考えると、1 年よりも更に長期で入院されている患者さんがたくさんおられるという事です。また、この平均在院日数 300 日

というのがいかに特殊で異常な事態かというのを知る為に、国別の精神科平均在院日数との比較も役にたつと思います。日本の平均在院日数は欧米諸国の実に約 6 倍という長期間なのです。こうした背景があって、アメリカで生まれた ACT（包括方地域支援制度）の実践や近年日本に紹介されたフィンランドのオープンダイアローグ（OD）などが注目されています。精神科訪問看護は、ACT や OD のような特別の思想やシステムがあるわけではありません。日本の保険制度の枠組みの中で、医師からの指示を受けて動くシステムです。ただ、それだけのものですが、確実な効果を挙げていることも事実です。具体的にいうと、退院後訪問看護をスタートした患者さんは、その後一時的に病状が悪化した時に入院することはありますが、それは一時的短期的な入院で収まり、何と訪問看護を受けていなかった時期に比べて入院する期間が 4 分の 1 にまで短縮されているのです。これは、2 年間に渡る調査で明らかになったことです。

＊文中で使用及び参考にしたデータは、全て精神科訪問看護基本療養費算定要件研修会で使用された資料に基づくものです。

汚部屋あれこれ

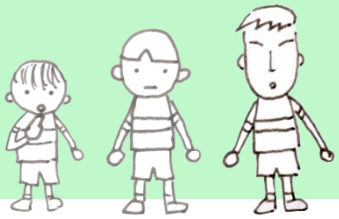
難しい制度や背景はさておいて、現実場面のお話しに入りましょう。訪問看護ですので、当然ながら患者さんのお宅におじゃまします。私が働いていたステーションは制服は無かったので、それぞれ私服を制服代わりに使っていました。普通の服を来て、名札だけ下げて約束していた時間にふらりと患者さんのお宅に伺います。そして、インターフォンを押すなり、ドアを叩くなりして「こんにちは～。〇〇（ステーション名）の〇〇で～す。」と言って、ドアを開けてもらいます。おうちに上がる際のご挨拶はもちろん、「こんにちは～。おじゃまします。」実際に、「邪魔や！要らん。帰ってくれ。」と言われる事もありますが、そういう時には無理強いはせずに、その方が入れてくださる所まで入れていただきます。それは敷地内だけだったり、玄関だけだったり、客間だけだったり、どこでもどうぞだったり、その方の状態や気分と訪問者との関係性などがあいまってまちまちです。

で、どこまで入れていただけるかはさておいて、精神科の患者さんの特徴としてまず挙げられるのが、汚部屋が多いということです。私は「散らかり系」「不潔系」「圧迫系」と呼んで自分の中でカテゴライズしていたのですが、いくつものお宅にお伺いする中で、一口に汚部屋といっても様々なパターンがあることに気づきました。「散らかり系」には 2 パターンあって、物が多すぎるがゆえに散らかっているパターンと、極限まで物が無いにも関わらず散らかっているパターンです。で、この両者の場合、後者の方が患者さんの状態が重いことが多いように感じました。次に「不潔系」です。この「不潔系」汚部屋になっている方も状態が重い方が多いように感じました。そして、「散らかり系」と「不潔系」が混在している事も多いのですが、多くの患者さんが散らかっていることに関しては自分自身でも嫌悪感を感じて訴えられるのですが、不潔であることに関しては気になっておられない方が驚くほど多いのが特徴的でした。最後のパターン、「圧迫系」です。これも 2 パタ

ーンあって、物が多すぎて圧迫される状態になっているタイプと、そんなに物が多いわけではないのに圧迫される状態になっているタイプがありました。「散らかり系」や「不潔系」の汚部屋はそのほとんどが重度の鬱病や統合失調症の患者さんのお宅に多かったのに比べて、「圧迫系」汚部屋は圧倒的に強迫性障害の患者さんのお宅で多く見かけました。ちなみに、この「圧迫系」に関してのみは、汚部屋と呼ぶべきかどうか迷うくらいに整理整頓され清潔も保たれている所が多かったのも特徴です。しかし、物の量もしくは配置の仕方の加減によって、何とも言えない絶妙な圧迫感を醸し出すお部屋というものが確かに存在しました。

こうして、いろんな患者さんの色んな汚部屋におじゃまするわけですが、訪問を続ける間に、お部屋の様子がいつもず一っと変わらない方もおられれば、驚くほどの模様替えや大掃除をされる方もおられました。汚部屋の変化具合からも患者さんの様々な体調や気分の変化を垣間見る事ができます。というわけで、訪問看護において汚部屋におじゃまする事は患者さんを理解する上で本当に大切な事で、フロイトとユング風に言うと「汚部屋におじゃまることは、精神科訪問看護のアルファでありオメガである」ように思います。

知的発達障害の家族の日々9

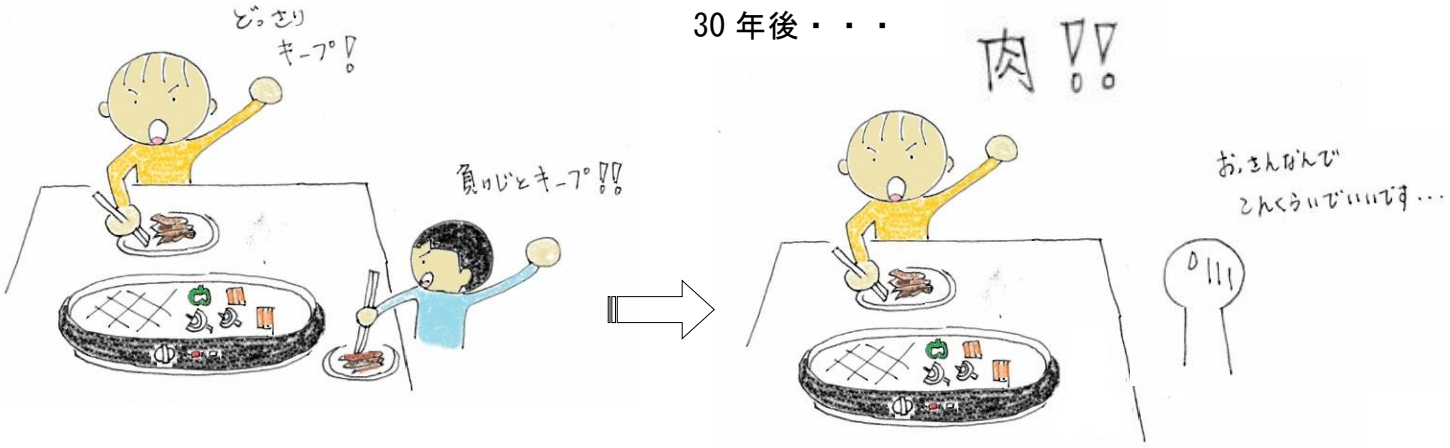


大谷　多加志

味覚

弟は明らかに食の好みに偏りがあった。単純に肉が好きで、野菜は嫌いだ。食事時になると食卓をずいっと覗き込み、お好みの品があるといそいそと着席し、食事に備える。好みのものがないと「あんまりお腹が減ってないなぁ」などと嘯きながら、ビデオを見に居間に戻っていく。当然だが、お好みの品を食べつくすと急に「お腹いっぱい」になる。

こんな食事スタイルの弟であるから、当然食べ方にも偏りがある。個人の皿の上で勝手に食べている分にはこちらも特に構わないが、鍋や焼肉など、1つの場から各々が食材を取る場面になると、彼の偏りに強制的に巻き込まれることになる。例えば焼肉であれば、放っておけば開始５分で肉は全滅し、残りは単なる焼き野菜になる。



肉を食べたければ、序盤で確保する必要があった。ただ、弟も負けじと確保するので、途中から「皿にキープする肉は 2 枚まで」という我が家のルールができた。結果、食べた者から次が取れるようになるので、全員がさらにハイペースになり、却って早く肉がなくなることになった。私は痩せていて小柄な割には食事のペースが速い方だが、これはこのあたりの経験からきているものだと思う。

自分でも肉を偏って食べているという自覚はあったようで、自分が肉ばかりおかわりするのが目立たないように、時には「ほら！入れてやるよ」と母の器に肉を 1 切れ入れてあげ、ついでに自分のさらにも２切れほど・・・という技も使うようになった。今思えばかわいらしいところのようにも思うが、当時は意図が丸わかりな小芝居に、少々いらっとすることもあった気がする。

弟の食の好みは肉以外でもはっきりしていて、味の濃い、わかりやすい味のものが好きだった。必然、コンビニに置いてあるお菓子類や惣菜などは、好みに合致するものばかりであった。夕食前に小腹がすいてくるとコンビニでカップめんやお菓子を買って食べてしまい、肝心の夕食はほとんど手をつけないこともあった。そんな高脂肪、高カロリーな食生活であったので、結果的に体重はどんどん増加していった。

自分自身のことで言えば、この数 10 年で随分食の好みは変わったと思う。肉など味の濃いものは少量で満足するし、だしの味にほっこりしたりもする。年齢相応に味覚も変化してきているように思う。一方で、弟の方は一貫して濃い味、わかりやすい味が好みで、変化していない。そうは言っても、彼も 30 代半ばを過ぎた体。年々大きくなるお腹周りと、もうゴムのものしかはかなくなったズボンを見ながら、『内臓脂肪も結構なんだろうなぁ』と健康状態を心配してしまうこの頃だ。

この手の話は、障害を持つ家族がいる家庭では比較的よく聞くように思っている。ASD も関連した偏食の場合もあるし、健康に留意して食事を調整するのが難しい場合もあるのだろう。『健康』は、結果が即時的に返ってこないので、周囲の説得も効きにくかったり、本人の動機づけも持ちにくいのかもしれない。

対人支援点描（８）

「地域格差と支援に携わる人材確保」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

1. はじめに～人材募集

今月に入ってから、帯広に住む作業療法士の支援者仲間から、その支援者が勤めるクリニックの母体となっている病院の常勤の心理士を探しているので心当たりないかという連絡を受け取った。もともと勤めていた心理士が退職するため、後任を探しているということであった。

しかし、この話は、実は去年の今頃にも同じ話が持ち上がっていた。その時は、私も本業があり、加えて次年度からえりも町に本業とする業務（幼稚園）が決まっており、なおかつ外勤する話（この時は、浦河町の相談支援事業所）も進んでいた。同じ地方でがんばっている支援者仲間の相談ということもあり協力したいという思いもあったが、先方では常勤職が必要ということであった。何でも認知症疾患医療センターの活動の要件としても常勤職が必要であるということである。私も月１～２回程度であれば、何とかしたいと思ったが、それでは十分ではない。けれども、その後、幸いにも後任の目途が立ち、私もその話を聴き安堵していた。

ところが、今回、その採用予定であった後任の方が赴任することができなくなったのだそうである。そのため、話は振出しに戻ったというわけである。

ご存じのとおり心理士の国家資格はまだない。そのため、医療現場など算定に影響する“国家資格ではない”心理士の働き口は少ない。新人の常勤職の就職となると、就職前にどこかの医学部の医局に入るなどある程度の道筋がないとできない。そう実感していた。だが、北海道に来てから、その見方も変わった。北海道の臨床心理士のメーリングリストから流れる求人メールは、常勤の心理士の募集が割合多いという実感がある。北海道の事情として心理士の養成校が少ないという地域的な事情もあるのだろうが、募集の中には臨床心理士の受験資格取得の段階、つまり修士課程修了１年目の資格取得前の人材でも応募を受け付けるというものまである。

こうなってくると、北海道では心理士の就職は、困難は困難だが絶望的な状況ではないといえる。心理士になろうと志し、大学院を修了して働こうと思う人は、当然、非常勤職員を寄せ集めて働くのではなく、常勤職を望むであろう。その望みは、果たせないわけではないのである。おまけに、先に話題に合ったような医療現場は、福祉現場の乏しい雇用環境に比べれば格段に良い。以前の職場を例に関係医療機関と福祉現場を比べれば、福祉現場のサラリーは半分、拘束時間は倍くらいと冗談が冗談にならないくらい差が見られた。ともすれば、医療現場から常勤職で、なおかつ資格取得前でも良いという条件は破格な募集である。

しかし、それでも人材確保が難しい現実が北海道にある。それは、何が要因となるのであろうか。

2. 地域格差の中の更なる地域格差

国内で東京一極集中が指摘されて久しい。このいびつな集中化は、実は戦争のための国策として始まったという論もある（野口悠紀雄（2010）『1940 年体制増補版』東洋経済新報社）。その論じるところの是非を問うには自分は門外漢であるので対話にならないが、東京一極集中という傾向は 1940 年前後にその萌芽が見られたと指摘できるだろう。1940 年代と言われても、自分が生まれる以前の話のため同時代の証言ということも言えない。東京オリンピックの栄光をもう一度とがんばっている元首相ぐらいであればわかることかもしれない。今も東京一極集中の本流を歩んでいる。

その東京からみたとき、北海道および沖縄県は地方や地域と呼ばれる両翼もしくは両端といえる。そのどちらも、経済はもちろん教育や福祉においても低水準の状況におかれている。

さらに、北海道内においては、道外への人口の流出とともに、北海道内の地方や地域と呼ばれるところから中央である札幌市への人口の集中化が生じている。北海道の人口の 3 分の 1 超が札幌市に集中している（2015 年国勢調査によると北海道の総人口 5,383,579 人、札幌市 1,953,784 人、対比 36.29%）。

日本で地域格差が生じているその中においても、更なる地域格差が生まれているのである。

また、北海道独自の事情として、北海道の広大な土地の問題を指摘できる。北海道の鉄道や高速道路網は、北海道地図を置いて札幌市のあたる所に左手の手首のあたりを置いてちょうど手を広げ指先へ向かうように各地へとめぐらされている。けっして環状にはめぐらされてはいない。つまり、札幌へ向かうように北海道の人と物流ができているのである。しかも、その路線の多くが赤字となっている。北海道内の地方から人口が流出し、地域産業が衰退すれば、当然のこととして路線を利用する人も減少する。そして、超がつく不採算を廃止することで、一層の負のスパイラルが強化されるという構造である。私自身も北海道に移り住んでわかったことだが、北海道の広さは住んでみて実感するものがある。私が住んでいる日高地方は、広さが東京都の約２倍、福岡県と同じくらいの広さがある。北海道の一地方がこれだけの広さがあるため、交通網も比して長くなる。利用者が少ないのに資材費や維持費は数倍かかる。厳寒の気候は劣化を速め、必要以上の経費をかける。そのような環境にある。さらに、今年は北海道にあまり縁のなかった大型の台風が連続して上陸し、北海道の主要産業である農業や漁業に影響を与え、それだけではなく鉄道網や道路網も破壊した。北海道内の地方をさらに分断させることになった。日高地方においても JR 日高線の廃止を決定づけた出来事となった。

3. 地域格差は、支援者不足を生む

このような格差は、経済や利便性といった問題だけではなく、支援者不足という地域格差を生じさせる。これまでも田舎であるから家賃や食べ物が安いとかということがないということを指摘してきた。相対的にみれば、医療現場も公的な医療機関を除き、民間のクリニックなど都心部の方がサラリーは良いようである。生活のしやすさを考えても地方には不便が多い。生活の質について損得勘定で測れば、北海道の地方にメリットを見出す理由は少ない。例外があるとすれば、そこが地元であるとか、地元の人とのつながりがあるとか、田舎の暮らしが性に

合っているとか、本来の業務とは異なった理由で北海道の地方や地域に住み働いているようである。

しかし、そういった生活者としての支援者の面ばかりではなく、専門職として地方や地域で働くことを妨げるものがある。

それは、同業、同職、同じ専門とする仲間の不足や、学会参加や研修の機会などの不利益である。私自身も感じていることであるが、北海道の臨床心理士会の研修のほとんどは札幌で行われる。北海道外に出かけることを思えば、参加もしやすく、研修費用も安い。しかし、札幌近郊に住む者にとって交通費と心理士会主催の研修費は、せいぜい 3,000 円程度であるが、そこから一歩離れると往復 8 時間以上かけて移動し、時間によっては宿泊もして参加することになる。これを職場からの出張ではなく自己負担すれば、毎回 10,000 円以上の余分な出費を生じさせる。結果として、参加を制限しなければならなくなる。また、こうした状況は、研鑽の機会を減らし、新しい情報や支援者仲間とのつながりを減らすという職務の質への影響を与えることになる。土曜日や日曜日に、少し勉強に出かけてくるというわけにはいかなくなる。1 年、2 年であれば大きな影響は出ないかもしれないが、10 年、20 年となると、さすがにきつくなるのは明白である。

私の知り合いの内科医も開業するのに、日高地方か、都市部化を選ぶのに、同様の理由で迷ったということである。最終的には、その医師は、パートナーの仕事の関係もあり日高地方で活動することを選んだ。だが、専門性を持つ職業であるだけに、迷いも大きかったのではないか。

4. 中間的なまとめ～続く負のスパイラル

地域格差が支援者不足を生じさせる理由について日ごろ感じていることを述べたが、最初に紹介した帯広の心理士の募集は続いている。余談だが、えりも町役場では保健師と社会福祉士を募集している。だが、応募があったという話さえ聞こえてこない。

こうした地域格差が支援者不足を生じさせると、何が起こるかというと住民へのサービスが低下したり、行き届かなくなったりするということが起こる。負のスパイラルである。

こうした課題を、どのように克服していけばよいのか。この点についても引き続き検討する必要がある。

「あ！萌え」の構造：序論

（7）

総合心理学部　齋藤清二

19. 「プラセボ効果」に「騙すこと」は必須か？

「萌え」の「苦痛抑制効果」についての話題から、いつのまにか「プラセボ効果」の話になり、さらにそこから「非特異的効果」という「人を喰った」話題へと、我々の乗った舟は漂流を続けている。これ以上漂流を続けていると、地球の端の水平線から流れ落ちる滝に巻き込まれて奈落の底へ落下してしまうおそれがあるので、すこし話題を引き戻すことにする。といっても本題の「萌えの探求」までには戻らず、「プラセボ効果」の話なのであるが。

プラセボ効果についての医学における論争や研究は、実に奇妙な状況を呈している。それは非常に重要なことがらであるということは、多くの人が認めているのであるが、それを正面切って話題にすることには、一種のアンビバレンス（両価的感情）があるように見える。これはおそらく、何度も繰り返し論じてきたように、医師がもっとも恐れていることは、「お前は偽医者だ（つまりペテン師だ）！」と言われることであるということに関係していると思われる。「え、それっておかしいじゃん。だって偽医者が

自分の正体を見破られるのを怖がるのは分かるけど、アンタって医者でしょ。なんでホントの医者が怖がるのよ？」とあなたは思うかも知れない。まさにそうなのだが、おそらく多くの医者にとって、「プラセボ効果を使うことも医者の重要な技量のうち」ということを認めることは、「あ、ひょっとするとアンタって偽医者？」と言われるのと区別できないことなのだろう。

このような事情にさらに話題を追加したい。統合医療（ホリスティック・メディスン）という医学の一分野にアンドルー・ワイルという非常に有名な医師がいる。統合医療をひとことで定義するのは難しいが、要するに近代の西洋医学だけにこだわるのではなく、一般には科学的ではないとみなされるような、様々な伝統的な医療の方法論や、相補代替医療と呼ばれるような幅広い理論・方法論をも取り込んで、患者の治療に役立てようという考え方の医療である。ワイルはその著書の中で、自身のホメオパシーの治療体験について触れ、「プラセボが治療効果を発揮するためには三つの条件がある」と述べている。ワイルに拠れば、その一つ目は患者がその薬の効果を信じていること、二つ目は医師がその薬の効果を信じていること、三つ目は患者と医師の間に信頼関係があることだという。これは「本来は効果のないはずのもの」が効果を発揮する時の状況（条件）をうまく言い表しているように見える。しかし、よく考えてみると、このような条件下で薬理学的に効果がない物質が何らかの効果をもたらしたとしても、それを「偽薬」と呼ぶ必要なない。そこには意図的な「偽り・騙す」という行為は存在していないからである。このワイルの言説は我々に有意義な洞察を与えるものではあるが、事態はさらにそれを超えてゆくのである。

20. プラセボを巡る最新の知見

ここで、もう二つほど最近報告された興味深い研究知見について触れておきたいと思う。一つは最近急速に進歩している脳画像の解析による神経科学・脳科学的な研究の結果である。いくつかの報告によれば、プラセボが患者に主観的な効果を実感させている時（例えば痛みの軽減やうつ気分の改善などが得られている時)、脳は「実薬」と「偽薬」を区別できていないらしいということである。つまり、偽薬によって症状が軽減している人の脳画像検査が示すパターン（脳のどの部位で血流が増えているか、あるいはグルコースの消費が増えているかなど）は、実薬によって同様の効果が得られている人と区別できない。つまり偽薬は、その人の主観的体験を変化させていると同時に、その人の脳に対してもそれと相関するような変化をもたらしている。そういう意味では明らかに生物としてのヒトの一部分である脳は、認知的にも生物学的にも「偽薬によって騙されている」とも言えるが，別の言い方をすれば、プラセボ効果は決して「幻」ではないということになる。

もう一つの衝撃的な研究結果は、「プラセボは、それが偽薬であることを知っている患者にも効果を発揮する」という事実である。これはにわかには信じがたいことであるが、良くデザインされたRCT（無差別割り付け試験）として実施された研究におい

て、あらかじめ「これは全く効果のない薬です」と説明しておいた場合でも、「効かないはずの薬を服用した群」に明らかに効果が認められるというのである。そうすると、患者がその薬の効果を信じているかどうかは、プラセボ効果が発揮されるための必要条件ではないということになる。どうしてそのようなことが可能なのだろうか。

実はさきほどのワイルが述べている、「プラセボが効果を発揮するために必要な三つの条件」の記述は、実はワイルがそれを思いつくにいたったワイル自身の体験とは矛盾しているのである。すこし詳しく説明してみよう。ホメオパシーと呼ばれる代替医療は、実は非常に古い伝統をもっている。ホメオパシーの理論の根底にある原則は、極めて単純化して言うと、「病気はそれを引き起こす原因と同種のものによって癒やされる」というものである。ホメオパシーには、現代の医学とは全く異なる病気の分類の仕方があり、その診断を導くための精緻で複雑な方法論がある。例えば「水銀の病気」という診断カテゴリーがあり、ある特定の症状が複数あり複数の診察所見のセットが揃っている時に、それは「水銀の病気」と呼ばれることになり、それは「水銀」によって引き起こされていると判断される。ホメオパシーの理論によれば、「水銀の病気」は「同種のもの＝すなわち水銀」によって癒やされるはずなので、患者に水銀を投与すればその病気は治ると考える。これは現代に生きている私達にとっては思考を破壊されるような論理である。だって、水銀が原因で水銀の病気になっているのに、水銀を投与することが治療となるというのであれば、病気を起こすことと治療は同じものということになってしまう。しかし、一方で「毒を以て毒を制する」などという言い回しが現在でも使われているように、因果論だけによって病気を制することはできないという知識が生き残っているということの証拠にもなる。しかし、一般にはどう考えればよいのだろうか。水銀という毒によって水銀の病気が引き起こされている状態で、さらに水銀を与えれば水銀の病気はさらに悪化するだろう（有機水銀中毒＝水俣病の患者に有機水銀を与え続ければ当然病気は悪化し続けるだろう）。それなのに水銀を使うことで水銀の病気を治す。どのようにしたら、そのような矛盾が可能になるのだろう？

ホメオパシーの理論は、この問題を以下のような原理を持ち込むことによって解決する。すなわち、水銀の病気を治すための水銀は微量であればあるほど効果がある。実際には水銀が入っている原液の一滴を一定量の水に加え、それを徹底的に振盪して希釈したら、それを一滴取ってさらに一定量の水で希釈する。これを何度も繰り返し、理論的には水銀の分子が水の中に存在する確率がほとんどゼロに近くなるまで続ける。そのようにして限りなく希釈された「水銀」の水溶液ができあがり、それを「レメディ」と呼ぶ。その水銀のレメディが「水銀の病気」の特効薬となるのである。

近代医学の常識を身につけている我々から見ると、「レメディ」は、これ以上はないくらい確実なプラセボである。このような水に生物学的効果があるということは考えられない。もしこのレメディが実際に効果を発揮するとすれば、それはプラセボ効果以外に考えられない。実際ワイルも医師で

あるから、このような理屈は百も承知していたのである。従ってワイルはホメオパシーが効くとは信じていなかった。ところが実際に西洋医学の治療では治らなかった症状が、ホメオパシーのレメディの投与によって見事に改善した。これはワイル自身が患者として体験したことである。この経験からワイルはプラセボが効果を発揮するための前述の３つの条件を考え出したのである。

しかし、賢明な読者はもうお気づきと思うが、ワイルの主張は明らかに間違っている。あるいはワイルは勘違いしている。ワイルはレメディが単なるプラセボであることを知っていた。つまりレメディの効果を信じてなどいなかったのである。また、ワイルを治療したホメオパシー医が、果たして効果を信じていたのかどうかは証明のしようがない。よって、ワイルの体験したホメオパシーによる治療（つまりプラセボによる治療）のうちで確実だったのは、ワイルとそのホメオパシー医の間に信頼関係があったことだけなのである。そうでなければワイルがホメオパシーの治療を受けることなど有り得ない。

以上のことから少なくとも次のことが言える。プラセボが効果を発揮するためには、治療者や患者がその「偽薬」の効果を信じている必要はない。必要なのは、治療者と患者の間に信頼関係があるということと、その二人の間で「何か」が行われることだけなのである。よって「プラセボ」に「偽薬」という言葉を当てるのは適切ではない。またプラセボ効果を治療に用いるということは、医師が患者を騙しているということではない。騙そうが騙さなかろうが、それとは関係なく「プラセボ効果＝非特異的効果」は、信頼し合う治療者と患者との相互行為において生じる。それは認知的変化と生理学的変化を「実際に」伴うのである。

21.『萌え』についての考察の進め方についてのメタ考察

さて、延々と「プラセボ効果」についての議論を続けて来た。読者は「いったい、『萌え』の話題はどうなってしまったのか？」と思っているに違いない。さらに言えば、「この『序論』は何時まで続くのか？いつになったら『本論』に入るのか？」とイライラしておられるのではないだろうか。ごもっともである。非常によく分かる。しかし、正直言って、筆者の実感としては、これはいつまでたっても『序論』なのである。なかなか本論が書けるという気がしない。あーでもない、こーでもないと論じているうちに、もしかすると『本論』につながる何かが浮かび上がってくるかも知れないが、もうしばらく我慢しておつきあいを願いたい。そうはいっても、これまでに論じたことをある程度振り返って整理しないと、何時までたっても堂々巡りしているだけになりかねない。そうだ。その努力をしてみよう。

ここまで、どちらかというと『萌え』についての「機能的側面」についての議論に時間を費やしてきたような気がする。機能的側面とは、要するに、『萌え』はどのように役にたつのか？そしてどのような害を生じるのか？ということである。整理してみよう。

1）『萌え』には、強力な苦痛抑制効果がある。
2）その効果は、「プラセボ効果」と呼ばれるものと関連が深いが「非特異的効果」と呼ぶほうがより適切である。
3）上記の「苦痛抑制効果」の負の側面として、「依存」がある。
4）「依存」が生じるメカニズムとして『萌え』と「似て非なるもの」との取り違えが関与している可能性がある。
5）「似て非なるもの」に関連する現象として「カップ焼きそば現象」がある。
6）「カップ焼きそば現象」は「プラセボ効果」が生じることと関連している。
7）よって、「カップ焼きそば現象」について理解することは、『萌え』の有効性を活かすとともに「依存に陥ること」をある程度防止する可能性がある。
8）『萌え』を有効利用することはストレスコーピングとして有用であり、同時に「依存」をある程度コントロールすることで、有用性はさらに増強するだろう。

うーん。ちっとも整理されていないなあ。どうどう巡りの循環構造を呈しているような気もするが、一応この問題はここでいったん保留にしておく。不十分ではあるが、萌えの機能的側面の検討をいったん離れて、『萌え』の別の側面について論じていくことを考えたい。

たぶん『萌え』の構造的側面について論じていくのが良いのだろうなあ。なぜなら、本稿のタイトルは「あ！『萌え』の構造」だからである（←今さら何を）。あれやこれや色々と考えているうちに、ふと思い出したことがある。昨年ある人の修論を指導していたのだが、それがとても面白いテーマで、直接『萌え』という言葉がタイトルに出てくるわけではないのだが、「母娘関係と娘のサブカル趣味の関連について」というような、とても興味深いテーマの研究論文であった。サブカル趣味のある青年期の女性に半構造化インタビューを行い M-GTA で分析するという本格的な研究なのだが、その中で、娘の語りから「関係性萌え」というカテゴリーが浮かび上がってきたのである。つまり「萌え」のパターンには、「関係性萌え」「キャラクター萌え」「ストーリー萌え」といったサブカテゴリーが抽出でき、単にあるストーリーのあるキャラにスタティックに萌えているだけではなく、そこにはダイナミックなストラクチャーがあるという一種の「構造」が浮かび上がってきたのである。

よし、次回はこれをヒントにして、『萌え』の構造的側面に考察を進めていくぞ！乞うご期待。

＜続く＞

海の向こうにでて見れば

(6)「物乞う人」に…

石田 佳子

一概に「海外に住んでいる」と言っても、現地の人々に溶け込みなじんで暮らしている人だけではなく、日本人とばかり交流しながら暮らしている人、ほとんど誰とも交流せずに暮らしている人など、その暮らし方はさまざまです。とりわけ海外に住む日本人には、「日本人“村”社会」と揶揄されることがあるほど特有のコミュニティを形成する傾向があるため、今回は自分の経験約５年前、生まれて初めて東南アジアを訪れた私は、赤ん坊を抱いて路端に座り込む女性や、自らの障がい（欠けた手や足など）を誇示しながら金銭を求める男性の姿に衝撃を受け、「彼らはなぜここでこんなことをしているのだろう？」「私は彼らに何ができるだろう？」という疑問に捕らわれました。日本では彼らのような「物乞う人」を目の当たりにする機会が乏しかったため、驚きと困惑と憤りを感じたのです。彼らのいる風景を見慣れてしまった今になっても、それらの疑問は解けた訳でなく、答えを探して私の内で燻り続けているようです。そこで今回は、「物乞う人」と彼らを取り巻く状況について考えてみます。

「物乞う人」から「商う人」へ

私が住んでいるクアラルンプールの中心部では、ピカピカの高層ビルが乱立し、豪華なホテルや流行の飲食店、近代的な建築物、高架式のモノレールなどがひしめき合っています。マレーシアは凄まじい勢いで発展している国ですから、ここ数年間で街の様子が急激に変化しました。ポンコツ自動車や廃墟のような建物を見かける機会は減り、「物乞う人」と出会う場所も限られて来ています。

しかし、それでもやはり（中心部からほんの数分歩いただけで）雰囲気が一変し、打ち捨てられたような風景にとってかわる、寂れた地域もあるのです。そんな場所には無造作にゴミ屑が散らばり、微かな異臭が漂っています。薄汚れたビルの隙間や路上には、垢で全身を真っ黒に覆われたホームレスの男性が寝そべったり、様々な年代の「物乞う人」が座り込んだりしています。

オープンエアのフードコート（屋台が集まった所）で食事をしていると、金銭（喜捨）を求める人がやって来ます。あまり清潔そうに見えない服装をしていても、店主も客も目くじらを立てることなく、見過ごし容認しているせいか、彼らは臆することなく堂々と自己主張します。また、

毎週決まった場所で行われる地元のパサール・マラム（夜市）には、決まって彼らが現れます。彼らはまるで欠かせない参加者のように、違和感なくその場に溶け込んで見えるのです。賽銭箱と共にポケットティッシュを携えている人もいますが、金銭（喜捨）と引き換えにティッシュを持ち去る者はほとんど居ません。しかし、その代わりに彼らは音楽を奏でたり、唄を歌ったり、深々と頭を下げて謝意を示したりするのです。

パサール・マラムの「物乞う人」たち（クアラルンプールにて）

もしかすると、誰かにマージンを支払っているのかもしれませんが、彼らの顔には「引け目」や「羞恥」といった暗さが見受けられず、「商う人」のような自信すら感じさせます。

音楽を奏でる「パフォーマー」たち（チェンマイとシェムリアップにて）

考えてみれば、唄や音楽を提供してお金を得るのは「パフォーマー」ですし、物と引き換えにお金を稼ぐのは「商う人」の仕事です（実際には“形だけ”の場合もありますが）。彼らは「与える/与えられる」という一方的な関係でなく、「遣り取りする」という対等な関係を築こうと努力しているのかもしれません。

途上国の「命にかかわる貧困」

発展途上の貧しい国々では、先進国とは次元の異なる「貧困」が見受けられます。低所得、栄養不良、不健康、教育の欠如などのために人間らしい生活ができない程の貧困状態を「**絶対的貧困**」と呼んで、「1 日 1.90 ドル以下で生活している人たちの数」で表します。

世界銀行によると、2013 年時点でこのような状態にある人たちは、7 億 6660 万人でした。世界の人口は約 73 億人ですから、地球人口の約 1 割（10 人に 1 人）が、日々死を覚悟して生きなければならない程の「貧困」の中にいることになります。貧しい国で、貧しい親の元に生まれたために、教育も医療も受けられず、命の安全が脅かされる環境の中で、必死の努力をせざるを得ないとしたら……？衣食住にも事欠き、読み書きも計算もできないため良い仕事には就けず、一日一日をただ生きのびるための悪戦苦闘に明け暮れ続けるとしたら……？

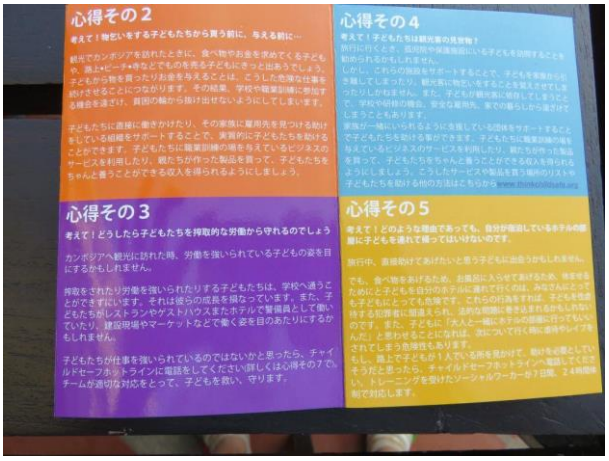
そのような状況では、生きるために切り捨てたり奪われたりするものが増えるでしょう。言うまでもなく、教育や医療や福祉などは容易く手に入りません。また、警察や法律がうまく機能していないため、親にわずかな前金を支払ってその子どもを買い取り強制労働や売春や臓器売買などに従事させる犯罪（人身売買）が、横行します。売られたり騙されたりして働かされる子ども達は、劣悪な環境の中に置かれ、暴力や折檻や栄養失調や不衛生による疾病（性病や感染症）などで死んでしまうことも少なくないそうです。

「人権」も「尊厳」もない世界

インドでは、マフィア（ごろつき）が「物乞う人」をモノのように管理しているという話も聞きます。路上で暮らしている子どもたちを連れて来て、その手足を切り落としたり、火傷を負わせたり、目をつぶしたりして物乞いをさせ、その上前を跳ねるのです。また、成人の「物乞う人」に赤ん坊を貸し出すビジネス（レンタルチャイルド）もあり、その赤ん坊の供給源として出産を強いられる女性たちがいるそうです。マフィアの目的は、「“顧客”の哀れみを掻き立ててより多くの小銭を出させること」ですから、そこには子どもや女性への配慮どころか、「人権」や「人間としての尊厳」といった概念さえ微塵もありません。

カンボジアには、今も戦争の傷痕が生々しく残っていて、地雷で手や足などを失った人たちの物乞う姿が、そこかしこに見られます。家族や友人を殺されたり殺したり、身体の一部を奪われたりといった地獄さながらの現実を通り抜けて来た人たちが、心の傷を癒して自立して行くのは並大抵のことではないでしょう。また、親を失い、幼い頃から路上で屑拾いや物乞いに従事した

り、ペドフィリア（小児性愛者）の餌食になっている子ども達には、明るい未来が思い描き難いでしょう。観光地のホテルやレストランには、観光客に向けて「子ども達は、見世物ではない！」との警告や、「個人にお金を与えるのではなく、団体に寄付しましょう」との啓蒙が、英語その他の言葉で書かれたリーフレットが置かれています。



子どもたちを守るためのリーフレット（カンボジアのシェムリアップにて）

迎え入れる雰囲気

途上国の政府やコミュニティには、福祉制度のようなセイフティネットを設ける余裕がありません。宗教施設や慈善団体が支援の手を差し伸べていますが、それだけでは到底足りないため、基本的にはすべてが「自己責任」で賄わねばならない世界です。怪我や病気や老いなどで働けなくなれば、一直線に「貧困」に向かって滑り堕ちる他ないのです。それでも（それ故に？）「物乞う人」を排除するのではなく、迎え入れ認めようとする雰囲気が、少なくとも私の訪れた東南アジア諸国の「普通の人々」には感じられました。そしてこのような雰囲気は、日本をはじめとする先進国では、ほとんど感じたことのないものでした。

先進国の「わかりにくい貧困」

今の日本では、物乞いが法律（軽犯罪法，児童福祉法，市町村の条例など）で禁止されているため、彼らの姿を見かけることはほとんどありません。また、その他の先進国でも生活保護や医療保険などの社会保障制度を設けている国が多いので、働けなくなっても「命にかかわる貧困」に直行することはないでしょう。しかし、だからといって「貧困」がない訳ではありません。

OECD は「**相対的貧困**」という言葉で先進国の貧困層を定義しています。これは「等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割って算出）が全人口の中央値の半分未満の世帯員の割合」で、つまり一定基準の所得を下回っている人の多さを示します。日本の相対的貧困率は、総務省「全国消費実態調査」(2009 年)では 10.1%、厚生労働省「国民 生活基礎調査」(2012 年)では 16.1%と上昇して（増えて）いて、平成 21 年度の所得の中央値は 250 万円なので、年収 125 万円（月収は約 10.4 万円）以下で生活している人が貧困と見なされ、これに該当する日本の貧困層は全国民の約 16%（6 人に 1 人）です。

親が貧困に陥ることで問題になるのは、「子どもの貧困」であり「貧困の世代間連鎖」でしょう。親の所得が低いためにその子どもが十分な教育を受けられず、生涯安定した仕事に就けないとしたら……？人は努力した成果が認められたり、達成感を味わえた時に、喜びや満足を得て『また明日も頑張ろう！』と思えるものでしょう。しかし、頑張っても事態が一向に改善せず、将来に何の希望も見出せずにいたら……？頑張りたくてもその対象(仕事や活動の場)が与えられず、所属集団（会社や家族や社会）から弾き出されてしまったら……？

冷ややかな眼差し

ストレスにまみれて疲れ果てた時、心の隙間にアルコールやドラッグや借金といった「悪い習慣」が入り込むのは、容易いことのように思われます。しかし、それらの悪習にはまることは、水面に浮かび上がろうともがいている人の手足を縛ることにも等しく、彼らをより過酷な状況へ追いやるのです。暴力や売春や犯罪（加害/被害の両方の可能性を含む）に手を染めたり、より

一層困窮した状態や自暴自棄や自滅といった方へ向かわせる、潤滑油や陥穽になることが多いのです。

私の印象では、日本やアメリカ、カナダや欧米などの先進国で「貧困」は、“個人の問題（他人ごと）”や“自己責任（自業自得）”として片付けられ、見過ごされがちなように思います。競争や効率を重視する資本主義、個人主義の世界では、「物乞う人」にも厳しく冷ややかな眼差しが注がれがちなのです。そのような蔑みの視線や、大半の人が豊かに暮らしている中で「自分だけが貧しさに苛まれる」「希望も成すすべもない」という状況は、彼らに深刻なダメージを与えてエネルギーを奪う、残酷な足枷になるに違いありません。

自力ではどうにもならない悪循環にはまり込み、社会の底辺に転がり堕ちてしまったら、どうしたら良いのか？何ができるのか？……せめて「自分にも起こり得ること」として、今後も考え続けたいと思っています。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

〜シーズン１「SM クラブの受付」〜

エピソード ７ ：サボる受付が仕事化する

しすてむ❤口きよたけ

僕は、止まらない。進む。自分だけ止まっている気になることはあっても、他の人が進み、社会が進むのだから、止まってなんていられない。

僕は、飽きる。何か一つを貫くことも大事だと思うけど、つまらなくなる。自分に違う息吹が舞い込むことを望んでいる。

僕は、自由に動きたい。いる場所で、勝手な振る舞いと思われることをしているのだろうが、結果として、思いがけない息吹を吹かせていること起きるのではないかと思っている（←これができます！はないけど、何もできないはずはないと堂々と言ってみている感じ）。

なぜ、止まらないこと、飽きること、自由に動きたいことを書いたのか。今回で「SM クラブの受付」を一旦止め、次号からシーズン２を書き始めようと思ったからです！前号の最後に「初日に行った実務的なことを綴る」と書いたんだけど、変えまーす！

思い出して行くと、僕の勤務時間の多くは、寝ることやおしゃべりをすることだったので、その辺りを中心に書きます。仕事と思えないワードですが、僕はそこがキャストの欲求や不満をキャッチし仕事にしていたようでした。

さて、それではいつも通り、今回のラインアップを。「1.　ちびっこ相撲からデータ収集」、「2.　お昼寝からオススメポイントGET」、「3.　人懐っこさから限定コース」、「4.　売り上げを届けただ飲み」、「5.　アベルの悩み」、「6.　僕はサボっていたけど許されていた」

1.　ちびっこ相撲からデータ収集

僕の身長は、157 センチ。とても小さなおっさんだ（当時はギリおっさんではなかった・・・ということにしておこう）。

プレイに、格闘プレイがある。格闘を性風俗で解釈することは難しい。SM 嗜好を

通常の射精を目指す快感産業と捉えるからだろう。性風俗から、格闘プレイを観戦したら、エッチな放送をしていることにもなるので、どうやら当たり前とされている性的対象の水準から格闘は外れている。「プレイ」とついている理由がよくわかる。

格闘プレイが好きで、僕より少しだけ身長が低いキャストがいた。はじめから、格闘プレイが好きだと知っていたわけではなかった。

僕が、待機室で写真の入れ替え作業などをしていた時、「清ぴー、清ぴー」と藍子が後ろから抱きつかたことがあった。

「ちょ！近すぎるで！おっぱい当たる！アウト！」など言いながら、席を立つと彼女は「おっと！闘うのか！来るのか！来い！！ワシは強いぞーー！」といいながら、僕は「お！そんなん負けへんでーどうだどうだ！！！」と言いながら、足をかけたりつかみ合ったり、時には倒してしまうようなことをしていた。

それを観ていた周りのキャストが「おっと！ちびっこたちが、何か始めてるー」「ちびっこ相撲じゃなーい？」とやんや言っていた。

ここから僕は、さらに藍子に興味が出た。この人、おしゃべりより、身体を使った方が会話につながる、と思った。ここから、売り上げが悪いときにこれまでの記録を見直し、通常コースとイベントコース、時期、客層などを辿り始めた。

彼女がしたいと思うタイミングと客の欲求がマッチしていない時期も見えてきた。また、写真の写り方と彼女がしたいことが合って居ないような気もしたので、少々厚かましいか？と思いながら、一緒に写真の見直しをしてみた。

結果的に売り上げが上がったがどうかはわからないし、直接的にグンと効果があったかもわからない。だけど、彼女に惹き寄せられる僕が居たのだから、きっとそのタイミングは、受付がキャストと作ることができるのだと思った。

ここでの「プレイ」は格闘でも快楽でもない。僕も楽しんでいるから「遊び」だと思う。しかし、時が過ぎて気づいたことは、僕が受付の「実務」にしていくチャンスだったと思う。

2. お昼寝からオススメポイント GET

待機時間が少しでもあれば、キャストたちは、プレイログを Twitter であげたり、ブログの更新をしたりしていた。でも、だいたいおしゃべりやゲームをしたり、アニメを観たりしていた。中には、お昼寝を。

こんな光景を横目にしながら、僕はどんなお客さんが来ているのかなど入会証の嗜好のチェック項目などを見ながら、どんなことをしているのか想像し、何をしたら電話がもっと鳴るのか・・・と考えていた。

無駄ではないが、まーー僕も黙ってじっとしているのも面白くないから、面白く過ごす方法を考えていたのだろう。

そんなことをしていると、キャストから、プレイのことを聞くことがあった。初回からどんどんできることが増えているマゾさ

ん。コンスタントに同じプレイのマゾさん。好きなキャストが決まっていて、その人が出すイベントならなんでも来てしまうマゾさんなど、あらゆる人がいることを知った。

それを誘発させているキャストたちに興味が湧いていた（←辞めてから気づいた）。

なぜだか、実務をしている時間は、僕は少なかったと思う。だって、時間があると仮眠をとる桃香がゴロゴロし始めたら、僕もゴロゴロ。よく、二人でブランケットをかけ、「足当たらない？」とか言いながら横になっていたものだ。ときには、オナラをしてしまうハプニングが起きることだってあった。それなりに羞恥もあったと思うが、なんとなく了解しあってしまえる、やり過ごしも互にあった。

ある日、「清 P〜、温玉食べたくない？」「え？ま〜そう言われたらそうやな〜」。

作り方は忘れたが、貯蓄貯金ぎょのブランケットを掛け、ホットカーペットをつけ、卵を必死に温めた記憶がある。

「醤油ない」「あ、俺買ってくる？」「電話とっとくよ〜」「ほんじゃ、鳴ったら 5 分後にかけてって言って！」「は〜い」。

勤務中に温玉が本当にできるのかどうか、さらに、食べるなら美味しく食べたいから電話番を放棄！

でも、こんなことで知ることが合った。彼女は、遠慮しがちだったり、気を使うことが多い人と思っていたのだが、上手に甘え頼ることができる人でもあった。

だからなのか、電話ごしでなよっとしてるわりに勝手な要望をしてくる客だな〜と思っている人が、彼女に懐いていた。たとえ彼女が「うっとうしい」と言っても、プレイの場ではそれが、「あしらい」として、「女王様の振る舞い」へ変わっていたのではないだろうか。

僕は、同じように待機室で過ごしてみてよかった。彼女の少しリラックスしている時間を共にしなかったら、彼女を知ることはなかったかもしれないし。

その時間により、彼女の風貌以外の気遣いや優しさある振る舞いを知り、客におすすめポイントとして伝えたくなって来ていた僕がいた。

3. 人懐っこさから限定コース

やたらと慣れ慣れしくしてくるキャストがいた。「あなたを見ると、ちょっかい出したくなるんだよね〜」と出会って２回目の時から言われていた。彼女の名前は、ゆうな。

興味をもたれることはありがたいが、割と警戒しまくっていた。でも、これってプレイとなれば、何か活かせるコミュニケーションなんじゃないか？とも思った。

数ヶ月後、僕は彼女の限定コースを作ることになった。ここに至るまで、ゆうなとはいろいろあった。

予約が入っているが、親の体調が悪く、急遽帰ることになり、予約のキャンセルの連絡を入れたり、昔からのお客さんだったので、責任者に連絡を入れ、何かフォローできないか一緒に検討してもらったり。プレイ面では、なかなか予約が入らない状況

もあった。

彼女に対してでけでなく他のキャストにも思っていたが、他のキャストがいる中、なかなか予約が入らず待機室で過ごすほど、苦しいことはないと思ってきた。

僕は、このネガティヴに漂う時間に、何かできることがないだろうか、ずっと考えていた。彼女の人懐っこさと写真のイメージ、予約をしてくる客をずっとにらめっこをしていた。

ここで抜けていることに気づいた。彼女がしたいことは何だろう。僕も興味を持ち始めた瞬間だった。

待機室で二人きりの時、僕は「えらい、近くにいてるし、パンツも見えそうで困るわ！」と言った。「そうですかー？もっと見せましょうかー？」「それは、客に見せろ！ってか、どんなプレイしたいとかってあるー？うまくいくかわかんないけど、一緒にコース作ってみて、責任者のルーブル・ガガに提案してみよっかー。特別扱いになるのは懸念するけど、まー今ある限定コースの表現を変えるだけって感じなら、イケると思うんだよね。」、「うん！やってみます！」。

気づいたら僕は A4 の紙を出し、寝転がっている彼女と同じように僕も寝そべっていた。そして、「今のお客さんって、どんな感じの人が多いと思う？」「お客さんのメモはつくってる？俺が、この人すげーっておもったのは、かんなさん。一人ひとりお客さんのプレイ内容、日付、道具、コスチュームなんかを書いて、五十音順でファイリングをしているよ。」「曜日や天気によって来る人もいるから、その辺も書いておくといいかもね」「一番、俺が知りたいこと。プレイで楽しいと思うことは、どんな時？」。

これらを、A4 の紙に書き出していき、本人が今からできること、今から店が提示できることと分けて考えてみた。

「快楽」と「奴隷」という言葉を使いコースのタイトルを作り上げた。欲求ある男が見ているモードに合わせて、多くの文面による、コース内容の提示は避け、コースで使える道具を表すことで客がイメージを持ちやすいようにした。

文言のチェックは、他の受付にも確認し、意見をもらってみた。同時に、責任者のところへ出向き、売り上げと彼女の積極的な思いを伝えた。

コースは完成。そこから、このコースで予約して来る客が徐々に増えた。僕は「3ヶ月は、焦らずこのコースをおいておいてみて、そこから次を考えていこう」と話した。その先は、僕は知らない。だけど、彼女がしたいことと客が受け取る彼女のプレイには差があった。

そこから、ごちゃごちゃしたコースを置かれ、立ち位置がわからないような印象に変わっていった。積み上げからの発展の見せ方ではなくなったコースだったので、彼女の中でどのように伸びって行っているのか気になった。ときに、相談連絡が来たことがあるが、彼女が動かなければ、次に進まないと思い僕からは動こうとは思わない。

それに、僕は店には、もういない。それ

でも彼女は、続けて所属している。

彼女が、あの時のように自分がしたいこと、どうしたらいいか探している状況に面白おかしく歩んで行く人に出会うか、自分でキャッチしながら、自ら店に言えるようになるといいなと陰ながら応援している。

4. 売り上げを届けただ飲み

締め作業。封筒にその日の売り上げ書類とお金を入れる。そのまま、事務所の金庫に入れておいていいも。

だけど、たまに「キヨ！今日、持って来てくれへん？」と責任者のガガから言われることがあった。

「なんでー？」「いやーまとめたいからさー」・・・本当は、必要じゃない。「えーまぁえーけど。じゃ、締めが終わったら、BARに行くわー」ガチャ。

僕は、責任者にも敬語を使わないし、呼び捨てをするくらいのちょっと非常識人だとつくづく思う。一方で、それを許してくれる環境だったり、僕がSM業界人ではないから縛られていないのだと思う。

さてさて、そこに届けに行ってからだ。「キヨに飲み物出したってー」この言葉が出た時は、朝の３時や４時くらいまでいることだってあった。短くても１時間くらいは滞在する。

「キヨ好きなもん言っていいよ」、「んじゃ、カラジンで。瓶のままでいいよ。」チーフに伝える。そこから、お代わりまで、自由にさせてもらえるただ飲み時間。こりゃーもう捕まったようなものだった。でも、面白かったから、好きだった。

「今日は、どうだった？」「そやなぁー。電話はならんかったなー。今風俗業界としてもM性感が出て来てるから、SMにたどり着かない人、SM 嗜好と思っていたけど実は、M性感寄りの人が出て来てるかもしれない気がするなー。だから、そこをわかった上でSMクラブをしっかり見せて行くことは大事ちゃうかなー。だって、SM が好きって人が行くことなかったら、めっちゃグロかったり、キチャナイ話やでーおもろ！！だから、何か動き始めた方がいいと思うわー。例えば、俺は、SM がわかんない。だから、グッと来るポイントが、いまいちわからんね。ってことは、迷い込んで来にくいし、来ても、女の子も客と接しにくいとか生まれてる可能性はあるんとちゃう？」他にも「広報を頑張ることが全てだとは思わないなー。コースの伝え方とか、イベントコースをタイトルで惹きつけるけど、内容は何かちょっと曖昧にしておくとかね。問い合わせある貴子のイベントを見ると分かりやすそうだけど、ちょっと質問したくなる。だから、問い合わせがある、そこから、受付がグッと推す。そして、伝えたことを女子にも伝える。これは、マッチングの話」。

たまに、ガガは、女子のメンタル的な心配をしていることもあった。僕は「いやーそれは、ガガが動いたらあかんやろ。女子同士でなんとかしてたり、待機室に来たりプレイ後に元気になったりしてるから、きやすいように、プレイが入るようにしたら、

楽しくていいやん。俺も事務所で過ごしやすいから万々歳」

そんなことをだらだら話していた。タバコ６本くらい吸ってる日もあった。たまに、「ショーやるからそれまで見ていきなよ」と言われ、そのままいて見ることもあった。

「店に私が入ったらいいかなー？」と言われた時には「あかんな。ガガが来たらレジ金合わへんからややっこいわ。」とか言いながら、少し距離を保つようにしていたこともあった。

そんなことを言っていた理由はなんだったんだろう・・。

ガガの存在は内気な女子にとっては、緊張感がマイナスに働くこともあるし、店の変更点などを聞かせると気にする女子もいたからだったかもしれない。僕は、彼女たちがプレイに専念できる何かを探していたのだと思う。そして、そこには、責任者もプレイヤーにも幕内が、いい方向に機能することもあると思っていたのだろう。

5. アベルの悩み

アベルは、雅店長の次に来た店長。店長と言われつつ、ガガと 20 年近く付き合いがあるから、店長として認められるまで、平社員として置かれていた。見定め期間だ。

彼女のすごいところは、記憶力がハンパないとこ。事務作業も 2 回くらいで覚え、客の名前とプレイ内容も覚えてしまう。他にも、元プレイヤーだっただけあって、客の要求も察知しやすい。

ただ、寝坊がハンパないし、子育て中ということもあって、子どもの学校の予定との都合もつけたかったようで、シフトチェンジが多かった。

でも、だからと言って、彼女のことを信用できないと思うこともなかったし、頼れないと思ったこともなかった。僕が持っていない、仕事っぷりが大いにあった。キャストのことも一生懸命に考えていることも「清 P 最近気になるんだｋけど・・・」とキャストのちょっとした言動から考えていた。すごく頼れると思った人だった。

他にも、彼女が来て、店がゆるくなったと言ったらいいのか、女子がリラックスしている様子もあり、僕はこういう変化も面白いと思い何か女子が店に来やすくなるんじゃないかと思った。

客にとってもよかったように思う。彼女がいるから客が問い合わせしやすいことも起きていたと思った。僕は、彼女ができていることや存在の良さがあると思っていた。

しかし、ガガは認めなかった。ガガから、「アベルを店長として鍛えてやってほしい」と言われたことがあった。「え？いやー俺は、アベルのことよく知らないけど、店長だってしてしまえば、彼女がそこから考えて動くんじゃない？しかも、失敗したっていいじゃない。そこから、発展していくことって多いにあるんだから。俺は、女の子たちに助けられて、SM を知ったり、店のことどうしたらいいか考えるようになったわけでさ。女の子たちも、それなりに柔軟性があるから、大丈夫だって！肩書きや身分で判断するのは、やめたら？」とまで

言ってしまったことがあった。

アベルは社員なのに立場は曖昧、どこまで自分が進めていいのかわからない。進めてもガガが望むものでなければ、理由なく却下、取り合ってももらえていなかった。実力主義社会であることは、性風俗業界では当然なのかもしれないが、人柄が出やすい仕事であるから、なにを実力とするのかは要検討した方がいいと思ったし、なんとかならないものかと思っていた。

今でも、僕はアベルと連絡をしている。何かわからないが、受付の連絡ネットワークに僕を抜かないでほしいということもあり、なんらか繋がりがあるからだ。

アベル！いつのまにか、あなたは、俺をお父さんと呼ぶようになったね。たまに、天パの僕をチリ毛と呼ぶようにもなったね。何も嫌な気はしなかった。きっと、客も君のフランクさやちょっとした気配りや時にバカはしゃぎすることを魅力だと思っていると思う。一踏ん張りしよう、僕らの子どもであるキャストを大事に見届けていこう。もしかしたら、これまでもあったよう、見送る立場になることもあると思う。それでも、「この SM クラブに来てよかった」とどこかで思えるような、見送りの時期を迎えられるといいな、と思う。

6. 僕はサボっていたけど許されていた

僕は、通常の業務は大事だとわかっていたけど、そこまで大事だと思ってなかった。というか、一連の流れさえわかれば、あとは SM クラブといった特殊な場だから、どうのこうのと言った話ではなかった。

いかに電話で予約につなげるか、ブッキングはないか、客の要望を聞き出せているか、そして、キャストに客の様子を伝えるか、その程度のことだった。

ただ、今も思い出すし、大事にしている仕事があった。SM クラブという非日常的な行為が行われる場だが、実は、リアルを生きているのはキャスト。僕は、キャストの生の声や過ごし方を知り、彼女たちに背中を押されるかのように新しい案を反映させていたのだろう。

それは、キャストがいなければ、店はない。店があるからキャストが集まる。キャストが今の客の欲望を見つけ出してくるのだから。

短信で少し紹介したよう、今回でシーズン 1「SM クラブの受付」を一旦終わりにし、次に進みます。

とか言いつつ、新しいシーズンでも、ついてくるはず。実は、最初に自分を売り込んだ場所が「SM クラブ」だったもので。働いている最中にガガに無理くり売り込んだのです。

ぜひ、読み物として手にするだけでなく！どうか・・・僕が何者なのか気づいていきたいので置いてくれる場、泳がせてくれる場のご提案やこんなところに来てみてよ！とお声かけしていただけるとありがたいです！

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋らNight！」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyo です。

今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00ー行っています。清武システムズHP に録音のリンクを貼る予定です。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁‼ロートーク about 熟女コースー』

人が見つかったので、あとは開始するだけになりました！！

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。さーめんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！という、通りすがりの旅人です。

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！違う息吹ここにあり！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

S・V 羅針盤のない航海

川﨑　二三彦

【3】ソーシャルワークの手順

緊急の養護相談

相談判定課長の辞令を受けて 1 か月を過ごして改めて思ったのは、「所変われば品変わる」ということだ。私自身は就職以来この日まで、児童心理司や児童福祉司として 20 年以上児童相談所で勤務しており、京都府 3 つの児童相談所で行われる合同の会議や研修その他にも数限りなく顔を出し、他の児童相談所職員についてもほぼ全員と顔見知りだったと言っていい。ところが、同じ京都府の、それも前任地とはすぐ近い児童相談所で、なおかつ 10 年前には私自身が身を置いていた職場であるのに、10 年近い児童福祉司経験の中で私がセオリーだと思っていたこと、自明のことだと意識すらしていなかったことが通用しない。日誌にはこんなことが書いてあった。

> 今日も緊急の養護相談が入った。
> 母親が近く入院しなくてはならず、その間生後 8 か月の子どもの養育ができないという病院からの通告である。電話を受けた福祉司は、翌々日に父との面接を設定したが、すぐに京都市児童相談所に電話し[*1]、ついで、遠方にある京都府管轄の乳児院にも連絡を入れている[*2]。
> 私なら、保護者から直接話も聞かないうちに施設の打診はしない。急ぐというならもっと早くインテーク面接を設定する。もちろん入所の受け入れが可能かどうかの押さえが必要であることは理解できるし、京都市所管の乳児院にも目配せしているのは準備万端と言えなくはないかも知れない。とはいえ、仮に遠方の乳児院だと家族が納得するのかどうかもわからないし、そもそも京都府の施設ならば、今すぐ打診しなくても、現在の入所状況を考えれば、受け入れはいつでも可能なはずである。逆に、保護者が遠方であることを嫌って躊躇すれば、現段階で施設側にいろいろ段取りを考えてもらうことが、かえって無駄足になってしまうおそれもある。これは福祉司の用意周到さなのか、手抜きなのか、それとも不安なのか。
> 繰り返すが、私ならまずは急いで保護者のインテーク。そこで、家族の事情について納得がいくよう調査をし、入所の必要性があると判断できるなら、保護者の希望もふまえつつ、児童相談所として妥当と判断できる施設から順次打診していく。
> この事例で感じたのは、相談の第一報を受けてインテーク面接をいつするかという入口段階で、早くも私のセオリーとは逸れてしまっているということだ。
> ちょっとしたことかも知れないが、このような感じで、この職場でごく普通に行われている（と思われる）流れに違和感を覚えてしまう。セオリーが、私の肌

*1 前号でも述べたことだが、政令市である京都市が管轄している乳児院への措置を行う場合、京都市児童相談所の了解が必要となることから、連絡したものであろう。私が赴任した児童相談所は、京都市周辺部を管轄しているので、京都市の乳児院を利用させてもらうことが保護者の希望にも添い、便利なことが多かったのは事実である。

*2 京都市児童相談所の反応がよくなくて、遠方にあるとはいえ京都府管轄の乳児院に打診したのか、乳児院すべての空き状況などを順次確認したのかどうかは、この日誌だけではわからない。

感覚と微妙にずれていくのである。
　福祉司なら誰でも同じと思っていた初動の進め方に実は違いがあり、統一的な対応を行うことが、意外に難しいということに気がついたのである。

　このようなことを日誌に書き付けた後、私は他の相談判定課長に愚痴めいたことをつぶやき、「つい愚痴が出てしまうのだが、これはあまり良くない。こんなに自分の不満を口外していてはよくないと反省する」などという記録も見つけたので、日誌で「（福祉司の）用意周到さなのか、手抜きなのか、それとも不安なのか」などと書いてはいても、やはり批判的気分は押さえられず、自分のやり方が正しいと信じ込んでいたことは疑いないだろう。

時間

　思うに、時間を計算しない、もしくはできないソーシャルワーカーは、多忙な業務を成功裏に進めることはできないのではないだろうか。たとえば、「急な病気で母親が明日から入院するので子どもを預かってほしい」という今回と類似の相談を仮定してみよう。明日からとなると、確かに慌ててしまうが、しかし今日は実家から祖母が来て数日間は滞在してくれるだとか、３日間なら父親が年休を取ることができるということであれば、祖母や父の状況を見極めつつ、福祉司として調査や調整に費やせる時間がどの程度あるかが見通せる。それをふまえ、他の業務も睨みながら最も有効かつ効率的に与えられた時間を使えばよい。むろん、身内などの協力が得られず本当に切迫した事例であれば、この福祉司がしたように、直接保護者と面接する前に、施設や里親などに連絡して入所の可能性を伝え、打診しておいた上で早急に面接等の設定を行う必要があろう。

　今回の件では、「近く母親が入院しなくてはならず」と聞かされただけで、いつ入院するのかもわからなかったし、実家などの協力が得られるのかどうか、また、どの程度の入院、入所期間が予想されるのか、何も分からなかった。だから、（当時の私は）まずは保護者から直接話を聞くことを第一だと感じたのだろう。一方、福祉司は、もしかしたら、まず最初に施設に連絡することに疑問など持たず、これが当たり前ということであったかも知れない。

　通告の電話が入った直後に、児童福祉司から今後の進め方についての相談でもあれば、私が考えるセオリーを伝えて議論できたかも知れないが、すぐさま行動する担当者の動きを、私は黙って見ているしかなかったのであった。

読みが外れた！

　本連載、本当にこのまま続けられるのか、ますます苦痛になってきた。〆切間際になってようやくここまで書き綴ると、疲れきっていつの間にか眠り込んでしまったのだが、寝ている間に記憶の片隅からかすかな声がした。かつて私自身が児童福祉司をしていた時代のことだ。

　“児相研第 1 回新人児童福祉司研修ワークショップ[*1] を企画していた時、参加者に宛てた通信に何か書き付けたのじゃなかったかい？”

　寝ぼけ眼で PC に保管しているデータをあちこち探していたら、「児童福祉司研修ワークショップ参加決定のお知らせ」というタイトルの中に、その文章が紛れ込んでいた。

*1 児相研企画の新人児童福祉司向けワークショップは、1998 年 3 月に第 1 回が開催された。当初は、海のものとも山のものともはっきりしない怪しげな印象もあったワークショップだったが、実施してみると参加者から大好評を得てその後も続けられ、2016 年には第 19 回が実施された。

＊

午後８時、例によって、たまった仕事を片づけるべく残業していたところに警察署からの電話。

「先ほど母と内縁の夫を逮捕したけれど、子どもたちの行き場がないんですわ……」

要するに緊急一時保護の依頼です。悲しいことに私の担当地域での出来事。選択の余地なく、２人の子どもがやって来た。

一時保護となると受理判定会議において決定をしなければなりません。しかし、定例の会議を待っているわけにはいかない。真夜中に児童相談所で何が起こったのか、翌朝、臨時ケース会議を開き、一時保護の（事後）承認を得ることになります。

さてこのケースの不思議は、住居は私の担当地域であるのに通学する学校は隣町ということ。しかも子どもたちに聞くと、もう２年前から電車通学しているというのです。逮捕された母の拘留がどの程度続くのか、警察に聞いてもはっきりとはわからないし、子どもの通学に関する事情もよくわかりません。一時保護は決まったけれど、この後のケースワークをどうすればいいのか、そこが問題です。

留置されている母との面接をまず試みるのか､それとも学校情報を優先させるのか。ケース運びの展望、ケースワークデザインが必要なのです。ところが翌日の私は終日保健所で発達相談をし、それが終わって夕方からは家のお金を持ち出すという小６女児のインテーク面接をする予定でした。時間がないのです。しかも保健所で予定していた午前中の相談が、これまたやっかいなケース。母は精神科の治療が必要とされていて、離婚した夫、つまり実父が同居しています。ところがこの両親がひどい虐待を繰り返し、子どもは保育園で落ち着かず、すぐに暴力をふるう、最近は登園もままならず、家の中でさらに体罰を受けている、ただ理由はよくわからないが発達相談にだけはちゃんと来るというのです。これは内容的に外せない。考えた末、私は同僚の福祉司に午後の発達相談を受け持ってもらうことにして、空いた時間を一時保護の子どものために割くことにしました。

さて保健所に着くと、まさにこれから面接という段になって職場から電話。いろいろ考えて午後に小学校を訪問しようと決め、打診していたことへの返事が入ったという連絡です。

「校長の都合で、何とか午前中に来てもらえないかとのことでしたよ。返事をしてあげてください。それと、講演依頼の電話が入ってます。無理は承知だが何とか引き受けてほしい。早急に返事がほしいとのことです。電話番号言いましょうか？」

“やめてくれ！　こっちはそれどころじゃないんだ！”

講演依頼はうっちゃって、学校には保健所での相談が終わり次第かけつけることにしました｡おまけに慌てた自分が悪いのか、鞄の鍵が壊れてしまい、引っ張っても叩いても開いてくれません。はさみで切り裂いて中身を出しました。

さて、空いた（空けた）時間を使ってまず学校へ行こうと決めたのは、校区外通学が長く続いているのだから、おそらくこの家族について詳しい情報を持っているだろうと踏んだからです、表向きは。つまり逆に言うと、母はどんな人物かよくわからないし、留置場での制限された面接では不安がある、まずは情報がほしいという福祉司側の心理的事情に、当の本人が気づいてなかっただけ。昼食はパンにして、急いで小学校に向かいます。ところがこの訪問は右から見ても左から見ても失敗。学校は子どもたちの通学状況どころか、校区外の住所も正確に把握していなかったのです。一時保護の事実を伝え、一時保護とはどのようなものかを説明し、今後の可能性についてわかる範囲で話すなど、私が情報を提供す

るだけの訪問となりました。

児童相談所に戻って、一時保護した子どもたち２人と個別面接。内縁の夫という人物への距離が兄弟で微妙に違っているのは年齢からして当然でしょうが、ここで私が困ったのは、子どもたちに母の逮捕が隠されていることです。児童相談所としてこの一時保護をどのように説明してやればいいのかを考えねばなりません。それにしても小１の弟に、「昨日ここに泊まってどうやった？」と聞いたときの第一声が「嬉しかった。オモチャもあったし」というのには複雑な思いになってしまいます。

ともかく、２人の面接が終わったら息継ぐ間もなく新規のインテーク面接。ところが、これがまたまた予定外の事態。まずは保護者だけの面接を案内したはずだのに、両親に連れられて本人まで一緒に来ているのです。面接計画を再検討しなければなりません。こんなときは、両親にお茶を運んで事務室に戻り、声を出して自分に言い聞かせます。

「よし、３分で面接の方針を立てろ！」

この独り言に周りはいつもはた迷惑。ところがここで別件の電話。

「えっ、はいそうです。ええ、ええ……」

ということで３分間は使われて、かけ声もむなしく面接室に入ってみると、案の定、子どもの様子は緊張して表情も難い。そこで私はその子と個別面接をすることに…。

＊

単なる参加決定通知にこんなことを延々と書いていたことに驚かされたが、「児相研企画」と言いつつ、当時児相研事務局長を務めていた私が、実質的には自分で企画して自分で参加者を募集し、自分でワークショップを切り盛りしていたのである。初めての企画に対する不安が、これだけの文章を書かせたのだろう、と今になればわかるのだが、それはともかく、ここで取り上げた事例に関しては、小学校を訪問することに決めた読みが外れて、結果的に学校からは何らの情報も得られなかったという結末であった。ただし、ソーシャルワークの手順を考えて行動していたことだけは間違いないだろう。

神は細部に宿る

相談判定課長の仕事ではなく、私の児童福祉司時代のことに紙数を費やしすぎてしまったが、話を元に戻そう。

緊急の養護相談のその後である。

「この件、一体どうなったんだろう」

と思って日誌を読み進むと、どうやら、比較的遠方となる京都府所管の乳児院に措置したことがわかった。そして、翌週の日誌には、次のような記載があった。

「先週乳児院に措置したばかりのケース、結局は母親が入院しなくてもよくなったため、数日の在籍だけで引き取りになった」

＊

本事例は、特に何か大きな問題があったわけでもなく、日常業務の一コマとして忘れ去られてもおかしくないものだ。とはいえ、些細なことの積み重ねが、ソーシャルワークの成否を左右することがないとは言えまい。

本当はスーパーバイザーたる私が、機会を見て福祉司と議論する素材にすればよかったのだろうが、残念ながら、この時も未熟な私にその余裕はなかったと言わざるを得ない。　　（つづく、かな？）

本稿は、「児童虐待防止法」制定、施行の前後、筆者が児童相談所の相談判定課長時代に書き付けていた個人的業務日誌を改めて繙（ひもと）き、現時点で振り返ろうとするものである。本文中、「日誌」と記載しているのは、この業務日誌のことだが、もちろん、業務内の記録ではない。業務を終えて、個人的に記した全く私的な日誌である。

これまでの連載
序
(1) 前史
(2) 最初の 1 か月
＊題名を click すると本文へジャンプします。

精神科医の思うこと③
－電子カルテ（診療録）－

松村　奈奈子

患者カルテ閲覧、病名漏らす　大阪府立成人病センター看護師、停職処分

地方独立行政法人の大阪府立病院機構は31日、患者の電子カルテを閲覧し、病名などを自分の家族に漏らしたとして、府立成人病センターの女性看護師（47）を停職1カ月の懲戒処分とした。「興味本位でやってしまった」と話している。機構によると、看護師は7月、患者の電子カルテをパソコンで閲覧し、自分の家族に病名や病状を伝えた。患者と家族は知人だったが、看護師は面識がなかった。 家族から「（患者が）成人病センターにかかっている」と聞き、職務上関係のない患者情報を見てはいけないと知りながら閲覧したという。病院から説明を受ける前に、家族が病名などを患者に話し、発覚した。＜2016年10月31日産経新聞より＞

上記の記事を見て思うことがあったので、今回のテーマは電子カルテ。

似たようなニュースはこれまでも報道された事はあり、電気カルテの医療従事者の閲覧による漏洩の記事を目にするたびに、私はとても複雑な思いになります。
実は、私が９年近く勤務した総合病院を退職したいと思った理由のひとつには、電子カルテの導入があったからです。

研修医の頃は、大先輩の診察について、先生と患者さんの交わす会話をカルテに代筆しながら診察のポイントを学ぶのが仕事のひとつでした。患者さんが退席した後、カルテをもとに先輩の先生と議論しながら、先輩の話す見立てをまた記録します。
思春期のケースなどは、カルテをもとに夜遅くまで先輩と議論するのは、本当に勉強になりました。

また、私のカルテを先輩医師がチェックして指導してもらったりと、カルテは患者さんのものであり、医師間で患者さんを共有して理解するための大切な記録です。

さらに、カルテは医師と患者さんの共有する記録だとも私は考えています。
私は外来診療では、診療の会話を本人の目の前で記入します。本人も紙カルテを覗き見れるので“その漢字じゃないですよ”と笑って誤字や家族系図の間違いを指摘してくれる事もしばしばでした。その後、患者さんが退席してから、診療のアセスメントや次回診察のプランを書きます。この部分は患者さんの目には触れませんが、私は、診療録は患者さんと一緒に作っていくものだとも思っています。

２０年前、私が精神科医になった頃はもちろん紙カルテで、各科別になっていました。
当然、わざわざ事務を通して取り寄せなければ他の診療科のカルテを見ることができませんでした。

その後、しばらくしてからオーダーリングシステムが導入され始めました。これは、診療の記録は各科別の紙カルテに書き、お薬や検査はパソコンで病院全体で管理するものです。紙カルテは残しつつ、精神科以外でのお薬や検査の結果が医師・看護師に共有して閲覧できるもので、薬や検査の重複しないようチェックでき、とっても便利な機能でした。

ところが、十数年前に厚労省は電子カルテシステムを大きな病院から導入を進める事を決め、とうとう数年前勤務していた総合病院に電子カルテの導入が決まりました。
電子カルテに関しては、他の病院を受診した友達からも“医師がパソコンの外面ばかり見て顔も見てくれない”“検査結果だけパソコンで見て、薬をだす”などの苦情を直接たくさん聞いていました。

なので、電子カルテスタートの時はかなり構えて診察をしていました。
もともと精神科の記録は文章で長く、画面に気を取られてしまい、なかなか顔を見ての診察は難しいです。そのため、診察中はキーワードだけを入力して、患者さん全員の診察が終わった後にキーワード以外の文章を入力してしました。

それでも、電子カルテが始まって間もなく、診察で統合失調症の患者さんから“先生、なんで今日は私の顔をみないの？怒ってるの？嫌いになったの？”と悲しそうな顔で言われました。すぐ“カルテがパソコンに代わって、先生はパソコンが苦手で…ごめんなさい”と笑いながら謝罪しましたが、やっぱり紙カルテのようにはいかない状況が辛かったです。

ただ、本当に電子カルテに抵抗があるのは別の理由です。

精神科の患者さんには、誰にも知られたくない、家族にも話せない事情を、診療でだけ語る事があるからです。ところが、電子カルテになると、名前などを入力したら病院内の他の診療科の医師や看護師でも、パソコンの端末で精神科のカルテを見る事ができます。はたして、この状況は患者さんが安心して話せる診察の場なのだろうか？と疑問に感じていたからです。

電子カルテに切り替わる時に、ソフトメーカーの導入前の説明会が何回かありました。
近親相姦、レイプなど性被害にあった患者さんから、誰にも知られたくないと希望があったら精神科以外からはカルテを閲覧できないように閲覧制限できるのか？と聞いたことがあります。

担当の技師は、技術的には可能だが職員には守秘義務があるのでロックは必要がないし、これまでどの病院でもそのような希望はなかった…と淡々と返されました。
説明会はほぼ男性医師ばかりでしたが、やり取りを聞いていた数人はうなずいて“それは、制限かけたいよな…”という反応で私をみてくれた事が唯一の救いでした。

なすすべもなく、電子カルテは導入され、その直後に辛い一言を聞きました。
性的被害の過去のある女性患者さんから“私の電子カルテはどの看護婦さんでもみれるのですか？”と問われました。病院に近所の顔見知りの看護師さんが勤務している。精神科の外来前で会えば、私が精神科に通院しているのがわかる。カルテを見てしまうかもしれない。私の性被害の事はカルテに書かないで欲しい…と言った内容でした。
当然の要求であり、医療診療録という視点からは一番ジレンマを感じる要求です。
勤務していた病院は郊外の病院で、医師は異動で遠方から来ている人がほとんどですが、医師以外の医療従事者は病院近辺からの勤務がほとんどでした。当然、患者さんは医療従事者に知人がいることが多い事になります。
そんな状況での患者さんの電子カルテへの不信は、予想どおりであり、抱いて当然の不安だと思いました。

電子カルテは科によっては導入により仕事量が軽減されます。
医師の悪筆カルテによる解読不明文字もなくなりました。
端末で名前などを入力すれば、カルテの情報を知る事ができるシステムは、救急の場面では大変有用だと思います。

また、膨大な事務的な処理のために全国的に大規模病院ではほぼ利用しているのは理解しています。ほかにも導入には様々な理由があって、欧米でも日本より先に電子カルテの導入が進んでいると聞いています。

そして、カルテを閲覧すると閲覧記録が必ず残り、情報漏れがあった時は閲覧記録から個人が特定できます。しかし、閲覧記録をわざわざ見直すのはトラブルのあったケースです。
知ってしまった事を漏洩として判断されなければ多くはそのままです。
前出の新聞に載ったケースは、苦情がでて漏洩が確認できたから個人を特定し、対応したのだと思います。性被害の女性が漏洩を申し出ることは難しい事だと思います。

本来は職員全員の倫理観を高め、守秘義務をまもる完璧な体制ができるのが理想です。

しかし、報道を見るかぎり、それは難しい事だと思います。
最近、何かの記事で患者が閲覧の主導権を持つべき…という考えで、患者の希望で閲覧制限のできる電子カルテを…いうのもあるというのを見ました。
本当はそうあるべきと、私は個人的には思っています。

おくのほそみち

～‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に～
二歩目；〇〇〇と私

3

理学療法士
奥野　景子

夕方、翌日の予定について伝えなければいけないこともあり、太田さんの病室に向かった。太田さんのベッドは、四階病棟六人部屋の左奥、窓側だった。「失礼しま～す。太田さ～ん、明日のことなんですけど、今少し話しても良いですかぁ？」と、手前のベッドの人に挨拶をしながらその前を通り過ぎ、太田さんの元に向かった。太田さんは、なぜか顔を赤らめ、なんだか挙動不審な感じで「はっ、ハイ！大丈夫ですッ！！」と言った。‘なんかいつもと違うな’と思いながらも、翌日のことについて話した。その間も太田さんは目をきょろきょろさせているし、同室の人はニマニマしながらゾロゾロと近付いてきた。「えっ？な、なんですか！？」と聞くと、一人のおばちゃんが「先生、なんか気が付きません？」と笑いを堪えながら言った。私は何がなんだかわからず辺りを見渡し、太田さんは真っ赤な顔を両手で覆い、同室のおばちゃんたちはキャッキャ言っていた。‘ほらほら’と目配せをされて視線を向けた先には、なぜか A4 に引き伸ばされた私の満面の笑みが貼られていた。そして、それが貼られていたのは、太田さんがベッドで横向きに寝ると顔の真正面になるベスポジだった。自分で言うのも恥ずかしいが、太田さんは私のことが大好きだった。初めて会った時、大好きな小劇団の大好きな俳優さんに激似だと大興奮された。‘……にしてもオイッ！！’と思いながら、私はみんなと一緒に笑っていた。

～　前回のおさらいと今回のこと　～

前回のマガジンでは、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていました。ただ、いざ書き進めようと思うと色々と立ち止まることがあり、「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」というテーマで、自分の中にあるもやもやを書いてみました。そして、『次回は、今回書いたことを踏まえて「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみようと思います。もし、他のもやもやが邪魔した場合は、それについて書くかもしれません。その時は‘なかなか辿り着かないなぁ～’と気長にお付き合いいただければ幸いです。』という言葉でマガジンを締めくらせてもらっていました。

さて、今回のマガジンでは、前回の宣言通り「リハビリテーションが行なわれる場」について書くのではなく、「他のもやもや」について書き進めてみようと思います。も

し、ちゃんとこのマガジンを読んでいて下さっている方がいて‘いつになったらリハビリテーションが行なわれる場について書くつもりなんだろう？’と思っている人がいたとしたら、ご安心ください。ちゃんと「リハビリテーションが行なわれる場」について書いていますよ。

0.　前回のもやもやと今回のもやもや
1.　「当事者ー私」という言葉
2.　「あなたー私」という関係 から浮かぶ「私」

0.　前回のもやもやと今回のもやもや

前回のマガジンを書くにあたって、始めは「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみようと思っていた。そして、ひとまず「誰にとってのホームグラウンドか？」ということに焦点をあてて「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみることにしていた(表参照)。ただ、いざ書き進めて行こうと思うと「そもそも‘家’って何なんだろう？」という疑問が浮かび、‘家’に関するエピソードをいくつか書き、それを軸に私の中にある‘家’に関するもやもやについて表してみた。

そして、今回はそのもやもやを踏まえた上で、もやっと書き進めてみようと思っていた。ただ、‘場’に焦点を置くということ自体が果たして良いのだろうか？という新たな疑問が浮かび上がってきた。その疑問に通じるのが、冒頭のエピソードになる。私が始めに思い浮かべたイメージ(表参照)では、病院は「当事者にとってはアウェイ、私にとってはホーム」ということになっていた。しかし、冒頭のエピソードでは、病室というある意味特殊な場ではあるが、始めは完全にアウェイの空気にのまれていた私が、最終的にはそのアウェイの空気に溶け込み、結局その場はアウェイでもホームでもない場になっていた。これはなぜなのか？ということを考えてみると、やはり‘場’に焦点を置くことはなんだか違うような気がしてきた。

では、何に焦点をあてれば良いのか？たぶん、それは‘関係性’なんじゃないかと思っている。今回は、このことについて書いてみようと思う。

	当事者	私
病院	アウェイ	ホーム
家	ホーム	アウェイ
施設	ホーム？ アウェイ？	ホーム？ アウェイ？

1.　「当事者ー私」という言葉

表では、‘場’に焦点を置いていたため、横軸(当事者ー私)をあまり意識していなかった。しかし、改めて考えると「当事者」に対して「私」という言葉(存在)は、なんだか温度感が違うような気がしてきた。そもそも「当事者」という言葉に対してあまり納得もしていない(ただ、表を書くにあたってひとまず使ってみたという感じだった)。以下では、なんだか嫌だな～と思う言葉について書いてみようと思う。

まずは、「患者」という言葉。うん、好きじゃない。そこに人がいないような気がす

るとでも言えば良いのだろうか。医学系(特に、狭義の医療、医学の科学性を重視した分野)の論文などによく出てくるのは、この「患者」である。それは、科学に基づく枠(この科学というものも狭義の科学。まだ、科学とは何か？ということを考えている途中なので上手く言えないのが申し訳ないが、一般的に理解されている科学と思ってもらえるとありがたい)の中に人をあてはめ、「患者」という存在を創り上げた感じがする。「A 氏：70 代、男性。脳梗塞(発症後約 2 年)。運動・感覚障害軽度、日常生活動作自立」といった感じだ。ここに生身の人間はいない。ただ、存在としての「患者」を扱わなければならない時もあるため、そのような時に使う言葉としては、なんの抵抗もない。

次は、「利用者」という言葉。これは、介護サービス(介護保険で利用できるサービス)などについて話される場面でよく耳にする言葉である。例えば「利用者のことを考えた介護について」や「利用者主体の介護サービス」などである。これに関しては、正直あまり良くわからない。私の中では「要介護者、要支援者は、必要に応じて介護サービスを利用する者」といった捉え方をされているために「利用者」という言葉が使われることが多いと認識している。ただ、これに関しては本当にそうなのか？という疑問がある。と言うのも、介護サービスは、要介護・要支援者のためだけに利用されるものではない。家族や介護者の負担を減らすために利用されることも少なくない。結果的に要介護・要支援者に通じるのだが、それだけではない軸で動くことがあるということをわかっていなければいけないように思う。そして、状況によっては支援者とされる者(ケアマネージャーや医療従事者など)が必要だと思うことを提案し、それがそのまま採用されることも少なくない(これにはパターナリズムの課題なども潜んでいるが、ここでは触れない)。仮に、要介護・要支援者が介護サービスを自らの主体性に基づいて利用することがあったとする(これが全て良いと言いたい訳ではないし、この一文の表現に間違いがないのかもわからない)。その場合、彼らは「利用者」とされる存在になり得るのかもしれないな、とは思う。ただ、それでも現状の介護保険制度では、本当の意味での「利用者」にはなり得ないような気がしてしまう。例えば、ごく簡単に、ごくごく簡素に場面を想定してみたいと思う。要介護・要支援者が「ヘルパーさんを利用したいです」と言ったとする。ケアマネジャーは、その必要性を検討した上で「じゃあ、そうしましょう」と、どこかの事業所にその依頼をかけ、スケジュール調整をしてヘルパー(つまり、訪問介護)が導入されることになる。この場合、どこの事業所にしたいかを指定してくる人は少ないし、誰に来て欲しい、この人は嫌だと始めから指定してくる人も少ないのが現状だと認識している(そのような人がいない訳ではない)。例えば、りんごを食べたくなった私が近所のスーパーに行ったとする。同じりんごでも色々な種類があって、同じ種類のりんごでも色や形は全然違う。食べてみないとその味はわからないが、食べてみておいしくなかったら、そのスーパーで同じりんごを買うことはしないようになるかもしれない。でも、値段が違ったら買うかもしれないし、違うスーパーだったら同

じ種類のりんごに再挑戦することもあるかもしれない。介護サービスは商品ではないため、利用に伴う負担額の設定は一定だ(負担割合は人によって違うこともある)。このように、状況や条件に違いがあるとは言え、現状で要介護・要支援者が「利用者」になり得る日は遠いような気がしてしまう。前述した例は、財源も違えば、その目的も含めて色々なことが並列させるためには無理があるとも思う。それでも、正直あまり介護保険制度について理解できていない一人の理学療法士には、こんな風に見えているのも事実だ。「利用者」という言葉が支援者とされる人のきれいごとに付き合わせるためだけの言葉に聞こえてしまう。(もし、そうじゃないよって教えてくださる方がいれば、ぜひお願いします！！)

そして、最後に「当事者」という言葉。インターネットでちょろっとその意味を調べてみた。デジタル大辞泉では「1 その事柄に直接関係している人。2 ある法律関係に直接関与する人」となっている。この場合、おそらく 1 に相当するのだと思う。そして、この場合、‘その事柄’というのは、疾患や病い、障害(ここではあえてこの表記にする)が相当するのだろうか。ここで‘ん？’と思ってしまう。私が仕事を通して出会ってきた人たちは、疾患や病い、障害の当事者なのだろうか？と。たぶん、それは間違いではないが、正しい訳でもない。では、私が出会ってきた人たちは何者なのか？それは、間違いなく唯一無二の「あなた」でしかなかった。だから、「あなた」を目の前にして存在する私は「私」にしかなり得ない。おそらく、前述した「患者」や「利用者」、「当事者」という言葉を使うとしたら、その反対側にいるのは「医療従事者」や「理学療法士」となるのだろう。でも、それは違うと思うから、やっぱり表の横軸は「あなたー私」になるのだと思う。

2. 「あなたー私」という関係から浮かぶ「私」

ここにいるのは「私」でしかあり得ないし、そこにいるのは「あなた」でしかあり得ない。ただ、いつ何時も私は「‘ありのままの’私」としてここにいるのではない(ありのままの私が何なのかもよくわからない)。理学療法士であるからこそ「あなた」の前にいることが出来る。そこにいるのは「私」であって「‘ありのままの’私」ではないけど、そうでもある。そこにいるのは「‘理学療法士の’私」であって、それだけではない……。ここで「じゃあ、私ってなんなんだぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？！？！？」なんてゆうおセンチなことを言うつもりはない(笑)。でも、突き詰めようと思うとそうゆうことになるのだと思う(マガジンに書くかどうかは別として、私にはそれを考える必要があるのだと思う)。ただ、自分という存在は常々色々な意味で変化していると思う(実際変化している)し、一定ではないと思うし、変化し得ない部分もあるように思っている。ひとまず、今ここでこんなことを言っていても何かがわかるとは思わないので、スルーしておく。

と、言うことで「あなた」と「私」という関係から浮かぶ「私」について考えてみようと思う。仕事の中で実際にあったエピ

ソードをもとに、理学療法士でありながらもそれだけではない「私」を見てみようと思う。

●悟りのリツ子さん●

リツ子さんは、100 歳間近のぽわんとしたおばあちゃんだった。転んで大腿骨を骨折して手術をした。そして、術後のリハビリ目的で私が勤める病院に入院してきた。もともと一人暮らしで身の回りのことは自分で行なっていた人だった。戦前、戦中、戦後を生きてきた人でもあった。

入院生活が進むにつれてリツ子さんは、痛みも落ち着き、少しずつ出来ることが多くなっていった。ある日、病室を覗くとリツ子さんはベッドの周りを一人でちょこちょこと歩いていた。まだ病室での歩行許可は、下りていなかった。私は「リツ子さん、まだ一人で歩いたら危ないですよっ」と、少し焦って声を掛けた。リツ子さんは「あぁ、そうやったねぇ〜。ごめんごめん」と言って、ゆっくりとベッドに戻った。また別の日、リツ子さんは、食堂の陰で窓際に立ち、外の景色を気持ちよさそうに眺めていた。車いすは、はるか遠くに置かれていた。私は、のんびりとリツ子さんの背中に近付き「リツ子さん、何してはるんですか〜？車いす、えらい遠くにありますけどぉ？」と、ニマニマしながら声を掛けた。「ん？外は気持ちよさそうやね〜」と、リツ子さん。確かに、真っ白な雲が真っ青な空をぷかぷかしているような気持ちの良いお天気の日だった。「そうですね〜」と、私。私がさらに言葉を続けようとすると、リツ子さんは「わかってるんやで。でもな、大丈夫、だいじょーぶ。ちゃんとわかっとる」と、それを察したかのように言った。私は、あははと笑って、車いすを取りに行った。そして、それをリツ子さんの近くに置いてその場を離れた。その日から、私はリツ子さんがちょこちょこしていたとしても、声を掛けないようになった。理学療法士としてよっぽど危険だと判断した時は声を掛けようと思っていたが、リツ子さんが危険を冒してまで何かをする場面に私は遭遇しなかった。

リツ子さんが外の景色を気持ちよさそうに眺めていた背中が忘れられない。「私は私なんだ」と言っているようだった。上手く言えないが、長い人生を歩んできたリツ子さんに人としての強さを教えてもらったような気がしている。この人には敵わないなと思ったから、私は何を見ても声を掛けられなかっただけかもしれない。

●思春期真っただ中の幸枝さん●

幸枝さんは、大金持ちの一人娘として大切に育てられた人だった。いつも綺麗な服を着ている。おばあちゃん世代にありがちな藤色の服が多いが、そのどれもがなんだかワンランク上な感じがするし、たまに可愛らしいピンク色の服を着たりもする人だった。そんな幸枝さんは、ちょくちょく美容院に髪を切りに行く。それに気が付いた時は「おっ、幸枝さん、また髪切りに行かはったんですね。いつもとまた違って良い感じですやん」とか、なんとなく感想を言っていた。

ある日、リハビリの時間が終わりに近

づくにつれて幸枝さんが不機嫌になる日があった。私は、そのことに気が付いていたものの、そんなに気にかけることもなく、いつも通りにリハビリを進めていた。そして、いよいよリハビリが終わるなといったところで、幸枝さんが少し尖らせた口を開いた。「ねぇ？なんか気付かないの？？」と。「せっかく昨日カットに行ってきたのに気付いてくれないなんて…」と、続いた。ハッとした私は、少し大袈裟に身を引いて、目を細めながら幸枝さんを見た。そして「あっ、ほんまですね！？いやぁ～、いつも綺麗にしてはるから全然気が付きませんでしたわ～」と、腕組みをしながら言った。「もぉ～、ちゃんと気付いてよ～」と、幸枝さんはまんざらでもない態度だった。

その日から幸枝さんが髪の毛を切ったなとわかった日でも、そのことに触れる日もあれば触れない日もつくるようにした。無頓着な私の一言で一喜一憂して欲しくなかったし、無頓着な私には荷が重すぎることだった。幸枝さんの後ろに女学生の陰が見え隠れし出すと、私は何かを見ようと目を凝らしてしまう。

●ハイブリッド車●

髙山さんは、男手一つで二人の子供を育ててきたお父さんだった。脳梗塞に伴う高次脳機能障害のリハビリ目的で入院をしている人だった。作業療法や言語聴覚療法でのリハビリでは、色々と難しい課題も多く、しょんぼりしている姿を見かけることも少なくなかった。私とのリハビリの時は、ストレス発散も兼ねて散歩に行くことが多かった。少し高めの段差を昇り降りしたり、芝生を歩いたり、バランス訓練や応用歩行訓練も兼ねた散歩ということにしていた。

お散歩中、私はよく車のことを教えてもらっていた。髙山さんは、自動車修理工場で働いていて、車にとても詳しかった。車の運転が好きで、ちょうど新しい車を買おうと思っていた私は、色々なことを髙山さんに聞いていた。「車ってやっぱりエンジンによって全然違うんですか？」、「四駆ってどうゆう仕組みなんですか？」、「今、流行の色って何なんですか？」、「なんで色によって値段が違うんですか？」などなど。車自体にはあまり興味のない私だったが、髙山さんと話しているうちに車の仕組みや車の何が魅力なのかなど、色々なことが気になるようになっていた。そして、一番面白かったのは、ハイブリッド車の話だった。髙山さんと話しているうちにハイブリッド車と電気自動車の違いをよくわかっていない自分に気が付き、そのことを教えてもらったことがあった。「ハイブリッド車はね、電気とガソリンで動くんやけど、車って動き始めと止まる時に力が必要で、そん時が一番燃費が悪くなりやすいねん。ハイブリッド車ってのは、その力が必要な時を電気でアシストするってやつで、それによってガソリンを節約するやつやねん。電気自動車は、ぜーんぶ電気でやるよってやつね」と。これ以外にも車と政策やCO_2削減のことなど、色々なことを話してくれた。知らないことが多く、すごく楽しいお散歩だった。

ハイブリッド車は、走行中の音がすごく静かだ。歩いていると車との距離がだ

いぶ近付かないとその存在に気が付けないこともある。今、髙山さんに会えるとしたら「ハイブリッド車って歩いてる人には結構危なくないですか？」と聞いてみたい。

「ここを鍛えたら、もう少し痛みが楽になるかもしれないですね」、「こうやったら、もう少し楽に動けるようになるんちゃいますかね？」とかは、理学療法士がリハビリテーション場面で口にする光景がイメージしやすいのかもしれない。でも、実際には前述したエピソードのように、それだけではない側面もある。

では、「あなたー私」の関係は、何によって変化するのか？たぶん、それは‘役割’なんじゃないかと思っている。あなたの前に存在する私は、理学療法士として存在することもあれば、一人の若者として存在することも、微妙な髪型の変化に無頓着な人や車に興味がある人として存在することもある。それ以外にも、人見知りのおしゃべり好きやサッカー好き、アガサクリスティーについて教えてもらう人、ケーキを美味しそうに食べる人、娘みたいな存在など、さまざまだ。役割について考えるためには、専門性(もしくは専門)とは何か？ということについて考える必要があると思うので、これについては改めてどこかでテーマにしたいと思う。

そして、「あなたー私」の関係は一定ではなく、その時々、状況によっても変化するんじゃないかと思っている。色々な「私」がいるのと同時に色々な「あなた」もいる。それに応じて互いの関係や距離、「あなたー私」という一つの存在の空間における位置関係も変わってくるように感じている(上手く伝えられている感じはしないが…)。いつ、どのようなタイミングや状況で、どの役割を前面に出すのか？それによって関係は変化し、その場の意味付けも変化するように思っている。

～　終わりに　～

次回のマガジンでは、今回書いたことを踏まえて「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」の三歩目として『「あなたー私」という関係 によって変わる「場」』について書いてみようと思います。

次回は、今回の予告通りの内容を書けそうな気がしています。何かの枠にあてはめるのではなく、現実の中から混沌とした、悶々とした、もやもやっとしたものやことを見ていけたら良いなと思います。

👣　おくのほそみちのこれまで　👣

第 24 号
新連載決意表明（「執筆者@短信」にて）
第 25 号
リハビリテーションのこと
第 26 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に

多文化共生と心理臨床

③差別するこころ

ガヴィニオ　重利子

「オバマが良い・・・」
学校のお泊まり遠足からの帰り道、バスの中で息子が私につぶやいた。彼の遠足中にアメリカで大統領選挙があり、トランプが次期大統領に当選したのだった。お泊まりした合宿場にテレビはなかったはずだし、第一、息子がアメリカ大統領選 について知っているなどとは思えず、私はびっくりした。

「誰から聞いたの？」と尋ねると、「みんなしゃべってたよ。怖いって」と息子は話してくれた。きっと先生たちから始まり、ショックの波が子どもたちにも空気として伝わったのではないかと思われた。私自身、朝一番に届いたそのニュースに久々に頭が真っ白になるような驚きを覚えたし、その状況は想像するに難くなかった。そして次の週には、新聞にも今回の選挙結果に子どもたちが受けたショックについて、意見コラムなどが出ているのを見かけた。移民の親や親戚を持つ子どもたちの間では特に、将来への不安から眠れない、食欲がないなどの身体症状を訴える子も出てきているらしく、事態はなかなか深刻らしかった。

どうしてこうもトランプ現象は米国の政治という枠を超えて世界中に旋風を巻き起こしたのだろうか。何と言っても、彼の人種差別的、宗教差別的、性差別的発言の数々は、世界中で多くの人を傷つけたり怒らせたりした。英国の心理関連雑誌などでも「選挙期間中、クライアントの多くが面接室でトランプの話をするようになった」ことが取り上げられていた。それだけ多くの人へ、とりわけこころに繊細な課題や不安定さを抱える人たちへの影響は大きかったようだ。

差別を社会環境や無知からくる人の未熟さとして議論することは、簡単なことのように思う。確かに、今回の選挙結果や人種差別に関連する調査結果が示すには、差別が起こりやすいのは同じ国内でも経済的に貧しく 、外国人が少ない地域に多いということがある。しかし、問題はそれだけなのだろうか。都市部に暮らし、一定の教育を受けた「私たち」とは、差別は無関係なのだろうか。

最近、精神分析家 Narendra Keval の Racist States of Mind という本を読んだ。差別とは、「こころの状態の一つ states of mind」というタイトルに惹かれた。それは社会や政治的な問題といった遠い存在ではなく、私たち一人一人が日々体験するこころの状態だということがこの本の主題だ った。

「人は、受け入れ難い自分の弱みや辛さを相手に移し見ることで、そのことを考える責任から情緒的な距離をとることができる。しかし、そのような擦りつけを受けた相手は、自分ではないものを押し付けられることになり、アイデンティティーを傷つけられることになる」といった精神分析では投影と呼ばれる概念がこの本の軸となっていた。

学校でのいじめや児童虐待などでも、きっと同じことが起こっているのだろうと思う。それらの問題も常に、地域環境や家庭環境の厳しいところで深刻化しやすいし、加害者となる親や生徒 自身が大変辛い境遇に暮らしていることが多いという現実はもっと注目されるべきことのように思う。人はしんどくなると、その辛さを肩代わりしてくれる人（自分より弱く見える人）を見つけ、擦りつけることでなんとか情緒的距離を取り、生き抜こうとするのかもしれない。

先月、こちらの州立大学が主催する児童虐待に関する研修会に参加してみた。そこでは、この国のいじめに関する興味深い調査結果も提示されていた。２０年近くの追跡調査を経て、いじめが子どもたちの「その後」に及ぼす影響が調べられた研究だった。被害者が５年後、１０年後にも抑うつなどの症状を抱えやすいという結果だけでなく、加害者や目撃者にもその影響が残ることがわかったとのこと。つまり被害者と加害者、そして目撃者もまた、心に傷を負うという結果だった。擦りつける方も、擦りつけられる方も、そしてまたそれを見る人間にとっても、それは辛い体験となるようだった。

「オバマが良い」とつぶやいた息子は、確かにどこか辛そうだった。テレビで流される発言の数々に傷つく大人たちの姿。それを見ている子どもたちもきっとその体験に傷ついたのかもしれない 。また、自分自身が移民（少数派）となった息子にとっては、その痛みは同時に決して他人事ではなかったのだろう。

日本でも、障害者施設での殺人事件や その後の犯人による「障害者はいらない」発言、そして沖縄での「土人」発言問題など、差別的な出来事が続いている。と同時に、「美しい国、日本」や「日本人のここがすごい」といった歯の浮く ような文句も、もてはやされる傾向にあるように感じる。これらはきっと、同じコインの裏表なのだろう。自分の内に存在するブサイクさを省みなくなる時、痛みに耐え難くなる時、それらは他者に居場所を見出すことになる。

Make America Great Again!（アメリカに昔のような栄光を！）とはトランプの有名な掛け声だが、擦りつけは、人種間、民族間、国家間だけでなく、昔と今といったあらゆる違いを見つけては起こるのかもしれない。「昔はもっと〇〇だった」とか「最近の若いもんは」といったセリフも、その人にとって「今が辛い」ということときっと同義なのだろう。 そろそろ私も若者ではなくなってきたこの頃。若いもんに擦りつけることのないよう、自省に励んでいきたい・・・（汗）。

参考文献：Keval, Narendra (2016), Racist states of mind –Understanding the perversion of curiosity and concern, London: Karnac.

父の看取りと、私への最期の宿題「今から、ここから」3

ソーシャルワーカー

馬渡　徳子

かくして、地域の皆さんに見守られながら、三年が過ぎました。帰省中に、夜中のおむつ交換をしているときに、時々、父が「癌やったら、よかったのに・・・わるいね。」と、か細い声でつぶやくことがありました。段々と痩せていき、その頃は、要介護 2 になっていました。同居の弟は、太極拳と空手、気功をしており、まるで介護士のように、要らぬ力を使わずに上手に介助ができるのですが、私は本当に下手だったのでしょう。職場の看護師や介護士、リハビリ職の仲間に、昼休みに実践で教えてもらっていたのですが、「徳子は、手が整わん。お口だけ美人や。」と言われました。（笑）けれども、最期の一年間は、母も弟も私も、点滴を抜いたり、痰の吸引も上手くなり、往診医や訪問看護師さんに、随分と褒めていただきました。

2014 年春から夏、父は自由な外回り中に、度々意識を失って救急搬送されました。歩行状態もふらふらで、けれど、認知症があるので検査ができなかったからと直ぐに帰らされていました。その頻度が週に 2、3 回にもなっていました。母に、「今度は違う救急病院に搬送してもらったら。本当にいつもの心臓病なの? 脳を検査してもらって。」と伝えていました。その直近の救急搬送先は、また同じ総合病院でしたが、今回は母が「最近よく転ぶ」と話したことから、やっと脳の検査をして下さり、脳幹部近くの大きな慢性硬膜下血腫が見つかり、緊急手術となりました。術後、ベッドに四点柵と体幹と両手足をベルトとミトンで拘束されていた父は、麻酔が覚めた夜中から激しく抵抗し、二人の弟がずっと付き添っておりましたが、翌朝早朝の 5 時に強制退院となりました。父は、医療保険と差額ベッド代合わせて、わずか一泊二日 12 時間の入院で、合計 16 万円の支払いでした。「認知症だから」と説明され、最高額の差額ベッド特別室しか入れてもらえなかったそうです。ふらふらの父を、弟二人で何とか自家用車に乗せて帰ってきたそうです。弟から、「姉ちゃん、認知症に

なったら、みんな、治療を平気で拒否されるんか? 姉ちゃんの病院でもそうか? お父さんは、サウジアラビア紛争の時に、会社の指示でホテルの部屋から外出禁止とされていたことがあり、だからベッドに括られると思い出して怖かったから暴れたんだと思う。そのことを伝えたの　に、沢山の書類にサインさせられて。ちょっと看護師さんの手をはらっただけなのに、暴力を振るったと騒がれて、本当に頭にきた。もう、二度とあんな病院には救急搬送して欲しくない。手術後の説明で、最低三週間の入院が必要と言ったくせに、脳の手術の翌朝には、転院先も紹介せず、自分で縫合部を消毒して、一週間後に抜糸に来なさいと追い出された。」と、石川県で連絡を受けた私は、病棟の申し送りの終わる九時を待って、病院側に連絡をしました。「こんな急な退院で、高血圧と脳梗塞の既往歴もあり、血液が固まらないようにする薬も二種類飲んでいる父の安全性が守れるのでしょうか? 認知症の父が、頭の傷口を触って、感染症を起こしたらどうするのですか? 処置に必要なものも、自分で薬局で買えとはどういうことですか? 転院もできないならば、せめて、往診医や訪問看護へつなぐとか、、、昨日入院の際に、ケアマネジャーさんも情報提供書を持って、ご挨拶に来られていますよね。」と、アサーションなんてすっかり忘れて、まさに、詰め寄りました。同じ医療従事者としても、心から本当に許せなかった。突然に退院を勧奨される患者さんのお気持ちが、本当に実感できました。結局、病院側からは、医療ソーシャルワーカーさんからも何の療養提案も戴けず、私はケアマネジャーさんと相談することにしました。直ぐにケアマネジャーさんから、訪問看護ステーションと評判の良い往診医をご紹介戴き、その日から訪問看護と往診で経過を観ていくことにしました。後に、この訪問看護師さんと往診医がいなかったら、そのたった二ヶ月後に、末期胃癌は見つかりませんでした。往診医は、地域の女医さんで、同じく医師である旦那さんと二人で、24 時間在宅支援診療所としてターミナルケアの実績も重ねておられました。何と、父の最初の主治医であった、あのおじいちゃん先生の娘さんでした。父は、女医さんのことを「〇〇ちゃん、立派になったね。」と子どものときの呼び名で呼んで、本当に和やかにおつきあいをしておりました。訪問看護師さんとも、最初から機嫌よく話をしており、父の抵抗は全くありませんでした。傷口を覆う網ネットも、父が面白がるように、ちょん髷やミッキーマウスのように工夫して結んで、毎日一緒に写真を撮って笑いとばして下さいました。私は「〇〇なんだから、触ったらだめよ。」と正当に注意を喚起するよりも、ちょっとしたユーモアで、こんなにも治療上必要な処置が抵抗なく上手くいくものかと、本当に勉強になりました。もちろん、先生、看護師さんと、父はよく簡単な英語で挨拶と会話をしていました。秋に、「この顔色の悪さは何? 認知症の進行だけで、ここまで痩せないよ。入院中に胃カメラした? 」と直ぐに胃カメラと腹部エコーをして下さり、末期胃癌が見つかりました。「余命、三ヶ月から長くて一年以内。胃癌そのものよりも、肺炎とか感染症でのリスクが高いね。旅行とか今のうちにね。」と言われました。

そこで、家族で相談し、孫・ひ孫に全員集合をかけて日帰りで贅沢グルメを楽しみました。父は、当時、自分一人ではもう着替えも困難な状態でしたが、何故か、ひ孫に靴下を上手に履かせておりました。自分の紙オムツも、丁度つかまり立ちをし始めた下半身裸のやんちゃなひ孫にはかせて、まるでドナルドダックのような姿を見て、父はケタケタと大笑い。その時の二人の表情が、あまりにも素敵だったので、写真とビデオに収めてあります。 デイサービスの方々は、水害時にも浸からなかった父の大切にしているアルバムに、付箋でちょっとした「聴き書き生活史」を作って下さり、父は大層自慢気にしておりました。

余命宣告直ぐに、先生の紹介で、認知症ケア専門士と緩和ケア専門医の資格を持つ外科と精神科の医師二人(二人とも自治医科大出身)をご紹介戴き、母の介護疲れに備えて、いざという時のレスパイト入院体制も整えることにしました。ですから、父のサービス担当者会議には、自宅に、毎回三人の医師とケアマネジャーさんと訪問看護師さんと訪問薬剤師さんとデイサービスと、後に訪問入浴の方が勢ぞろいしていました。母は、いつもとても恐縮がっておりましたが、先生方三人が、「それぞれの所属機関と専門分野の特徴を活かして、認知症の方が末期癌になられた時に、この地域の関係者がどういうしくみをつくって、どう動けば良いのか、旦那さんにモデルになっていただいているつもりです。ですから、どうか忌憚のないご要望をおっしゃってください。」と、おっしゃって下さいました。

本当の意味での地域包括ケアの構築実践だと思います。

かくして、父は、末期癌の病巣の余命宣告をはるかに超えた一年二ヶ月後に、天寿を全うしました。お看取りのエンゼルケアは、ご指導の下、家族皆んなでさせていただきました。

故郷の総合病院の対応にも呆れましたが、「逆に」医療従事者である自らと日本の医療制度の酷い実態も振り返る機会にもなりました。

天国のお父さん、
お父さんの応援団だった皆さん、
私と出逢い、お付き合い戴き、
お看送りさせて戴いた患者さん、
認知症の人と家族の会の皆さん、

私、
偶然にも、転勤でね
地域包括支援センターの
認知症地域支援推進員になったよ。

定年までの四年間に、
本当に素敵な「宿題」を、
ありがとうございました。

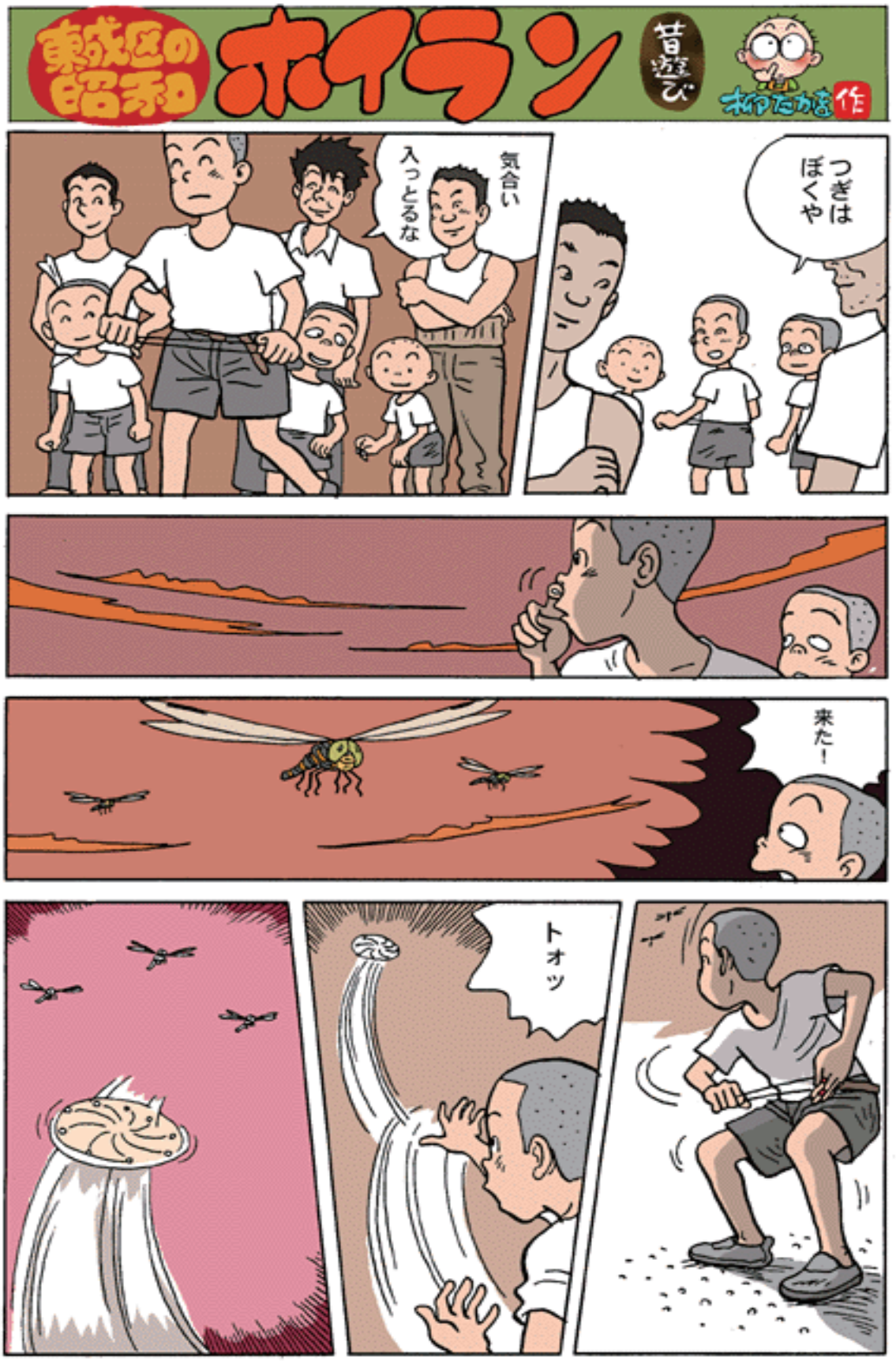
これからも、困難に出逢ったら、
右手の腕時計に目をやり、
『逆に』と認知を変えて、
五感を働かして、俯瞰して観るように致します。

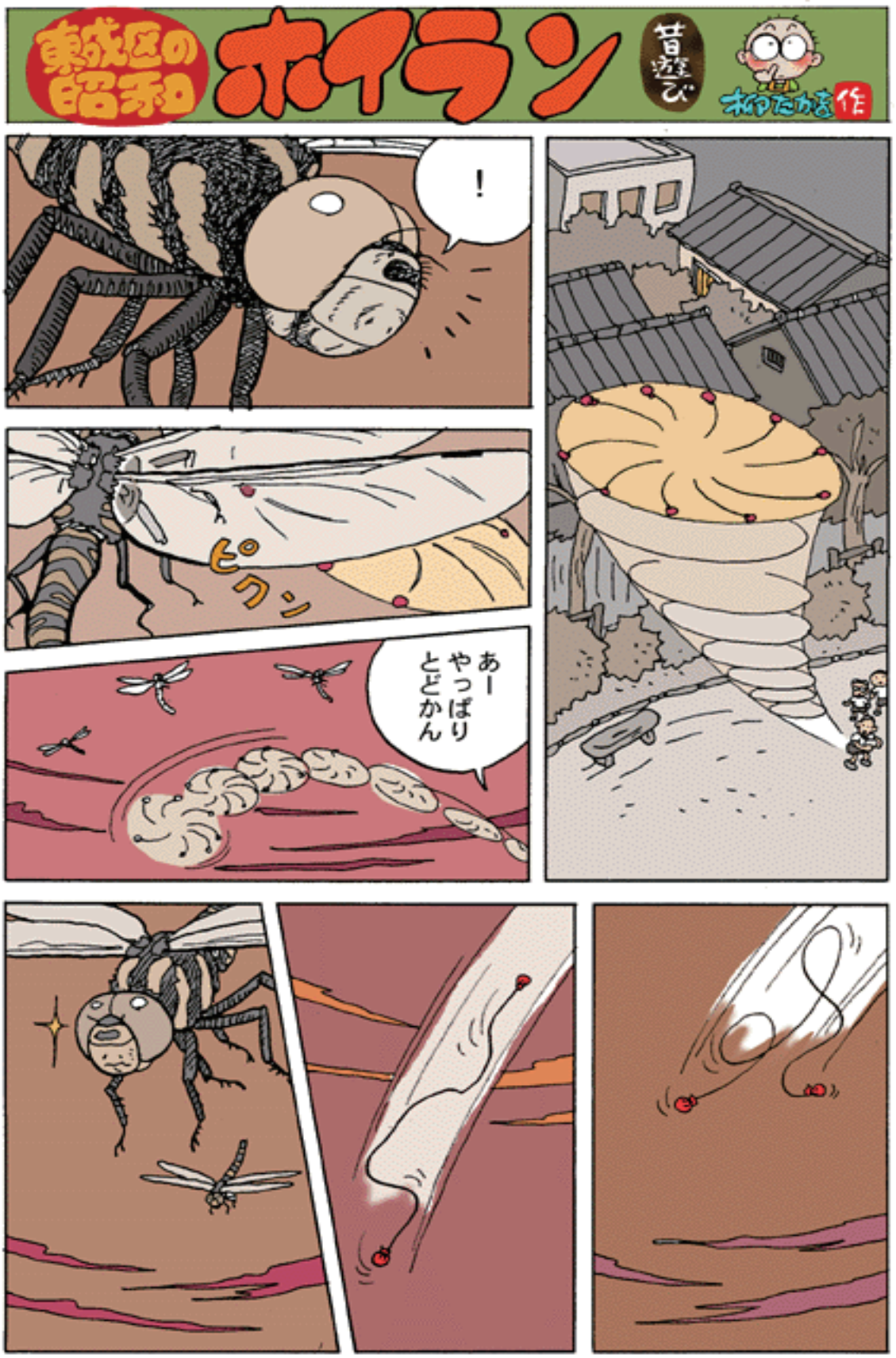
私の石川県の素敵な仲間にも、
心より、合掌。

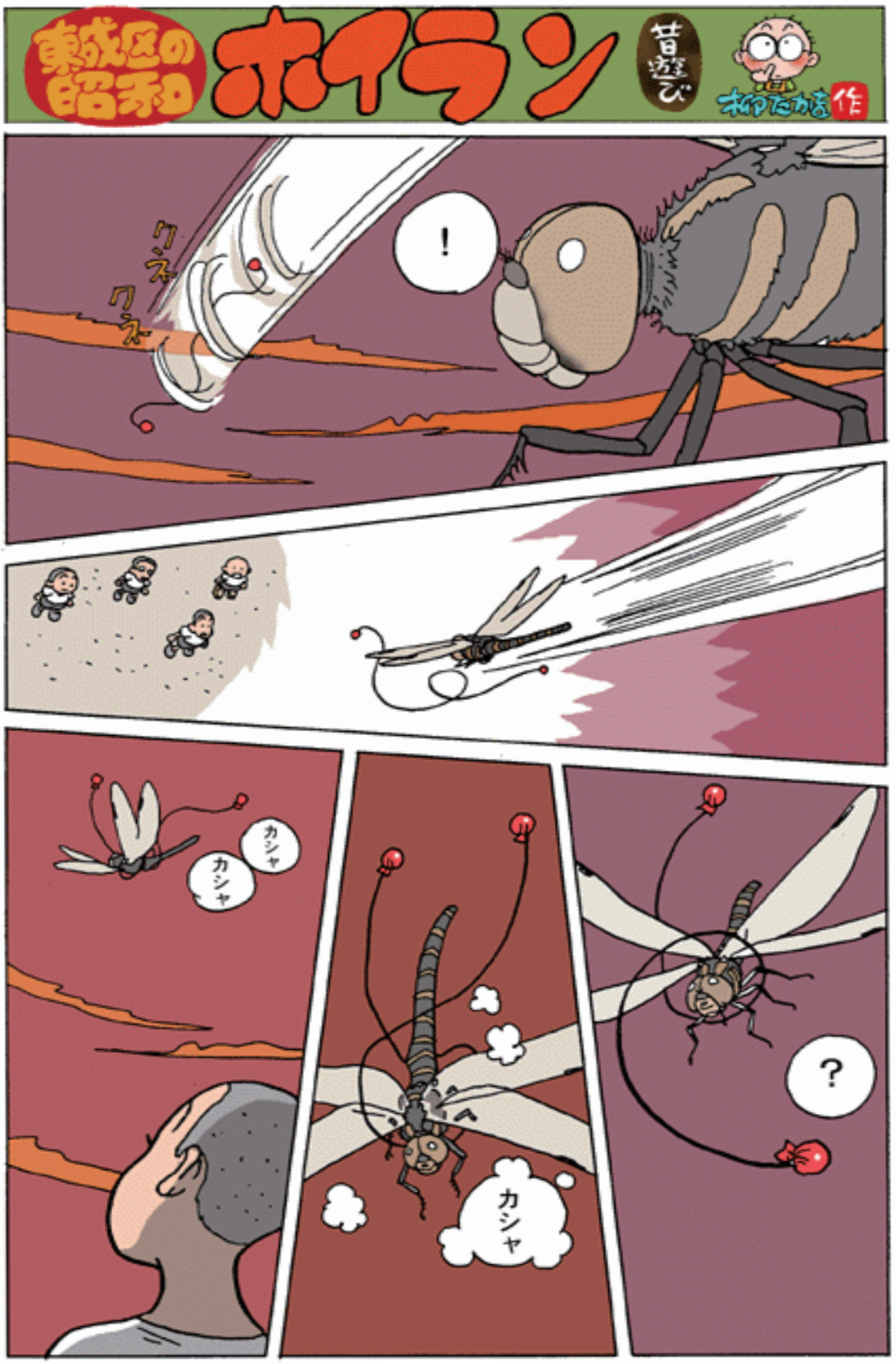
東成区の昭和ホイラン
昔遊び
ホリたかお作
ヒュン
ヒュン
ヒュン
ヒュン
てっ
うりゃ
ポン
なんや…
むかし空襲に
来よったアメリカ
のB29を
思いだすなあ
B29？

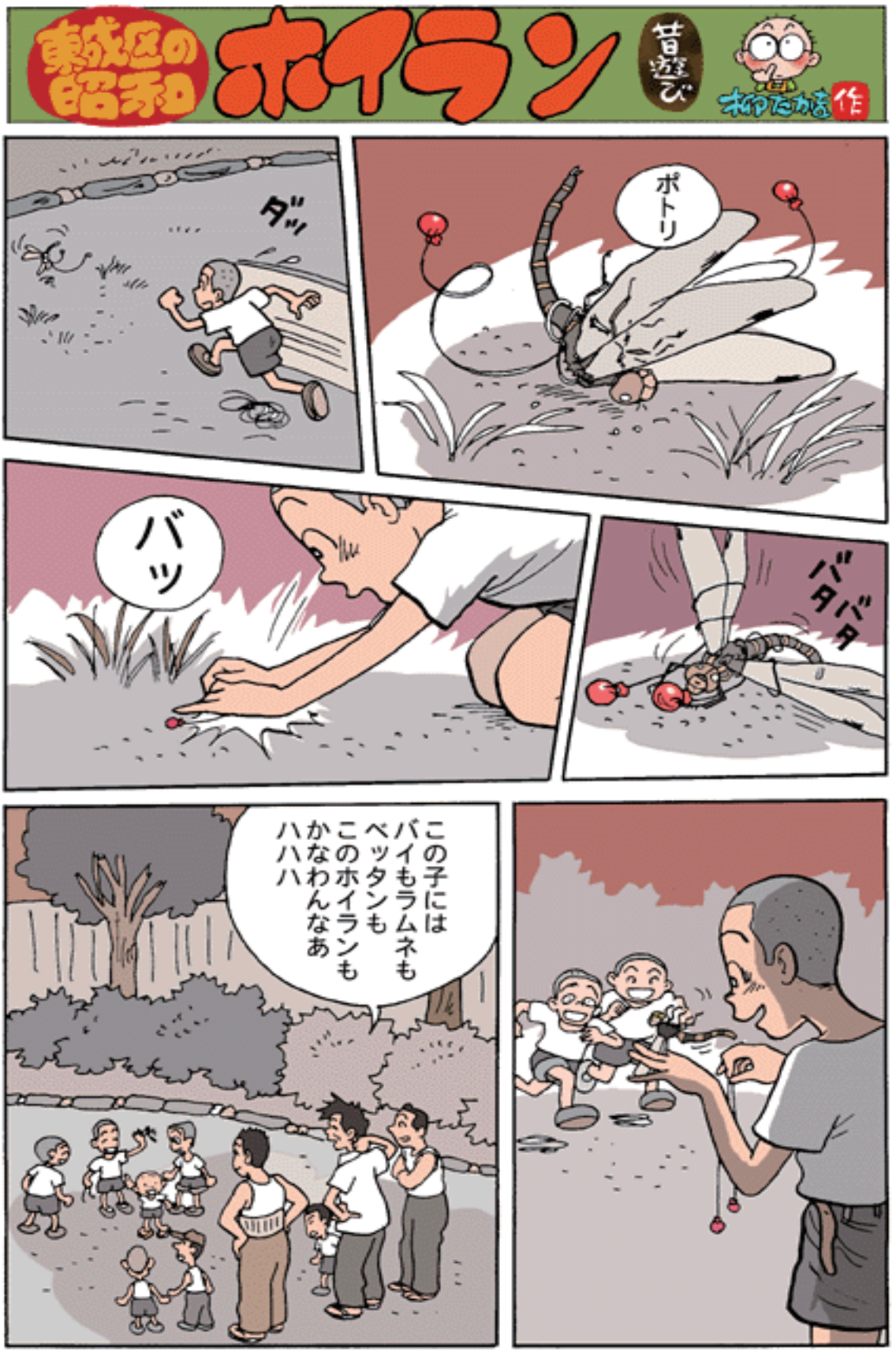
東成区の昭和ホイラン
昔遊び
オヤたかお作
日本軍がなんぼ高射砲撃っても
B29の高度が高すぎて弾がとどかんのや
爆弾落として涼しい顔で帰っていきよったもんや
そういえば飛ぶ姿が堂々としてるなあ
日が沈みはじめると餌の虫を追って地面すれすれまで下りてくるんや
勝負はそれからや
……

東成区の昭和
ホイラン
昔遊び
ホイたかお作
新兵器てそれか？
赤いホイラン！
セロハンの中は戸車分解してとったベアリングや
グイッ
投げやすいし小さいからヤンマが驚かへんやろ？
かっこええホイランやなあ


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
オヤたかお作
つぎはぼくや
気合い入っとるな
来た！
トォッ


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
ホイたかお作
！
ピクン
あーやっぱりとどかん


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
木内たかお作
クネクネ
！
カシャ
カシャ
カシャ
？


東成区の昭和ホイラン
昔遊び
ポトリ
ダッ
バッ
バタバタ
この子にはバイもラムネもベッタンもこのホイランもかなわんなあハハハ

東成区の昭和ホイラン 昔遊び

ホイたかお 作

書簡型連載　2

ケアマネさんとお坊さん

木村　晃子　様

差出人　竹中　尚文

往復書簡　2　　わからない世界

いつの間にか、北海道では雪が降り冬の始まりではないでしょうか？ 兵庫県の里山で暮らす私は、秋になると「野菜炒め」を作るのが楽しみです。今年の夏は忙しくて「ラタトゥイユ」をほとんど作れませんでした。私は、「野菜炒め」を神戸の南京町で買ってきた「腐乳」(腐豆、臭豆腐：豆腐を腐らせたような刺激臭の調味料)を隠し味にして作ります。自画自賛、美味いです。料理は私の趣味の一つなのです。秋は食いしん坊なだけではありません、11月後半の里山は美しく、ひたるように感じる美しさです。

15年程前に、アメリカで“tuesday with Morrie”という本を、会う人の大半から薦められてバークレーの書店で購入しました。私はあまり英語が堪能ではないのですが、寮の部屋で頑張って読みました。その後、帰国して邦訳『モリー先生との火曜日』も知りました。ジャック・レモンの遺作となった映画のDVDも見ました。とってもいい映画だったと思いますが、私には苦労して読んだオリジナルの本の印象が強いです。この本の冒頭に近い部分での話ですが、モリー先生がテレビのインタビューを受けるのです。インタビューアーが、これから最も恐れることは何でしょうかと尋ねます。モリー先生は「近いうちに、誰かが私のケツを拭かなくてはならなくなることだ」と答えるのです。モリー先生は著者の大学の恩師であり、退職して余生を楽しんでいた人でした。そんな彼がALSを患うことになります。医者からは蝋燭が溶けるように身体が蝕まれて死を迎えることを告げられたのでした。モリー先生はALSという病気にならなければ、もっとダンスを楽しめたでしょう。人生を楽しめただろうと思います。

私がずいぶんとお世話になった先生は、人生を楽しんだのは63歳からだと言っていました。63歳で大学を退職してから96歳まで研究者として過ごされました。「63歳までは大学から給料を頂かなくては、ビールが飲めなかった」と言って、定年後は研究生活を楽しまれました。印度哲学というジャンルでは大がかりな専用の研修施設を必要としないので、96

歳まで文献に目を通し、議論をふっかけて、執筆をして、研究を楽しむ生活に老いは感じられませんでした。96 歳の時に突然に奥様が亡くなりました。先生は、こんなにつらいことはない、こんなに苦しいことはないと言っていました。それ以後、研究は進むこともないまま亡くなりました。

人生には、いろんな問題が起こります。病気であったり、人間関係の崩壊であったり、経済的困窮であったりします。何の問題もない人生などないでしょう。そうした問題を克服していくパワーの大小は、年齢に関係することもあるように見えます。もちろん問題の大きさや質もあって、若いからすべてを克服できるわけではありません。高齢化と共に克服する力が減衰していくようにも感じますが、個人差もかなり大きいように思います。

例えば、子供と言えばおおよその年齢が想像できます。しかし、老人と言えば年齢が想像できるでしょうか。何歳から老人とは言えないと思います。それとも、決まっているのでしょうか？ 日本では、定年退職という年齢が決まっているのですから、老人の始まり年齢というのも決まっているのでしょうか？ 現実には、年齢を重ねても不自由なく人生を楽しんでいる人に、老いを感じません。人生を楽しむことを阻む要素が、病気であったり、対人関係であったり、経済的障害であったりするように思います。二十代の頃は、風邪をひいても一気に治ったのに、今はなかなか治りません。

私にはどのような老いが訪れるのかと、想像します。病気になるかもしれないし、経済的苦境に陥るかもしれないし、誰からも顧みられることのない状況に陥るかもしれません。あるいは、老いを感じる前に思わぬ出来事で死んでしまうかもしれません。老いを迎えるまで生きるかどうか分からないけれども、自分の老いを想像することは大切なことではないかと思います。個人の未来を想像するのは困難なことかもしれません。明日は今日の同じ繰り返しではありませんが、今日と無関係な明日が訪れるのではないでしょう。経験則で未知の領域を測るのは賢明なことではありません。私が老いていくというのは、私には未知の領域です。しかし、私の知らない世界を生きていく事も、私が生きるのです。私が自分の老いに想像を巡らせることは、老いを生きる当事者となった自分に影響を与えるものではないかと思います。そこで、老いに想像を巡らす時に、誰かが私の相談に乗り、アドバイスを与えてくれるなら、ありがたいものです。老いの事前相談に乗ってくれる人はいるのでしょうか？

これから、ドンドンと寒くなります。どうかご自愛ください。

合掌

竹中尚文　様

拝復

こちらはすっかり寒くなりました。雪も容赦なく降ってきます。例年、「雪虫」を見ると、２週間程度で雪が降ると言われています。けれども、今年は、雪虫を見かけないのに、随分と寒くなってきた、と思えば、雪虫をようやく見かけた翌日に、ドカンとした雪が降りました。まだ、１０月の半ばを過ぎた頃でした。この数年は、季節の読みが全くままなりません。

北海道と言えば、雪を思い浮かべる方が多いと思いますが、必ずしも北海道イコール雪ではありません。私の住む当別町は、豪雪地帯ですから、冬は雪との戦いです。一方、道南の浦河町などでは、真冬でも庭箒ひとつで冬が越せるとか。以前２月に訪れた時に、雪のない町なみに驚きました。私の地域では、除雪に使う「ママさんダンプ」で一生懸命雪かきをすれば、それは（ママさんダンプ）ワンシーズンでガタがきてしまいます。（壊れます）雪の話題ばかりは尽きません。滅多に風邪をひかない私が、今、風邪をひいて喉がやられています。明日からは、関西への出張予定ですのに、イマイチな体調にうんざりしています。お料理好きの竹中さんの、美味しそうな野菜炒めを想像してみたものの、どうも食欲が沸いてきません。やはり風邪です。普段は、食欲旺盛ですから・・・

さて、竹中さんからのお手紙がきて、「モリー先生との火曜日」の DVD をすぐに借りて観ました。ALS という病気は私にとって忘れることのない病気です。もう、あれから７年がたったことを覚えます。仕事の関わりで、ALS と診断された女性の担当をしました。年齢は４４歳でした。４４歳という若さでその診断がついてから、一年ほどでこの世から旅立ちの時を迎えてしまいました。とても進行の早い病状でした。今の世の中、情報が多々あります。癌の告知が当然となっているように、癌以外の難しい病気であっても、ほとんど病名

は本人に告知される世の中になっています。自分に付けられたよくわからない病名を聞いても、すぐにインターネットなどで検索が可能です。そしてそこには、正しい情報も、間違った情報もあふれています。多くの情報にふれた私たちは、そこから何を取捨選択するのでしょうか。私が担当したALSと診断された女性は、その難しい病気について調べ、悲しみに暮れ、それでも自分の人生に立ち向かっていました。どのような状態になったら、命の終わりを意味しているのか、そこまで事前情報として理解していました。けれども、「その時」は突然やってきたのです。病気の進行スピードは大変早いものでしたが、そのスピードについていくように日々を過ごしていました。けれども、呼吸状態の悪化があって２～３日で旅立ってしまったのです。やはり、人間は自分の命の時を悟ることは困難です。

私の仕事は、主に高齢者を対象としています。家族形態が大きく変化した現代社会においては、従来家族の中で担われていた「介護」を、家族だけで担っていくことが難しい状況になっています。そこで、「介護保険制度」の活用によって、介護が必要な状態になっても、住み慣れた地域で最期まで暮らし続けることができるように、お手伝いしていくことが私たちケアマネジャーの仕事です。とは言っても、ケアマネジャーが直接、様々な介護を提供するのではなく、その人の困り事を聞き（相談）、その人の望む生活に向けて必要な介護サービスを調整するのが役割です。これまで、２００人近い高齢者とその家族に出会い、支援をしてきました。

高齢期における困り事は、それ以外の年齢層にも言えるように「様々」です。勿論、肉体的な衰えは多くの高齢者に起こりますが、いくつになっても、肉体的な衰えを感じさせない人もたくさんいます。見た目には「様々」であっても、年齢と共に「喪失」するものが増えていくというのは、高齢期における「共通」だとも思います。私の仕事は「今起こっている困難」にどう対応していくか、がメインにはなりますが、もしも「老いの事前相談」を持ちかけられたとすれば、私はどのように応えるだろう？と考えてみたものの、よくわかりませんでした。何せ、私もまだ「老い」を経験していませんから・・・それは、もしかすると、竹中さんのようなお坊さんに、「あの世はどんなところですか？」と質問することと似ているかもしれません。

ただ、老いの事前相談に対する応え方はわからないのですが、自分の老いを思うとき、私は自分自身に問いかけます。「あなたは、自分の周りの目に見えるものがなくなったとして、それでもあなたであることをどのように感じて生きていきますか？」と・・・

目に見えるもの、若さであったり、健康であったり、職業であったり、友人であったり・・・私を飾っている様々な状況がなくなっても私であること、それはどのようなことだろう？と。私は、静かに目を閉じて耳を澄ませます。すると、自分の関わったたくさんの人や出来事が思い浮かびます。そういうことを静かに感じながら生き抜きたいと思うのです。そのために、今、見えていること、見ていること、見ているはずなのに見えていないこともあるかもしれません。「今」を大切にしていきたいと思います。

明日は今日の繰り返しではないかもしれません。けれども、今日の続きが明日であること

が人間の歴史なのでしょうね。
私の好きな言葉があります。作者不明ですが、よく聞きます。

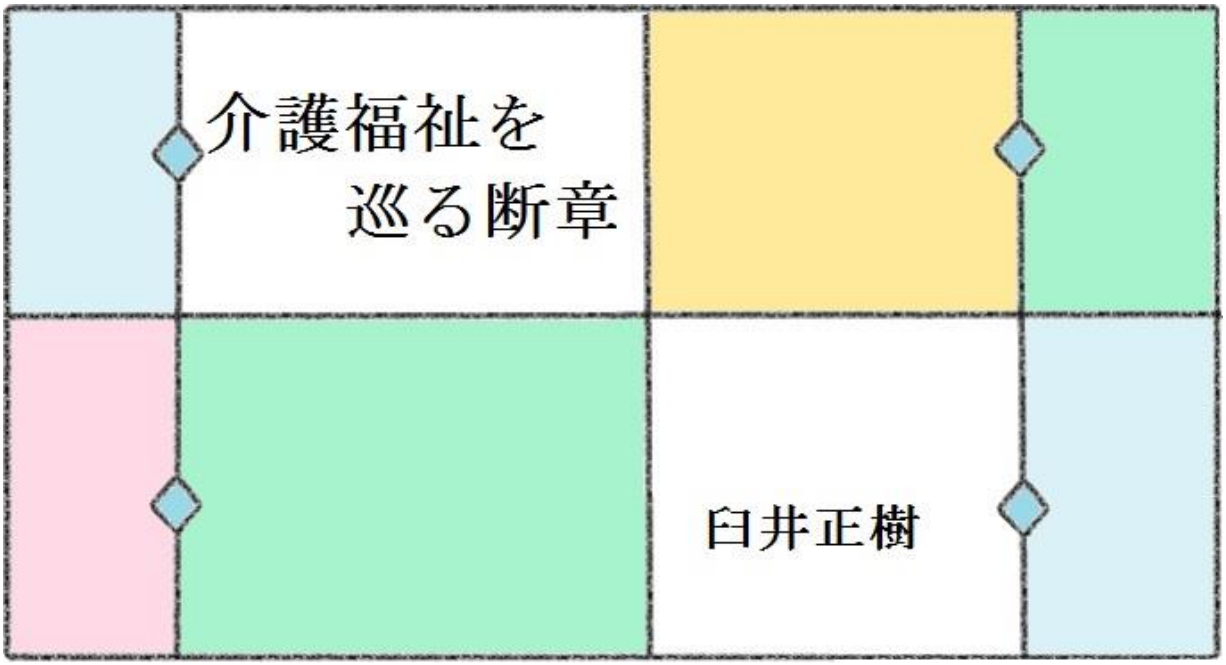
～子ども叱るな　来た道だもの
年寄り笑うな　行く道だもの
来た道　行く道　二人旅
これから通る今日の道
通り直しのできぬ道～

誰かにとっては、今日の私が「子ども」であり、また誰かにとっては、今日の私が「年寄り」に当たるのでしょう。わからない世界を生きていくことも、楽しみたいと思います。

竹中さん、いつか真冬の北海道をご案内したいと思います。ぜひ、いらしてくださいね。

敬具

追伸
老人という定義は非常に難しいですね。国の基準では「高齢者」とは、６５歳のからのようです。「高齢者」と「老人」は違いますね。また、最近は「老人クラブ」という呼称に人気がないようです。



1　はじめに

私は現在、63 歳である。父親は私が 34 歳の時に心筋梗塞で亡くなった。配偶者は 42 歳の時に家庭内の事故で亡くなり、母親も 48 歳のときに心筋梗塞で亡くなっている。50 歳前に、私は 3 つの葬儀で喪主を務めた。おかげでこの先、自らの身内の介護を担う可能性は極めて少ない。にもかかわらず、介護あるいは介護福祉に関しては、社会福祉の教員としてだけではなく、様々な形で関わってきている。

まずは、社会福祉の教員としての立場の延長線での話である。所属する大学の社会福祉学科には介護コースがあり、学科の責任者としての立場から介護コースの運営に関わることになる。社会福祉学科の学科長として、介護コースを希望する学生の選考、幾つかの実習報告会への参加という形での関わりである。また、大学の近隣の自治体から、介護保険事業計画の策定員会のとりまとめを依頼されることがある。横須賀市で 2 期、葉山町でも 2 期、計画の策定に関わらせていただいた。さらに、学生の卒業論文の指導、修士論文の指導でも介護福祉に関連したテーマでの指導を求められることがある。介護という援助における利用者と援助者の関係性をテーマにした卒業論文、異文化を持つ高齢者の援助に関する研究や介護におけるリハビリテーションの教育に関する修士論文などがそれである。

介護福祉士国家試験に関しても、ここ 9 年ほどかかわってきた。特にこの 6 年は国家試験委員会の副委員長という立場で、介護福祉士国家試験問題の作成に携わってきた。経済連携協定（通称 EPA）への対応として、ここ何年か、国家試験問題の出題内容の適正化に関わるとともに、試験の在り方そのものについて、深く考えさせられることが続いている。

もう一つ、娘のことを書く必要がある。20 年ほど前に亡くなった妻との間には二人の子供がいる。その二人の子供は、上が男で下が娘である。この娘は、母親が早くなくなったことも関係してか、美術系の高校にいたのだが大学では哲学（正確には臨床哲学または、現代倫理学）を学び、大学院博士前期課程ではスピリチュアルケア、グリーフケア等につ

いて臨床哲学の立ち位置からを研究した。その後、大学に附置されたグリーフケア研究所で RA を 1 年務めた後、介護職員初任者研修を受講して、現在は介護の現場で働いている。彼女には彼女の思いがあっての進路選択ではあるが、この後、介護福祉の分野で彼女がどのように成長していくのか、楽しみであるとともに、気にかかるところでもある。

このような幾つかのことがあり、本人の望むところとは関係なく、私は介護あるいは介護福祉と遠からぬ縁ができてしまった。このような縁を頼りに介護福祉を巡ってこれまで考えてきたことを、今回からとりとめもなく書き連ねていきたいと思う。

２　日本と韓国の間で考えたこと

2010 年度からの 3 年間、大学院で指導した学生に韓国出身の朴ソンへがいる。彼女は、韓国・釜山特別市にある私立大学、慶星大学（韓国では大学校）の社会福祉学科を卒業した。成績が優秀なことから 3 年半で大学を卒業することになり、その後、釜山市内の社会福祉法人に 1 年半ほど勤務してから、日本への留学を希望して東京の日本語学校に通ったというキャリアである。まだ日本語が不自由な時点で大学院を受験したが不合格になり、私の研究室で研究生として 1 年間勉強し、翌年の 2009 年 9 月に大学院に合格した。

大学教員になった 2006 年以降、私の隣の研究室に 10 カ月ほどサバティカルで来ていた朴貞蘭氏（韓国金海市にある仁斉大学社会福祉学科の教員で高齢者福祉が専門）が、2007 年 1 月に韓国へ戻ったことから、私は折に触れ釜山市や金海市の福祉現場を定期的に見学させていただくようになっていた。2008 年の夏、朴貞蘭氏が日本での研究のついでに大学に立ち寄ってくれたのは、朴ソンへのことを彼女の恩師である慶星大学の金教授（社会福祉政策が専門）から依頼されたからであろう。私の所属する神奈川県立保健福祉大学の大学院の受験を朴ソンへに勧めるとともに、指導教員の候補を探るための来校であった。若干の経緯はあるが、朴貞蘭氏がサバティカルの際、隣の研究室にいて顔見知りであったこともあり、私が指導することとなり、2008 年 9 月に 1 回目の大学院受験をした。しかし、この時点ではまだ日本語の修得が十分ではなく、小論文も水準には達していなかった。このようなことから、2009 年度は、私の研究室で研究生として大学院進学の準備をすることになった。学部の社会福祉学科の専門科目を徴候するとともに小論文の課題を出しそれを添削するということを繰り返した。また、彼女は、朴貞蘭の紹介を受けて横須賀市内の社会福祉法人でボランティアを始めた。翌年の 2009 年 9 月の大学院入試では、日本人の学生に交じり恥ずかしくない成績で合格する。朴ソンへの日本語を修得する早さには驚かされるばかりだった。

大学院に合格が決まったあと、入学直前の 2010 年 2 月から 3 月にかけて、私は朴ソンへの案内で韓国、釜山市内の社会福祉法人等を見学をした。彼女が大学を卒業してしばらく務めていた社会福祉法人が経営する総合社会福祉館と小規模な老人ホーム、さらに彼女の大学の先輩が管理職をしている別法人の老人ホームを訪ねた。

韓国の社会福祉は、1990 年代の民主化政権のもと、1995 年の IMF 通貨危機を乗り切る

過程で発展してきたといわれる。1950 年からの朝鮮戦争は、アメリカの軍事介入により 38 度線での停戦という形で区切りを迎え、朝鮮半島の南側に、現在の大韓民国が成立する。アメリカの軍事力に守られた大韓民国（＝韓国）は、世界の最底辺国の一つとして出発する。北の攻撃にあい疲弊しきった土地に韓国が成立したとき、アメリカからの直輸入で社会福祉が導入される。一方で、日本が朝鮮半島を植民地としていた時期に、日本の社会事業が朝鮮半島に進出している。このあたりのことは、朴貞蘭の『韓国社会事業史』（朴貞蘭 2007 『韓国社会福祉事業史』ミネルヴァ書房）に詳しい。恐らく多くの韓国人は認めたがらないのであろうが、植民地時代に日本が持ち込んだ社会事業とアメリカ直輸入の社会福祉が混ざった形で発展してきたという状況にあると考えられる。

その韓国は、近年、日本の社会福祉制度を熱心に研究しながらこの 20 年余りの間に自国の社会福祉の枠組みを構築してきたということができる。2008 年 7 月には、高齢化率 7％の段階であるにもかかわらず、日本の介護保険制度を参考にして長期療養保護保険制度をスタートさせている。韓国の高齢者福祉はそうした中で発展してきているのである。

長期療養保護保険がスタートしてから 2 年弱の 2010 年春先の段階で、私が韓国で見た高齢者福祉施設は、日本の介護保険スタート時点よりはるかに昔の運営形態であった。利用者である女性は皆が洗髪しやすい短い髪型であり、施設の中では同じパジャマを着ていた。施設の中で車イスはほとんど使用されておらず、居室にはベッドもなく、日本より狭い居室で 3 人が生活しているところを見学した。この時点で私は、韓国の高齢者福祉が日本と比較して 20 年以上遅れていると感じられ、1990 年代の民主化後、あわてて社会福祉制度を整えてきた国なのだとの印象が強かった。

たびたび韓国に行き、高齢者施設を見て行くうちに、幾つかのことに気付かされる。韓国も高齢者施設には女性が多い。その女性たちが、座布団を囲んで花札をしている場面に何度か出くわした。日本にいて高齢者施設を訪ねても花札をしている場面に出合ったことはない。この花札という遊びに何か特別な意味があるのではないかと感じた。また、見学に行くと概ねいつも高齢の女性利用者たちが親しげに近寄ってきてくれる。人間関係における距離感が日本とは違う印象があった。

釜山から車で 1 時間ほどのところに慶州かある。屋根のない博物館とも称せられるところで、朝鮮半島の千年の都であった新羅の中心都市があったところである。この慶州は、韓国仏教の頂点にある仏国寺や、国宝となっている石窟庵の石仏、新羅王朝の歴代の王の古墳など有名な史跡があるのだが、それとは別に慶州ナザレ園という高齢者福祉施設がある。この施設は、韓国の社会福祉法人が運営する日本人のための施設である。

韓国の介護保険制度である長期療養保険は、韓国国民が対象である。日本人などの外国人はその対象外となっている。しかし、朝鮮半島にはかつて日本が半島を植民地にしていたこと、内鮮一体として朝鮮半島と日本を一体化する同化政策により、多くの日本人が渡り、その中には半島出身の男性と結婚した女性も多くいた。そうした女性たちが、その後

すべて幸福な生活ができたとは限らない。むしろ、戦後の日韓関係の中で、日本人であることを隠しながらひっそりと半島で暮らしてきた人が多かったのではないか。結婚して子供が生まれ、家族が形成されて行く過程で、第二次世界大戦が終わり 1950 年代初めには朝鮮戦争があった中で、以降今日までの 70 年間、韓国と日本との関係は、困難な環境にある時期の方が長かった。そのようなひっそりと暮らしてきた日本女性たちの中に生活に困っている人がいることを知った韓国のキリスト教関係者が、1970 年代に立ち上げた老人ホームが慶州ナザレ園である。

私は、これまで慶州ナザレ園を 3 回ほど訪問している。1 回目は 2010 年の春、2 回目は 2011 年の秋、3 回目は 2015 年の春である。2010 年の春に、朴ソンヘと一緒に訪問した際、私達を出迎えてくれたのは慶州ナザレ園の園長である宋美虎氏であった。眼鏡をかけ、広い額が見える髪型で 50 代後半の私と同年輩であろう宋園長は、ナザレ園のできた経緯を日本で紹介したテレビ番組の録画ビデオを私たちに見せた後、施設の案内をしてくれた。

窓が大きく、春の日差しが差し込み明るく暖かい廊下を歩いて行くと、中ほどに丸い小さなテーブルとそれを取り囲むイスが置かれていて、そこで 3 人のおばあさんたちが花札をしていた。私たちはそこで立ち止まり、しばらくの間、おばあさんたちとおしゃべりをし、写真を撮った。3 人のおばあさんは、皆、80 歳を超えていたが、私が日本から来たことを伝えると、出身地などを話してくれたように思う。そのあと、奥にある利用者の居室や NHK の画像が流れている共用のリビングルームなどを見学したが、廊下で出会った 3 人のおばあさんと花札の印象が特に強く残った。

2011 年秋には、社会福祉学科の同僚教員を誘ってナザレ園を再訪した。最初の訪問とほぼ同じ午前中の 11 時前に訪問したのだが、驚くことに 3 人のおばあさんたちはまったく同じ場所、同じ位置取りで花札をしていた。しばらくおしゃべりをしたのち、また写真を撮り、握手をして別れた。日本に戻って、2 階の訪問のときの様子を、写真を交えながら話す機会が何度かあり、話すたびに 3 人のおばあさんが花札をしていることの意味を考えさせられた。そしてまた 3 人のおばあさんが、その後どうしているのか気になった。

2015 年の春、別の大学の招きでゼミ生を連れて韓国を訪問する際、1 日時間を取り、3 度目となる慶州ナザレ園への訪問をした。連れて行った三人のゼミ生は女子大生ばかりで、それだけでとても賑やかな旅であった。ナザレ園に行くと、おばあさんたちは三度目も同じ場所で花札をしていた。よく見ると、どうやら一人は前の 2 回の方とは入れ替わっている。もしかすると前回の訪問からの 3 年半の間に亡くなられたのかもしれない。隣のテーブルにも 4 名のおばあさんたちがいて、連れていった女子学生たちとにぎやかなおしゃべりの花が咲いた。自分達が朝鮮半島に来た時と同じくらいの年齢にある若い日本人女子大生が尋ねてきたことで、おばあさんたちは心躍ったのであろう。

このときも私達を案内してくれたのは宋園長だった。利用者のおばあさんたちの認知症が進み介護に苦労していること、ナザレ園を開設した金牧師の志を何とか遂げるため努力していることを、宋園長は私と学生たちに話してくれた。

朴ソンヘに様々なことをお願いするなかで、韓国・釜山周辺の社会福祉の現場を見て歩くことだけでなく、彼女の家族等とも交流をするようになっていった。私が金海国際空港につくと、到着ロビーに彼女のご両親が迎えに来ていたり、義理の兄がホテルまでの送迎を受け持ってくれたり、様々なサポートをしてくれた。日本に帰るときにも、見送りが可能なときは車で 1 時間近くかかるにもかかわらず、お土産をもって金海国際空港まで見送りに来ていただいた。外国の人と友人になっても、日本人である我々にはとてもできそうにない対応である。

韓国に行って知り合いが次第に増えて行く中で、やがて様々なことが一つの形をなしていく。「情」と「ウリ」という言葉によって示される人間関係の濃密さの意味に気付かされていく。（以下、次回へ）

町家合宿 in 京都 2016 夏の陣
～大学見学とまちなか観光～

山下桂永子

今回の合宿では印象に残ったことが沢山ありました。

夕飯のときが印象に残りました。食卓が細長かったため、離れたものを取る際にコミュニケーションが要りました。協力の大切さがわかったような気がします。しかし、夕飯のときに僕は座っているだけで、ちっとも準備などのお手伝いができませんでした。なので、次は、積極的にコミュニケーションをとって、先生や皆さんのお手伝いができるようになりたいです。

2 日目、迷惑をおかけしたことは強く印象に残っています。夜景を観に行くときに財布を持たずに出たり、銭湯で鍵をなくしたりしました。1 つ目については、予定を把握して、必要なものを考えれば防げたと思います。2 つ目については、少し考えれば、ロッカーにそのまま鍵を入れるのが不適切だと気付いたはずです。両方とも、僕が気を抜いたのが原因です。団体で行動するのだから、その場に応じた緊張感は必要だと思います。それが気遣いというものだと思います。これから気遣いを大切にしていきたいです。

行った場所で印象に残っているのは、妙心寺です。見るときに立つ位置によって、様々な姿が現れる雲龍図。それを見て僕は、物事は見る角度によって違って見えるのかもしれないと感じました。また、僕は歴史の勉強が嫌いで、歴史の話などはずっと避けてきたのですが、妙心寺の浴室の話を聞いたときは、面白いと思えました。「歴史はつまらない」という思い込みにとらわれていたのかもしれません。これからは、何事に関しても、一つの視点にこだわったり思い込みにしばられたりせずに、色々なことに挑戦していければいいなと思いました。

このように印象深い体験の多い合宿でした。その体験から学べたことも多かったと思います。3 日間お世話になりました。ありがとうございました。

これは、中学校 3 年生 A くんが参加した町家合宿 2016 夏の陣の感想文である。A4 の感想文用紙の上半分に手書きの小さな字でみっちりと書かれていた。

☆町家合宿概要

町家合宿とは、（元）不登校であったり、（元）ひきこもりであったりする 10 代後半から 20 代前半の参加者とともに、京都市内の町家に泊まり、2 泊 3 日（年に 2 回行うときは、内 1 回は 1 泊 2 日）で観光や大学見学などを行っているものである。私が大学院の修士 2 年時から始まって今年で 11 年目を迎えた。毎年 5 人前後が参加してくれていて、いつも半分ぐらいがリピーターである。今年行った 2016 年夏の陣は、参加者 5 名のうち 3 名が 10 代で初参加、2 名が 20 代のリピーターであった。

町家合宿では、何をするのか、どこに行くのかなどは基本的には当日までノープランで、町家に着いてから参加者たちの希望をもとに決めていく。一方、毎年行ういくつかの同じイベントやルールもある。イベントには主なものに名刺交換と古着交換、大学見学などある。ルールには 1 食につき 1 人 500 円や 1 日の交通費 500 円などがある。すべて私なりに参加者が少し自分と向き合ったり、他者と向き合ったりすることに対しての仕掛けのようなものであるが、詳細についてはまたの機会に書かせていただくとして、今回は、冒頭の感想文を書いた A くんの話を中心に、町家合宿についてご紹介できればと思う。

☆A くんについて

さて、A くんと私の出会いは今から 10 年ほど前である。出会った頃はまだ幼稚園の年長だったと記憶している。私が週に 1 回勤務しているＡ市のフリースクールに、不登園？の子として通っていた。幼稚園に行けなかった理由は、集団になじめず、お友だちにケガをさせてしまうことがあったからと聞いている。本人もそのことを自覚していて、「ぼくが、ほかのこをおしたりしちゃうからようちえんにいけないんだ」と言っていたらしい。確かにその頃の A くんは、性格はまじめで明るいが、衝動的で負けず嫌いな一面があり、みんなでゲームやスポーツをするときに負けそうになると、苦しそうに顔の表情をゆがめて怒り出し、ルールそっちのけで他の子を押しのけて（たぶん A くんには人を押しのけている感覚はない）でも勝とうとするようなところはあった。私は、私の腰上ほどの身長の A くんを抱きかかえ、半ばヘッドロックをきめながら、笑顔で「だいじょうぶだよー。次が A くんのじゅんばんだよー。」などと言いながら、落ち着くまでなだめることが何度かあった。小学校は保護者の方のお考えで、人数の少ない学校の支援学級にと他市に転出していったのだが、その後、他市の学校でも不登校になり、またＡ市に戻ってきたところで、私が現在週に 4 日勤めるＡ市の適応指導教室に通室するようになり、並行して元のＡ市のフリースクール（Ａ市では市の適応指導教室とフリースクールが連携して、在籍学校長の許可がおりればどちらに通っても出席扱いになる）にも通うようになった。その後、紆余曲折があり、今は別のフリースクールに電車で毎日通いながら、Ａ市の適応指導教室にも月に 1 度ぐらい顔を出してくれている。そんなこんなで 10 年たって、現在、A くんの身長は私よりも 20 ㎝は高くなっている。性格はまじめでおだやかで、少しだけシャイで、表情はあま

り変わらないが、礼儀正しく、ときおり冗談も言う。今中学校 3 年生であるのにも関わらず、数学は高校の微分積分などをやっている。誰から見ても高身長、高学力の好青年である。ただ本人は、自信がなく、今でも「ぼくはコミュニケーションが苦手です。だから高校はコミュニケーションが学べるところに行きたい」とよく言っている。

そんな私と出会って 10 年の A くんが、11 年目の町家合宿に初めて参加することになった。

☆A くんが町家合宿に参加した

町家合宿の対象者は中学校 3 年生以上としているので、私は今年初めて A くんを町家合宿に誘ったのだが、当初、私は A くんが参加してくれるとは予想していなかった。なぜなら、現在、私は A くんとは月に 1 回会うかどうかで、たまたま会えたので軽く説明をして案内チラシを渡しただけだったし、A くんの普段の生活は、月曜日から土曜日までフリースクールと塾と習い事でみっちりとスケジュールがつまっていて、昨年の夏はフリースクールのキャンプを 3 つもはしごしていたなど、「学校行ってへんのに、日本一忙しい不登校の子や（と、本人に伝えたらかなり笑ってくれた)」と思っていたからである。しかし A くんは私の予想を裏切り、誰よりも早く、メールで申し込みの意志を示したくれた。よくよく考えたら、「不登校、ひきこもりはアクティブではない」とか「宿泊行事と言えば山か海」というステレオタイプを打破すべく、めちゃめちゃ動き回る都会の町家合宿をあえてしているのに、なんで忙しい A くんが来ないと思ったんだろうと思うが、とにかく A くんからメールをもらったときは、驚きとともに、とても嬉しかった。

☆感想文より～A くんの食卓と反省～

町家合宿の夕食は自炊である。朝昼晩、一食につき 1 人 500 円までと決まっているなか、一日目に集合した参加者に駅の改札で、「今晩なに食べたい？」と聞いて、その場でメニューが決まる。今年のメニューは 1 日目がカレーとサラダ。2 日目が、（ツナやカニカマなどリーズナブルなネタの多い）手巻き寿司とそうめんであった。

A くんの感想文にあるように、確かに食卓は、幅 70 ㎝ほど、長さ 2 m ほどの古い一枚板の古木を木組みに乗せただけの、雰囲気はあるが、使い勝手は二の次で細長く、10 人ほどが向かい合いながら食べるので、カレーをよそうのも、手巻き寿司で自分の食べたいネタを取るのも、「あれとって、これとって」のコミュニケーションが欠かせない。しかし A くんが「マヨネーズとってください」の一言を言うのにそんなに緊張をしているようには見えなかったし、手伝いをできずに悶々としているとは思いもよらなかった。真夏の炎天下を歩き回る強行軍に疲れ果て、他の参加者が扇風機の前でぐったりしている中、むしろ A くんが一番手伝いをしてくれていたとさえ思っていたし、スタッフの間でもそんな話をしていた。

キャンプ慣れした A くんが、町家合宿と言う宿泊行事について、なんの不安もなかった

かと言えばそうではなかったのだということに感想文を読んで初めて気づくことになった。

町家の台所と食卓

☆感想文より～A くんの忘れ物と私の反省～

A くんの感想文にある、2 日目の「迷惑をおかけしたこと」についてである。A くんは自他共に認める忘れんぼうである。忘れんぼうについて、私もかなり自信があるので、よくお互いの忘れんぼう武勇伝を語り合う仲である。予定を忘れること、物をなくすこと、それは A くんにとっても、私にとってもおそらく一生つきあっていく、少々面倒な自分の性格である。いつだったかAくんはその自分の性格について、「ぼくがわすれないなんてこと、あるわけないじゃないか！」という名言を放ったことがある。なんて素敵な自己受容と自己表現なんだろうと私はいたく感動した。そんな A くんが、時々「ぼくと山下先生はにてるんですね」と、口の端でにやっと笑いながら言ってくれることは、私にとって何か、その道のプロに認めてもらったかのような誇らしさを感じている。と言ったら、いつもそれで「迷惑をおかけして」いる私の周囲の人々や町家合宿の他のスタッフに、何を開き直っているのだと怒られるかもしれない。

しかし私と違ってAくんはとても努力している。以前はウェストポーチにメモとペンを必ずいれて持ち歩いていた。しかし、私「でも書いたメモなくしたりしない？あとメモを後で見るのも忘れるでしょ」Aくん「そうなんですよねー」ということで、Aくんは数年前から、スマホのアラーム機能とリマインダー機能を駆使して忘れんぼうへのシステム対策を行っている。そんなAくんがこの町家合宿で財布を持って出かけるのを忘れたことと、銭湯の靴箱の鍵を（一時的に）なくしてしまったことについて、A くんはとても反省しているのであるが、これについては、私自身の今後に向けての反省にもしなければならない。

毎年 2 日目に古着交換というのを行っていて、（詳細はまたほかの機会に書かせていただくことにする）夕食後に、徒歩で行った銭湯帰りにその古着を着て、夜景を観に行くという順番なのであるが、徒歩で銭湯に行くわけだから、財布がその場で必要ないと判断する

のは当然である。「銭湯の後に古着を着て夜景を観に行きます」だけではなく、「またバスに乗るから 1 日乗車券を忘れないようにしてね」と一言添えておけば、それこそ防げたはずであるし、銭湯に慣れていない子が、靴箱の鍵やロッカーの鍵をどこにやったかわからなくなるなんてことは、忘れんぼう先達の私には当然予想できているし、実際、私は自分の鍵を忘れないように、「靴箱の鍵はここ、ロッカーの鍵は手にはめた」と 3 回以上は（心の中で）つぶやいていた。忘れんぼうの後輩のことをちょっと思いだせばよかったのである。まさに彼が感想文で書いている「それが気遣いというものだと思います」である。

☆感想文より～Aくんの観光～

最後にAくんが印象に残ったと書いたのは、観光である。

町家合宿では、観光に行く場所を決める際に、1 日目の夕方に参加者には「いってみたいやってみたいことランキング」という紙を渡して、京都市内のガイドブックを見ながら 1 位～3 位まで書いてもらっている。全員の希望が出揃ったところで、予定を決めていくのだが、毎年具体的に行きたい場所や、やりたいことが参加者から出るときもあれば、出ないときもある。2016 夏の陣については、比較的、参加者の希望がはっきりしていたので、予定がすすめやすかった印象がある。

A くんが書いたのは 1 位「なにか京都のものを食べたい。・ラーメン・ゆば・出町ふたば・洛匠・錦市場←ここ行きたいです」2 位「有名なところに行ったり、京都の大学をめぐったりしたい。」3 位「散歩しつつ京都の通りを覚えたい」であった。

1 位のラーメンは 3 日目の昼食に京都の有名なラーメン屋に行き、出町ふたば（大福が有名）洛匠（わらびもちが有名）については、他にも和風スイーツが食べたい希望者がいたので、カキ氷とみたらし団子、わらびもちなどが有名な甘味どころで 2 日目に堪能、錦市場は 3 日目に出かけ、A くんはお土産に和菓子を買っていた。3 位については、観光しながら京都の通り名の歌を、京都通のスタッフに教えてもらっていたように思う（東西だけでなく南北の通りにも歌があるんだよというううんちく付で)。

2 位の有名なところ、京都の大学については、2 日目に金閣寺に行った後に、立命館大学を散策（学食で昼食を食べたり、生協でお買い物をしたり）し、3 日目に花園大学を散策（入試課で資料をもらったり、朝のお勤めなどする講堂に入らせてもらったり）した後に妙心寺に行った。妙心寺に行くまでは、その前日に行った金閣寺や本能寺に比べると地味な印象（私見です）だったのだが、広い敷地の中で、セミの大合唱の中、歴史ある建物を眺めながら歩き、大きな八方にらみの雲龍図を真下からじっくり眺め、国宝の鐘の音を聞き、浴室を見学してみると、私自身、とても歴史にワクワクするとともに厳粛な気持ちになった。入浴が修行であり、慰霊であることの意味をお寺の方の朗々たる説明で知り、A くんも表情には出さないが、私と同じようにワクワクしていたのかもしれない。

☆A君の反省と学び

Aくんはワクワクするだけでなく、八方睨みの龍が、見る角度によって表情や姿を変えるということに、狩野探幽が（製作期間）8年がかりで伝えたかった仏法の思想というものを感じ取り、自分に生かそうとしている。観光なのに、最後の最後まで A くんはまた反省している。まじめすぎる。とは思うが、もしかしたら高度なテクニックを駆使したウケ狙いなのかもしれない、とちょっと疑ってしまうぐらい反省を通り越して内省している。

さらに、今まで興味が持てなかったものにも興味を持ち、これが学びだと感じている。A くんはこの 10 年間、ほとんど学校という場所には行っていない。行こうとしたこともあるが、それでも学校に行っていない。それなのに A くんは、学ぶということを知っている。今、A くんは高校受験に臨んでいるし、そしてその先の大学受験の勉強もしている。A くんにとって学校とはなんだろうと聞いてみたくなった。

☆Aくんと私の町家合宿～2016 夏の陣～

Aくんの反省文を読んで、Aくんとの 10 年を振り返り、誇らしいやら、うれしいやら、穴があったら入りたいやら、様々な気持ちが湧いてきた。今Aくんに会ったなら「なにいろいろ反省してんねん！そんなん一ミリも必要ないし！」とにやけてツッコミをいれる私と口の端でニヤッと笑うAくんの姿を想像してしまう。

町家合宿では、普段適応指導教室や、フリースクールで関わっているこどもたちの違う一面が見られて、そのことから私は多くのことを学んでいる。私にとっての対人援助とはなんなのかという振り返りやメンテナンスを１年に１回行っているような気がしている。

案内チラシ

◆◆

町家合宿 in 京都 2016 夏の陣

～大学見学とまちなか観光～

◆◆

日　時：平成〇年〇月〇日（〇）～平成〇年〇月〇日（〇）

参加費：〇〇円（宿泊費、食費、交通費、観光費、保険費用を含みます）

宿泊先：〇〇〇

☆京町家を改修して宿として利用している建物です☆

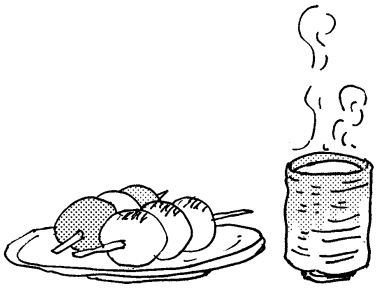
冬は寒く、夏は暑い京都ですが、町家の中は夏を涼しく過ごす工夫がされています。

というわけでクーラーはなく、扇風機でがんばりましょう！

スケジュール（1 日目）

15:30　〇〇駅〇改札集合。徒歩で宿へ移動。

16:00　夕飯の買出しをしつつ宿泊地「〇〇〇」到着。



16:00　宿チェックイン

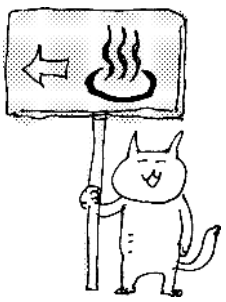
16:30　自己紹介と今後の予定を決めるお話。

17:30　夕食の調理開始

18:30　夕食

20:00　入浴（宿にお風呂はないので徒歩で銭湯へ。

　　シャワールームはあります。）



2 日目

起床～　みんなで決めたスケジュールで大学見学と京都観光

17:00　夕食の買出しと調理開始

18:30　夕食

20:00　入浴

3 日目

起床～　みんなで決めたスケジュールで大学見学と京都観光

14:00　解散

持ち物：宿にバスタオル、シャンプー、歯ブラシ、寝間着はありません。

　　保険証のコピー（あれば）、学生証（あれば）

　　その他必要と思うものを持参してください。

お問い合わせ・お申込み先

池田市教育センター　山下桂永子（やましたけえこ）

Tel　〇〇〇

Fax　〇〇〇

E-mail　〇〇

そうだ、猫に聞いてみよう

約 1 年ぶりに連載再開です。

10 月に環境省が平成 27 年度の犬猫引き取り及び負傷動物の収容状況を発表した[i]。統計によれば、27 年度の猫の殺処分数は 1 年間で 67,091 頭。前年度の 79,745 頭と比較すれば 12,654 頭も減少した。だが、未だに 1 日約 183 頭、15 分に約 2 頭のペースで人為的に猫を殺している。

猫たちはどう思っているのだろうか。猫にとっての幸せとは何だろうか。といっても猫は、今この瞬間を全力で生きているのであって、不満を抱いているわけではないだろう。猫の現状に不満を抱いているのは私だ。私から見てかわいそうに見える状態の猫を極力減らしたいと思う。そしてこの排除的なシステムは人間にとっても不利益であると私は思う。

「ノラ猫」は野性動物ではないため、干渉せずに生息域を守り、“共存”する対象ではない。かといって、家族の一員として人と“共生”しているペットとしての猫でもない。「ノラ猫」という“共生”と“共存”の狭間の存在に私たちはどう向き合っていくべきなのだろうか。
当初は、地域猫活動のルポを書く予定だったが、なぜ排除ではなく共生や共存的なシステムが良いと思うのか、をテーマに今回は書いてみたいと思う。

共生と共存

「共生と共存の違いを説明してください」と言われたら、どう答えるだろうか。「共に生きる」と書いて共生、「共に存(あ)る」と書いて共存、共に生きていくことが共生だとすれば、家族は共生で、近所の人は共存だろうか。私は、影響し合い一緒に生きている様が「共生」で、つかず離れずの距離を保ちながら同じ場所に存在している様が「共存」かなと考えている。

対人援助学マガジンの編集長である団先生の授業で、「結婚は両者のそれぞれの文化を統合して、新しい家族の文化を作っていくこと」であり、例えば、朝食のバターを端から切っ

て使っていくのか、真ん中をすくうように使っていくのか、それぞれの育った家庭の方法が違ったなら、どちらの文化を採用するかその都度決めていき、新しい文化を作っていくことが必要である。という話だった（と思う）。それはきっと「共生」のプロセスだと思う。もし、これを「共存」的に解決するとすれば、どちらかの食べ方にするのではなく、バターを２つ買って、それぞれがそれぞれの食べ方をする。といった解決方法になるだろう。賞味期限と冷蔵庫のスペース的にはもったいない気もするが、それぞれの文化を尊重しているともいえる。

共生と共存は、きれいに分類できるものではなく、階層的で複層的で、共生の中にも共存と共生があり、共存の中にも共生と共存もある、、、と考えていると頭がこんがらがってくる。でもなぜか考えずにはいられない。友人や会社などの人間関係で、距離感をうまく取れずに失敗した経験は誰にでもあるんじゃないだろうか。友人に嫌われない距離感、自分がしんどくならない距離感はどれくらい？共生寄り？共存寄り？共生と共存の狭間で、どう生きていくか悩むのは、もう人間の永遠のテーマなんじゃないかと思っている。

猫を簡単に排除するコミュニティは人だって簡単に排除する

猫に厳しい地域は猫にだけ厳しいのではなく、猫問題と向き合うよりずっと前に、排除のシステムを定着させていているはずだ。それが当たり前だと思い生活していると、“排除が楽で効果的な対応である”、という理論が無意識のうちに個人の中にもコミュニティの中にも根付いていく。すると、次に全く別の場面に遭遇した時、無意識にその排除の理論やシステムが動き出す。

個人でいえば、自分（たち）にとって都合の悪い人やモノ、合わない人と遭遇した時、排除という解決法を用いてきたのだろう。「どうしていじめが起こるのかわからない。今時の子どもは…」という話は何度も聞いたことがあるが、分からないと言っている人たちが長い時間をかけて作り上げ、様々なところに配置してしまった排除の理論を、若い世代もきちんと学習し、早いうちから発揮してしまっているだけなんじゃないかと思う。

言葉のブーメラン、哲学のブーメラン

排除の論を推奨しない理由として、“言葉のブーメラン”がある。

意味は「他人に対する指摘（主に批判）がそっくりそのまま自分にもあてはまってしまうこと。つまり、お前がそれ言うなよっ！」というツッコミである（“言葉のブーメラン”や“ブーメラン発言”は、若い世代で作られたのか、２ちゃんねるや Twitter といったネット界で生まれたのか発祥元は不明だが、初めて聞いたときは『うまいこと言うな〜』と思った）。

哲学のブーメラン

他者（猫）を簡単に排除すればいいという哲学は、自分にも返ってくる。おそらく、「自分自身も弱者となれば、排除されてしかたがない」という無意識の哲学にも支配されている。だから自分が排除されてしまうのはないかという不安感に押しつぶされてしまいそうになるため、他人に強く当たり、自分の強さ、存在意義を誇示してしまうのではないか思う。それって、とても生きづらいのではないだろうか。周囲の人も、自分自身も傷つけてしまう哲学だ。

なぜ、そう思うのか、自分の経験を思い返してみたい。

過去のできごと

私は、小学校からバスケットを習い始めた。できる事が増えていく感覚の面白さに、中学校の頃にはドハマりしていた。ストイックに練習に打ち込み、試合で活躍できると、自分の居場所はここにあると感じ、さらに練習に打ち込んだ。そして、自己表現をしたい欲求は、「実力のあるメンバーだけで試合に臨みたい。やる気のないやつはチームにいらない。」と考える方向へ向かっていった。自分から見て努力していないように見えるチームメイトを責めた。排除を肯定する思考になっていた。でもそれを「自分にも人にも厳しい自分」と肯定的に認識することで自惚れ、自分のアイデンティティを保っていた。そして、試合で自分が上手くプレーできずに負けるたび、「役にたてなければ、自分の居場所はどこにもなくなってしまう」と怯えて布団かぶって泣いていた。排除論の辛い副作用だったと思う。

そんな私の哲学が大きく変わる出来事があった。
そのきっかけは大きく２つある。

きっかけその１：新しいコーチ

部活に新しいコーチが来た。そのコーチは私の意思には反して「全員バスケをする」と言うのである「やる気のない選手はいらない！」と考えていた私は猛反発。「全員バスケ」の理念のもと、「いらない選手なんていない！」そう声を張り上げるコーチの言葉が、今まで受けていた道徳の授業のように、着地することなく心の中を通り過ぎて行った。

後に、このコーチとの出会いが自分の排除的な哲学を崩し、新しい自分哲学を作るキーポイントとなった。

きっかけその２：猫の保護

話は少し変わるが、私が育った家族はよく動物を拾う家族だった。猫が一番多かったが、犬やハト、人、亀、様々な生き物が一時的に我が家に来た。その血は私にも濃く流れており（というより、拾ってきても怒られない空気感が家の中にあった)、病気でガリガリの子猫や、交通事故にあって倒れている猫など、拾ってきては治療して新しい飼い主さんを探し、譲渡していた。とくに勉強したわけでもないのに、運よく保護した子猫は元気に回復し素敵な家族にもらわれていくことが続いていた。今思えば、うまく行き過ぎていた。

ある時、そんな私の未熟さ故に死んでしまった子猫がいた。取り返しのつかない事態に、申し訳なくて悲しくて苦しくてただただ、泣いて後悔することしかできず、でも泣いていては、自分が悪いのに、悲劇のヒロインのふりをしているようで、それが嫌で、感情を収拾できなかった。その時期に宗教の授業だったか、なんだったか、人は２回死ぬ（1 回は体の死で、2 回目は自分のことを覚えている人がいなくなった時）と聞いた（都合のいい解釈をしていて本当はそんな話しじゃなかったかもしれない)。その子猫のことを思い出す度に心臓が潰れそうになる痛みは、自分の中でまだあの子が生きている証なんだ、この痛みがなくなることの方が怖いことなんだと理解しなおした。それなら、数か月しか生きることのできなかったあの子猫が、私に教えてくれた沢山のことを今後出会うであろう猫たちに役立てることで、あの子が生きた意味を濃く残していくことができるのではないだろうかと考えた。

それからは、真剣に保護活動をしようと獣医さんにあれこれ教えてもらい、真剣に保護した命と向き合っていった。それまでは、たまたま出会った負傷猫を拾っていただけで保護活動を能動的にしているつもりはなかった)。

生後 1 か月ほどの手のひらサイズの子猫なのに、猫風邪にかかり、両目は目やにで塞がり、鼻水が固まってしまい息もままらない状態の子猫に、「なんとか生きてほしい。元気になって」と何度も何度も声をかけ、目やにや、鼻水をこまめに拭いた。口に入れた餌を呑み込んでくれた時、自分から進んでガツガツ食べてくれた時、回復して元気に遊んでいる姿を見た時、言葉では言い表せないくらい嬉しかったことを覚えている。嬉しくて嬉しくて「あぁ、ただ元気に生きてくれているだけで、こんなにも素晴らしいことなんだ。人に元気を与えてくれる存在なんだ。」そう思った。

“命の大切さ”という言葉が初めて自分の心に着地した。

変化

「生きているだけで、奇跡みたいにすごいことなんだ。」そう猫に気づかされてから、学校に行くと、友達や先輩、後輩が違って見え、自然と関わり方が変わっていった。それと同時期に、部活動にも変化が現れていた。「全員バスケ」の理念のもと、試合もなるべくベンチメンバー全員が出場するようになったが、練習は厳しくなっていた。だが、今まで以上に皆が必死になって取り組んでいた。今思えば、当たり前なのかもしれないが、試合に出たり、必要とされることによって、皆バスケが楽しくなっていた。 “楽しい”気持ちは純粋に頑張

るモチベーションになる。そんなことに気づいた時には、私自身も部活が楽しくて楽しくてしかたなかった。

全員バスケといっても、「勝敗は気にせず、全員均等な時間試合に出ましょう」というわけではなく、コーチは試合に勝つことに全力を尽くしていた（心のうちでは、様々な意図や思いがあったかもしれないが、少なくとも生徒であった私たちの瞳には、本気で勝たせようとしてくれていると映っていた）。だから、試合の出場時間は均等ではないし、試合によっては出場時間がなかった選手がいることもある。

格上のチームとの試合前に、コーチはこう言った。

「いいか、あの相手に、40 分間互角に戦ってこいとは言わない。10 分互角にやってくるのだって無理だ。だから、1 分だけでいい。1 分だけ必死になって、自分のマークを抑えるか、一泡吹かせてこい。それならできるだろう。それを全員でつないでいくんだ。そしたら勝てる！」

暑苦しいと思うだろうか(笑)。ばかばかしいと思うだろうか。おそらく試合会場にいた私たちのチーム以外の誰もが、私たちの負けを確信している試合でも、私たちが勝てると思い込むには充分すぎる言葉だった。だいたい一回戦負けか、よくて二回戦負けが常だったチームが、コーチが来て 2 年目には県大会に出られるようになった。カトリック大会で優勝できるようになった。

そして私は、「使えない選手がいたんじゃない。使えないシステムがあっただけなんだ。」そのシステムを作っていたのが自分自身だったんだと気づいた。

心からチームメイト全員がこのチームに必要なんだと思えた。いらない選手はいない。そう心から思えた時、その理論はブーメランとなり私自身にかえってきた。自分も技術の上手い下手とか小手先のことではなくてチームにいていい、必要な存在なんだ、と思えたら、とても心が軽くなった。新しく築かれた哲学の良い副作用だった。

まとめ

言葉や哲学はブーメランであり、コミュニティシステムは“自分だけ”を特別扱いはしてくれない。排除のコミュニティシステムの中では、常に自分自身も排除対象となりえる緊張感の中で過ごすしかないのだ。

猫に教えてもらった気づきは、バスケットの経験を通してより具体的に理解された。

猫に関しても殺処分されるべき不要な猫がいるはけではなく、生かし、活かすことができない人間の社会システムがあるのだと考えるようになった。

学校の檻にウサギを閉じ込めて、一方的に触れ合ったり、一週間に 1 回程度回ってくる掃

除当番で、命に対する責任感や共感の心を育てようとしなくても（おそらく育たない)、大事なことは身近な猫が教えてくれるかもしれない。身近な猫に接する大人の姿が、子どもたちに命に対する責任を教えてあげることができるのではないだろうか。

大人も含めた社会全体にちらばっている小さなシステムや、個人が無意識のうちに作り上げてしまった排除的な哲学を、地道にひとつずつ変えていくことがいつか大きな変化を生むのではないかと思う。そういった意味でも、地域に住むノラ猫の問題に、地域が真剣に向き合い取り組むことに大きな意義があると思う。

空気の変化

動物の殺処分問題を私が知った頃は、今から 12 年ほど前で中学生の頃だった。当時年間猫の殺処分は、約 23 万 9 千頭（H16）にのぼった。初めて知った時大きなショックを受けたことを覚えている。色んな人に話したが、意外なほどにも大人の対応はドライだった。「しかたがない」、「やむをえない」、「あまり言いすぎると変な人だと思われるよ」、そんな空気が漂っていた。とても気持ち悪い空気だと思った（幸い私の両親はあまり空気を読まないたちだったので自由に行動させてくれた)。

しかし、ここ最近、テレビでも「犬や猫の殺処分問題」が取り上げられるようになり、芸能人たちも殺処分問題に関心があることを表明しても大丈夫な空気感になってきた。気持ち悪い空気感の何十年も前から、地道に TNR（飼い主のいない猫を一旦捕獲し、不妊去勢手術を施したうえで、元いた場所に戻す活動のこと）や地域猫活動を続けてきたボランティアさんや、一部の行政の足跡が、「殺処分よりも、TNR や地域猫活動の方がいいかもしれない」というように世論を変えつつあるんじゃないかと思う。

注意点

ただ、注意点として排除しないシステム論的な介入にはそれなりの技術がいるということだ。バスケもただ皆で仲良くやりましょうと、うわべを繕ったってうまくはいかない。年齢やチームの状況、目指すところを見極めて、適切に介入したコーチングの技術があったからこそ、チームが良い方向にまとまったのである。また、この経験は、あくまで私の個人的で主観的な内容であり、チームメイトであっても、一人一人コーチの見え方や経験した気持ちは違うだろう。TNR や地域猫活動もうまくいくにはそれなりの理由がある。だから、なんとなく TNR っぽいこと、地域猫活動っぽいことをやって、うまくいかなくて、「TNR や地域猫はダメだ」と簡単に結論を出してしまわないでほしいと思う。どの地域にもあてはまるマニュアルがあるわけでもない。

余談

私は保護した猫たちから多くのことを教わった経験を「リヒーリング効果」と造語で呼んでいる。“癒そうとすることで、跳ね返って自分の方が癒されること”という意味で、癒しと

いう意味の“ヒーリング”に戻るという意味の“リ”をつけただけの英語が苦手な人が考えた感丸出しの呼び方をしていた(笑)。先日、対人援助学マガジンの千葉さんの連載を読んで、こういったことは社会福祉の場面では、「ヘルパーセラピーの原則」と言われていることを知った。同じなのか、同じにしてはいけないものなのか、今度千葉さんに聞いてみようと思う。個人的にはとても近いものだと思っている。

実体験をもとに考えると、この心理的効果はとても大きい。

おわり

小池英梨子

立命館大学院応用人間科学研究科対人援助額領域 2015 年修了

猫を切り口に、共生と共存社会のリアリティについて研究

公益財団法人どうぶつ基金に 2 年間勤務し、犬猫の殺処分ゼロを目指す取り組みに従事。

現在は、「ねこから目線。」としてフリーで活動中。

[i] 統計資料 「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況」（環境省）2016.11.14 アクセス
http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html

先人の知恵から
14

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

今回は、次の８つを挙げてみた。

- 親の心子知らず
- 親はなくとも子は育つ
- 終わり良ければすべて良し
- 凱風南よりして彼の棘心を吹く
- 蛙の子は蛙
- 顔で笑って心で泣く
- 垣堅くして犬入らず
- 学問に王道なし

＜親の心子知らず＞

子を思う親の気持ちがわからず、子は勝手なことをするものだということ。また、親になってみなければ、親の気持ちは推し量れるものではないということ。

子どもが思春期に入ってくると、親は今までの素直な子どもではなく、何かにつけて反発したり不遜な態度を取ったりする様子に腹を立てることがある。成長の過程と頭では分かっていても、「こんなに苦労して育てて来たのに・・・」などと思ってしまう。そんな親に出会うとこの諺を伝える。親の心がわかるのは、自分が親になってからだと。また同様に、「子の心親知らず」ということもできる。この二つは対で使う事が出来る。親が嘆くと同様に子も嘆いているとわかれば、親も少し気持ちが落ち着くし、子どもへの思いも変わるだろう。親は子どものためと思って、生まれてからずっと一所懸命子育てをしている。
何があってもこの子は守らなくちゃという思いで頑張っている。しかし思春期の子どもにはそれこそが迷惑。何とも切ない話だが、「上手に子育てをされたから、今のこの状況があるのですよ。」と伝えると何とか納得してくれる。

英語では・・・

When the rain rains and the goose winks little wots the gosling what the goose thinks.（雨が降って親ガチョウが目を閉じるとき、その子には親の考えていることが殆どわからない）

＜親はなくとも子は育つ＞

親が居なくても、子どもは自分の力や他人の善意などで、何とか成長して行くものである。世の中はそれ程心配したものではないということ。「渡る世間に鬼は無い」も類語。

心配性で過干渉な親が多い中で、いきなりこのような諺は使い辛いが、思春期が進み、自立の時期を迎えた若者の親に対しては、この言葉と「可愛い子には旅をさせ」を度々使う。大学を選ぶときに、自宅から通えるところを第一条件にする親も多い。子どもの方も自宅から通える大学を選ぶ。

就職しても自宅から通う子も多い。親が「初任給は安いから自宅から通いなさい」と引き留めることもある。しかし、むしろ若いうちは苦労をさせた方が良い。お金が余りなくても、無いなりに生活をして行く事で学べることも多いだろう。

以前田舎から都会の大学に進学した子から聞いた話だが、ある時アパートの洗濯機が壊れた。困って電気屋さんを探して電話し、来てもらった。冬の事である。彼女は、暖房をあまり使わないようにと部屋でちゃんちゃんこを着ていた。田舎の母親が送ってくれたものだ。電気屋のおじさんは、東北から来ていたそうで、「田舎からでてきたの？」と修理代を只にしてくれたそうだ。

怖い話ばかり聞いているので、「人を簡単に信じてはいけない」と教える昨今だが、こんな話を聞くと、世の中捨てたもんじゃないと思う。

人の親切に触れて、人は優しく育つのではないだろうか？そのためにも、親元から離れて暮らす経験は大事だと思う。

＜終わり良ければすべて良し＞

物事は最終の結果が全てだということ。「終わりが大事」とも言う。

この諺はよく使う。親に対してだけではなく、自分自身や周りの同業者、先生方など様々な場面で使う。カウンセリングをしていても、〇〇療法が効くとか効かないとかではなく、クライエントの状態が良くなれば終了となる。クライエント自身の努力で改善される場合もある。もちろんカウンセラーとしては、クライエントが良くなるように最善を尽くす。結果が良ければ、それで良い。不登校の子が学校に行けるようになったとか、辛い症状に苦しんでいた人が、症状から解放されたとか、今抱えている問題が解決したとか、今の状況より少しでも良くなるとすれば、それで良いではないか。過去を穿り返して、ああでもないこうでもないと言っていても、何も変わらない。起きてしまったことは変えようがない。でも今からはいくらでも変えられる。良い結果を得られた所からスタートをすればよいのだ。

英語では・・・

All is well that ends well.（終わり方が良いのは良い事だ）

The end crowns all.（終わりが全ての物事の冠となる）

＜凱風南よりして彼の棘心を吹く＞

母親が愛情を持って子どもを暖かく見守り育てることの例え。暖かい南風が優しく吹いて、いばらの若い目を育てる意から。棘心は棘のあるいばらの木の芽生えで手のかかる子を表す。出典ではこの後に『棘心夭夭たり、母氏劬労す』（元気な子はまだ幼く、その養育のために母は苦労する）と続く。出典は「詩経」

子どもを育てることは、親が十分に大人であり、優しく見守れる度量があることが求められる。そうして大切に育んだ子が大きくなってきてイヤイヤ期や、反抗期になると、子どもたちは常に親に手を掛けさせ、心も折れそうになって苦労が耐えない。そんな子育ての覚悟を伝えるようなこの諺を、今の親たちに伝えたい。親たちは、自分の時間を持ちたいというが、子育ての間、特に子どもが小さい間の数年間は自分の時間を持つのを諦めると言う事はできないのだろうか。自分の時間を持つためにスマホに没頭すると言う事も聞く昨今、小さい子どもと向き合う事に不満を感じるのであれば、子どもを持つのが早いのではと言わざるを得ない。

＜蛙の子は蛙＞

子どもの才能や性質は親に似るものだということの例え。蛙は子どもの頃は親と形の違うオタマジャクシだが、成長すれば親と同じ蛙になる事から。『瓜の蔓に茄子はならぬ』も同義。

子どもが生まれるまでは、五体満足に生まれて欲しいと思い、それ以上のことは望まない。しかし、大きくなってくると、我が子に「才能」の片鱗を探し、「きっとこの子は天才だ」と思いたくなる。それが親と言うものだろう。しかし、そうそう天才は生まれては来ないし、下手に英才教育でもしようものなら、かえって才能を潰す事にもなりかねない。

基本的には、子どもは両親の遺伝子を貰っている。両親が優秀であれば、それなりに子どもも優秀である可能性は高い。勿論例外はあるが。父親も母親も、子どもは自分くらいにはなると考えるのならともかく、未だ三歳の段階で「東大に入れる」とか「将来は医者にしたい」などというのを聞くと、この諺を使い、高望みしないように育てていれば、もしかしたらそういうこともあるかもと伝えている。

ノーベル賞を貰った人たちのこども時代をみると、親が特に大きな期待を持っていたとか、英才教育をしたという話は聞かない。余りのプレッシャーに潰される高校生も沢山見てきたが、親の期待が大きすぎると子どもはその期待に押しつぶされる事が多い。程ほどに期待していくのが大事だが、この「ほどほど」が難しい。

＜顔で笑って心で泣く＞

悲しみを顔に出さず、笑顔で人に接すること。また、笑顔ではいるが、内心は悲しさに耐えられず、密かに涙を流す事。

最近は自分の感情を出すことが良しとされており、悲しいときは子どもよりもその感情を出している大人を見かけるようになった。

ある方が病死され、そのお葬式で、自分の母親の棺にすすみ最後のお別れをする時、１０代半ばの子どもがいる娘が、酷く取り乱し、泣きわめくということがあった。悲しみの表現は人それぞれではあるし、その故人との結びつきの強さによっても異なるだろうが、突然の死でもないのに別れの覚悟ができていなかったのだろうかと不思議に思ったことがある。

一方で、すごく悲しく、気落ちしているだろうと思う人が、とても気丈に振舞っていると、余計に涙を誘う。

日本では、悲しみや自分の感情をあまり顔に出さずに、心にとどめ、人目のないときに一人で泣くことが美徳とされてきた。

大人の振る舞いとして、子どもたちに見本を示していく事はどのような場合も大切である。親を見て子はその振る舞いを自然に学んでいく。顔で笑って心で泣くことは、生きていると度々経験することであろう。感情をそのまま表すことも必要な時はあるが、自分の気持ちを押し殺して笑顔でいられるということは自分の感情のコントロール力が強いということになる。自らの感情をコントロールできるという意味合いで、親や子どもにこの言葉を伝えることが度々あるのでここに入れた。

＜垣堅くして犬入らず＞

家庭がしっかりしていれば、それを乱すようなものが外部から入ってくる事は無いということ。

家族について学んでいると「境界」の問題が家族の問題において、重要であることを知るだろう。このことわざは、正に「境界」の話である。

家庭がしっかりしているとはどういうことか？それは、家族が誰か（父親や母親など）を中心に、しっかりと纏まっていることであろう。家族が問題を抱えたときに、解決に向けて家族のみで考え、決定していくことができる力を持っているということではないだろうか。そうであれば、他の何かがそこに影響を与えることはない。

「困ったときの神頼み」という言葉もあるが、占いや他人の力を借りるのは、解決努力をしても解決できなかった場合か、解決努力そのものを他に頼る場合であろう。筆者のようなカウンセラーのところに相談に来ることが最近では多くなってきていはいるが、昔から長老に相談するなどということはあった。それが悪いということではない。

この諺で言う「犬」は混乱や災いのもとになるような、悪い意味での外部の「影響力」を指している。家族を守るためには、適度に堅い垣根が必要である。かといって堅すぎる垣根は、何物をも拒み、必要な支

援を受けることさえできなくなる。程々にと付け加えたいところであるが、高価な壺を買わされたり、貢物を要求されたりというような、とんでもない事態に遭わないための戒めとして使われてきた。古くから言われてきた言葉は今も「境界」という言葉で家族の問題に生かされている。

＜学問に王道なし＞

学問を修めるのに、手軽に身に付ける事が出来るような特別な方法はないということ。ギリシャの数学者ユークリッドが、幾何学を学んでいたエジプト王トレミーの「もっと手軽に学ぶ方法はないのか」という問いに対し「幾何学に王道なし」と答えたという故事に基づく。

最近の学校の子どもたちの様子で気になることに、大人にとって便利なツールを子ども達が使うことで、面倒なことをさらに面倒くさがってやらなくなってきたことがある。

調べ物はググってプリントアウトして持ってくる。重たい辞書を引くことはせず、電子辞書を使う。

パソコンや電子辞書がなかった時代には、調べ物は図書館に行き、どの本棚のどの本を選べばよいかを司書に聞いたり、自分で探して、本を選び間違えたり、棚を間違えたりという時間がたくさんあった。棚を見ながら、「こんな分類のものもあるのだ」と違うものを発見したり、或いは選んだ本が目指したものとは違っても、その本の内容に触れることで、余計な学びもあった。

辞書で何かを引くときも一緒である。国語辞典や大辞林などを引いて、目的の言葉を探す間に、余計な言葉を発見して「へえ～」と余分な知識を得たこともあった。目的の言葉についても、電子辞書よりずっと詳しく書かれていたり、例文も一杯あったりする。また、その言葉の前後の言葉にも、つい目が言って読んでみたりしたものである。

こうしたことは「無駄」であろうか？ものを学ぶときに、簡便さばかりを追求すると、より深く学べる機会を失うのではと危惧してる。

二言目には「めんどい」と言う子どもたちに、この言葉を送りたいと思う。子どものうちは、面倒くさがらず、もっとじっくり一つ一つの学びを進めて行ってほしいと思うから。

英語では・・

There is no royal road to leaning.

今回はここまで。

出典紹介

詩経

中国最古の詩集。五経の一つ。講師が約三千の古詩の中から選んで成立したと言われるが未詳。紀元前十世紀から、前六世紀ごろまでの詩三百十一編を収録。風（国風ともいう。民謡）・雅（宮廷の祝宴歌）・頌（祖先を祭る歌）の三部構成。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

★　第7巻第三号（通巻27号）をお届けする。今号から又、新しい執筆者が加わって下さった。臼井正樹さんと山下桂永子さん。中味はじっくり味わってください。そして一年ぶりに、野良猫、じゃなくて、この世界を自由に行き来する社会猫が戻ってきた。もう一本、三野さんの「遍照金剛」も再開した。高垣さんの連載は新たなテーマになってスタートする。河岸さんの復活モノもある。

★　うっかりというか，油断だが，執筆者の皆さんに今号執筆の締切お知らせをするのを忘れていた。通常は締め切り月の初めにメールを差し上げていたのに。

　だが振り返ってみると、忘れていたと書くのは正確ではない。そのつもりでPCを開いた記憶がある。そこで何か他の緊急用件が目に入ったのだと思う。その対応をしている内にすっかり忘れてしまったのだ。こんな事態を二度、繰り返した。

　こういうことが最近よくある。老化現象だ。そしてある執筆者からの指摘で慌てて１１月２０日過ぎに締切告知メールをコピペ修正で送ったら、前号の締め切り告知で書いた接頭文「暑い夏がまだまだ続きます・・・・」をそのまま残してしまうポカ。まったく、よくこれで定期刊行出来ているものだが、それもこれも几帳面な執筆陣のおかげだ。

　なんて、こう書いておけば、引きつづき誠実に対応してくださるだろうと、押しつけているだけか？　策略が見え見えだな。

★　でもとにかく、今号もなかなかの充実ぶりである。更に次号から新規執筆者も今のところ二名、予定している。とっくに全部読んでいる人は限られた状況になっている。文藝春秋と同じだ！なんて大きく出たよ。

　「対マガ」はこの時代の現在進行形の資料である。過去の資料庫ではなく、今を映し出す対人援助世界の記録誌になれたらいい。

編集員（チバ　アキオ）

「あきおちゃん！」、祖母のお葬式の最後、参列して下さった方々を会場の出口で見送っている時に声をかけられた。その方は秋田の実家の数軒隣にあった、パンとお菓子などを売るお店のおばちゃん！お目にかかったのは30年ぶりぐらい！生まれて1年で秋田の実家を離れ、多くの時間を大阪で過ごした私には秋田は夏休みに過ごすところ。おやつの時間になるとアイスを買いに、お菓子を買いにとそのおばちゃんのお店に行った。44歳の今、私を「あきおちゃん」と呼ぶ方はいない。秋田、東京、仙台、大阪と移り住んだ私には、小さい「あきおちゃん」を知っていて、現在も出会う方は親戚のごくわずかの方々。地域の方で当時の私を覚え、今も声をかけてくれる経験は皆無に等しい。そう、私はあの秋田に確かに生きていた！…それが前号26号の対人援助学マガジン編集会議を欠席し、私が経験したこと。

　人生の縦軸か横軸か奥行の話なのかわからないけど、自分自身の人生をとらえるときの何かが広がった経験だった。

編集員（オオタニ　タカシ）

　いつも、編集後記を書く前に「さて、何を書いたものか・・・」と思案する。時にはちょっと途方に暮れる。一応、編集員ではあるのだが、あまり“編集をしている！”という意識がないからだ。執筆者の皆さんから届いた原稿を、体裁を整えて、Web に up できるよう手配する。体裁まで独自に整えておられる方もいるので、それほど膨大な仕事量にはならない。むしろ、最初の読者として楽しく読ませてもらっているというのが実感である。

　ただ、時折だが「マガジン」という場や仕組みの持つ力に思いを巡らせることがあり、それがマガジン全体のことを考える、唯一の編集員らしい思考といえるのかもしれない。私自身、機会に恵まれて現在の職場以外でも色々な場で仕事をさせてもらっている。いずれの場でも感じるのは、組織の縦横の構造が健全に機能していることはそうそうないということ、さらに時間軸が入る世代交代や経験や知識の伝承という側面になると、もはや何の手も打たれていないのも珍し

くないということである。それを妨げているのは、システムの問題であったり、個人の感情の問題であったり、立場や考え方の相違であったりする。それを解き解すのは簡単ではないし、そういうしがらみとうまく付き合うのが大人だと言われるかもしれない。それは承知していて、その上でやはり健全に機能しているものに触れておくことや機能している背景にあるものに思いを巡らせておくことが、自分自身がしがらみに絡め捕られてしまわないために大切であると思っている。私にとって、マガジンについて考える機会は、そういう時間になっている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻27号

第7巻　第三号

２０１６年１２月１５日発行

http://humanservices.jp/

第28号は2017年03月15日
発刊の予定です。
原稿締切2017年2月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載 7 年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

寅さんである。いつ見始めたのかは覚えている。もともとの連続TVドラマを見ていた。そして映画になって、初期は必ず見た。

やがて公開が年中行事になり、話題になったときだけ。そして、そのうち見なくなった。渥美清さんが亡くなった頃に又、数本見たような気がするが、何を見て、何は見ていないのかは、ゴルゴ 13 に似て、もはやわからない。

寅さんより渥美清という役者の方に関心が強い。更に、本名を田所さんと言ったと思うが、ほぼ寅さんで、渥美さんでの一生だったのだろう。

二つもの大きな名前を持ちながら、自分自身を生きるのは、どんなだったのだろうとたまに思う。

2016/12/25　団士郎